上信越自動車道

埋蔵文化財発掘調査報告書　5

――長野市内　その3――

松　原　遺　跡

弥生・総論 3

弥生中期・土器本文

2000

日　本　道　路　公　団
長　野　県　教　育　委　員　会
長野県埋蔵文化財センター

上信越自動車道

埋蔵文化財発掘調査報告書　5

――長野市内　その3――

松　原　遺　跡

弥生・総論 3

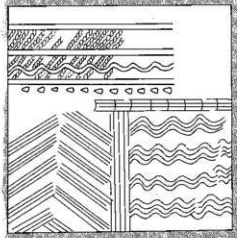
弥生中期・土器本文

2000

日　本　道　路　公　団
長　野　県　教　育　委　員　会
長野県埋蔵文化財センター

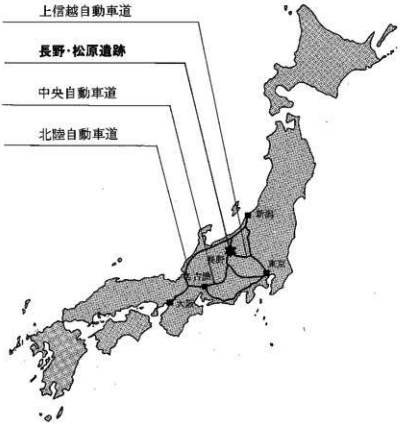
第 III 部

弥生時代中期・土器本文



「上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書５　長野市内その３　松原　―弥生総論―」

第１分冊	第Ⅰ部	調査の概要
	第Ⅱ部	弥生時代中期・遺構（本文）
第２分冊	第Ⅱ部	弥生時代中期・遺構（図版）
第３分冊	第Ⅲ部	弥生時代中期・土器（本文）
第４分冊	第Ⅳ部	弥生時代中期・土器（図版）
第５分冊	第Ⅴ部	弥生時代中期・石器　その他
第６分冊	第Ⅵ部	弥生時代後期・古墳時代前期
第７分冊	第Ⅶ部	弥生時代　・考察　検案
第８分冊	第Ⅷ部	松原遺跡　・総論　自然科学分析



例　　言

1．本書は長野県長野市松代町東寺尾に所在する松原遺跡の報告書である。

2．本書は『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書5　長野市内その3　松　原　―弥生・総論―』全8分冊のうち、第3分冊 弥生時代中期・土器本文編である。本書に係る土器図版は、第4分冊 弥生時代中期・土器図版編で提示している。

3．調査は上信越自動車道建設に伴う事前調査として実施し、日本道路公団より長野県教育委員会を通じた委託事業として、財団法人長野県埋蔵文化財センターおよび財団法人文化振興事業団長野県埋蔵文化財センターが実施した。

4．調査にあたっては以下の関係機関のご協力を得た。
長野県教育委員会文化財・生涯学習課、日本道路公団名古屋建設局、日本道路公団東京第二建設局、長野市教育委員会、ＪＡグリーン長野農協

5．発掘調査から本書の刊行に至るまで多くの方々のご指導を賜わり、ご協力を得た。第1分冊「第Ⅰ部 調査の概要」にお名前を掲げさせていただくが、厚く感謝申し上げたい。

6．土器の容量に関しては、北陸学院短期大学小林正史助教授に容量計測を実施していただき観察表に提示した。煮炊き用土器の作り分けと使い分けについてもご指導を得るとともに、本書に玉稿を賜った。

7．執筆分担は次の通りである。

第1章 第3節4（2）	贄田　明（調査研究員）
第2章 第1節	百瀬長秀（調査課長）
第3章 第3節	小林正史（北陸学院短期大学助教授）
第1章 第2節　第3章 第2節	徳永哲秀（調査員）
上記以外	青木一男（調査研究員）

8．編集の補助は整理補助員があたった。
丑山和江　風間春芳　近藤久子　鳥羽徳子　中川麻由美　中村るり子　米山敏子（敬称略）

9．実測図の作成、トレースは整理補助員があたった。
浅井とし子　石田多美子　今井せつ子　岡田皓子　笠井すみ子　加藤周子　北澤三枝子
小林奈美江　滝沢久子　野沢久子　堀本香代子　三上義子　柳沢るり子　（敬称略）

10．調査記録、出土遺物は報告書刊行後長野県立歴史館に移管し保管する。

11．編集は青木一男が行い、百瀬長秀が全体を校閲した。

凡　　例

1．本書に掲載した実測図の縮尺はすべて1：4、遺物写真の縮尺は任意の大きさである。

2．土器ナンバーは、個体写真ナンバー、遺構出土地点の遺物ナンバー（第2分冊）と一致する。

3．本書の補遺図版および土器ナンバーは、第4分冊　弥生時代中期・土器図版編の図版ナンバーの継続として表記されている

4．本書の写真PLナンバーは、第4分冊　弥生時代中期・土器図版編のPLナンバーの継続として表記されている。

本 文 目 次

第Ⅲ部　弥生時代中期・土器本文

第１章　資料の整理

第１節　整理の方針と経過……1
　１土器整理の方針……1
　２土器整理作業の経過……2
　　(1)土器整理作業の流れ　(2)土器整理作業の公開
第２節　土器復元技法……5
　１「接合補強」成立への経過……5
　２「接合補強」技術の展開……5
　３復元技法の実際と向上……7
第３節　栗林式土器の観察法……9
　１器類・器種および部位呼称……9
　　(1)栗林式土器　(2)器類の部位呼称
　２栗林式土器の観察……10
　３調整手法……11
　４文様帯と施文手法……12
　　(1)施文原体と文様　(2)文様帯の設定　(3)器類と文様帯
　　(4)施文手法　(5)施文手法の類型化

第２章　資料の提示

第１節　縄文時代晩期末～弥生時代中期前半の土器……25
　１出土状況……25
　２概要……25
　３浮線文期前後の遺跡分布……35
第２節　栗林式土器……37
　１栗林式土器の提示方法……37
　　(1)土器解説文の提示　(2)土器提示遺構の検索
　２竪穴住居址出土土器……45
　３土壙出土の土器……88
　４旧河道出土土器……96
　　(1)提示土器の選択　(2)旧河道出土土器　(3)土器の出土状況
　５囲郭溝出土土器……98
　　(1)囲郭溝と土器　(2)囲郭溝SD1027，1083，1215，1305出土土器
　　(3)囲郭溝SD12，18出土土器
　６土器観察表……104
　　(1)遺物観察表についての考え方　(2)土器の観察
　　土器観察表凡例

土器観察表
第3節　加工円盤・小型土器・土製品 ……153
1 土器片加工円盤 ……153
2 小型土器 ……157
3 土製品 ……159
第3章　分析
第1節　甕の文様構成および施文手法 ……161
1 栗林土器様式の甕 ……161
2 甕の文様構成 ……161
(1)文様帯別文様構成　(2)中部高地型の文様固執
3 甕の文様施文手法 ……165
(1)栗林様式の櫛描文　(2)羽状文・波状文の施文手法
(3)松原遺跡の施文手法
4 まとめにかえて ……167
第2節　松原遺跡の赤彩土器製作技法 ……169
1 はじめに ……169
2 赤彩土器再現の経過から ……169
3 赤彩を定着する条件 ……171
4 赤彩定着度の観察に当たって ……172
5 比較検討のため実見した土器 ……172
6 松原遺跡弥生中期・弥生後期・古墳時代の赤彩技法 ……179
7 おわりに ……182
第3節　弥生時代の煮炊き用土器の作り分けと使い分け：　長野地域を中心として ……183
1 目的と分析方法 ……183
(1)遺跡の選択　(2)観察属性　(3)分析土器の選択
2 器種間の作り分け程度 ……187
3 容量による甕の作り分け ……192
4 甕の容量クラス組成 ……197
(1)遺構間の比較　(2)時間的変化と地域差　(3)西日本との比較
5 甕の容量クラス間の器形の違い ……200
(1)頸部の括れ度　(2)相対的深さ　(3)相対的頸部長
(4)底部形態　(5)口縁部形態
6 蓋と甕の対応関係 ……207
(1)甕用蓋と壺・鉢用蓋の識別　(2)形による甕用蓋と壺・鉢用蓋の識別
(3)蓋の口径分布　(4)甕と蓋の対応関係
7 炭化物からみた甕の使い分け ……211
(1)分析方法　(2)頸部のススの付着度からみた使用頻度
(3)容量クラス間のコゲの違い　(4)台付き甕と平底甕のコゲの違い
(5)遺跡間のコゲの違い　(6)煮炊き方法の検討
8 甕の作り分けと使い分け ……220

(1)容量クラス間の作り分けと使い分け　(2)受け口甕と外反口縁甕の作り分け
(3)長野地域の甕の特徴　(4)まとめ

第4章　結語

補遺図版 ……227

写真PL

第4分冊「松原遺跡　弥生・総論4　弥生中期・土器図版」編

第Ⅳ部　弥生時代中期・土器図版

図版1～図版56　SB214～450土器実測図
図版57～図版161　SB1102～1311土器実測図
図版162～図版180　SK127～551土器実測図
図版180～図版196　SK1318～2001土器実測図
図版197～図版199　SD100土器実測図
図版200～図版203　SD101土器実測図
図版204～図版207　SD102～1305土器実測図
図版207～図版210　SD18土器実測図
図版210～図版244　SD12土器実測図
図版245　SBH土器実測図
図版246　ST2177土器実測図

PL 2～4	SB246	PL27～31	SB1135	PL55～56	SK151
PL 4～6	SB260	PL31～32	SB1136	PL56～57	SK153
PL 6～7	SB267	PL32～34	SB1142	PL57～59	SK156
PL 8～9	SB328	PL34～35	SB1143	PL59～60	SK158
PL 9～10	SB354	PL35～37	SB1146	PL60～61	SK163
PL10～13	SB360	PL37～39	SB1155	PL61～62	SK164
PL13～14	SB364	PL41～42	SB1174	PL63～64	SK191
PL15～17	SB409	PL43～44	SB1178	PL64～65	SK1333
PL18～20	SB1102	PL44～46	SB1189	PL66～68	SK1714
PL20～21	SB1103	PL48～50	SB1282	PL69～71	SD100
PL21～22	SB1119	PL50～51	SB1302	PL71～73	SD101
PL24～26	SB1126	PL51～52	SB1304	PL73～74	SD18
PL26～27	SB1134	PL52～54	SB1306	PL74～92	SD12

挿 図 目 次

第１図　器類の部位呼称法
第２図　栗林式土器文様呼称法
第３図　栗林式土器の文様帯
第４図　壷類部文様帯の類型
第５図　栗林式土器の文様帯と文様
第６図　甕胴部文様帯における縦位ブロック
第７図　中部高地型櫛描文・畿内型櫛描文
第８図　甕施文手法の類型化
第９図　栗林式以前の遺物分布図
第10図　浮線文系土器群（１）
第11図　浮線文系土器群（２）
第12図　浮線文系土器群（３）
第13図　浮線文系土器群（４）
第14図　浮線文系土器群（５）・条痕文系土器群
第15図　変形工字文系土器群
第16図　中期土器群
第17図　浮線文期前後の遺跡分布図
第18図　弥生中期後半・栗林期遺構面
第19図　遺構検索全体図
第20図　遺構検索図　Ⅰ
第21図　遺構検索図　Ⅱ
第22図　遺構検索図　Ⅲ
第23図　旧河道の位置
第24図　囲郭溝の位置
第25図　SD12土層断面図
第26図　様相１　SB260出土土器群
第27図　土器片加工円盤実測図
第28図　小型土器 (1)
第29図　小型土器 (2)
第30図　土製品
第31図　松原出土甕の文様帯別文様構成
第32図　頸部文様帯の構成
第33図　胴部文様帯の構成
第34図　中部高地型櫛描文展開概念図
第35図　縄文～古墳時代の赤彩土器
第36図　遺跡の位置
第37図　容量と括れ度による器種間の作り分け
第38図　容量と相対的深さによる器種間の作り分け
第39図　甕の容量分布
第40図　松原中期の５竪穴の容量分布
第41図　甕の容量分布の谷部の位置
第42図　甕の容量クラス組成：　遺構間の比較
第43図　甕の容量クラス組成：　長野
第44図　甕の容量クラス組成：　北部九州の前期（ａ）と中後期（ｂ）
第45図　甕の容量クラス組成：　吉備
第46図　甕の容量クラス組成：　大和・中河内
第47図　甕の容量クラス組成：　加賀
第48図　甕の容量クラス組成：　東日本
第49図　容量クラス毎の括れ度の平均値
第50図　容量クラス毎の相対的深さの平均値
第51図　容量クラス毎の相対的頸部長の平均値
第52図　容量クラス毎の括れ度の平均値：　西日本の４地域
第53図　受け口の比率の容量クラス間比較
第54図　容量と括れ度における受口と外反口縁の違い
第55図　蓋の相対的内面高
第56図　蓋の口径分布
第57図　甕と蓋の口径の対応関係
第58図　頸部のスス付着程度
第59図　内面胴部のコゲ付着
第60図　内面胴部のコゲ付着
第61図　内面胴部のコゲと底部形態の関連

挿表目次

第１～３表　検索一覧
第４表　囲郭溝土器出土状況一覧表
第５～７表　SD12土器出土状況
第８～52表　土器観察表
第53～54表　住居址出土土器片加工円盤一覧
第55表　小型土器観察表
第56表　松原遺跡器種別赤彩率
第57表　土器塗彩ベンガラの科学分析
表58表　器種分類の模式図
表59表　各容量クラスの括れ度、相対的深さ、相対的頸部長、口縁部形態、底部形態、蓋のサイズクラス組成、甕に対する蓋の比率
第60表　蓋の赤塗、紐孔、蒸気抜き孔の相関
第61表　炭化物の特徴
第62表

補遺図版目次

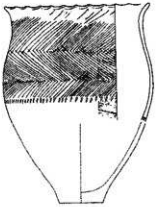
図版247　SB280・281・319・326・352・353・354・368
図版248　SB358
図版249　SB426
図版250　SB403・414・415・425・1103・1110・1136
図版251　SB1104・1141
図版252　SB1141
図版253　SB1144・1147・1156・1161
図版254　SB1161・1174・1182・1247・1259・1261・1276
図版255　SB1276・SK132・136・141・156・160
図版256　SK164・201・301
図版257　SK301・320・334・354・355・1333・1340・1371・1519
図版258　SK1714・1717
図版259　SD12（ＩA15・ＩG16・ＩL1・ＩL6）
図版260　SD12（ＩL6・ＩL16・ＩL21・ＩL20）
図版261　SD12（ＩL21・ＩQ1・ＩQ6）
図版262　SD12（ＩQ11・ＩQ16）
図版263　SD100・1215・1305
図版264　SD1027・1083・SK343
図版265　遺構外
図版266　SB71・遺構外・SD101
図版267　SD102
図版268　SD102
図版269　SK166・遺構外

写真図版目次

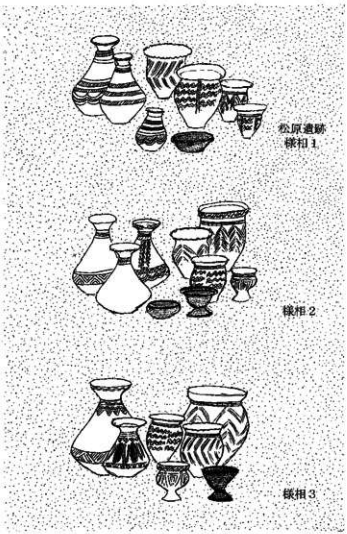
PL93　土器一括集合写真
PL94　1　鉢内出土ベンガラ（SB309，弥生中期）
2　ベンガラ付着痕跡が認められる台石（SB246，弥生中期）
3～6　ミガキ石
7　頸部の全周にススが付く甕（松原SD100の519）
8　頸部にススが付かない甕（松原SD100の585）
9　胴下部のコゲバンド（松原SD100の

588)
10 台付き甕胴下部のコゲパッチ（松原SD100の620）
11 胴中部のコゲパッチ（松原SD100の579）
12 側面からの加熱による円形のスス酸化消失
PL95 住居址出土一括資料
PL96 〃
PL97 〃
PL98 〃
PL99 〃
PL100 鉢
PL101 〃
PL102 高杯・赤彩小型壺
PL103 赤彩小型壺・壺
PL104 蓋・壺
PL105 壺
PL106 〃
PL107 〃
PL108 甕
PL109 〃
PL110 〃
PL111 甕
PL112 〃
PL113 〃
PL114 〃
PL115 〃
PL116 甕・文様手法
PL117 文様手法（甕Ⅲ文様帯）
PL118 〃 （甕Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ文様帯）
PL119 〃 （甕Ⅰ・Ⅱ文様帯）
PL120 〃 （壺Ⅱ文様帯）
PL121 〃 （ 〃 ）
PL122 〃 （壺Ⅱ・Ⅲ文様帯・甕Ⅲ文様帯）
PL123 〃 （壺Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ文様帯）
PL124 〃 （壺Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ文様帯）
PL125 〃 （壺 〃 ）
PL126 〃 （壺Ⅰ～Ⅲ・甕Ⅰ～Ⅲ文様帯）
PL127 浮線網状文系土器
PL128 変形工字文系土器・条痕文系土器・栗林系土器

神奈川県大塚遺跡出土



新潟県下谷地遺跡出土


松原遺跡
様相1
様相2
様相3

第１章　資料の整理

第１節　整理の方針と経過

１　土器整理の方針

松原遺跡高速道地点から出土した弥生土器は、遺物収納コンテナ数3200箱あまりで、90％以上が弥生時代中期後半以降の栗林期の資料であった。残る６％ほどは弥生後期の箱清水期、２％ほどは弥生１期の浮線文期の資料が中核で、後続する時期の資料も若干認められるところである。
私どもは、弥生時代の土器について、下記の２点を整理方針として整理作業を行ってきた。

① 松原集落は栗林期中～新相の拠点的集落であり、遺跡内における遺構間の関係および時間的な位置付けを明らかにする方向を志向した。その関係を解明する基礎情報が土器にあると理解した。そこで、遺構内における遺物の出土状況を重視し、同一遺構内であっても出土した遺物群の関係をできるだけ把握するように努めるとともに、提示することを心がけた。

② 栗林土器様式は、形態、文様に関してバラエティーが認められる。同一遺構内から出土した資料群に対して、提示する資料の選択に注意を払うとともに、選択された土器群の情報を、図面、写真、解説、観察表でできるだけ詳しく報告書に提示することを心がけた。

①に関しては、発掘現場で得られた情報が重要であった。しかしながら、発掘段階から整理段階の混乱もあろうが、担当者の問題意識によってその情報も千差万別であった。将来的に集落の構造を分析する際有効となるように、可能な限り遺構出土の土器を遺構の中に位置づけて提示することにした。その際に、遺構図（第２分冊　遺構図版編）および、土器説明（当分冊）では出土状況をできるだけ詳しく情報提示することを心がけた。②については、①で得られた情報を元に、良好な一括資料を抽出して提示することを念頭に資料選択を実施した。資料選択にあたっては土器の残存率を考慮することが多いが、私どもは残存率のみにこだわらずに、器種、器形のバラエティー、文様構成の全体像がつかめる資料を提示するように注意を払った。残存率何％以上は提示するという選択は行わないように心がけたため、完形土器であっても資料提示されていないものが存在する。

収納された土器コンテナ

松原遺跡の弥生中期集落は、発掘調査段階から長野盆地南部の拠点的な集落として注意されてきた。土器の整理は、そんな松原集落の構造を解明するための基礎整理作業であったが、不備な点がなかった訳ではない。ひとつは、遺構

出土資料の整理に重点をかけたため、包含層出土資料にほとんど手が入っていないことであり、ひとつは、多量の資料が存在しても、遺物の取り上げに問題があって出土層位、位置、まとまりが把握できない河川址出土資料の提示が充分できなかったことである。しかしながら、私どもの仕事は限られた時間と予算の範囲で最善のデータを提示するという課題が存在する。遺構出土の土器を中心に提示した情報が活用され、松原集落の構造追究のための基礎データとなることを願う。

2　土器整理作業の経過

(1)　土器整理作業の流れ

松原遺跡の弥生時代中期集落および旧河道に残された土器の整理作業経過について以下に示す。

①洗浄

土器の洗浄は、発掘作業と併行して発掘現場プレハブで実施した。雨天時の作業が土器洗浄にあてられたことが多い。他チームの発掘現場プレハブへも雨天時の作業用として多量の土器が移動した。洗浄時の管理については気を配らなくてはならない点も存在した。

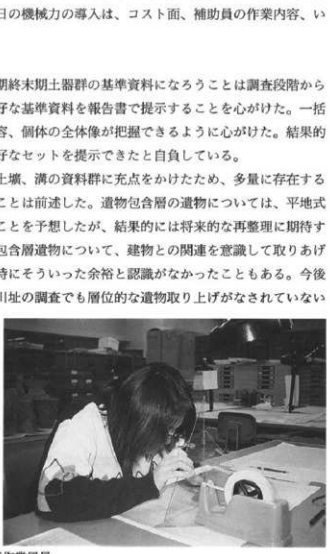
②注記、遺物台帳作成

今日、当センターの注記作業は機械力を導入しているが、松原遺跡の注記作業はすべて整理補助員の手作業で行われた。多くの補助員と担当者１名で行われた緻密な注記、遺物台帳作成業務は、以後の整理作業をスムーズに行える基礎を作った。しかし、今日の機械力の導入は、コスト面、補助員の作業内容、いずれをとっても有効であるという結論に達した。

③接合・復元

松原遺跡の栗林式土器群は、中部高地の弥生中期終末期土器群の基準資料になろうことは調査段階から注目されていた。土器接合・復元にあたっては良好な基準資料を報告書で提示することを心がけた。一括性の高い資料群を接合する場合は、そのセット内容、個体の全体像が把握できるように心がけた。結果的には接合作業に時間をかけることになったが、良好なセットを提示できたと自負している。

しかし、問題がない訳ではない。竪穴住居址、土壙、溝の資料群に充点をかけたため、多量に存在する包含層、河川址出土の土器接合が充分でなかったことは前述した。遺物包含層の遺物については、平地式建物址、掘立柱建物址に関連する遺物が存在することを予想したが、結果的には将来的な再整理に期待することになってしまった。調査時段階で、多量の包含層遺物について、建物との関連を意識して取りあげていない事実も記しておかねばならないし、発掘時にそういった余裕と認識がなかったこともある。今後の松原遺跡の再整理に期待するところである。河川址の調査でも層位的な遺物取り上げがなされていない



整理作業風景

ため、一括性を保障できるデータはない。遺物群を遺跡の中でどう取り上げるか。接合作業の中で多くの課題を得た。

接合・復元作業は、更埴市に所在する長野県立歴史館内に設けられた埋文センター遺物整理室で、補強復元を実施し、写真撮影のための復元、古色仕上げは長野市に所在する篠ノ井整理棟復元室で実施した(第1分冊および本書第1章第2節参照)。遺物整理室と復元室（各担当調査研究員1名）は連携して作業を進め、両担当者は土器成形に関する調整手法、文様施文手法、文様帯の観察を同時に行ってきた。

④データの選択

報告書に提示する遺物の選択はすべて担当者が行った。データの選択には担当者の力量が問われる。竪穴住居址、土壙、溝に関しては遺物選別台帳を作成し、登録ナンバーをふり、実測図を提示したものとしていないものを明示した。遺物選別台帳に登録された遺物は「実測」と明記したコンテナに収納し、他の破片と区別した。

⑤実測・トレース

土器の実測およびトレースは、調査研究員が指導を行った整理補助員が行い、実測の一部については業者に依託したものもある。整理補助員ならびに業者の図面作成者に対しては実測・トレース作業のポイントを伝え、整理補助員の実測・トレース → 調査研究員点検 → 整理補助員再実測・トレースあるいは修正という流れをとった。

⑥観察と提示

土器の観察については調査研究員が行い、その情報は本文および観察表で提示した。図版で提示した土器の観察は、選択時および実測図点検時に行ったが、さらに本文執筆および観察表作成時に再び行った。観察にあたっては実測図に表現しにくい調整手法、文様について重点的に扱い、本文および観察表で明らかにするように心がけた。

⑦収納と公開

報告書刊行後の遺物は、長野県立歴史館に移管し、長野県立歴史館の収納方針で整理されて一般に公開されることになる。土器本文・図版編に提示された遺物については、長野県立歴史館の公開に基き、再検討することができる。

(2)　土器整理作業の公開

松原遺跡の弥生時代土器整理作業は、県立歴史館内の埋蔵文化財センター遺物整理室で実施された。整理室は県立歴史館の公開ゾーンと接していたため、公開ゾーン側の壁面はガラス張り設定で、埋蔵文化財センターの整理作業は見学者に常に公開されていた。この空間を通して整理作業を見学された方は多い。

一方、小・中・高校生の社会科見学、遠足、あるいは中学生の職場体験学習等で、遺物整理室を訪れた児童・生徒たちも多い。埋文センターに送付されてきた作文の一部を掲載する。私どもは、子どもたちの文章から今後の埋蔵文化財の活用について思索することになろう。

> 前略、先日はお忙しいところ、私達屋代中学校1学年9名がおうかがいして、いろいろ見学させていただき本当にありがとうございました。たくさんのことを学ばせていただいた中で、一番印象に残ったのは、土器などを発掘して、接合し、その場所を調べ、そして展示までと、歴史館の裏側で一生懸命苦労し、またお仕事に、とてもはげんでいる姿を拝見させていただきました。(略)今回学ばせていただいたことを将来に役立てるため、これから一生懸命勉強していきたいと思います。

屋代中学校1年　北原ちえみ

11月16日(木)の社会見学では、いろいろな事を体験させてくれてありがとうございました。本物の土器を見るのは初めて、しかもそれをさわらせてもらって、とても得をした気分でした。部屋の中には、発くつされた土器がたくさんありびっくりしました。あれは、全部長野県で発くつされた物なんですよね？。重い物や軽い物、模様の入っている物やいない物など、いろんな形の物がありました。土器のはへんを組み立てる作業は、大変でした。あんな難しい事を毎日やっているんですね。つかれるだろうな～。私もやらせてもらったけど、合う物がなくて、難しいやら大変やら。貴重な体験ができました。また、私達はこの時の体験を11月22日(水)、全校集会「太陽のつどい」で、発表しました。ダンボールで土器のはへんを作り、合う物や合わない物、動作を付けて発表しました。つぼ、かめ、たかつきという三つの土器の種類も発表させていただきました。ふだんは見る機会のない土器をさわらせてくれて、どうもありがとうございました。これからもがんばってください。

青木島小学校6年　渋澤明里

ぼくは、歴史館の見学に行って、はじめてお母さんの仕事をしている部屋を見ました。お母さんがどんな仕事をしているかわかってよかったです。担当の先生にいろいろ教えていただいて、いろんな場所に連れていってもらいうれしかったです。

森将軍塚古墳も見れたけど、けっこうつかれました。それと、いろいろ勉強にもなりました。また歴史館へ行きたいです。

豊栄小学校6年　近藤英樹

文化財センターのみなさん、いろんなお仕事ごくろうさま。昔の土器などほとんど松代のものなのですか？。私は松代に土器があったなんて知りませんでした。私はつぼをもってみたら、何かわからないけど音が聞こえました。なんか「ぐつぐつ」という音が聞こえました。私はたぶん土器の中にその人の心が残っているんだなと思いました。ほんとうにありがとうございました。

豊栄小学校6年　坂口江美

本物の土器にさわらせてくれてありがとうございました。土器のこともよくわかりました。

南箕輪小学校6年　赤羽　隼

土器をさわらせてくれてありがとうございました。このおかげでいい土器が作れました。

南箕輪小学校6年　中田敬子

第２節　土器復元技法

１「接合補強」成立への経過

松原遺跡の復元作業を滞りなく進めるために従来まったく試みたことのない新たな作業方式とそれに伴う作業体制をとることにした。その実際の推進は準備段階で予想していた以上に順調に行われた。その成功は、なによりも作業担当者の積極的な姿勢に負うところが大きい。新技術の習得から出発し、創意工夫に基づく技術革新と錬磨がつねに重ねられていった。その経過と成果をここに述べたい。

当センターでは平成４年度以降急激に増加した復元作業量に対し、平成５年度後半期に独立した復元室を設け対応してきた。当初石膏復元を中心に作業を行ったが問題点が多く、復元の質も作業効率もなかなか向上しない。そこで、形状記憶樹脂を芯材としたパテ状エポキシ樹脂による復元を考案し取りくんだ。[註1] 良質な復元が可能になるとともに作業効率も著しく向上した。しかし、平成７年度からそれまでの大きな遺跡であった篠ノ井遺跡群の古色仕上げおよび石川条里遺跡の作業の一部を継続しながら、新たに松原遺跡と榎田遺跡の復元にも取り組まなければならなかった。その復元作業量の大きさを簡単に比較して示すことは難しいが、以下のような数字から推定してみた。

篠ノ井遺跡群の場合、復元作業担当者15名（５時間勤務者11名･7.5時間勤務者４名）で土器実測前の復元だけで、約200日を費やした。その復元土器はおよそ1500点に及んだ。この篠ノ井遺跡群を基準に７年度以降の復元作業量を推定するため発掘された住居址軒数を時代別に比較した。[註2]

	縄文時代	弥生時代	古墳時代	奈良平安時代ほか
篠ノ井遺跡群		１５９	１５８	４８９
松原遺跡	３２	２６４	１２	４４２
榎田遺跡		１７４	５１０	３２３

また、発掘時の土器収納コンテナ数は篠ノ井遺跡群に対し、松原遺跡は４倍、榎田遺跡は２倍だともいわれていた。

松原遺跡・榎田遺跡の実測前の復元を現有の復元体制で篠ノ井遺跡群同様に行うとすれば、到底期限内に作業を終了することができなくなる。復元室の体制の強化も、復元技術の習得を伴い、量的にも質的にも簡単にできるような見通しはない。

平成６年度末、以上の状況を踏まえ、担当者間での検討を重ね「接合補強」技術をすすめることにした。

２「接合補強」技術の展開

ここで「接合補強」と呼ぶのは、従来実測前に行った復元の代わりに、各遺跡単位に行われている土器接合の過程で、実測に対応できる程度の補強を接合作業者自身が行う、その作業のことである。

この接合補強が可能になったのは、後に述べる復元技法の材料と技術に有効に応用できたことによる。土器の欠損部に形状記憶樹脂『クラプレン』を芯材として入れ、そのクラプレンにパテ状エポキシ樹脂『ワーカブル・レジン』を張り付けるように入れる。この復元の行程で、クラプレンとそれを土器に接着する接着剤『ハイスーパー５』によって土器は、実測に耐えれるだけの十分な強度を持つ。そこで接合時に、

復元の前半の工程を応用し土器が実測に耐えれる最小限の補強をクラプレンとハイスーパー5で行うことにした。

①．その有効性を明らかにするため、従来のやり方では実測のための復元が必要になる土器5点を選び復元室で「接合補強」を試み、担当者による有効性の検討が行われた。その結果以下のような利点がはっきりした。

＊技術的にだれにでも容易に行える。
＊各遺跡の整理作業の中で、接合と補強さらにその土器の実測を同じ作業者が行うことが可能で，実測に有効な「接合補強」が展開できる。
＊「接合補強」をしながら、接合の間違いに気付くことが多くなる。
＊接合できる土器片が増える。
＊石膏などによる補塡の必要がなくなるので、土器の内面観察もしやすくなり、実測図が取りやすい。
＊実測後、写真撮影のための土器を厳選して復元室に持ち込むことができる。
＊エポキシ復元には、接合補強に用いたクラプレンをそのまま芯の一部として生かせる。復元時に不必要になる接合補強部分のクラプレンは，取り外して再利用する。
＊クラプレン以外の補強材料も有効に使うことができる。
＊復元室の作業量を大きく削減することができる。

②．以上の検討結果に基づき、「接合補強」技術を採用することになった。実際にこの作業を展開するに当たり基本と復元工程への関連を、作業者がしっかり認識して始めることが望ましいという担当者の判断に従い、平成7年4月後半から松原遺跡の補助員全員が復元室で2日間から5日間の復元研修をした。結局約3ヶ月に及ぶ研修期間を設けることになったが、その成果は大きく、思いがけない創意工夫が生まれ、質の高い技術が確立されていった。

③．研修後6月から「接合補強」を取り入れた土器接合が進められた。その点数は弥生中期・後期・古墳時代だけで3500点を越えるものになった。その過程で、接合技術が向上し大変正確な接合が行われるようになり、それは質の高い実測図づくりに生かされていった。

④．クラプレンやハイスーパー5の使い方にさまざまな創意工夫がなされたが、なかでも写真1にみられるような技法…これを『やぐら』と呼ぶ…が生まれ、土器を正しく立てるのに極めて有効な方法として、実測作業に大きく役立った。

写真1　接合補強技法のやぐら構造

ここでやぐらに用いているのは、おもに建具材や家具材として市販されているラミン棒である。クラプレンとも併用しながら、ハイスーパー5で接着して組み立ててゆく。ラミン棒には様々な太さのものがあるので土器の重さと大きさに合わせて使い分けることができるが、工作上も後の取り外しにも直径5㎜のものが使いやすい。この太さであればコクヨのクラフトハサミを使って作業が可能である。

⑤. ①に述べた利点はいずれも実際の展開の中で、予想を超える有効性を示し実証されてきた。精選されて復元に持ち込まれた土器も、接合が正確であるため量的に大変多いにもかかわらず能率的に復元されていった。その結果復元専属担当者7人（5時間勤務者4名・7.5時間勤務者3名）で復元点数は13ヶ月で2300点に達している。

3　復元技法の実際と向上

復元技法はすでに述べたように当センター紀要4に詳細に説明してあるが[註3]、ここでは当遺跡の土器復元の展開に即して、技法の要点を述べることにする。

①. 復元室に入ってきた土器の95％以上が形状記憶樹脂・エポキシ樹脂復元技法によって復元され、残りは石膏によって復元された。石膏によって復元された土器は欠損部の大きい土器の一部である。石膏復元では、石膏とクラプレンとの接着がわるいため補強に使ったクラプレンをすべて取り外さなければならない。そこで当遺跡の場合、補強をしないで接合実測したものを中心に石膏で復元することにした。

②. エポキシ復元では、できるだけ補強に用いたクラプレンを生かすようにしている。そのため研修段階で、補強用のクラプレンを土器に接着する位置について、土器外壁から2～3㎜内側としてあった。その点松原遺跡の補強作業が丁寧に行われていて無駄が少なかった。もちろん不適当なものは外して再利用するが、ほとんどのクラプレンをそのまま活用した。その上で、欠損部にクラプレンを入れる。この作業は、およそ70℃の湯にクラプレンを浸し透明になったら取り出し、水をきって土器の欠損部に見合う残存部に当てて型を取って行う。なお『やぐら』は外す。土器から外しにくい場合ヘアードライヤーで温めて外す。

③. 残存部の型を写し取ったクラプレンを欠損部に合わせハサミで切り抜き、土器にハイスーパー5で接着する。この作業によって器形の再現が行われ、復元の成否が大きく左右されるので丁寧に行われなければならない。土器の器形はいずれも多様な歪みを持っているし、左右対称になるような土器はない。「流れに合わせ形を作ってゆく」このクラプレンによる作業の技術は、松原遺跡の土器復元作業の中で一段と向上した。写真2の土器は、焼成時に歪み破損したものと思われるが、このような土器の復元もクラプレンを巧みに使うことによって可能になった。複雑な器形の変化に合わせながらクラプレンの切り抜きと接着を工夫し、器形の流れを追ってゆく。各作業者の器形追及努力に負うところが、技術の向上とともに大きくなっていった。

写真2　ゆがみ土器に対するクラプレン使用例

④．クラプレンによる器形復元を終えた土器のクラプレン部分に、ワーカブル・レジンを張り付けるように入れる。一回に用いるワーカブル・レジンの量は技術の向上とともに変わるので、それぞれ作業者の判断に委ねられる。主剤と硬化剤を混合してより素早く薄く入れることができるようになると、一度にワーカブル・レジンによる成型を広範囲に行うことができるようになってゆく。硬化時間がほぼ30分と限られているだけにこの技術向上は、作業効率と作業の質を高めるのに重要であった。

⑤．ワーカブル・レジンの入れ方は、各作業者の個性的な努力によって見事に発展した。その一つはレジンを薄く延ばす際、水分を含んだ表面の比較的粗い布を用いる方法である。布を畳んだり巻くことによって適度な弾力性を持たせる。この布でワーカブル・レジンをクラプレンの上に引き延ばしてゆく。この際強く押さえ付け過ぎないようにする。ワーカブル・レジンの膨張したり表面に光沢を出しやすい性質がこの作業方法によって克服できるようになった。

ワーカブル・レジンは粘着性が高く扱いにくい面がある。その点適度な水分の利用が有効である。水分が混入されない程度にレジンの表面だけが潤う状態で作業すればレジンの強度に全く影響が及ばないことが分かった。上記のような湿った布を用いるほか、細かい器形の変化を再現する際、工具や指先を濡らして作業することができる。

表面に光沢の出やすいレジンの性質は、色塗りをしないで写真を撮る場合不都合であった。以上のような技法によって表面光沢を抑えることができるようになったためワーカブル・レジンで復元した土器をそのまま写真にとることが安心してできるようになった。

⑥．多くの場合、土器外面の器形成型をワーカブル・レジンで行って、レジンが硬化した後クラプレンを剝ぎとって再利用する。この復元技法を考案した当初は芯材として埋め込んでしまうことを基本にしていたが、ワーカブル・レジンの強度と接着効果が十分高いことが分かり、有効な再利用を基本とするようになった。これも、⑤の技術とともに重要な技術革新となった。

⑦．上記⑤の技術の発展とともに、施文技術も大きく向上した。実際に土器製作時に用いられたと思われる施文原体や施文具を用いて粘土に施すとほぼ同じように施文ができることが実証され、その技術が作業担当者の努力によって飛躍的に発展した。硬化時間を延ばしてより正確な施文をするため、ワーカブル・レジンを冷却しながら作業を進めることもできるようになっている。

以上述べたように、当復元室のクラプレン＝ワーカブル・レジン復元技法は、松原遺跡の接合から復元の作業過程の中で発展し確立されてきた。その意義は貴重であり、今後に資するところ大なるものがあると思っている。

註1）　徳永哲秀　1995年「「土器復元」改良の試み－形状記憶樹脂とエポキシ樹脂を芯材、補強材として－」『長野県埋蔵文化財センター紀要4』

註2）　ここで示した榎ノ井遺跡群、石川条里遺跡、櫻田遺跡は高速道関係の調査および整理作業をさす。いずれも報告書が刊行されている。同時に、住居址軒数が必ずしも遺物整理量の大小を示していないことが理解できる。

註3）　前掲註1

第3節　栗林式土器の観察法

1　器類・器種および部位呼称

(1)　栗林式土器

栗林式土器の器類[1]は、壺形土器，甕形土器，高杯形土器，鉢形土器（以下、形をとり呼称する）が基本構成となり、用途に応じた形が作り出され、その総体が栗林土器様式として認識されている。器類の壺形土器は、その形、文様構成等によって、細頸系壺、太頸系壺、小型赤彩壺等の器種に分類され、各器種はさらに諸型式に細分されることになる。細頸系壺は口縁部の形態，胴部の形態、文様構成等によって、高杯、鉢はやはり口縁部の形態によって細分が行われる。この分類作業には、時として器種の判別に苦慮する場合も生じる。たとえば甕形を呈する土器に、壺形に占有される文様モチーフが飾られる場合が若干存在し、時には大型の鉢形を呈する場合も生じることになる。これらの折衷的な、あいまい要素ともとれる現象は、栗林式土器を理解する上で重要な点となるのであって、栗林様式を理解できる分類が求められるところでもある。

本書「松原遺跡　弥生・総論3　土器本文」編では、土器の器種分類、編年的考察は行わない。前節で示した通り、多くの土器資料の中から選択、提示した土器は、詳細な観察とその提示によって今後の分析のための基礎となると考えた。私どもは記録保存を行った基礎データについて、今後の土器研究や、松原遺跡の集落構造を解明するためにも、本書を紐解く多くの活用者が利用しやすいような観察提示を心がけた。本節ではその観察にあたっての観点と用語について解説する。

(2)　器類の部位呼称

土器本文編では図版編で提示した土器について、本文と観察表によって解説を行うものとする。その主な内容は器形の特徴ならびに調整の手法、文様と施文手法の説明となるが、その前提として各器類の部位呼称を示す（第1図）。

口縁部　・壺、甕では頸部文様帯および屈曲付近より上位をさす。口縁端部は口縁部先端の全体を特定し、口唇部はさらにその先端の面取り部あるいは縄文施文によって面となる部分をさす。

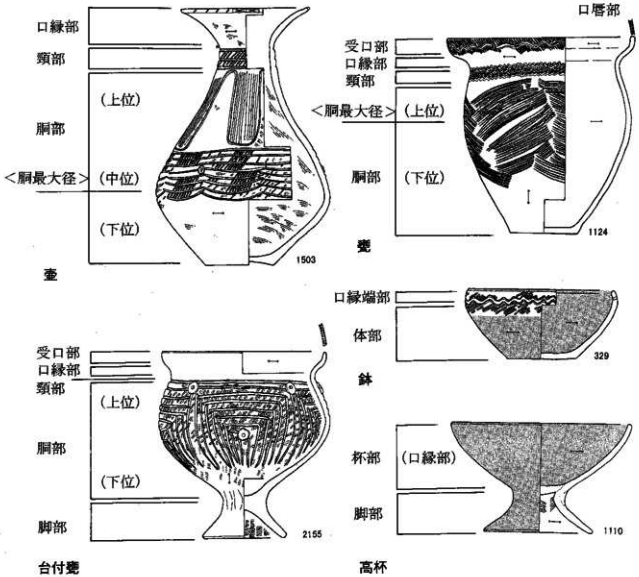
頸　部　・胴上位部分に位置し、口縁部へと変換する括れ部付近をさす。壺は横帯系の文様が設定されることが多く、甕では文様帯が設定される場合とない場合とがある。

胴　部　・頸部以下を胴部としてとらえる。さらに、その部位を上位、中位、下位として認識するが、胴部全体で大まかにとらえた位置である。壺の場合は、胴最大径付近を中位としてとらえ、その上を上位、その下を下位としてとらえる。甕の場合は中位という概念をはらい、胴部上位と胴部下位に2分して提示する。

杯　部　・高杯は脚部と杯部に分け、杯部については口縁部と呼称する時がある。

脚　部　・高杯および台付甕の脚については脚部と呼称する。

1）「器類」とは「器種」を総括する用途名称分類で、加納俊介氏によって提称されている。加納俊介　1993年　「東日本における後期弥生土器研究の現状と課題」『転機』4号



第１図　器類の部位呼称法

2　栗林式土器の観察

土器製作にあたっては、①粘土の選択 → ②器形製作 → ③文様施文 → ④乾燥 → ⑤焼成という経過をたどる。今日の考古学研究では、① ～ ⑤の各々の過程について分析を加え、土器に込められた諸情報を引き出している。本節では、②器形製作および ③文様施文に関連して、本書で用いる用語・呼称について提示することにする。

器形の製作から文様施文は、ａ成形 → ｂ調整 → ｃ文様施文という流れがある。私どもが土器を観察する際には、主にｂの調整痕と、ｃの文様が注意されるところとなり、報告書では土器観察表に提示されることになる。ａの成形痕についても、輪積み痕、擬似口縁等で観察可能な場合もあるが、多くはｂの調整痕や、ｃの文様で消されてしまっていることが多い。調整、施文に関わる行為をそれぞれ調整手法、施文手法と呼び、土器に認められる痕跡から、その手法を復元するが、細部については行為は一様ではなく、多様性が窺える。調整手法と施文手法に別けて用語、呼称について提示したい。

3　調整手法

土器の調整手法とは、器形を成形する過程で行われる行為で、器形の補正行為から器面の微調整、施文のための基礎作業に至るまで含まれ、文様施文以後も行なわれる。よって、調整手法と一概に語っても粘土の乾燥過程にも段階差があり、その状況によって異なった行為、用具が必要となってくる。私どもが土器を観察して確認する調整痕は調整手法を明らかにする際の糸口となる。本報告書で用いる調整手法に伴う痕跡には、ヨコナデ、ナデ、ハケメ、ミガキ、ケズリ等の調整痕があり、調整痕を呼称する場合、痕跡にその調整行為内容を名称として与え、調整手法および内容がイメージできるようにしている。

ヨコナデ　・口縁部のみに認められる調整痕で、口縁部の内外面に、口縁と並行してきめ細かなスジが並行して認められる痕跡をヨコナデと呼ぶ。このスジは多くの場合、途中で静止したり、交わったりすることはなく、互いが並行した状態で一周する（PL118－157）。
ヨコナデは土器製作時の回転行為に基づいた結果生じた調整痕である。痕跡のあり方から細分も可能となり、調整方法および調整のための用具等の差がその背後に想定されるところである。その場合、総称はヨコナデという用語を用い、ヨコナデａ，ｂ，ｃというように細分する。栗林式土器の場合、ヨコナデ痕跡の下地にハケ調整痕跡が確認されることが多い。また、ヨコナデ後にハケ調整痕がかかっている場合もある。

ナデ　・器表面を平滑にするための行為の痕跡で、その行為はハケメ、ケズリ調整で生じた器表面の小孔を消す働きをしている。ナデは主に手のひらで行った調整であると想定されるが、器面に対して軽く施すのは工具を用いた場合も同様であろう。
外面にハケ調整を施す栗林式土器の壷では最終調整で軽くナデを施しているものもある。ナデとミガキの差は器面調整時の器面への押圧がナデの方が弱く、現象的にはナデの光沢は弱い。これは調整時の乾燥度と水分の補給とも関連するかもしれない。

ハケメ　・器形を成形する際に調整具を用いた時に残る痕跡や、器表面を平滑にするための行為の痕跡等の総称である。浅く細い条痕が一定幅内で平行して刻みこまれるものをさす（PL116－140）。条痕の調整具にはいくつかの種類が想定されるが、凹凸の様子から２系統に分けることができ、ハケメａ、ハケメｂとする。ハケメａは条痕凹部の幅が広く、掘りの浅いもの、ハケメｂは条痕凹部の幅が狭く掘りの深いものをさす。ハケメａはハケメの主体を占め、調整痕にも多様性があるところから細分の可能性がある。原体は板状の小口部ならびに、ヒゴの結束状のもの（櫛歯状原体・簾状原体）が想定される。ハケメｂはハケメ痕跡の切り合い関係が不明瞭なものも多く、ハケメａとは形状の異なる調整具が想定され「荒神ホウキ」のような「ササラ状の原体」を想定している。ハケメｂはハケメａに比べて使用例は多くない。栗林式土器のハケメについては考察編で論考する。

ミガキ　・器表面を平滑にするための行為の痕跡で、工具調整痕跡が残る。ナデに対して器面に加える圧力は強く、器面の小孔を消すと同時に砂粒を器表面から内面に押しやる働きをする。ナデよりも乾燥した状態で施していると考えられ光沢をもつ（PL116－139）。栗林式土器のミガキは、ハケメ、ナデ等の一次調整の後、その上位に密に施すことによって一次調整の痕跡を消し去る場合と、一次調整痕をそのまま残す場合とがある。大まかな分類を行うと下記の通りである。

ミガキａ　・ミガキ痕が密に施されていて全体的に光沢をもち、一次調整痕跡が消え去っているもの。

精製化されているミガキ痕跡で、その方向がわかるものとわからないものがある。

ミガキｂ　・ミガキ痕が密に施されていて全体に光沢があり精製化されているが、一次調整痕が深いためにその痕跡が残るもの。全体的な光沢があり、ミガキ方向が理解できにくいものが多い。壺胴部上位に観察されることが多い。

ミガキｃ　・ミガキが密に施されていないため、ミガキ痕が観察される以外の器面に一次調整痕が残るもの。ミガキ痕が一定幅で並行して施されるものと雑に施されるものとがある。

精製ミガキ　・精製に施されているミガキａ，ミガキｂの痕跡を「精製ミガキ」と呼ぶ。精製ミガキは甕内外面下半、壺の一部に観察することができる。後期箱清水式土器の壺はミガキａが主体を占めるようになるが、栗林式の壺はミガキａ～ｃまで認められ、多様化している。

ケズリ　・いわゆるヘラケズリと考えられているもので、小砂粒の移動が痕跡として残る。栗林式土器の場合、新相を示す壺胴下半部に観察されることがある（PL116－141）。ヨコケズリが基本で、軽いケズリの場合が多い。ケズリ調整の後、ナデ、あるいはミガキを行っているため、ケズリ調整行為があっても確認できないものも存在すると思われる。

4　文様帯と施文手法

(1)　施文原体と文様

栗林式土器の壺、甕は多種多様な文様で飾られる。この文様帯構造が中部高地の栗林式土器様式の一要素となる訳であるが、表現される主な文様は沈線文、櫛描文、縄文によって構成される。施文具と施文手法については考察編で論考するが、ここでは基本的な用語について考え方を示す（第２図）。

①　沈線文（第２図：PL124）

施文原体は１本の棒状工具で、径３～５㎜程の棒である。原体を器面に当てて移動することによって描く文様で、横方向に描くことが基本となり１本づつ描かれている。沈線文には横走沈線、波状沈線のように原体を器面から離さずに描くため連続する文様と、押し引き列点文のように、原体を器面に押しあててから原体を器面から離すため列点状になる文様とがある。

②　櫛描文（第２図：PL117，118）

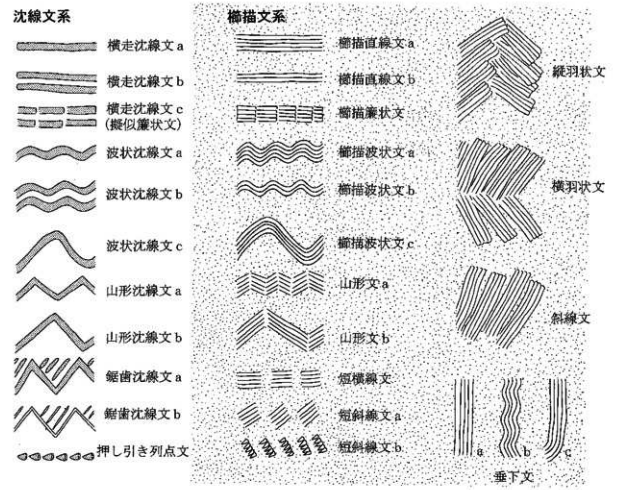
栗林式土器の施文原体は細い棒状のヒゴを束ねたものが想定され、徳永哲秀氏は「簾状工具」[2)] と命名している（徳永1995年）。簾状工具は径１～２㎜の棒が横位に編み込まれて結束したもので、櫛描文はその端部を器面にあて移動させることによって文様を描く。沈線文と異なって１回の移動で幅のある文様を描くことができる。本報告書で櫛描文の原体をさす場合、徳永のいう簾状工具を想定するが、観察表等では原体を「櫛」と表現する。櫛歯２本で表現された波状文の中には、凹部が２～３㎜と細く櫛描文と類似するものが存在する（櫛描波状文ｂ：PL119－159）。この原体は、櫛描文原体の細いヒゴを抜きとり２本結束したもので、櫛描文として位置づけたい。

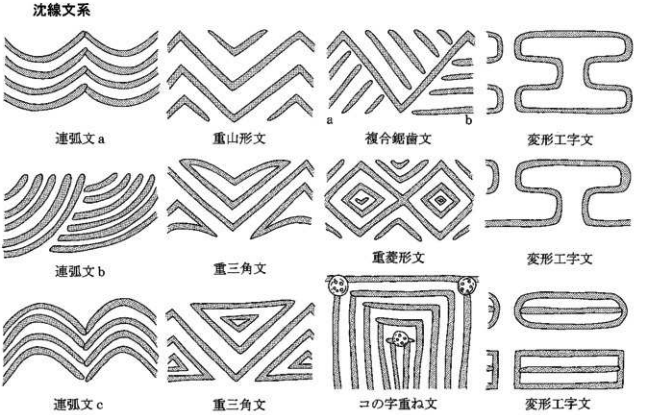
③　刺突文（PL117－144）

板状の小口面を器面に対して直交する形で突く文様で、棒状工具を斜位にあて押し引きする「押し引き列点文（PL123－193）」とは異なる。甕および壺の口縁端部、壺の頸部および胴部文様に用いられる。

栗林式土器の文様には沈線文系文様と櫛描文系文様とがある。その文様にはバラエティーが認められ、第２図に文様呼称法を提示した。その主要構成となる文様は沈線文系である。

2）　徳永哲秀　1995年「箱清水式土器の施文具および施文法について」「長野県考古学会誌」75　長野県考古学会





第2図　栗林式土器文様呼称法

(2) 文様帯の設定

栗林式土器の、壺・甕・鉢には文様が認められ、文様はそれぞれの器類に設定された文様帯に合わせて施文される。栗林式の文様を検討するには、文様帯の把握が重要であり、器類毎に文様帯の基本構造を整理する。

① 文様帯の設定（第3図）

文様帯は、口縁部・頸部・胴部に設定され、以下の様になる（第3図)。

Ⅰ：口縁部文様帯
　a：受口部外面　　b：口唇部　　c：口縁端部内面
Ⅱ：頸部文様帯
　a：主文様　　b：附加文
Ⅲ：胴部上位文様帯
Ⅳ：胴部中位文様帯
Ⅴ：胴部中位文様帯

② 壺形土器

壺形土器は、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴの文様帯構造となる。Ⅰ文様帯は、口唇部への設定が基本だが（Ⅰb)、口縁端部内面（Ⅰc）に設定される例が僅かにあり、更に受け口状口縁は口縁端部外面（Ⅰa）にも文様帯が見受けられる。Ⅱ文様帯は、下部へ附加文が付随する場合があり、その場合は主文様（Ⅱa）と附加文（Ⅱb）とに分化する。胴部文様帯は、上（Ⅲ)・中（Ⅳ)・中（Ⅴ）の3帯構成となるが、3帯構成は壺形土器特有の構造であろう。以上の文様帯には、以下に示す9系統の組み合わせが存在する。

Ⅰ＋Ⅱ～Ⅳ、Ⅰ＋Ⅱ～Ⅳ＋Ⅴ、Ⅰ＋Ⅱ＋Ⅳ、Ⅰ＋Ⅱ＋Ⅳ＋Ⅴ、Ⅰ＋Ⅱ＋Ⅲ＋Ⅳ＋Ⅴ
Ⅰ＋Ⅱ＋Ⅴ、Ⅰ＋Ⅱ、Ⅰ、0（器面を分化せず、全面に赤彩塗彩を施す）

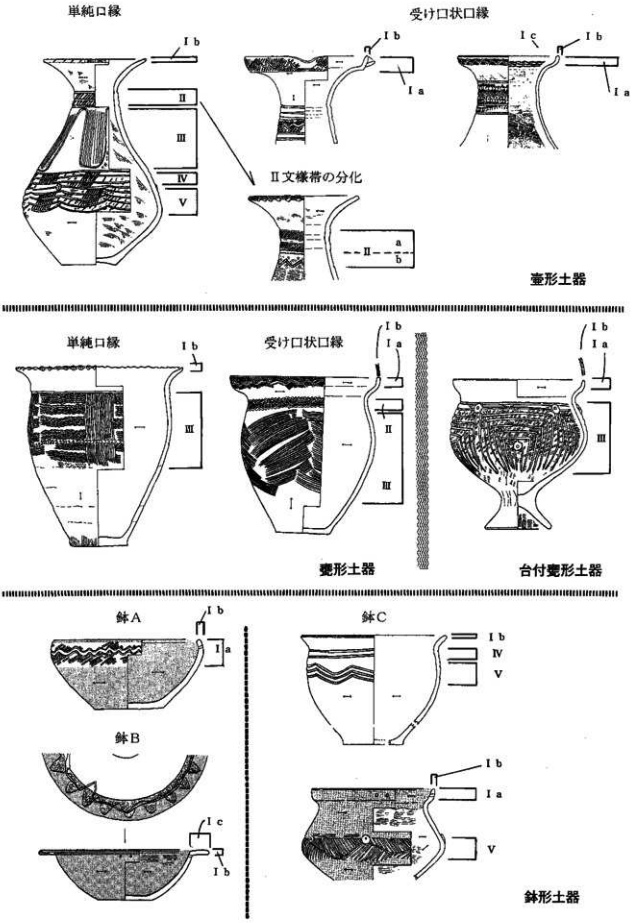
それぞれの系統は、後に述べるとおり、土器編年において組成や主要系統が異なり、各段階の判断基準・根拠となる。

③ 甕形・台付甕形土器

甕形・台付甕形土器の文様帯構造はⅠ・Ⅱ・Ⅲで、その組み合わせにはⅠ＋Ⅲと Ⅰ＋Ⅱ＋Ⅲの2系統が認められる。Ⅰ文様帯は、壺形土器と同様であり、口唇部（Ⅰb）の外に受け口状口縁には外面（Ⅰa）へも設定されるが、内面（Ⅰc）は基本的には文様を施文しないようである。

④ 鉢形土器

鉢形土器は、構造が大きく異なる2者が存在する。一方は、Ⅰの構造で鉢A・Bに採用され、Ⅰ文様帯のみへ文様施文が行われる。鉢Aは、外面（Ⅰa)・口唇部（Ⅰb)、鉢Bは口唇部（Ⅰc）及び水平に開く口縁部内面（Ⅰc）への施文となる。他方は、鉢CのⅠ・Ⅳ・Ⅴの構造で、組み合わせはⅠ＋Ⅳ＋Ⅴ、Ⅰ＋Ⅴの2系統である。Ⅰ・Ⅳ・Ⅴ構造のⅣ・Ⅴ文様帯は、壺形土器のⅣ・Ⅴ文様帯と類似性が強く、Ⅴ文様帯の施文文様に鋸歯状文・連弧文等が取り入れられている。この他、鉢A～Cには、器面を分化せず、全面に赤彩塗彩を施す0の系統がある



第3図　栗林式土器の文様帯

(3) 器類と文様帯

栗林土器の文様は、器類の部位毎に特定の文様モチーフを有し、文様帯を構成している。沈線文、櫛描文、縄文の組み合わせで表現されるこれらの文様帯の概要を示しておく（第５図）。

① 壷の文様帯と文様（第４，５図：PL120～125）

壷口縁端部文様帯（Ⅰ文様帯）

壷の口縁部は単純口縁と受口状口縁とがあるが、口唇部Ⅰｂ文様帯に縄文が施文されることが多い。栗林様式では同部に縄文を施文することを最終段階まで志向することが特色である。懸垂文をもつ受口状口縁の場合、Ⅰａ文様帯に施文される沈線文は、Ⅱ，Ⅳ文様帯でくり返し施文されることが多い。

壷頸部文様帯（Ⅱ文様帯）

栗林・箱清水式土器様式の文様帯は、頸部から胴部文様帯（Ⅱ～Ⅴ文様帯）が時間的変遷の中で頸部文様帯に収斂していく。このことから、頸部文様帯が重要な文様帯であったことを窺い知ることができる。

栗林式土器の頸部文様帯（Ⅱ文様帯）は、沈線文系の横帯文が基本で、地文にＬＲ縄文が施文されることが多い。櫛描文も認められるところではあるが、沈線文系の横帯文とＬＲ縄文が文様要素の規範となっている。また、Ⅱ文様帯の設定にあたっては器形の変化も認められるところであり、頸部の型式をａ～ｄに類型化する（第４図：PL120）。

頸部文様帯ａ	・胴部から頸部、口縁部と器形がスムーズに成形され、頸部に有段部はない。口縁部と胴部の明瞭な境界が認められない。頸部に横帯文が施文される。
頸部文様帯ｂ	・口縁部と胴部の境界に有段部があり、頸部文様帯が有段部から胴上半部に位置する。文様帯下位には有段部はない。有段部は痕跡化し明瞭でないものもあるが、横帯文最上位が横走沈線文でない場合は文様帯ｂと理解する。
頸部文様帯ｃ［押し出し凸帯］	・頸部文様帯の内面を横にユビナデを行って押し出しているため文様帯が凸帯状に盛り上がっている頸部文様帯をさす。横走沈線はユビナデ、板状の小口で施文する。押し出し行為およびユビナデによって盛り上がる頸部文様帯を「押し出し凸帯」と仮称したい。
頸部文様帯ｄ［貼り付け凸帯］	・頸部に貼り付けの凸帯をもち、その周囲を沈線文等で区画する文様帯をさす。凸帯を添付することから、この凸帯を「貼り付け凸帯」と仮称する。凸帯上は縄文、刺突文が施されることが多い。

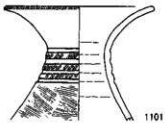
壷胴部上位文様帯（Ⅲ文様帯）

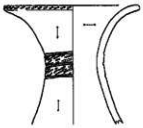
胴部上位に施文されるⅢ文様帯は、無文帯の場合と文様帯を構成する場合とがある。後者の場合、横帯構成の文様帯と、縦位構成の文様帯とがある。横帯構成の文様帯は、Ⅱ文様帯から継続する沈線文系の横帯文で充填されることが多く、Ⅱ文様帯との境界が明らかでないことが多い。縦位構成の文様帯は懸垂文が代表的である。懸垂文はⅢ文様帯を縦位に区画する連繋文で、櫛描文、沈線文、刺突文等によって描かれる。文様の主要構成は縦位区画の櫛描文で、直線文と波状文の場合とがあり、直線文を垂下文ａ、波状文を垂下文ｂと呼ぶ。垂下文は、その周囲を沈線文、刺突文で囲郭する場合がある。刺突文は棒状工具で押し引きをくりかえす押し引き列点文で、上位から下位方向に押し引くことが基本である。櫛描文、沈線文、刺突文の組み合わせで懸垂文の文様構成が決定され、その文様変遷が追える。

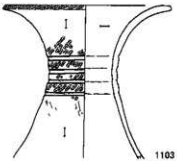
壷胴部中位文様帯（Ⅳ，Ⅴ文様帯）

胴部最大径付近に施文されるⅣ，Ⅴ文様帯は、Ⅱ～Ⅲ文様帯から連続して構成される場合と、Ⅲ文様帯

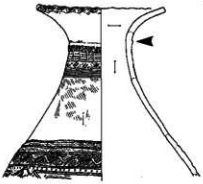
頸部文様帯 a

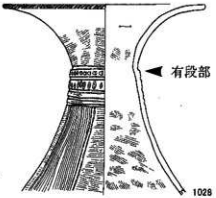


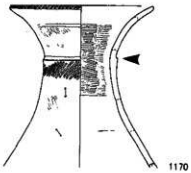




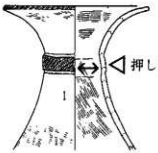
頸部文様帯 b

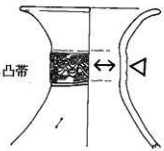


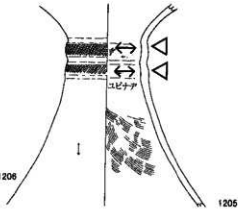




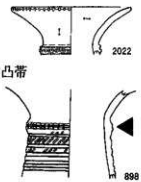
頸部文様帯 c

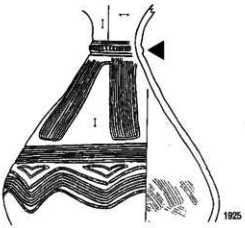






頸部文様帯 d





第4図　壷類部文様帯の類型

が空白帯となり、頸部Ⅱ文様帯とセットになって構成される場合とがある。Ⅳ，Ⅴ文様帯のみで文様帯が構成されることは基本的にはない。

Ⅳ，Ⅴ文様帯はセットになって施文されることが基本で、Ⅳ文様帯が横帯構成、Ⅴ文様帯が連繋構成となりⅣ文様帯にⅤ文様帯が付加する形となる。Ⅴ文様帯は沈線文、櫛描文、縄文で構成されるが、沈線文による単位文が連続して連繋することが多い。この単位文の繰り返しの数を単位として認識し、文様全体が理解できるものについてはその単位数を観察表で表記した。

② 甕の文様帯と文様（第5，6図：PL117～119）

甕の文様帯は口縁部、頸部、胴部文様帯をⅠ～Ⅲ文様帯に区分し、櫛描文、沈線文、縄文等で装飾する。Ⅱ～Ⅲ文様帯に施文を行なわないナデ、ミガキ、ハケ甕も少数ながら存在する。甕の主要文様は櫛描文である。沈線文系の「コの字重ね文」は栗林様式中～新相を代表する文様構成であるが、文様全体に占める割合は高くない。

甕口縁端部文様帯（Ⅰ文様帯）

甕の口縁部には単純口縁と受口状口縁とがあるが、口唇部Ⅰb文様帯に縄文が施文されることが多い。栗林様式では同部に縄文を施文することを最終段階まで志向することが特色である。この縄文施文の流儀は壺の場合と同様である。受口状口縁の場合、Ⅰa文様帯に縄文をころがし、さらにⅠb文様帯に施文する。

単純口縁の場合、縄文以外の施文として、口縁端部を押さえたり刺突したりすることがある（PL119）。

ユビオサエ　・口縁端部を内外面から指でつまんで調整を行なうもので、口縁端部が波状を呈することがある。つまむことによって押圧した部分に指紋が残っていることもある（第5図1865　PL119－160）。

オサエ　・口縁部の外面から、棒等の原体で押圧するもので、押圧された形状がユビオサエと類似し、面をもつもの。縄文原体で押圧することも稀に存在する（1048）。

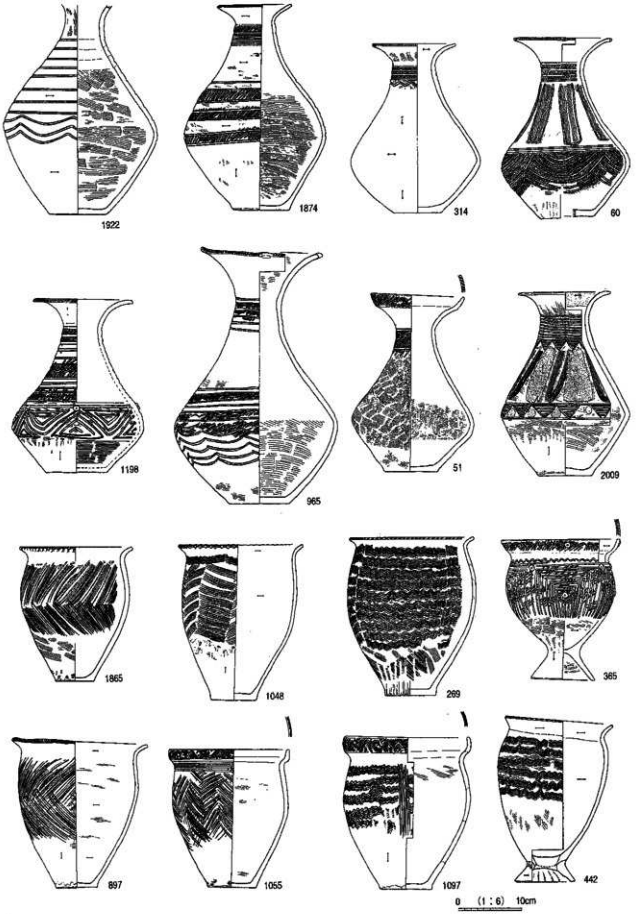
刺突　・口縁端部に対して板状の小口を突きさすもので、ユビオサエ、オサエよりも細くて深い縦位線が刻まれるもの（PL119－164）。

ユビオサエ、オサエは押圧文様で、その判別は難解であり、観察が不充分な点もある。原体には多様性が認められそうである。オサエは原体を押しあて左側に押し引いている場合が多く、施文は右回りに行われる。刺突はオサエが押しあてることに対して突きさす文様で、両者の区別はつきやすい。栗林式土器では、押圧文様は時間の流れとともに減少傾向にあり、一方、刺突文様は一定量認められる。

甕頸部文様帯（Ⅱ文様帯）

甕の頸部文様帯は、文様を施さない無文帯（第5図1865，897）か、横帯文（第5図1048，1055）の二者がある。前者の場合、胴部Ⅲ文様帯が頸部まで及んでいることが多いが、Ⅱ文様帯が無文であると解釈したい。頸部文様帯は櫛描文が主体で、直線文、波状文、簾状文があり、通常1段である。沈線文系の「コの字重ね文」にも、頸部文様帯に横走沈線が1条認められることがある。

甕の観察では、Ⅱ文様帯とⅢ文様帯の施文前後関係を重視した。栗林式土器に後続する箱清水式土器では、頸部文様帯（Ⅱ文様帯）を先に施文し、胴部文様帯（Ⅲ文様帯）を施文するタイプから、施文順位が逆になる傾向が認められるため、栗林式土器の甕における手法の把握に努めた。たとえば、Ⅱ文様帯の2段の波状文が上から下方向に施文され、次にⅢ文様帯の羽状文が施文されている場合は〔櫛波2段（上か



第5図　栗林式土器の文様帯と文様

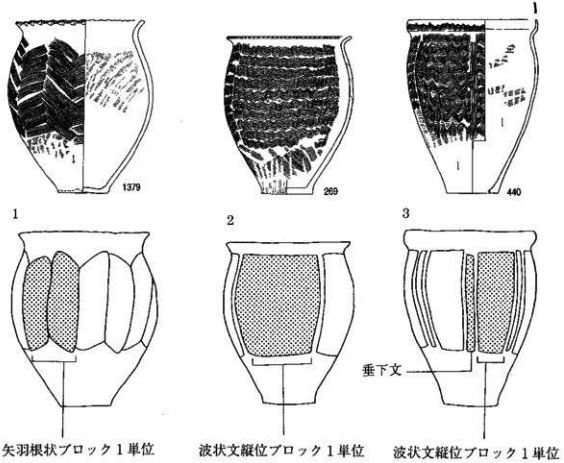
ら下）→羽〕というように観察表で表記した。櫛とは櫛描文、波とは波状文、羽とは羽状文を略している。

甕胴部文様帯（Ⅲ文様帯）

甕の胴部文様帯は、胴部最大径の下位付近まで文様が施文される。これをⅢ文様帯としたが、胴部下位は文様施文後、タテミガキされることが基本である。胴部文様帯は、横帯構成の幾内型櫛描文による波状文を除いて、文様帯を単位ブロックによって縦に区切ることが特色である。これが中部高地型櫛描文の特徴でもあるが、この施文方法によって成立する文様帯を縦構成の文様と認識する（第6図）。

縦羽状文の場合、文様は斜線文を縦位に重ねる。その斜線文の方向は縦位ブロック毎に反対となり、矢羽根状の文様を構成して繰り返しているが、この矢羽根状の縦位ブロックを1単位として認識し、文様帯を縦位に区切る単位として観察表に提示した（第6図－1）。観察表で〔櫛羽状文5単位＋斜線文1単位〕という場合は、縦羽状文の矢羽根状ブロックが5単位連続し、一ブロックだけ矢羽根状にならない斜線文の単位で構成され計6単位の縦位構成をとるということである。

波状文で構成される文様帯には、垂下文が構成要素となる場合と、垂下文がない場合とがある。断絶型の櫛描施文である中部高地型櫛描文で描かれると、垂下文の有無にかかわらず、文様帯はブロックで区切られた縦位構成をとる（第6図－2，3）。垂下文がある場合は垂下文の数が縦位ブロックの単位数となる。観察表の〔櫛波4ブロック単位〕とは、波状文の縦位ブロックが4単位縦位構成をとるということである。沈線文系のコの字重ね文も単位として認識し、観察表に提示を行なった。



第6図　甕胴部文様帯における縦位ブロック

(4)　施文手法

①　中部高地型・畿内型櫛描文

千曲川・犀川流域は中部高地でも北域に位置する。同流域に分布する栗林・箱清水式土器様式は、櫛描文が定着した土器群として認識されるが、この櫛描文の施文手法・文様構成は佐原真氏、笹沢浩氏らによって、中部高地型の櫛描文として評価されてきた[3]。かつて、佐原真氏は、弥生土器の製作に回転台の使用を想定し、文様の施文手法から櫛描文が波及した地域毎における回転台使用の有無を考察した。その際、畿内および西日本の櫛描横帯文には断絶がなく、文様が一周するところから、その施文に回転台の使用を考え、非断絶型の櫛描文を畿内型櫛描文と呼称した。一方、中部高地の箱清水式土器では、櫛描横帯文に断絶が認められることから、弥生文化波及の周辺地帯に位置するこれらの器の成形、文様施文には回転台が使用されなかったと想定し、断絶型の櫛描文を中部高地型櫛描文と呼称した。

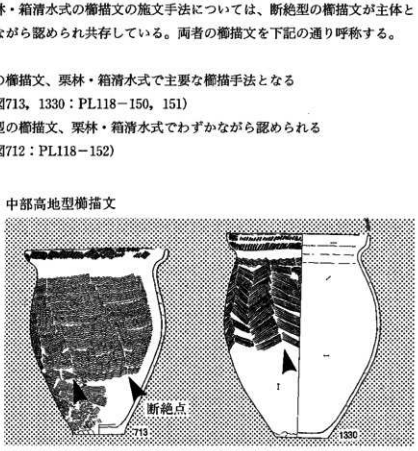
今日、栗林・箱清水様式における中部高地型櫛描文は回転台の使用の有無と関連するものではないと考える。甕の口縁部に認められるヨコナデ調整は、栗林・箱清水式土器の製作時における調整に回転台使用が想定されるところである。ただし、栗林・箱清水式土器における櫛描文は回転台調整痕と想定されるヨコナデ痕と断絶型の櫛描文が共存することに意味をもつ。中部高地型櫛描文は、縦位区画を志向する櫛描文として位置づくことが重要であり、東の櫛描文として評価することができ、施文原体についても再評価が行われているところである。栗林・箱清水式の櫛描文の施文手法については、断絶型の櫛描文が主体となるが、非断絶型の櫛描文も若干ながら認められ共存している。両者の櫛描文を下記の通り呼称する。

中部高地型櫛描文　断絶型の櫛描文、栗林・箱清水式で主要な櫛描手法となる
（第7図713，1330：PL118－150，151）

畿内型櫛描文　非断絶型の櫛描文、栗林・箱清水式でわずかながら認められる
（第7図712：PL118－152）

畿内型櫛描文

中部高地型櫛描文



第7図　中部高地型櫛描文・畿内型櫛描文

3）佐原真 1959年「弥生式土器製作技術に関する二・三の考察－櫛描文と回転台をめぐって－」『私たちの考古学』20　考古学研究会
笹沢浩 1978年「中部高地型櫛描文の系譜」『中部高地の考古学』長野県考古学会

② 甕の櫛描施文

栗林式土器の文様は、壷に沈線文系文様が、甕に櫛描文系文様が多様される。甕の胴部には「コの字重ね文」のように沈線文系文様も認められるが、その多くは櫛描文系の羽状文、波状文で充填される。櫛描文は前述の中部高地型櫛描文が主体となるが、畿内型櫛描文も混在する。この断絶型を主体とする櫛描文の施文手法には一定の流儀があり、集団の規範および、土器製作に関する時間的変遷を反映している。甕の櫛描文施文手法を類型化し、今後の文様研究の基礎データとなるよう観察表に提示した。

施文手法の類型化については以下の観点から類型化した（第8図）。

1．I～X

縦羽状文とか波状文というように、文様の種類で大別を行ない、更に、中部高地型櫛描文と畿内型櫛描文に分けた（Vについては中部高地型と畿内型が大分類の中に入っている）。同じ中部高地型であっても、1条あたりの櫛描文様が右から左に向って描かれているか、左から右に向って描かれているか、その方向を重視した。この観察には不明瞭な点もあり、今後、観察方法を検討しなくてはならない点もある。史料批判を受けたいところである。

2．A～H

中部高地型の櫛描文は、文様帯を縦構成にブロック区画している。縦羽状文ならば、同一方向に重ねた斜線文のまとまりが縦構成のブロック区画になり、中部高地型の波状文の場合は、文様帯を縦位に区切る垂下文の有無にかかわらず波状文のまとまりがブロックとなっている。このブロック間の施文順位を観点とした。

3．R・L

I～Xでは1条あたりの文様の描く方向を基準にした。断絶型の中部高地型でも非断絶型の畿内型でも、文様は一定の回転方向で施文されている。中部高地型でも畿内型でも基本的には右回りであるが、文様の種類によっては左回りが一定量を示すものがある。右回りをR、左回りをLとして分類した。

櫛描文を施文した甕について、1～3の観点に基いて類型化した甕の施文手法が以下の通りである。この組み合わせで分類を行い、櫛描文を施文したすべての甕の施文手法を観察表に提示している。

(5) 施文手法の類型化

I・縦羽状文

縦羽状文の斜線を常に右側から左側にはねあげ、かきおろす手法〔右起点型〕

A．斜線のブロックで、大半が上位から下位に向けて斜線を重ねていくもの〔下位方向型〕

B．斜線のブロックで、上位から下位に向けて重ねたとなりの単位では、下位から上位に重ねるというように、重ねていく方向が交互になるもの〔交互方向型〕

C．斜線のブロックで、大半が下位から上位に向けて斜線を重ねていくもの〔上位方向型〕

D．斜線のブロックが短く、切り合いがないもの

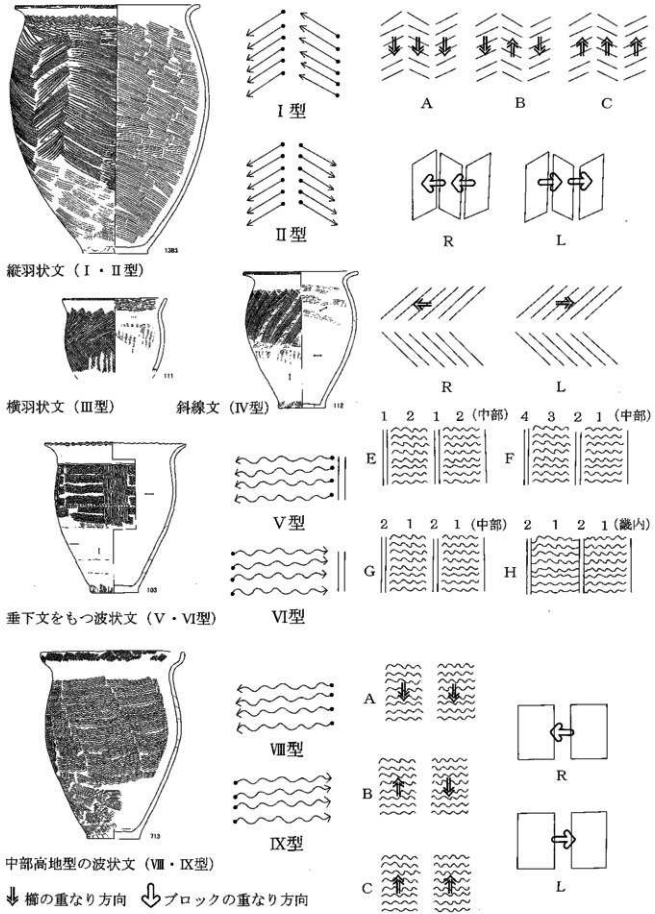
R　右回り方向に文様が重ねられる

L　左回り方向に文様が重ねられる

II・縦羽状文

縦羽状文の斜線を定点から右斜方下、左斜方下にかきわける手法〔中央起点型〕

分類A～D・R，LはI縦羽状文と同じ



第8図　甕施文手法の類型化

Ⅲ・横羽状文

R．上段斜線が右回りに重ねられるもの

L．上段斜線が左回りに重ねられるもの

a．下段（2段目）が上段と同方向に重ねられるもの

b．下段（2段目）が上段と逆方向に重ねられるもの

Ⅳ・斜線文

R．上段斜線が右回りに重ねられるもの

L．上段斜線が左回りに重ねられるもの

Ⅴ・垂下文をもつ波状文

1条あたりの波状文の描かれる方向が右から左方向と想定されるもの

E．垂下文を描いてから、中部高地型の波状文で垂下文間を充填するもの

F．中部高地型の波状文ブロック充填 → 垂下文 → 波状文ブロック充填というように、波状文と垂下文を交互に施文するもの

G．中部高地型の波状文を描いてから垂下文を描くもの

H．畿内型の波状文を描いてから垂下文を描くもの

R　右回り方向に文様が重ねられる

L　左回り方向に文様が重ねられる

Ⅵ・垂下文をもつ波状文

1条あたりの波状文の描かれる方向が左から右方向と想定されるもの

分類E～H・R，LはⅤ垂下文をもつ波状文と同じ

Ⅶ・畿内型の波状文（垂下文をもたない）

A．波状文のブロックで大半が上位から下位に向けて描くもの

B．波状文のブロックで大半が下位から上位に向けて描くもの

R　右回り方向に文様が重ねられる

L　左回り方向に文様が重ねられる

Ⅷ・中部高地型の波状文（垂下文をもたない）

1条あたりの波状文の描かれる方向が右から左方向と想定されるもの

A．波状文のブロックで、大半が上位から下位に向けて描くもの

B．波状文のブロックで、上位から下位に向けて描いたとなりの単位では、下位から上位となるように描く方向が交互になるもの

C．波状文のブロックで、大半が下位から上位に向けて描くもの

R　右回り方向に文様が重ねられる

L　左回り方向に文様が重ねられる

Ⅸ・中部高地型の波状文（垂下文をもたない）

1条あたりの波状文の描かれる方向が左から右方向と想定されるもの

分類A～C・R，LはⅧ中部高地型の波状文と同じ

Ⅹ・中部高地型の波状文（垂下文をもたない）

1条あたりの波状文の描かれる方向が不明瞭なもの

分類A～C・R，LはⅧ中部高地型の波状文と同じ

第2章　資料の提示

第1節　縄文時代晩期末～弥生時代中期前半の土器

1　出土状況

当該期の土器は主として河川の跡から出土した。対象資料は浮線文期前半から栗林式直前辺りまでと時間幅があるが、総量でコンテナ3箱程度にすぎず、単一時期を取ってみれば微々たる資料である。器表面に磨耗は見られないので、長距離を移動したことは考えられず、近接地点から投棄されたものと推測される。

当センターの調査対象区域に存在する河川は、第9図に示した通りSD100A地点、SD100B地点、SD101、SD102に区分できるが、そのいずれからも大量の栗林式土器に混じって当該期の土器が出土している。最も多いのはSD101⑥東区域で、大形破片の過半はここから出土している。ここからSD100B地点にかけてが分布の中心であるといえよう。時期別に見ると浮線文期はどの地点からも出土するのに対し、栗林式の成立に直結するようなやや新しい時期の土器は、松原西地区の河川跡からしか出土しない。栗林式期最古の集落は松原西地区にしか存在しないが、それと符合する現象である。廃棄のブロックが把握できることが多い時期だが、記録が不十分で詳細な平面分布は摑めない。層別の状況も不明なので、下層に集中するとは言い兼ねる。

河川跡以外ではSD100B地点とSD101の縁辺に若干、さらに松原東地区A地点（第9図）から10点ほどまとまって出土している。前者は河川跡出土資料と一連の関係にあろう。河川縁辺における廃棄行為の結果だと考える。後者は栗林式期以降の遺構に混入して発見されたが、集中状況は偶然だとは思えない。自然堤防上の何らかの生活痕跡の存在を反映していることが期待され、それが栗林式期以降に破壊されたのではないかと推測する。

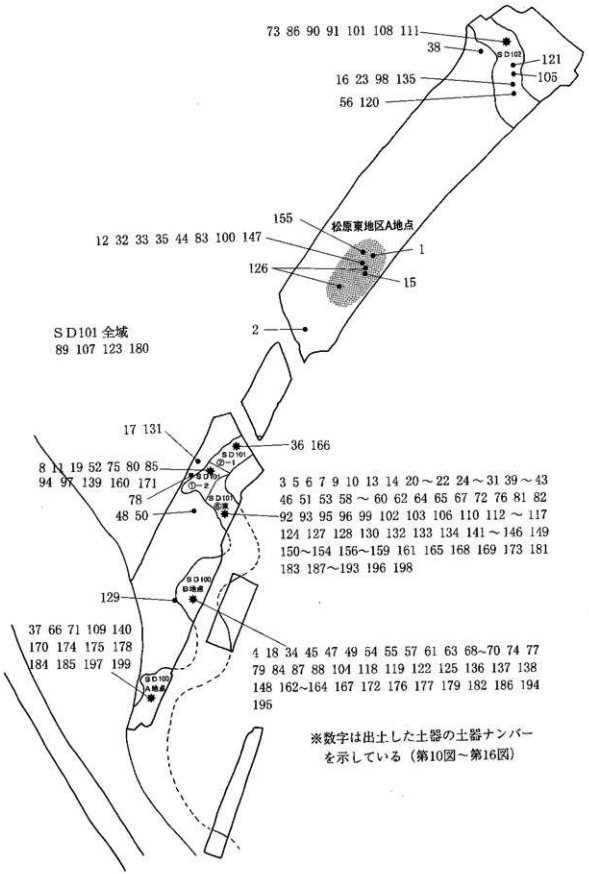
浮線文期、それもその後半にいたって、篠ノ井遺跡高速道地点や屋代遺跡③地区など千曲川の自然堤防上に、廃棄ブロックを主とした生活痕跡が残され始める。松原遺跡東地区A地点もその類例なのだろう。また長野県内全体を通じて、浮線文期には生活エリアに隣接した位置にある傾斜面（崖錐、断層崖、段丘崖、自然堤防斜面部など）に、より規模の大きな廃棄ブロックが形成される遺跡が大半となる。SD101⑥東区域などはその類例だと推測される。

2　概要

この時期の土器には多様な系統性があることが知られている。浮線文系、条痕文系、変形工字文系、及びそれらの系統性が克服された後に形成された地域色豊かな土器に大きく4区分して説明する。

1～124は浮線文系土器である（第10～14図，PL127）。長野盆地で一般的な土器のほか、いわゆる浮線渦紋土器［神村1988］や、太い隆帯で飾った壷なども含めてある。一般的な浮線文系土器から概観する。

神村透　1988「浮線渦紋土器」『〈条痕文系土器〉文化をめぐる諸問題　資料編Ⅱ・研究編』愛知考古学談話会



第9図　栗林式以前の遺物分布図

まず、少量ながら古相を示す土器として、4，23，24，37～39が指摘できる。23は顕著なミガキが特徴で口縁部に隆線を巡らす浅鉢、24，37，38は口縁部に1条の隆線手法の沈線を巡らす壺または深鉢で、特に24は内面にも1条の沈線をもつ。4はケズリナデ技法の深鉢で、縦方向のヘラナデで仕上げる。39は細密条痕深鉢である。これらは氷1式古相を示し、24は離山段階にさかのぼる可能性がある。

氷1式でも後半に属すると見られるのは1，7，8，16などである。1は浅鉢で、頸部無文帯が発達し肩部が網状文帯となるが、網状文のモチーフは2段の楕円か。甕のうち7，16などはかろうじて口外帯らしさを残し、8の口縁部には口外帯を意識した断続的な面取りがなされる。

氷1式よりさらに新しい様相を示すのは3，5などで、氷2式の範疇に属するだろう。3は口縁部に3条の幅狭い沈線、口端部には小さな圧痕をもち、5は5条の幅広沈線をもつ。いずれも梨久保遺跡で注目された仲間だ。これらに加えて、口唇部にユビ圧痕を加える甕12や、甕とは断定できないが同様の装飾を施す75，76，95～97も、口外帯が放棄されているという点に新相を認めるなら、同一段階におけるかもしれない。幅広い口縁部に細密条痕帯をもつ甕73・74は、和泉A遺跡などに類例がある上越方面との関連が問われよう。口縁部からヨコナナメ型の細密条痕を施す甕15は、肩部を整形方向の差で強調するのを放棄しており、その同類かと思われる72とともに条痕文系土器との関連が問われるが、時間的位置付けは氷2式と並行するかもしれない。

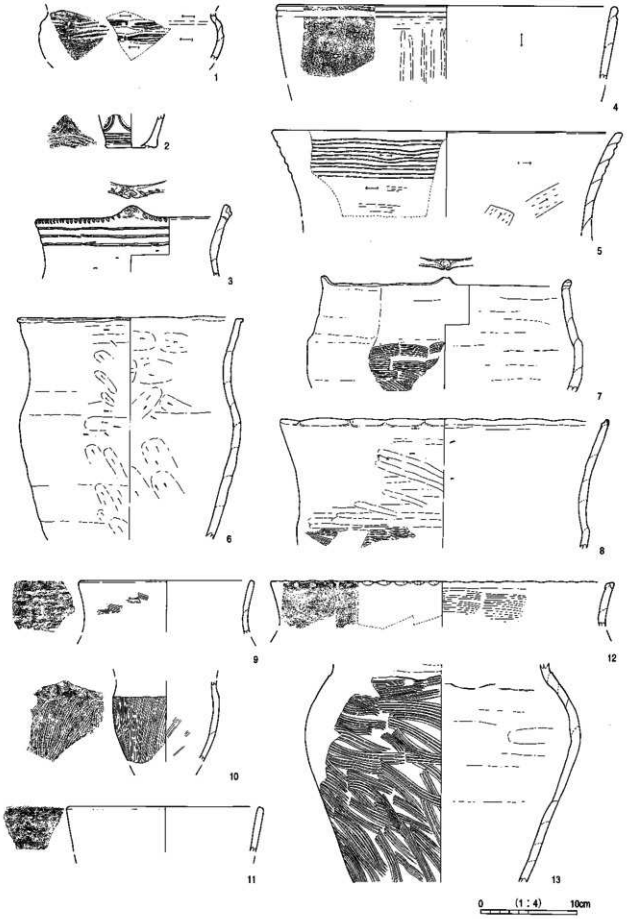
それ以外の甕・深鉢は氷1式後半～氷2式のいずれかに属する可能性が高い。甕と深鉢の区分は小破片では難しいが、確実な深鉢は無文の11だけで、残りの多くは甕だろう。いずれにしても、口外帯は口唇部から上方に突出する小突起に変形し、ケズリナデ仕上げが少なく、工具は多様だが各条が細く整った細密条痕は少ないことなどから、氷1式より古相を示す土器はほとんどないと考える。14・17の細密条痕はタテ型、それ以外はヨコナナメ型が多く、ヨコタテ型もある。

浮線渦文土器や沈線文系土器の仲間は2，25～31。体部の小破片で径が出せる個体はないが、いずれも直径15cm程度を上限とする小形土器であろう。独自の壷形を呈するが、鉢の一種だと考えたい。氷1式に一般的な浅鉢がほとんど出土しない中で、こうした鉢がある程度まとまって出土するのは、注意を要する現象だろう。胎土などは他の浮線文土器と違いがないようだ。渦巻状のモチーフは沈線で描かれる。隆線部分はミガキが施されるが、沈刻部分にはミガキはなされない。25にはやや厚い円板状の瘤が貼付される。

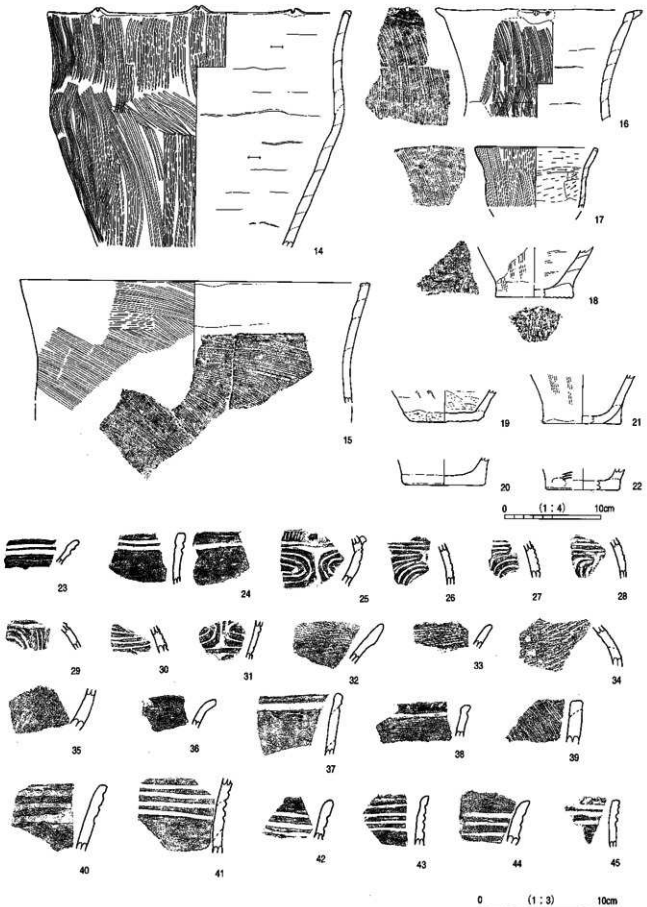
119～124は篠ノ井遺跡群聖川堤防地点で注目された、太い隆帯で飾った壺の仲間である。隆帯の有無が確認できない個体がほとんどだが、器壁が厚く類は太いのが特徴で、一つのグループを形成すると考える。肩の張りは小さいらしく甕と壷との中間的な形態をとっている。内外面ともケズリがない個体が多く、軟質の工具で横にナデて整形されるが、内面側には接合痕が顕著に残る。壷形の器形ではあるが、製作技法からみれば条痕文系統とは思えず、条痕文系の壷を念頭に置きつつも、浮線文系統の技法をもって製作した壷だと推測する。外面に炭化物が付着する個体が多く、煮沸に使用されることが稀ではなかったと推測する。119は太い隆帯が肩部上位に巡らされ、口端から隆帯までと隆帯から下方にも垂下する。隆帯上には指による大きな圧痕が連続して付加される。同様の装飾は口端外面にもみられるが、外反した口唇部に施されるとみてもよい。隆帯以下には細密条痕らしい痕跡が残される。外面は赤彩される。123は口端がくっきり外反し、口唇に指による大きな圧痕が連続する。口端直下には二山の縦瘤が貼付されるが、肩部隆帯の有無は不明である。それ以外の4点は口端部が直立し、口唇部に指圧痕が連続して残されるが、やはり肩部隆帯の有無は不明である。120の外面は赤彩される。

125～143は条痕文系土器である（第14図，PL128）。搬入品の可能性のある製作技法の異なる土器のほか、条痕文系土器模倣品と思われる浮線文土器と差のない造りの土器も含めてある。

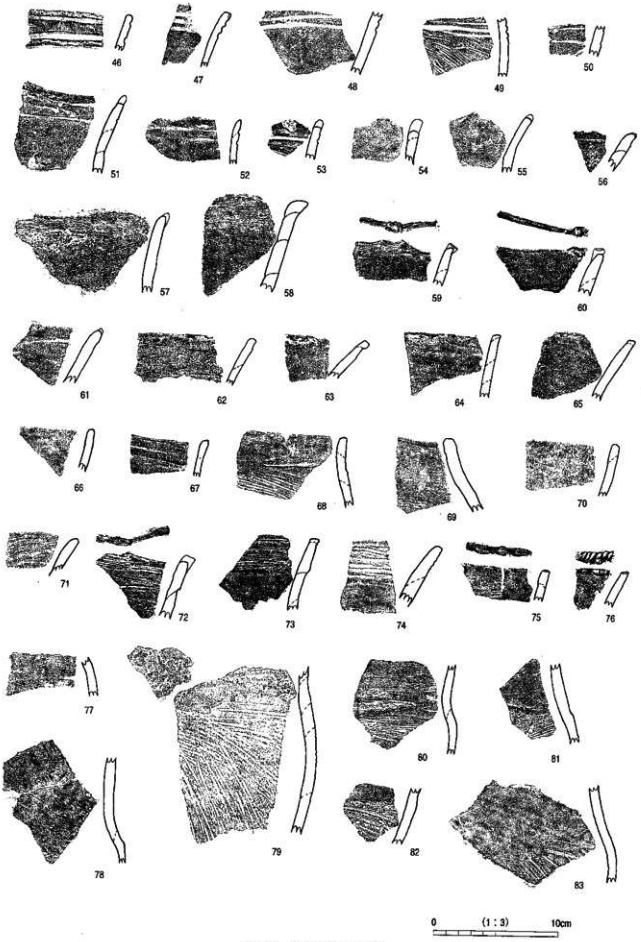
125～128，130～135は黄白色・桃灰色～灰褐色の胎土で、ローリングを受けた大粒の長石や石英を含む。



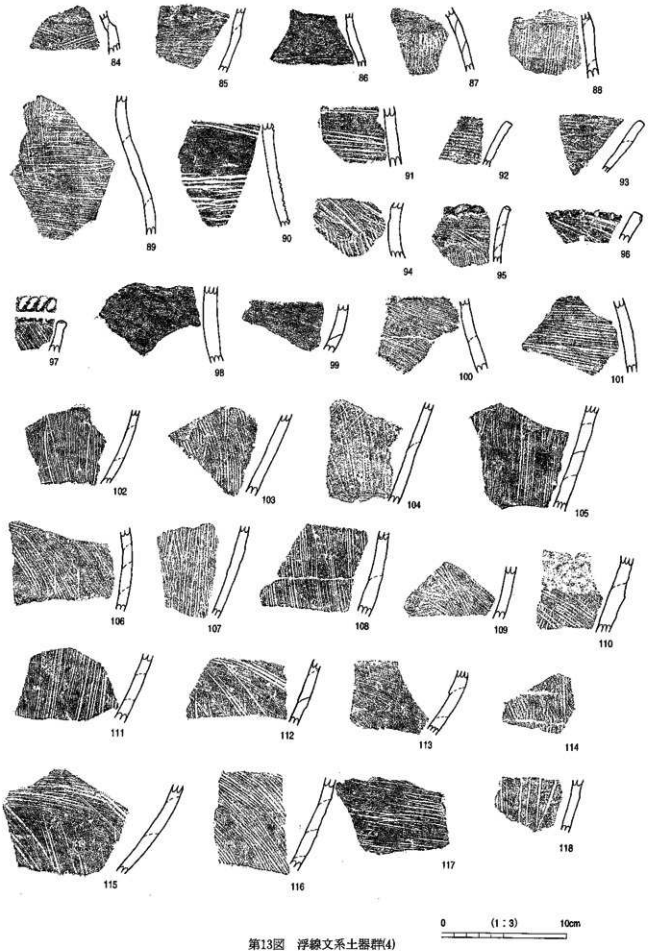
第10図　浮線文系土器群(1)



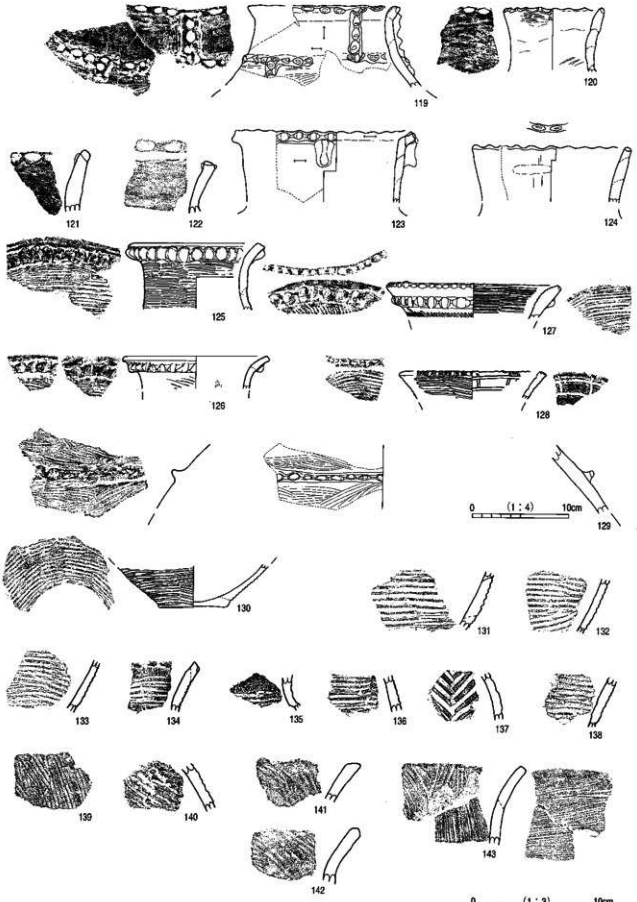
第11図　浮線文系土器群(2)



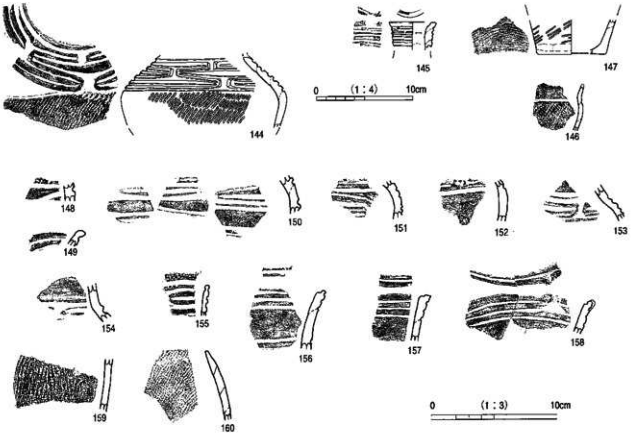
第12図　浮線文系土器群(3)



第13図　浮線文系土器群(4)



第14図　浮線文系土器群(5)・条痕文系土器群

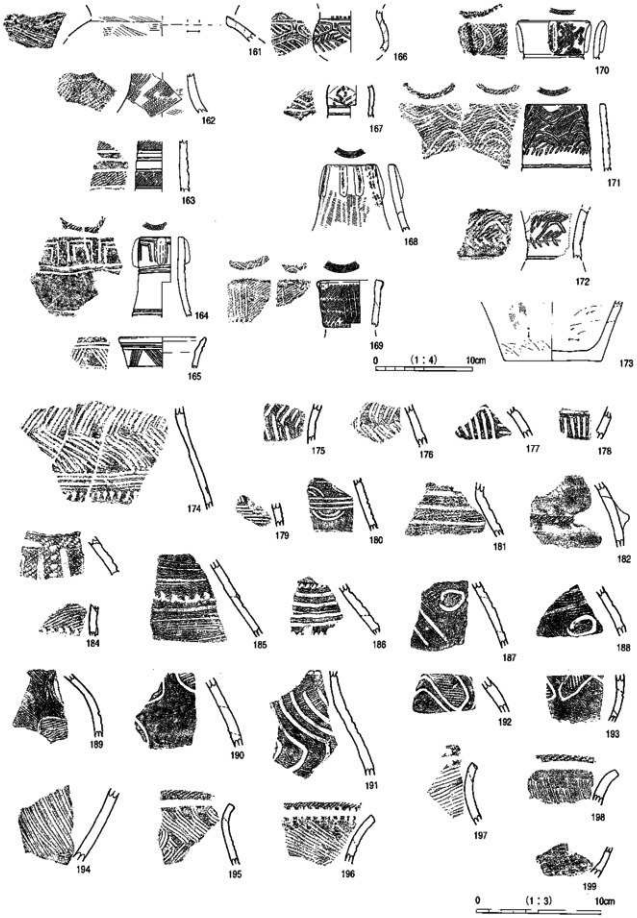


第15図　変形工字文系土器群

器壁が薄い個体を含み、内面側はオサエの後にナデで仕上げ、外面には二枚貝を原体に使用した可能性のある荒々しい条痕が横位に施される。樫王式～水神平式の範疇に属する搬入品の可能性を考慮すべきだろう。125～128は壷で、128以外は1条の隆帯が貼付され、指で下から上へ押し上げた圧痕が付加される。127には口唇部にも圧痕が付され、内面にも荒々しい条痕が施される。128は隆帯がなく、口唇部に押引きがなされ、内面には沈線で四角形状のモチーフが描かれる。125以外の3点は口縁部がはっきり外反しており、125よりも新相を示す。136・137も125などと近似した胎土だが、条痕の工具はアタリが角張っており、荒々しさは残るが二枚貝とは思えない。137の条痕は唯一縦羽状を示し、水神平式～岩滑式の範囲でよいかと思われる。

129，138～143は浮線文土器と胎土、整形に違いがみられない。細密条痕とは明らかに異なる条痕なので条痕文系統に含めたが、アタリが浅く、貝を使用しているとは思えない。模倣品と考えたい。129は壷で肩部に高く突出する隆帯を貼付し、指の圧痕を付加する。143は細密条痕と差がない条痕だが、内面にも同一工具で条痕を施す。浮線文土器には絶対にない技法で、やはり条痕文土器の模倣であろう。これらの模倣品の中には、水神平式より新相を示す土器が含まれる可能性もある。

144～160は変形工字文系土器である（第15図，PL128）。変形工字文は157・158を除いて、彫りが深い沈線で描かれる。彫刻的な手法ではないが、工具を単純に引いただけではこうした深さは得られないかもしれない。モチーフの集約部分ははっきりと抉られる。隆起部はミガキだが、沈線内部にはミガキがみられない。こうした手法の変形工字文は144を除いて隆起部の幅が沈線の幅よりも明白に狭い。破片が小さく全体像がわからないが、鉢・壷などかと推測する。144だけは隆起部の幅が広く、体部にはLRの縄文が施され


161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
172
173
0 (1：4) 10cm
174
175
176
177
178
179
180
181
182
184
185
186
187
188
189
190
191
192
193
194
195
196
197
198
199
0 (1：3) 10cm

第16図　中期土器群

る壷である。黄白色の胎土で器外面は漆黒色を呈する。他地域からの搬入品の可能性もあろう。

158は口端部に小さな瘤状の突起が付され、その直下に浅い抉りが残される。口唇部の浅い沈線とともに、変形工字文系に含めた根拠である。しかし157とともに沈線は彫りが浅く、面取りされ、抉り部分を含めて凹部までミガキが施される。これは浮線文系統の技法だと思われ、両者の折衷的な土器だと考える。

146は口縁部が外反し、肩部の沈線以下は縄文、以上はミガキである。一見して変形工字文系の甕に似るが、鉢もしくは浅鉢である。口縁部に付される板状の突起は、浮線文系統の要素かもしれない。160は口縁部以下に縄文を施す。破片が小さく、傾きは少々怪しいので、器種は断定できない。内面はミガキが顕著なので鉢かもしれない。159も含め、全面に縄文を施文する土器は浮線文系統にはない手法である。縄文を多用するのは変形工字文系土器の系統の影響以外に考えられない。

161～199は地域色が強い土器で、栗林式の成立にかかわると考えるべきだろう（第16図，PL128）。壷・甕・鉢があるが、時間幅が大きいと考える。

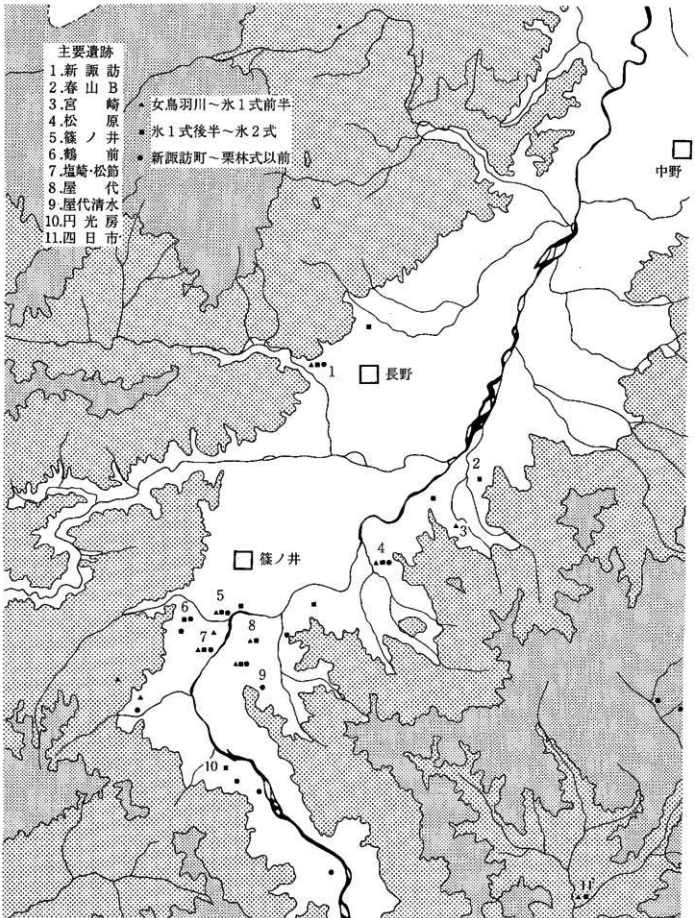
162～165・167は細頸壷。口縁部～頸部には様々な文様が描かれるが、いずれも栗林式に先行するだろう。変形工字文系統の影響を読み取ることができるが、モチーフは大きく変形している。竹管状工具の圧痕と縄文も併用する166の鉢とともに、栗林式直前といったところだろうか。168～172の壷は栗林式の範疇に属するかもしれない。

174～193は壷の肩部～体部。横位羽状の条痕を施す174～176、条痕をデザイン化した可能性のある沈線文の177・178などは、条痕文土器の系譜から派生する要素をもつ。187～193は独特の楕円を基調としたモチーフや円形モチーフに縄文を併用しており、阿島式などとの共通性を見せる。条痕文土器の影響もさることながら、変形工字文そのものの直接的な系譜には乗らないものの、その強い影響を感じさせる。これらの多くは、弧線文の180などとともに、栗林式以前の様相を示すように思われる。181～186は肩部～頸部に沈線や隆帯で直線的なモチーフが描かれたり、変形工字文から派生した四角形のモチーフが描かれ、縄文が併用される。栗林式の範疇に属するだろう。

全面に条痕を施す194～199の甕は外反する口唇部に縄文が付加される。栗林式以前だとは断定できない。

3　浮線文期前後の遺跡分布

長野盆地周辺の浮線文期前後の遺跡は更埴市屋代から長野市篠ノ井にかけて集中する（第17図）。千曲川両岸の自然堤防上に遺跡の多くは立地し、一部は盆地を見下ろす山麓にも立地する。墓などの遺構やまとまった量の遺物が得られる松節遺跡等も、この一帯に集中する。山麓は縄文時代以来の伝統的な立地、自然堤防上は水田耕作を指向した弥生時代的な立地、などと単純化して即断するのはむろん正しくない。縄文時代の遺跡立地の在り方はまだ不明な点が多く、当松原遺跡のように沖積地に立地する本格的な縄文集落も発見され始めているからで、沖積低地に展開する縄文遺跡も大いにあり得るのである。だがこれらの遺跡が占有する自然堤防上は、引き続いて弥生時代中期後半の栗林式期の集落が形成されており、その継続性は軽視できない。沖積地に生活の場を求めようとする方向性を認めるべきだろう。同時に、遺跡の多くは断片的な資料があるだけで、生活拠点になりそうな集落遺跡がほとんどないことも重要である。安定した集落が未成立の段階だと言えはしまいか。これは長野盆地周辺よりも遅かに遺跡数の多い松本盆地東南部や諏訪盆地北西部でも同様である。そうした中にあって、自然堤防上に立地し、一定の墓域をも成立させた本格集落である松節遺跡の突出ぶりには、目を見張らせるものがある。浮線文期の松原遺跡は、そうした中心的な区域を遠巻きに囲み、限定的な生活痕跡を残している。



第17図　浮線文期前後の遺跡分布図

第2節　栗林式土器

1　栗林式土器の提示方法

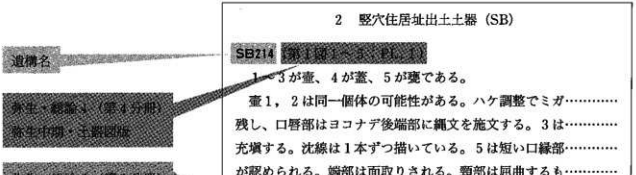
(1)　土器解説文の提示

松原遺跡出土の弥生土器は、栗林式土器が全体の9割以上を占めており、松原遺跡の性格を物語っている。本節では土器についての説明を行い、出土状況についてもふれる。土器図版は第4分冊「松原遺跡　弥生・総論4　弥生中期・土器図版」に、遺構図版は第2分冊「弥生・総論2　弥生中期・遺構図版」に提示した。土器の解説に関しては第4分冊で取り上げた土器について行った。その際、土器のまとまりは遺構単位で提示し、下記の順で解説した。

2．竪穴住居址出土土器（SB）　45～88P
3．土壙出土土器（SK）　88～96P
4．旧河道出土土器（SD）　96～98P
5．囲郭溝出土土器（SD）　98～104P

また、本文でとりあげることのできない情報については土器観察表で提示した。

本文・凡例



土器の解説および出土状況の説明で、土器図版編（第4分冊）および遺構図版編（第2分冊）の図版をさす場合、本来は双方とも「図版○○○」と指定することが正しいが、両者の混同を防ぐために、解説文では土器図版編の図版については「第○○○図」と置きかえている。「図版○○○」と「第○○○図」の「○○○」は等しい。遺構図版編の図版については「図版○○○」と示している。

(2)　土器提示遺構の検索（第1～第3表・第19～第22図）

土器を提示した遺構間の関係が明確になるように遺構検索表（第1～第3表）と検索図（第19～第22図）を示す。検索したい遺構は検索記号によって検索図Ⅰ～Ⅲ内で位置を確定されたい。遺構は検索記号の縦軸アルファベットと横軸数字との交点のマスに位置しているので検索されたい。

遺構名	検索記号	土器図版	遺構図版
SB214	IA13	1	111
SB221	IA13	1	113
SB228	IB12	3	112
SB231	IB11	2	26
SB245	IA13	3	114
SB246	IA13	3	114
SB260	IID 9	8	116
SB261	IID 9	11	117
SB264	IC10	12	117
SB265	IID 9	13	118
SB266	IID 9	14	52
SB267	IID 8	15	118
SB268	IID 8	16	52
SB271	IID 8	17	119
SB272	IID 8	17	52
SB273	IC 9	17	119
SB274	IID 9	18	120
SB275	IID10	18	43
SB277	IID 8	18	53
SB280	IB10	247	43
SB281	IID 9	19	49
SB282	IID 9	19	48
SB284	IID 8	19	120
SB286	IA12	19	121
SB287	IA12	20	122
SB290	IB12	21	123
SB302	IB12	21	35
SB303	IB12	22	124
SB306	IA13	21	125
SB307	IB13	23	111
SB309	IA12	23	125
SB310	IA12	23	126
SB312	IA13	24	28
SB313	IA13	24	126
SB314		24	28
SB316	IA12	24	127
SB317	IB12	25	31
SB318	IA13	25	29
SB319	IA14	26	128
SB320	IA14	27	130
SB323	IA13	27	130
SB324	IA14	27	131
SB325	IA14	28	22
SB326	IA14	28	132
SB328	IA14	29	131
SB329	IA14	30	132
SB331	IA14	31	129
SB332	IA14	31	22
SB351	IB12	31	133
SB352	IB12	32	134
SB353	IB12	32	135

遺構名	検索記号	土器図版	遺構図版
SB354	IB12	32	137
SB355	IB11	34	136
SB358	IB12	248	34
SB359	IB12	34	138
SB360	IA12	34	139
SB361	IB12	39	35
SB362	IB12	38	141
SB363	IB12	40	143
SB364	IB12	41	144
SB368	IB12	247	134
SB369	IB11	42	143
SB373	IB12	43	142
SB384	IB12	42	142
SB401	IA14	45	145
SB402	IA15	45	146
SB403	IA15	44	146
SB404	IA15	46	20
SB405	IA14	47	147
SB406	IA15	47	19
SB407	IA15	47	19
SB409	IA15	48	148
SB410	IA15	52	19
SB411	IA14	52	149
SB412	IB14	53	149
SB414	IB15	52	148
SB415	IB15	250	21
SB422	IB14	52	149
SB425	IC12	53	150
SB426	IB12	249	151
SB450	IB12	55	153
SB1102	IIF 6	57	153
SB1103	IIF 6	61	155
SB1104	IIF 6	64	64
SB1106	IIF 6	65	157
SB1108	IIG 6	65	155
SB1109	IIF 7	64	64
SB1110	IIF 7	66	158
SB1112	IIG 5	67	160
SB1113	IIF 7	67	161
SB1114		68	
SB1115	IIG 5	68	76
SB1118	IIG 6	68	161
SB1119	IIG 6	70	162
SB1120	IIG 5	72	162
SB1121	IIG 6	73	163
SB1122	IIG 5	74	71
SB1123	IIG 6	75	164
SB1124	IIE 8	77	164
SB1125	IIE 8	78	165
SB1126	IIE 6	79	166
SB1127	IIF 7	74	156

表１　検索一覧 (1)

遺構名	検索記号	土器図版	遺構図版
SB1129	ⅡE 8	74	54
SB1130	ⅡE 8	74	54
SB1131	ⅡF 7	82	159
SB1132	ⅡF 7	82	159
SB1134	ⅡD 7	82	167
SB1135	ⅡD 7	84	168
SB1136	ⅡE 7	89	169
SB1137	ⅡE 7	92	170
SB1141	ⅡE 7	251	171
SB1142	ⅡE 6	93	173
SB1143	ⅡE 7	96	174
SB1144	ⅡE 7	98	176
SB1145	ⅡE 7	97	177
SB1146	ⅡE 7	100	177
SB1147	ⅡE 7	253	58
SB1150		95	
SB1151		95	
SB1154	ⅡF 6	102	178
SB1155	ⅡF 6	102	179
SB1156	ⅡE 6	107	180
SB1157	ⅡF 6	110	181
SB1160	ⅡF 7	112	182
SB1161	ⅡF 6	253	64
SB1162	ⅡF 6	114	181
SB1163	ⅡF 6	116	183
SB1168	ⅡF 7	115	60
SB1172	ⅡF 6	118	184
SB1174	ⅡF 6	116	185
SB1175	ⅡE 6	119	186
SB1176	ⅡE 6	120	63
SB1177	ⅡE 6	120	186
SB1178	ⅡF 6	121	68
SB1181	ⅡF 6	123	187
SB1182	ⅡF 6	254	187
SB1183	ⅡF 6	123	188
SB1184	ⅡF 6	123	188
SB1185		161	
SB1186	ⅡF 6	124	189
SB1189	ⅡE 6	125	191
SB1190	ⅡE 6	128	189
SB1192		129	
SB1211		129	
SB1247	ⅢI 1	254	106
SB1248	ⅢI 1	130	105
SB1256	ⅢG 3	129	192
SB1257	ⅢG 3	129	194
SB1258	ⅢG 3	131	194
SB1259	ⅢG 3	131	195
SB1260	ⅢH 3	132	195
SB1261	ⅢG 4	132	196
SB1262	ⅢG 4	133	196

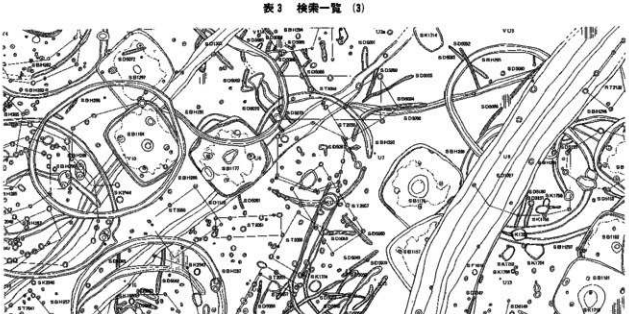
遺構名	検索記号	土器図版	遺構図版
SB1263	ⅡG 5	135	197
SB1264	ⅡG 5	136	197
SB1276	ⅡF 5	137	198
SB1277	ⅡG 4	137	198
SB1278	ⅡG 4	138	199
SB1279	ⅡF 5	136	200
SB1280	ⅡG 5	138	199
SB1281	ⅡF 4	138	200
SB1282	ⅡF 4	139	201
SB1283	ⅡF 5	142	202
SB1284	ⅡF 5	143	203
SB1287	ⅡE 5	143	205
SB1288	ⅡE 5	142	205
SB1289	ⅡF 4	143	206
SB1290	ⅡF 4	145	207
SB1291	ⅡE 6	144	207
SB1292	ⅡF 4	146	208
SB1293	ⅡG 5	147	80
SB1294	ⅡG 5	150	208
SB1295	ⅡE 5	149	72
SB1296	ⅡF 5	149	209
SB1297	ⅡE 6	149	210
SB1298	ⅡG 4	149	80
SB1302	ⅡF 5	153	211
SB1303	ⅡF 5	152	75
SB1304	ⅡF 4	154	212
SB1305	ⅢG 4	156	212
SB1306	ⅡG 5	157	214
SB1307	ⅡG 5	161	215
SB1308	ⅡF 5	161	215
SB1311	ⅡE 6	161	67
SK127	ⅡD 9	162	285
SK131	ⅠB 10	162	285
SK132	ⅠB 10	255	286
SK133		163	43
SK136	ⅡD 9	255	285
SK141	ⅡD 9	163	286
SK143	ⅡD 9	163	286
SK149	ⅠB 10	163	286
SK150	ⅠC 10	163	289
SK151	ⅡD 9	164	287
SK153	ⅡD 9	166	287
SK154	ⅡD 8	166	289
SK155	ⅡD 8	166	289
SK156	ⅡD 9	167	287
SK158	ⅡD 9	169	287
SK159	ⅡD 9	170	287
SK160	ⅡD 9	255	289
SK163	ⅡD 8	170	288
SK164	ⅡD 9	172	290
SK169	ⅡD 9	174	287

表2　検索一覧 (2)

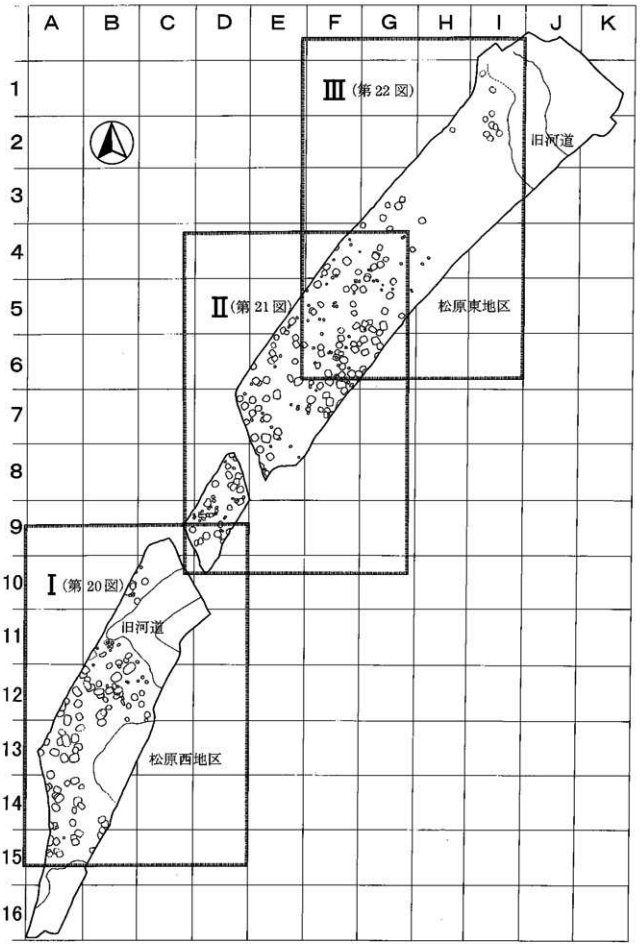
遺構名	検索記号	土器図版	遺構図版
ＳＫ170	ⅡＤ９	１７４	２８７
ＳＫ171	ⅡＤ９	１７４	２８９
ＳＫ190		１７４	３５
ＳＫ191		１７５	２９
ＳＫ192		１７７	３６
ＳＫ195		１７７	２９
ＳＫ200		１７７	２２
ＳＫ201		２５６	
ＳＫ237		１７８	３６
ＳＫ301	ⅠＢ12	２５６	２９２
ＳＫ313		１８０	
ＳＫ320		２５７	
ＳＫ334		２５７	
ＳＫ343		２６４	
ＳＫ345	ⅠＢ11	１７９	２９３
ＳＫ354	ⅠＡ15	１８０	２９４
ＳＫ355	ⅠＣ12	１７８	２９４
ＳＫ356	ⅠＣ12	１８０	２９４
ＳＫ359		１７８	
ＳＫ551	ⅠＢ11	１８０	２９５
ＳＫ1318		１８０	
ＳＫ1319	ⅡＥ８	１８０	２９５
ＳＫ1326		１８０	３０６
ＳＫ1333	ⅡＦ６	１８０	２９５
ＳＫ1335		１８３	６５
ＳＫ1340	ⅡＤ７	２５７	２９６
ＳＫ1349	ⅡＥ７	１８３	２９６
ＳＫ1353	ⅡＦ７	１８３	２９６
ＳＫ1371	ⅡＥ７	１８３	２９７
ＳＫ1373		１８３	５８
ＳＫ1377	ⅡＦ７	１８４	２９７
ＳＫ1382	ⅡＥ８	１８４	２９８
ＳＫ1393	ⅡＦ７	１８５	２９８

遺構名	検索記号	土器図版	遺構図版
ＳＫ1396	ⅡＥ６	１８５	２９８
ＳＫ1400	ⅡＦ６	１８６	２９９
ＳＫ1519		２５７	
ＳＫ1695	ⅢＩ１	１８７	２９９
ＳＫ1699		１８７	１０６
ＳＫ1714	ⅡＦ６	１８７	２９９
ＳＫ1717	ⅡＦ６	１９０	３００
ＳＫ1718	ⅡＦ６	１９０	３００
ＳＫ1735	ⅡＦ６	１９０	３００
ＳＫ1750		１９１	
ＳＫ1787		１９１	８６
ＳＫ1861		１９１	８６
ＳＫ1865	ⅡＧ４	１９２	３０１
ＳＫ1895		１９１	
ＳＫ1914		１９２	
ＳＫ1945	ⅡＧ４	１９２	３０２
ＳＫ1947	ⅢＧ５	１９２	３０２
ＳＫ1948	ⅢＧ５	１９２	３０２
ＳＫ1952	ⅡＦ４	１９３	３０２
ＳＫ1953	ⅡＦ５	１９２	３０２
ＳＫ1957	ⅡＧ５	１９３	３０３
ＳＫ1961	ⅡＦ４	１９３	３０３
ＳＫ1963	ⅡＦ４	１９４	３０３
ＳＫ1972	ⅡＦ５	１９４	３０４
ＳＫ1973	ⅡＧ５	１９４	３０４
ＳＫ1975		１９４	８０
ＳＫ1979	ⅡＦ５	１９４	３０５
ＳＫ1994	ⅡＦ５	１９５	３０６
ＳＫ1995	ⅡＦ５	１９５	３０６
ＳＫ1996	ⅡＦ５	１９６	３０６
ＳＫ1999	ⅡＧ５	１９６	３０６
ＳＫ2001	ⅡＧ４	１９６	３０６

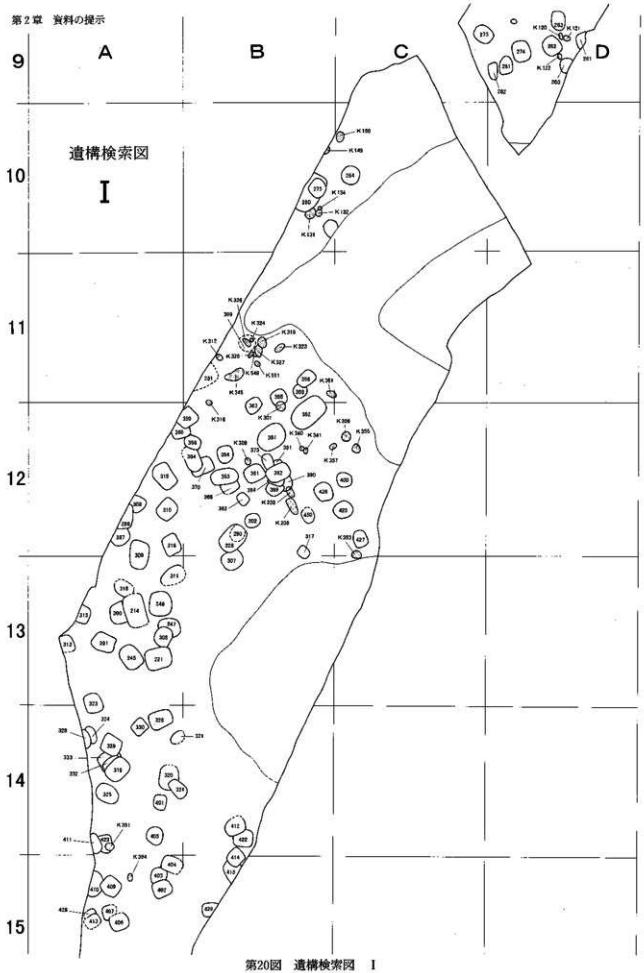
表３　検索一覧（３）



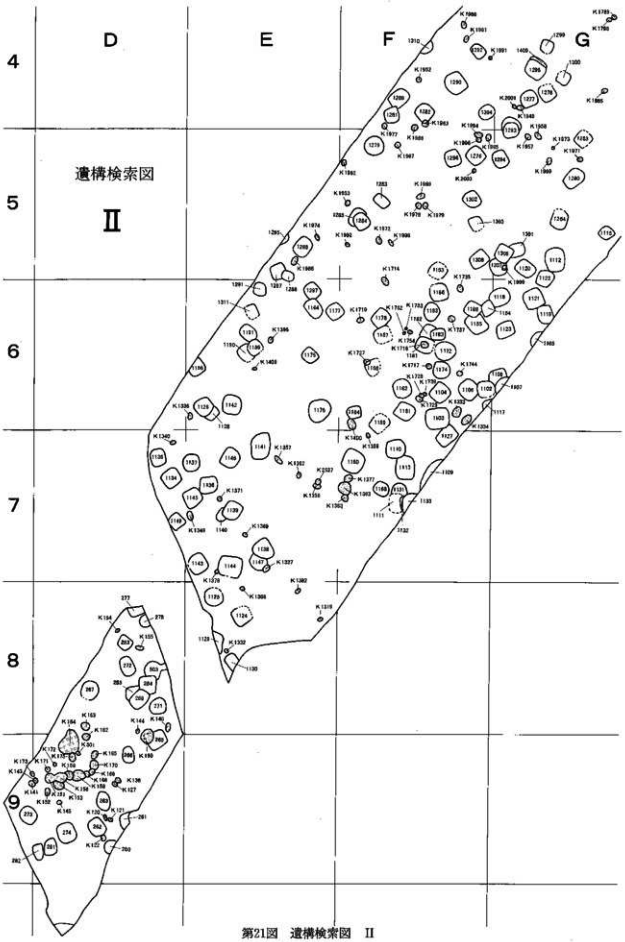
第18図　弥生中期後半・栗林期遺構面



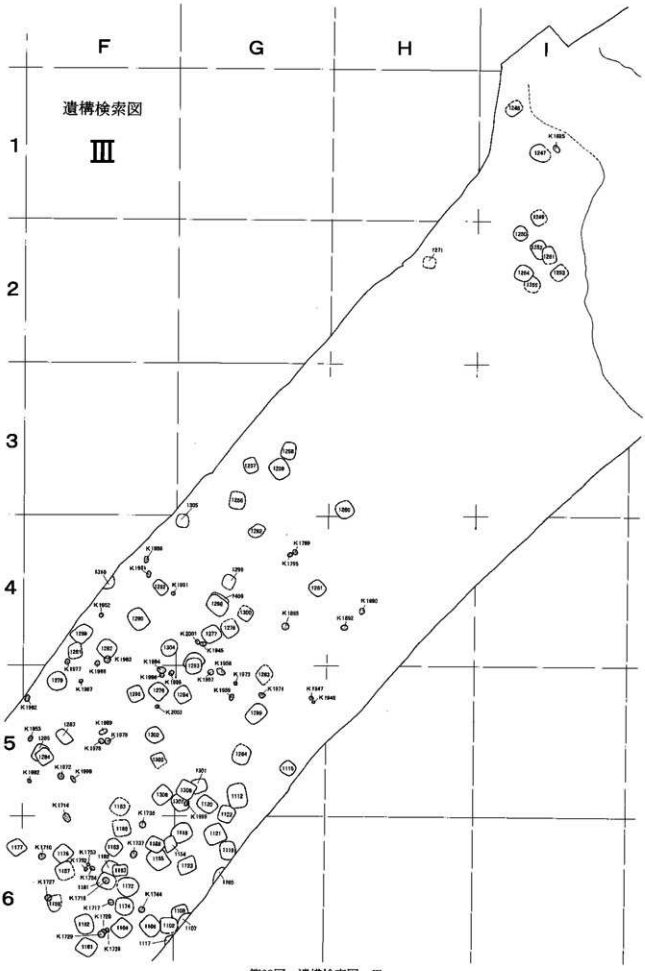
第19図　遺構検索全体図



第20図　遺構検索図　I



第21図　遺構検索図　Ⅱ



第22図　遺構検索図　Ⅲ

2　竪穴住居址出土土器（SB）

松原遺跡高速道地点の弥生中期栗林集落は多数の竪穴住居址が調査された。このうち、137軒の竪穴住居址より出土した栗林式土器について報告する。実測図は「弥生・総論4　弥生中期・土器図版」編の図版1～161に掲載している。

SB214（第1図1～5：PL.1）

1～3が壺、4が蓋、5が甕である。

壺1，2は同一個体の可能性がある。ハケ調整でミガキを施すことはない。口縁部内外面はハケ調整を残し、口唇部はヨコナデ後端部に縄文を施文する。3は壺の頸部文様帯で、横走沈線施文後、斜行沈線で充填する。沈線は1本ずつ描いている。5は短い口縁部が内彎状に立ち上がる形態を呈し、強いヨコナデが認められる。端部は面取りされる。頸部は屈曲するものと想定されるが、簾状文は認められない。口縁部文様帯は中部高地型で下から上方向に施文する。弥生時代後期吉田期に属する。

<出土状況：図版111>　壺1は床面直上から潰れた状態で出土した。頸部以上を除き完形に復元されたが、正位の状態で埋置されたものと想定する。他の土器は埋土中より破片の状態で検出され、量は多くない。

SB221（第1，2図6～23）

6～16，18が壺、17が鉢、19～22が甕、23が有孔鉢である。

壺9は太頸壺で、口縁端部に強いヨコナデが施され内彎ぎみに立ち上がる。口縁部のハケ調整は意識的に残している。胴部文様帯の山形沈線文は1周せず、頸部文様帯の山形沈線文も途切れる位置がある。

壺13の文様帯は2種類の原体を用いて施文する。胴部Ⅳ文様帯以下は沈線文施文用の棒状原体、Ⅲ文様帯以上は櫛描原体を用いる。櫛描原体は4本のヒゴを結束している。懸垂文は6単位で、1単位の構成は垂下文を左から右へ2条重ね、その周囲を櫛描原体の1本ヒゴで押し引きして囲郭する。押し引き列点文の施文方向には上から下、左から右への原則がある。頸部凸帯の縦位沈線も1本ヒゴで描かれている。

甕19，20の櫛描羽状文の施文は、1条あたり上位から下位方向に払い、上から下方向に文様を重ねている（Ⅱ A型）。施文の回転方向は右方向である。受口部および頸部の波状文は畿内型施文をとる。甕21，22は同一個体の可能性が強い。

<出土状況：図版113>　SB221は床面および壁面が被熱する住居址である。土器群は床面直上の炭化材層よりやや浮いて、住居址南西側に破片状態でまとまって出土した。焼失後、南西側から一括廃棄されたと考えられる。2次的に被熱し、還元状況を呈するものもあることから、焼失後ただちに廃棄された可能性が高い。床面上には遺棄された遺物はない。6～23は一括性の高い資料である。

SB231（第2図24～29）

24～27が壺、28が甕、29が高杯である。

壺24の口縁部は強いヨコナデを施し内彎する。壺25の頸部文様帯には縄文施文が確認される。鋸歯沈線文aは横走沈線文と同一原体で施文する。甕28はコの字重ね文をもつ台付甕である。

<出土状況>　床面上に破片となって散在していた。出土状況から一括性の高い資料である。

SB228（第3図30～34：PL.1）

30～33が壺、34が高杯である。

壺30～32は口縁部内面のみに赤色塗彩を施す太頸壺である。いずれも図示部分が完存する。口縁部外面には丁寧なミガキを施し、30，32では器面調整を消し、31では意図的にタテハケ調整を残している。30，31の頸部文様帯には横走沈線による擬似簾状文（横走沈線文ｃ）が施文される。沈線の走向が一致するところから、結束された棒状原体によって一度に施文されたと考える。33の鋸歯文は、ヘラ状工具によって鋭く刻み込まれている（鋸歯沈線文ｃ）。上部には櫛描直線文が認められる。外面は赤彩されずにタテミガキが施される。弥生時代後期吉田期に属する。

＜出土状況：図版111，112＞　30～34は奥壁中央付近の壁際からまとまって出土した（PL７）。高杯34は完形で、床面直上に横転した状況であったが本来は正位に埋置されたものであろう。奥壁中央ラインに位置し、家屋の棟木ラインを意識して遺棄されたものとみたい。30～32は壺口縁部が完存し、壁際の１次レンズ堆積土中より出土した。31，32は重ねられた状況である。奥壁上に置かれていたものが転落したものとみたい。埋土中から遺物の出土は多くないが、30～34は住居廃絶時の一括性が保障される。

SB245（第３図35～37：PL．１）

35～36は壺、37は甕である。図示部分は完存する。

壺35はハケ調整後ミガキを施す。文様帯は頸部に魚鱗状の連弧文（連弧文ｂ）を左回りに、胴部には乱れた波状沈線文を右回りに施文する。沈線文は１本１本描いている。壺36は丁寧なミガキを施し調整痕が残らない。文様はミガキを施した後施文する。頸部文様帯は連弧文風にカーブした擬似簾状文を山形文で挟む。擬似簾状文は結束した原体で施文されたと考える。静止部が５回認められ円形浮文を貼る。浮文には横位の刺突が施される。

甕37の櫛描羽状文は、上位から下位方向に払い、左方向に文様を重ねる。受口部外面は縄文施文後、波状沈線文を右回りに描いている。

＜出土状況：図版114＞　本住居址埋土は上層にレンズ堆積の炭化層（１～６層）がある。出土層位は35が埋土上層の１～６層から、36が埋土中、37が床面に潰れた状況で出土した。

SB246（第３～８図38～81　第56図663～667：PL．２～４）

38～64，663～666が壺、65～78，80～81，667が甕、79が鉢である。

同住居址出土資料は、二次的な被熱が激しいため、器面が荒れて調整不明瞭なものが多い。壺の調整は、ハケをそのまま残すもの（39，51）、荒いミガキを施すがハケが残るもの（50，53）が主体となる。38，41，52は精製ミガキを施す。口縁部外面は、ヨコナデあるいはナデを施し、ハケ調整痕を残さないものが多い。口縁部の形状は大きく開くものが散見され、47は直線的に長く外反し、48は反り返るように外彎する。胴部の形態は下膨れとなり、ソロバン玉型（39）と球胴型（50）の二系統がある。51，53，55，665の胴最大径部には隆帯が添付される。

57は櫛描簾状文と櫛描直線文による多段横帯構成をとる。60の文様構成は懸垂文（垂下文ｂ）、魚鱗状の連弧文をとり、連弧文は左から右に描き、左回りに重ねている。61は７条の懸垂文（垂下文ａ）をもつ。垂下文を区画する押し引き列点文の施文原体は、垂下文に用いた櫛原体からヒゴ１本を選別したものである。胴部文様帯は、波状沈線文と重三角文の組み合わせが崩れたもので、文様帯の上下を沈線で区画している。沈線文は１本ずつ描く。

甕66，67の羽状文原体は他と異なる（PL３）。原体はササラ状工具が想定され、刻み込まれる凹線の幅は狭く、鋭い状態で深く彫り込まれている。切り合いの認識がしづらいのも同原体の特徴である。74の波状

沈線文は2本結束棒で施文している（波状沈線文b）。

<出土状況：図版114>　同住居址は床面および壁面が被熱する住居址で、壷を中心に多量の土器が出土した。多くの個体は炭化材、炭化層直上より出土し、復元が可能であった。南西コーナー付近には土器集中部が認められた。土器群は入口左側に集中し、大形破片で廃棄された状況であった。層位的には床面との間に間層をもつ第3層に相当する。石器、石材類は炭化層4層より出土し、住居址使用最終段階に位置づけられ、土器集中部の土器は焼失直後に廃棄されたものと見たい。このことは土器の多くが褐色～灰色を呈し、器面がボロボロな状況になるほど被熱していることからも窺い知ることができる。壷38，甕65は青灰色～茶褐色を呈し、器形も大きく歪んでいるところから強く被熱した様子が窺える。出土層位は、39，40，44，52，57，61，62，64，71，72，75が埋土中より、38，41，43，55，56，60，65，80が2層より、58，67，69，77，78が床面直上より、他については南東コーナー土器集中部の3層から出土した。出土状況、土器の残存状況から、一括性の高い土器群と評価してよいだろう。壷61はSB310埋土中より出土した破片と接合した。

SB260（第8～11図82～95，97～117：PL．4～6）

82～95，97が壷、98～102が鉢、103～116が甕、117が有孔鉢である。

同住居址出土の土器群は遺存状況が良好で、調整手法が明瞭に観察できる。壷の外面は非常に丁寧なミガキを施し、調整・施文はハケ→縄文→沈線文・櫛描文→ミガキという順をとるものが主体となる。鉢、甕の内外面のミガキも壷と同様に精製志向であり、櫛描文→ミガキの順位となる。

壷82～84は、縄文，沈線文による多段横帯文をとる細頸壷で、縄文をころがした後に沈線文を施文する。82の縄文帯最上段は造り出しの凸帯となる。84の淡い赤彩は沈線部のみの可能性もある。85は櫛描文による多段構成をとり、織内型の右回り施文を行う。波状文は、櫛原体からヒゴを1本抜きとったものを原体とし、沈線文を施文する棒状原体ではない。上位2段は一部のみ施文している。86の頸部はユビナデによって造りだし凸帯を形成し、凸帯上に縄文施文を行う。文様帯は上位から縄文帯2段、櫛描直線文、沈線区画の構成となる。87～89は受口状口縁の細頸壷で、類例は少ない。90は織内型櫛描文と沈線文による横帯構成をとる。連弧文は13連単位で、2連に1箇所円形浮文を貼付する。連弧文の縄文帯には4連分のみ押し引き列点文が認められる。施文方向は左から右。口縁端部の突起は4単位である。91は横走沈線区画に櫛描直線文、櫛描簾状文を充塡する。胴部の櫛描直線文には沈線による横帯区画は伴わない。94～95は広口の壷で、94は胴部内面に精製ミガキを施し、95は胴部内面にミガキを施すことはない。94の胴下半部外面調整はタテハケ→タテヘラケズリ→タテミガキとなる。胴の一部には3連の連弧文と押し引き列点文が施文されるがミガキで消されている。97の口縁端部は縄文施文後に左へ押し引く刺突文を行う。

98～100は精製の大型鉢である。100の形状は甕に類似するが、文様構成から大型鉢に分類する。98の連弧文は右から左に描き、左回りに施文する。100は沈線と櫛描文による波状文を右回りに施文する。

甕は櫛描文施文甕が主体で、頸部文様帯に横帯文を施さないものが目立つ。甕114の1条あたりの羽状文施文は常に右から左方向へ払い、右回りに文様を重ねる。上下の重なりは上から下方向に施文する。同住居址出土甕の1条あたりの施文は、常に右から左方向へ払っている。口縁端部には103，104，108，109，113～115に押圧によるオサエが認められる。108，109はユビによるオサエ、103，104は原体を押しあてた痕跡があり、103の押圧は縄文原体の可能性がある。胴最大径の刺突列点文は110，113に認められ、113の刺突は連弧文風にカーブする。116は口縁部内外面に1箇所貼付けの隆帯をもつ。

<出土状況：図版116>　同住居址は床面および壁面が被熱する住居である。床面直上に炭化材、炭化層が認められる。残存率の高い個体が遺棄されていた。これらの土器は完形に近い状態で床面上に遺棄され、

上部に炭化層が乗っていると理解する。出土土器のうち87，88，98，100，101，105，110，111，113，115，116が埋土中より、他は床面直上より出土したが、型式的に大差はなく、一括性の高い土器群として評価できる。

SB261（第11，12図118～129）

118～122が壷、123～127が甕、128～129が鉢である。

118～121は精製ミガキを加えた壷である。いずれも沈線施文後にミガキを行う。121は沈線内のみ赤彩が認められる。胴部波状文は櫛描施文後、上下を沈線文で区画する（櫛描波状文ｃ＋波状沈線文ｃ）。

＜出土状況：図版117＞　本住居址の埋没はレンズ堆積を示し、埋没途中の窪地に炭化・焼土層（５～６層）が確認できる（図版117では壁際レンズ堆積層の７層が欠落している）。本住居址出土の土器は、第６層より上層の埋土中より破片の状態で出土し、床面上からの出土はない。123は埋土中に散らばった破片が接合した。他は埋土中からの出土であるが型式的に矛盾はない。住居埋没過程の窪地に破片が一括廃棄されたものと考えたい。住居の廃絶から、窪地を使って火が焚かれ、その後土器片が廃棄されるまでに時間差が認められよう。

SB264（第12図130～139：PL.105，108）

130～136が甕、137が鉢、138～139が壷である。

130，131の櫛描波状文は、左から右方向に静止部をもって描き、右回転に文様を重ねていく中部高地型施文である。134の胴部刺突文は左回転で押し引き風施文を行う。135の頸部波状文は３回静止面をもつ中部高地型である。甕内面のミガキは丁寧に施され光沢をもつ。壷138はハケ調整の壷で、粗いミガキを施すがハケ調整を消すことはない。口縁部は強くヨコナデする。

＜出土状況＞　本住居址に直接伴う資料は137，138の２点で、鉢137が北側主柱穴内、壷138が壁直下の床面直上に完形で遺棄されていた。他は炭化粒・焼土粒を含む上層の１～２層より破片の状況で出土した。上層の廃棄土器群は一定空間にまとまり、北側から廃棄された様子が窺える。炭化粒・焼土粒を含まない下層３層から土器の出土はない。

SB265（第13，14図140～154：PL.100）

140～143が壷、144～146が鉢、147～148が高杯、149～153が甕、154が大型鉢である。

壷140は横走沈線内を縄文とミガキを交互に配す多段横帯文構成で、沈線→縄文→ミガキという順位で施文・調整する。胴下半部にはミガキを施さずにハケを残す。143は口縁端部に２対１組の突起が４箇所、円孔は２対１組で４箇所認められる。

甕151の頸部文様帯は擬似簾状文で、施文原体を２㎜ほどで静止して波状文風に施文する。152は右から左方向に短斜線を描き、縦羽状風のモチーフをなす部分と、短横線を縦位に施文する部分とがある。149，153の内面にはミガキが認められない。鉢144の立ち上がりはやや内彎し、鍔状部との屈曲部は内面で明瞭な稜をもつ。突起は７単位。円孔は１箇所。

＜出土状況：図版118＞　153は埋甕炉に転用された甕である。141～144，150～152が床面上より、他は埋土中より出土した。141，142，144，151は西側長辺の壁近くにまとまって埋置されていた。壷142、鉢144が完形状態であった外は破片で出土した。床面に鹿の角（図版118，②～⑤）が散在する。土器の遺棄と何らかの関係があるかもしれない。

SB266（第14図155～159）

155～157が甕、158～159が壺である。甕155～157は残存状況が良好で、胎土等類似する。

<出土状況>　155～159はすべて埋土からの出土である。型式的に一括資料として扱って良い。

SB267（第15，16図160～180　第57図671～672：PL．6，7）

160～174，671が壺、175～179，672が甕、180が有孔鉢である。

171は被熱し、他の土器と色調、残存状態が異なる。型式的にも本資料群に伴わない可能性が高い。161は口縁部にヨコナデを、胴部はハケ調整でミガキが確認できない。162の胴部は光沢のあるタテミガキを部分的に施すがハケ調整が残る。163，164は頸部文様帯に擬似簾状文風の波状沈線を施す。擬似簾状文は163が6単位、164が5単位構成で、前者は左から右に1本ずつ描き左回り、後者は棒状工具の緩やかな結束が予想され、右から左に描き右回りに施文する。169，167は同一個体の可能性がある。166の頸部山形沈線文の施文原体は、棒状工具を2本結束している。671胴最大径部は、ミガキを加えずハケ調整痕を残すことによって文様帯を表現している。

<出土状況：図版118>　本住居址からは多量の土器が破片の状態で出土した。土器は遺構全体から密に出土したが、堆積断面はレンズ状堆積を示し、床面直上からの出土はない。埋没途中の窪地に一度に多量廃棄された資料であり、完形に復元できる個体は多くない。壺171を除き型式的には一括資料と考えて良いと思われる。

SB268（第16図181～185）

181～183が壺、184が鉢か高杯、185が小型甕である。185を除き破片資料である。

183は横帯区画内を、上位に櫛描短斜線文、下位に櫛原体1本で格子目文を施文する。184は口縁端部に刺突を行う。鉢あるいは高杯では類例が少ない。円孔の位置から鉢の可能性が高い。

<出土状況>　181～185はすべて破片資料であり、埋土中より出土した。

SB271（第17図186～189：PL.119）

186～187が壺、188～189が甕である。

小型壺187の文様構成は、横走沈線文，櫛描直線文4段，櫛描連弧文で、櫛描直線文上に波状沈線文が施文される。甕188は内外面に丁寧な縦ミガキを施す。189の文様構成は2段の斜線文で、上段から下段という順で施文する。図示部分の1箇所に縦羽状文が認められる。この位置が施文の開始点である。

<出土状況>　186～189は186を除き、図示部分が完存する。すべて埋土中より出土した。

SB272（第17図190～192：PL.102）

190～191が壺、192が高杯である。

壺190はハケ調整、191は丁寧にミガキを行い白色系に焼き上げて精製する。

<出土状況>　190～192は図示部分が完存する。すべて埋土中より出土した。

SB273（第17図193～200）

193～198が壺、199が甕、200が鉢である。

壺は193に代表され、細頸の多段横帯系壺が主体となる。甕199は横羽状文を施文し、口唇部は指でつまむ。壺、甕ともに古相を示す。

＜出土状況：図版119＞　同住居址の出土土器はすべて破片資料である。壷類部193は、主柱穴掘り方の底面から横位状態で出土した。図示部分は完存する。194～200は埋土中から出土した。

SB274（第18図201～211）

201～208が壷、209～210が小型土器、211が甕である。

201の調整・施文順位は沈線→縄文→精製ミガキを行う。白く焼き上げている。205も沈線→縄文となる。204は細頸壷で、淡い赤彩を施す。206は多段の横走沈線内に、櫛描直線文と櫛描短斜線文を繰り返す多段横帯文となる。207は細頸壷の頸部で、貼付け凸帯をもつ。凸帯にはヨコナデを施し、凸帯下段に横走沈線を描いた後、凸帯上に細い横走沈線を描きその後刺突する。208はハケを残すミガキを施している。小型土器210は赤彩小型壷を範型とする。赤彩は施さないが丁寧なミガキを加える。

＜出土状況：図版120＞　土器の多くは破片資料である。201は、床面中央部炭層中に逆位に埋置されており、土器埋設炉の可能性がある。小型土器209，210は床面直上から他は埋土中からの出土である。

SB277（第18図213～218）

213～215は壷、216は鉢、217～218は甕である。

同住居址出土の土器群は２次的な被熱を受けており、色調は黄橙色から灰白色を呈す。216は鉢か台付甕か判断に苦慮する。器壁がやや厚く重い土器である。内面はミガキを加えない。218は火にかけられた大型甕で、胴最大径より下位に黒色の煤が付着し、下位は灰白色系に被熱する。内面下位に焦げは確認できない。

＜出土状況＞　213～218は埋土中より出土した。217，218は完形に近く復元された。

SB281（第19図219～220，補遺図版247，2866：PL.119）

219～220は甕である。

219は２次的に被熱する。ミガキは確認できず、外面はハケ調整、内面はナデ調整か。ミガキが施されたとしても弱いミガキであろう。220の波状文は静止部をもつ中部高地型であるが、丁寧に重ねているため、一見すると静止部をもたないようにも見える。ともに埋土中より出土した。

SB284（第19図224～231：PL.103）

224～231はすべて壷である。

226は４単位の垂下文。垂下文の区画は刺突文で行うが類例は多くない。垂下文以外の部分はハケ後ミガキを施す。壷228～229は図示部分に破損部がなく完存する。229の口縁部は意識的に打ち欠いているものと思われる。壷230では胴最大径部分の接合が内傾接合となる。

＜出土状況：図版120＞　224，228，229が床面直上、他は埋土中より出土した。床面直上出土土器は床面に遺棄されたもので、228，229は主柱穴間、229は炉址付近に位置する。228は完形、229は口縁部を打ち欠く他は完形状態で横転していた。224と228は近接して出土し、壷224が壷228の器台として転用されていたものと考えたい。同住居址出土資料の多くが壷の破片である。

SB286（第19，20図232～238：PL.101，104）

232，235が鉢、233～234が壷、236が蓋、237～238が甕である。

232はユビナデ痕、輪積痕を残す粗製鉢で、内面のみにミガキが確認される。233は頸部に貼り付け凸帯

をもち、その上下に横走沈線を施文する。凸帯上にはRLR縄文施文。Ⅳ文様帯にも沈線施文後RLR縄文を施文する。Ⅲ文様帯には精製ミガキを加える。235は図示部分が完存し、底部は意識的に打ち欠いている。成形は内傾技法である。蓋236とセットになるものと思われる。

＜出土状況：図版121＞　本住居址は床面が被熱する住居である。235は床面直上の炭化材上に埋置されていた。底部は打ち欠かれている。床面直上からの遺物の出土は同例のみである。遺物量は少ない。

SB287（第20図239～247）

239～242が壷、243が蓋、244が高杯、245～246が鉢、247が甕である。

239はⅡ文様帯に擬似簾状文をもつ。擬似簾状文は4本の棒状工具を結束した原体で、右から左方向に描き左回りに施文する。Ⅱ文様帯と口縁部の境界には段が認められる。Ⅳ文様帯沈線内にはベンガラが残存する。240～241は2次的に強く被熱し、色調が茶褐色～灰色に変化する。特に内面が強く被熱して灰色化する。形状は240が口縁に大きな歪みをもち、241は発泡直前の状態である。この被熱土器は図示部分が完存し、この形態で何らかの用途に転用されたことが想定される。240の垂下文は5単位で、1単位あたり縦位櫛描波状文を2条施文する（垂下文b）。242胴部外面はハケ調整を残すヘラミガキを施し光沢がある。ハケ調整は胴最大径部ではヨコハケ、その上位で左上りの斜位となり、頸部から肩部にかけては縦方向にかきおろしている。大型甕247はミガキを加えない。2次的な被熱のためか、外面の煤および内面の焦げは観察されない。

＜出土状況：図版122＞　239～247はすべて埋土中より出土した。その多くが、炭化粒・焼土粒を含む4～7層から出土している。同層は2次堆積土層である。壺240は、2次的な被熱で赤茶褐色～灰白色を呈し、歪みをもつ。土器群の廃棄と、同埋土内で火が焚かれたことが密接に関連していることを物語っている。甕247は破片資料が主体となるが、ほぼ完形に復元できた。なお、同住居址と切り合関係にあるSB286は被熱住居である。両住居址の資料群は調査時点で混合している可能性があり、一括資料としては充分でない。

SB290（第21図248～249）

248，249は床面の同一地点から出土した。248が図示部分完形、249が破片資料である。

SB302（第21図250～255）

250～251が壷、252～255が甕である。

250は多段横帯文構成の細頸壷で、3条毎に縄文と波状沈線文を充填する。251の第Ⅲ文様帯は精製ミガキを施し無文帯となる。252は、胴部外面に輪積による段が認められ、段差部分に刺突を行う。

＜出土状況＞　本住居址出土資料はすべて破片資料で、250～255は炉址上面を中心とする床面直上より出土した。破片資料ながらも、出土状況および土器型式から良好な一括資料としてとらえることができ、住居の廃絶時を限定できる資料である。古相を示す資料が主体となる。

SB306（第21図256～261：PL.100）

256～258が壷、259～260が甕、261が鉢である。

256～257はハケ調整の壷で、ミガキが顕著でない。258は軽いミガキが認められるがハケ調整痕は器表に残存する。胴下半部はヨコハケ→ヨコヘラ削り→軽いミガキという手順をとる。256のⅡ文様帯は横走沈線内に縄文を充填するが、最下段は櫛描直線文で、その上部に波状沈線文が描かれる。胴最大径部の内外面

にはそれぞれ2箇所隆帯が認められる。257は口縁部が大きく外反する形態を呈し、上位はヨコナデ、下位はナデ調整を行う。甕260の外面最下位は、羽状文施文後に下から上へ軽く削りあげ、その後ミガキを施す。

＜出土状況＞　256～260は土器集中出土と記録されており、一括性が高い資料と考えられる。土器集中の位置に関する記録はない。261は床面直上より出土した。

SB303（第22図262～271：PL．7）

262～268が壺、269～271が甕である。

本住居址出土資料は形状を復元できる個体が多い。壺262～264，266の胴上位はハケ調整で、ミガキを加えない。265は精製ミガキを加える。口縁部の調整はハケ後、ヨコナデおよびナデを加えるが、264はヨコナデ後更にタテハケを施す。263は実測図の赤彩表示を落したが、口縁部内面のみ赤彩している。267の淡い赤彩は沈線内のみに施されている可能性もある。

269は中部高地型の櫛描文を施文する。器面を4ブロックに分割し、左から右に描き、右回りに文様帯のブロックを重ねる施文方法をとる。波状文は各々上から下方向に重ねている。271の頸部波状文2段は上段が畿内型、下段が中部高地型となる。

＜出土状況：図版124＞　本住居址出土遺物群は、a・床面上に遺棄された完形土器群、b・第一次堆積土上に廃棄された破片土器群とに別れる。aは266，270，271で、床面直上から完形に近い状態で出土した。266，270は長辺側の壁際から出土し、焼土、炭化層を含む第二次堆積層下に位置した。263は270と接近するが270より明らかに上層で、第一次堆積層直上より出土している。271は奥壁左側主柱穴上に横位状態で埋置されていた。bの262～265，267～269は、奥壁主柱穴間に床面よりやや浮いて破片が集積していた。これらの破片土器群は第一次堆積層直上の第二次堆積層中に位置する。269は奥壁右側主柱穴付近に破損した状況で遺棄されていた。aとbの土器群の関係であるが、aの遺棄とbの廃棄との時間差はあまりないものと考えている。

SB307（第23図272～274，275B：PL.103）

272が壺、273が高杯、274が甕、275Bが鉢である。

273内外面には1箇所隆帯が認められる。亀裂が入っており補強か。275Bは完存の鍔状口縁鉢で、内部に1.5cm程の厚さでベンガラが込められていた。

＜出土状況＞　土器は床面および埋土中より破片の状態で若干出土した。273，274，275Bは床面直上より、272は埋土中層より出土した。ベンガラが込められた鉢275Bは、床面直上に正位に埋置されていた。

SB309（第23図275A，276～283：PL.8）

275A，276が壺、277～279が甕、280が高杯、281～283が鉢である。

壺275Aは器壁を薄く成形し、白く焼き上げた精製土器で、胴部外面には精製ミガキを施す。口縁部内面のみ赤彩する。太頸壺276は後期タイプの壺に近い形状をなす。胴部はハケ調整後軽いナデあるいはミガキが施されている。頸部文様帯は、実測図ではLR縄文に表現されているが、観察の結果、ハケ刺突により施文された擬似縄文であることが明らかとなった。

＜出土状況：図版125＞　275A，276～283は、278を除きすべて床面直上より出土した。275A，276，277，280がほぼ完形に近い状態で遺棄されていたが他は破片資料である。壺275A，276は近接した床面上に位置し275Aが横転した状態で、276が正位に遺棄されたものが押し潰された状態で出土した。壺275A，276の共伴が保証される。高杯280は、主柱穴間中央の床面直上に逆位に伏せられた状態で出土した。付近から

獣骨を想定される歯が1片出土している。

SB310（第23図284～287）

284～285が鉢、286～287が甕である。

286の胴部櫛描施文は縦羽状文と斜線文が混合し、その施文法も乱れている。羽状文は両側にかき分ける施文手法を取る（II型）。

＜出土状況：図版126＞　284～287は主に床面直上より出土し、完形に復元できた。285は主柱穴上層より完形で出土した。主柱穴抜き取り後に埋置されたものであろう。286は、床面直上の3層から出土した破片と、最上層1層から出土した破片が接合している。なお、同住居址の埋土中から出土した破片がSB246出土の壺61と接合した。

SB312（第24図288～289）

288が壺、289が甕である。いずれも床面直上より出土し、図示部分は完形に復元できた。

SB316（第24図293～297）

293～294が壺、295が鉢、296～297が甕である。

293の頸部には2段の押し出し状の凸帯が認められる。調整手法は凸部内面にヨコナデを行い、凸帯間に板状工具の小口を用いて凹部横走帯を形成する。294は精製ミガキを施す。甕297の口縁屈折部は内面で明瞭な稜をもち直線的に外反する。内面は丁寧にミガキを施す。羽状文の施文原体はササラ状で細く、施文単位、羽状文の切り合関係が認識しずらい。

＜出土状況：図版127＞　293～295，297は床面直上より破片の状態で出土した。296は土器埋設炉として転用されたもので、図示部分は完存する。

SB317（第25図298～302：PL.122）

298～300，302が壺、301が鉢である。

298～299はハケ調整痕を残す壺で、一部に光沢のナデないしミガキが確認される。重い壺である。壺300，302は器壁が薄く精製ミガキを施す。軽い壺である。300は白く焼き上げる。302の縄文施文表現は単節LRとなっているが、RLRが正しい。

＜出土状況＞　本住居址は廃絶後レンズ堆積をなし、上層の1～2層より遺物が出土している。301，302は1層および2層炭化層より出土した破片が接合した。298～300は埋土中出土と記録されているが、型式的に1～2層より出土したものと想定される。よって、298～302は住居廃絶から一定時間を経過した後、窪地に廃棄された一括資料として捉えることができよう。

SB318（第25図303～310）

303が高杯、304～307が壺、308～310が甕である。

305の垂下文原体は2本1組のヒゴで、左から右へ2条施文し1単位とする。垂下文間は精製ミガキを施す。306は外反口縁を呈し、内外面に精製ミガキを施す。大型甕310は内外面にミガキが確認できない。外面は煤で褐色化し、内面下位には焦げが確認できる。

SB319（第26，27図311～329，補遺図版247，2867～2868：PL.8，100）

311～321が壷、322～326が甕、327が高杯、328が蓋、329が鉢である。

317～320は細片で、他は個体に復元できるものが多い。壷は太頸系（311～313）と細頸系（314～316）があり、後者は器壁が薄くミガキも精製傾向にある。311の口縁端部はハケを施した後ツマミによって調整する。口縁部外面にはミガキを加えない。314は完存し、欠損部がない。胴外面を丁寧にミガキあげる精製土器であるが、口縁部外面のみタテハケ→ヨコナデ調整をとりミガキを加えない。319の垂下文は櫛1本で押し引いており、1本ずつ描く。319，320のような垂下文は類例が少ない。

コの字重ね甕322，323の施文原体には櫛が用いられている。323のコの字重ね文は、頸部簾状文施文原体から1本のヒゴを抜き取り施文している。322も同様である。コの字重ね文の一条の描き方は、左上隅より上から下に描いた後、右横方向から右下に向かって描き、更に内側に重ねていく施文手法をとる。

＜出土状況：図版128＞　本住居址の埋土は大きく3層に別れる。最上層の1層は住居址埋没後の窪地に堆積した炭化粒を多量に含む黒色土層で、レンズ堆積をする。2層および床面直上の3層には炭化粒・焼土粒は含まれない。遺物群は最下層の3層および床面上からの出土はなく、埋土中層に位置する2層出土遺物群と、最上層1層の黒色土層出土土器群とに別れる。2層では完形に近い個体が散在し、1層では破片が散在した。311～316，321，327～329は2層、317～320，322～326は1層出土土器である。壷315は柱穴内より出土した。壷311～314，316，321は図示した部分が完存し、埋置された状態を示していた。層位的には2層と1層は明確に区別でき、土器の残存状況も異なっているが、土器型式学的には明確に区分できない。壷の文様要素では、1層出土土器群が型式的に新相を示す。

SB320（第27図330～333：PL.121）

330～331，333が壷、332が有孔鉢である。

＜出土状況：図版130＞　330，332，333は床面直上より、331は埋土最上層の炭化粒を多量に含む黒色土層より出土した。よって331は後の流入土器の可能性もある。330，332，333は床面に押し潰された状況で出土し、図示部分は完形に復元された。330は奥壁の壁際、333は奥壁側主柱穴間より出土した。

SB324（第27図334～336：PL.105）

334～335が甕、336が壷である。

335の頸部波状文は畿内型施文である。336は口縁部を除き欠損部分がない。2次的に被熱し、橙褐色を呈す歪んだ土器である。文様は櫛→沈線の順で、櫛描文は右回りに施文する。櫛描波状文cは7連で構成されるが1周せずに5連まで描いた段階で静止し、間隔があいた部分を2連分描き加えている（実測図左の部分）。

＜出土状況：図版131＞　336は主柱穴掘り方内より出土し、完形状態で正位に埋置されていた。口縁部は打ち欠かれている。334，335は破片資料である。切り合関係で本住居址より新相のSB328出土資料と混在化した可能性もある。335と336は型式的に共伴し難い。

SB323（第27図337～339：PL.100）

337～338が鉢、339が有孔鉢である。鉢338は細片から図化した。高杯の可能性もある。

＜出土状況：図版130＞　337，339は、炉址上に並行して埋置されていた。いずれも完形で、炉址酸化面上に伏せていた。炉址は2基並列して検出されたが、土層より新旧関係が認められ、最終使用炉に土器が埋置されていた。338は破片の状態で埋土より出土した。

SB325（第28図340～343：PL.114）

340～341が壺、342が広口壺、343が甕である。

＜出土状況＞　340～343は床面直上に押し潰された状態で出土し、図示部分が完形に復元された。４点は住居廃絶時に遺棄された良好な一括資料である。

SB326（第28図344～350，補遺図版247，2869～2872：PL.116）

344～349が甕、350が甕か鉢である。

344～346は胴部全体にミガキを施すミガキ甕である。いずれもハケ調整後ミガキを多用し、ハケを消している。内面に比べて外面を密に施すことも特徴となる。350は胴部に退化した連弧文が施文される。

＜出土状況：図版132＞　344～347は壁面近くから図示部分がほぼ完存状態で出土した。344，346が床面直上より、345，347がやや浮いて出土した。壁面上に位置していたものが、第1次レンズ堆積時に落下したものとみたい。348～350は埋土中より出土した。347～350は型式的に一括資料としてとらえて良い。

SB328（第29，30図351～365：PL.８，９）

351～357が壺、358が高杯、359～365が甕である。

351の沈線文は右回りに施文する。連弧文は７連。353の沈線文施文原体は、押引き列点文の断面から棒状工具が想定される。波状沈線文は、受口部では細い棒を２本連結し、頸部から胴部では太い棒を用いて施文する。壺は細頸系の351～352と、太頸系の353～355の二者が認められる。356，357は小型壺であるが、鉢として転用される。357の内面には、ベンガラが収納されていた痕跡が認められる。

甕363は羽状文帯施文後、文様帯を縦位に区画する垂下文を加える。施文原体は２本１組のヒゴを２セットゆるやかに結束した４本歯で、垂下文は２本１組の原体で施文する。同様な櫛原体の類例は多くない。365のコの字重ね文の施文は、①頸部に横線を１本、縦位の垂下線を５本引き胴部文様帯を５ブロックに区画する。②ブロック内を、左上隅より上→下、左→右→下とコの字を描く。③外側から内側に向ってコの字を重ねる。同コの字重ね文は、①→③という基本的施文方法で描いている。

＜出土状況：図版131，PL14＞　本住居址は床面直上に炭化材、焼土層が認められる。土器およびその直上に乗る第１次堆積土層から出土した。351，354，358，360，365は完形に近く復元された。土器は炭化層に乗る形で床面よりやや浮いて出土したが、358，360，365は遺棄された状況を示し、365，360は横位状態で、押し潰されていない。高杯358は甕360に接していた。杯部が逆位に甕に向いており、甕360に高杯358が蓋として被せられていた可能性もある。351，　353，354，359，361，364は押し潰された状態を呈していた。353はやや浮いて出土したが、壁際のレンズ堆積層に含まれ、前述した土器群と同一層に位置づけられると考えたい。352，357，362，363は埋土中より出土した。これらは破片資料が多く、第１次堆積土層出土土器群との扱いは検討の必要がある。

SB329（第30図366～370）

366～368が壺、369～370が甕である。

懸垂文をもつ壺368は、頸部文様帯の地文に縄文をもたず、垂下文は波状文である。刺突を施す楕円の浮文をもつこと、口縁部外面に精製ミガキを施すこと等、懸垂文系の壺としては新しい様相を示す。甕370の胴部文様帯は、斜線文と崩れた羽状文が共存する。文様施文に乱れがあり、施文順位がはっきりしない。

＜出土状況：図版132＞　366～367，369～370はレンズ堆積を示す２層中より出土し、図示部分は完形に復元された。368は多量の炭化物・焼土を含む１層より破片で出土した。前者は住居址２次埋没層に廃棄さ

れた土器群であり、後者の368は窪地に流入した土器であるとみたい。よって両者には若干の時間的差があるものと想定される。

SB331（第31図371～378：PL.101，104）

371～372が壷、373～376が甕、377が有孔鉢、378が蓋である。

甕は頸部に簾状文を施文するもの（373，374，376）が主体となる。375のコの字重ね文は櫛描施文で、棒状の原体で施文するのではなく、櫛歯の1本で施文する。施文方法は沈線文と同様である。376は台付甕では大形サイズで、類例は少ない。378はつまみをもつ蓋であるが、同タイプのつまみは後期に盛行し、中期としてはやはり類例が少ない。同セットでは、後期土器様式への傾斜を認めることができる。

＜出土状況＞　371，373，375～376は床面直上より出土した。377，378を除き破片の状態で出土し、完形に復元できるものはない。377，378は完形に復元された。壺胴下半部の372は土器埋設炉として転用されていたものである。374は埋土中より出土したが、型式的に他の遺物群と伴っても良い。

SB351（第31図380～383：PL.101）

380～382が壷、383が鉢である。

382は地文に縄文を施し、多段横帯構成の文様を施文する。施文原体は櫛歯で、櫛歯1本で描いた横走沈線内に上位からa空白帯2段、b波状文2段、c3本連結の櫛による押し引き刺突文（右→左）2段、d波状文で充填し、その下位に2本結束原体で波状文を施文する。383の鋸歯文は幅が1㎜以下で、彫の深いヘラ描き沈線で描かれ、鋸歯文としては後期吉田期の技法に通じる。施文後精製ミガキを施す。

＜出土状況：図版133＞　380は入口施設のピット内より、381～382は埋土中より、383は壁際の床面よりやや浮いた位置から出土した。381は破片資料、382は図示部分完形資料、383は1／2大の破片資料である。本住居址内出土土器は一括性に保障がない。

SB352（第32図384～389，補遺図版247，2873）

384が壺、385～388が甕、389が鉢である。台付甕387の浮文には櫛で6点刺突する。

＜出土状況：図版134＞　本住居址は大型住居址であるが、出土遺物は極めて少ない。386，389が床面直上で破片の状態で出土した外は埋土中より破片が若干出土した程度である。資料は型式的に一括資料としてとらえて良い。

SB353（第32図390～391，補遺図版247，2874：図版135）

390が鉢、391が甕である。390，391は図示部分が完形で、炉址脇の床面直上から埋置された状態で出土した。埋土中の遺物量は多くない。

SB354（第32～34図392～412，補遺図版247，2875：PL.9，10，119：図版137）

392～396が壷、397～404が甕、405～411が鉢、408が無頸壷、412が小型土器である。

壷は丁寧なミガキを施した精製壷（394，396）と、ナデ調整壷（392～393）とがある。いずれも、口縁部外面はヨコナデ調整でミガキを加えない。斜走文を施す甕は、胴最大径と口径に差がない深鉢タイプに認められ、口縁端部に刺突が認められる（397，399）。404は櫛原体でコの字重ね文を施文する。施文手法は流儀に従っているが文様に乱れがある。404の地文は、コの字重ね施文前に中部高地型の櫛描波状文をブロック施文する部分と、布目圧痕と想定される擬似縄文を施文する部分とがある。無頸壷408の内外面は赤

彩ミガキを施している。406は内外面非常に丁寧なミガキを施している。

SB359（第34図414～419：図版138）

414～416が壺、417，419が鉢、418が高杯である。414は大型壺で、籠目痕が認められる。

本住居址は、住居址埋没後の窪地に焼土・炭化層が流入している（第1～2層）。414～419は床面および床面より浮いて出土したが、基本的には1～2層より出土している。遺物量は多くなく、破片が主体であるが、415は完形で廃棄されていた。層位的に廃棄時の一括性が高い資料である。

SB360（第34～38図420～448　第56図668～669：PL.10～13）

420が無頸壺、422，430が鉢、421，423～429，668，669が壺、431～448が甕である。

無頸壺420、深鉢422の内面は、ハケ調整後丁寧なナデを加えるが、ミガキを施すことはない。壺は細頸系（425）と太頸系（423，427，429）がある。外面の調整は、精製ミガキを施す精製壺（423～425，427）とハケ調整壺（426，428）とがある。口縁部外面の調整は、ハケ調整後のヨコナデ調整が基本であるが、精製壺の427のみが例外的で、同部に丁寧なヨコミガキを施す。

425は淡い赤彩を施す。ミガキが及ばなかったハケ調整痕に粉状のベンガラが付着して残っている。ミガキ部分の発色は弱い。このことから赤彩手法は、ハケによる器面調整→ベンガラ塗布→ミガキという工程が想定される。胴部には精製ミガキを施す。426はハケ調整壺で、胴下半の一部に軽いタテミガキが観察される。口縁部は大きく開きハケ調整後ヨコナデが施される。器壁の薄い軽い壺である。427の頸部は縄文→櫛描直線文→斜状沈線文という施文順位をとる。

甕の胴部文様帯は縦羽状文が主体であり、頸部に簾状文をもつものがめだち、羽状文→簾状文という施文順位をとる。435は倒鐘型をなし、同住居址出土甕では形態的には古相である。口縁端部に指によるオサエを施す。簾状文と縦羽状文施文原体は、1本あたりが細く緻密で結束もしっかりとしており、他と異なる。松原集落以外からの搬入も想定される。甕437は中型甕（12.8㎏）、441は大型甕（33.6㎏）である。いずれも内面は丁寧なヨコミガキが施され、437は外面の胴最大径部付近に煤が付着するが内面に焦げが認められず、441は火に掛けた痕跡が認められない。439は胴最大径に対し器高の割合が他の甕より低く、球胴を呈する。外面は調整痕を残さない程精製ミガキが加えられるが、内面にはハケ調整を残すミガキを施す。台付甕442は脚部と胴部の接合に充塡技法を用いる。444は羽状文施文に櫛を用いずに棒状工具を用いて、沈線で羽状文を表現する。同施文手法は栗林式土器では類例が多くないが、胎土、形態から搬入土器とは考えない。

＜出土状況：図版139～140＞　同住居址の土層を検討すると、レンズ状堆積を示しており、1次埋没後の窪地では強く火を焚いた痕跡がある。窪地底面の2層最下面には3～5㎝程の酸化面が形成されている。同住居址からは完形に復元された多くの土器群を検出したが、そのほとんどは酸化面直上の焼土粒・炭化粒を多量に含んだ2層より出土しており、酸化面下位の最下層3層から出土したものはごく僅かである。

土器は破砕状態で住居址中央部の2層に集中する。火の焚かれた窪地に向って、住居外南側から破損状態で土器が廃棄されたものと思われる。また、復元された土器が被熱していないこと、窪地酸化面直上に廃棄されていることから、火を焚いた後に土器群が廃棄された様子が窺える。

SB362（第38，39図449～460　第44図514：PL.13）

449～454，514が壺、455～458が甕、459～460が鉢である。

壺は精製ミガキを施すものが多い。口縁部外面はタテハケ後、ヨコナデ調整（449，450）を行う。450は

胴最大径よりやや上位に記号が認められる。欠損し全体像が明らかでないが復元した。

455は胴最大径を上位にもつ長胴の甕で、口縁部はゆるやかな受口状を呈す。形式的に類例は少ない。胴最大径から下位に煤が付着するが、内面に焦げは確認できない。文様は頸部に乱れた波状沈線文が1周し、部分的に櫛描波状文が実測図に図示した部分のみに認められる。胴部は縦羽状文である。

458はコの字重ね文をもつ受口状口縁台付甕である。コの字重ね文、鋸歯文は全て櫛原体のヒゴ1本を抜いて原体とする（PL13)。

<出土状況：図版141>　449～451，454～455，458は床面直上より押し潰された状態で出土し、図示部分が完形に復元された。壷453は図示部分が完形状態で主柱穴内上層より出土した。柱を抜き取った後埋置したものと想定される。第44図514の壺は、棟持柱掘り方内より完形状態で出土したもので、柱を抜き取った掘り方内に逆位に埋置されていた。壷内部は空洞状態であった。514は胴部に焼成後穿孔が施されている。他の土器は埋土中より出土したが型式的に一括資料として扱って良いものと思われる。

SB361（第39，40図461～466）

461～463が壷、464～466が甕である。

461～463は多段横帯文系の壷で、461はII～V文様帯を充填し、462，463はIII文様帯に文様空白帯が認められる。いずれも横帯を横走沈線で区画し、縄文および押し引き列点文で充填する。461，463では横帯内に3本1組の山形文を描き、内部に押し引き列点文を充填する。461では左から右に向って水平に押し引き、463は右から左に向って押し引いている。462～463の空白帯には精製ミガキが施される。

甕464はSB360－444（第38図）と同一個体である。466は小型台付甕と想定され、頸部に簾状文、胴部にコの字重ねくずれの文様が櫛描施文される。胴部文様は司状の区画を右横から左下に向って描きながら右回りに施文し、さらに区画内を左から右に横位短線を充填する。

SB363（第40図467～473）

467～470が壷、471～472が甕、473が鉢である。

壷は太頸系壷（468）と細頸系壷（467，469）で構成され、細頸系壷は精製される。469は口縁部内外面に丁寧なミガキが施される。小型壷470は完存し、内面にベンガラの付着が観察される。

甕471の施文原体はササラ状工具を用いる。外面下位はケズリが認められる。大型甕472は内面に丁寧なミガキを施すが煮沸痕跡は確認できない。受口部外面の波状文は2本結束の櫛原体で施文される。

<出土状況：図版143>　467～471，473は、床面および埋土下層より破損した状況で出土した。小型壷470を除き完形に復元できるものはない。大型甕472は他の土器群よりやや上層で潰れた状況を呈していたが完形に近い状態に復元された。

SB364（第41図474～489：PL.13，14）

474～480，483～484，486が壷、481～482，485が鉢、487～489が甕である。

壷は外面を精製ミガキするもの(474,477,478)がめだつ。頸部文様帯は沈線文による横走沈線(474～479)が主体であるが、480は櫛原体で施文する(PL14)。477の頸部文様は擬似簾状文で、施文原体は棒状工具を櫛のように連結している。478は連弧文風に施文する。原体は連結状工具ではなく、棒状工具で弧を1本づつ描いている。左から右に向って描き右回りに施文する。

479は口縁部を欠損する以外は完存する。非常に淡い赤彩が施される。懸垂文および押し引き列点文は櫛描施文で、列点文は上から下に向って押し引きされる。480は太頸系の懸垂文壷である。文様型式から懸垂

文壺でも末期の様相を示す。口縁部調整は、外面にタテハケ後一部ミガキ、内面にヨコミガキを施し赤彩しない。Ⅱ文様帯の横線文・波状文はいずれも櫛原体で施文する。Ⅲ文様帯は垂下文が4単位で、一単位あたりの面積が大きい。縦位の波状文は左から右に描き、その後沈線で区画する。垂下文以外は丁寧な赤彩ミガキが施される。Ⅳ文様帯の波状沈線文部分は実測図では赤彩のトーンがかかっているが、この部分は赤彩していない。鉢485は、外面および内面口縁部に赤彩ミガキが施される。

＜出土状況：図版144＞　本住居址の層位は、炭化粒と焼土粒の互層（1層）と炭化層（3層）の間に暗褐色土層（2層）の間層が認められる。所見によれば土器の出土は1層に多いという。1層と3層の出土遺物の区分は不明確であるが、壺480は1層と3層出土の破片が接合している。475，477，478，480，482が1層、474，476，479，481，487が2層から出土したという調査所見が残されている。第1層における壺477，478，480の共伴が特記される。土器は破片の状態で出土し、壺類が多い。第1層と第3層出土の壺には頸部文様帯に差が認められる。

SB369（第42図490～500：PL.14）

490～496が壺、497～500が甕である。

古相を示す土器と新相を示す土器が認められるが、破片資料が多いため共伴関係に不明な点が多い。壺は太頸壺496を除くと、精製ミガキを施すものが多い。490は薄く整形された軽い壺で、黄橙褐色～黄白色に焼きあげている。

甕497は鉢型を呈す。文様ならび調整は垂下文が2条1組で右から左へ施文し、外面文様帯以下は、荒いタテミガキを施すがハケを残している。498は胴外面の文様帯境界部に段が認められ、同部分に刺突を加える。刺突部に段をもつ型式は古相の甕に認められる。

＜出土状況：図版143＞　層位的な出土状況は、492，496，499，500が1層より、490，494，495，498が1層と2層出土破片が接合、491，493，497が2層より出土した。1層出土の496はSB352出土土器片と接合した。上層と下層出土資料には若干の型式差がありそうである。

SB373（第43，44図501B～513：PL.101，114，115）

501B～503が壺、504～505が鉢、506が壺か鉢、507～513が甕である。

501Bは胴部上位内面にミガキを施す壺である。口縁部外面にも丁寧なミガキを施す。胴部外面文様は、櫛描横走短線文を縦位に配列する。横走短線文は左から右方向に描くが、縦位文様のブロックは右回りに施文している。文様構成および描く手法は甕509と同様である。506は鉢か受口状口縁の壺か判別がつかない。鋸歯文は区画部が沈線文、斜線部がヘラ描きされる。

甕509は内外面ハケ調整で、下位部分にはナデを施すがミガキは認められない。胴部には横走短線文を縦位に充塡する。切り合いから右回りに施文していることが理解できる。頸部波状文は4回静止部をもつ中部高地型施文をとる。台付甕511～513は大型甕513のみ充塡技法を用いる。512は口縁端部と肩部に刺突列点文を施している。

＜出土状況＞　土器群は、床面よりやや浮いた2層下部からまとまって出土した。2層と床面直上に堆積する3層とには炭の間層が認められるが、遺物群はこの炭層直上に堆積していた。第一次埋没後の窪地に廃棄されたと考えられる。土器は破損状態で各個体毎にまとまって出土したが、完形に復元できる個体は少ない。住居址東壁に添って壁直下よりやや離れたライン上に位置することからも、第一次埋没後、東側から廃棄されたものと想定される。良好な一括資料として位置づけられる。

SB403（第44図515～519，補遺図版250，2920：PL.101，103，112）

515～516が壷、517～518が鉢、519が甕である。

壺515は器壁が薄く仕上げられた壺で、口縁部は直口縁となる。調整は口縁外面がハケ、内面が丁寧なナデを、胴外面上位が精製ミガキされる。516は口縁部が欠損する他は完存する。

甕519は胴部文様帯に波状文帯をもつ。波状文は右回りの中部高地型施文で、左から右に描き、上から下へ重ねるブロックが５単位認められる。３条１組の垂下文施文は２箇所のみで、波状文帯を区画する意識がない。正面観を示している。上下１対の円形浮文が４箇所認められる。この区画と波状文のブロックとの境界は一致しない。内外面の調整は内面がハケ、外面下位には軽いミガキを施し、ハケを残す。口縁部はヨコナデ、端部に刺突を施す。

＜出土状況：図版146＞　同住居址はSB402と切り合関係にあり、双方ともに床面が被熱する住居址で、床面直上に炭化材、焼土が散在する。515，516，518は炭化材と伴に床面直上に位置し、赤彩土器516，518は図示部分が欠損することなく出土した。516は主柱穴を抜き取った後の柱穴上に正位状態で埋置され、518は土圧等で斜位の状態となっていた。

SB401（第45図520～527：PL.15）

520～523が壷、524～525が甕、526～527が高杯である。

壷520は、口縁部が大きく外反し、胴部は薄い器壁で丁寧に仕上げられている。口縁部内外面および胴上半部には丁寧なミガキが、胴下半部には赤彩ミガキが施される。文様は、櫛原体のヒゴ１本（直径２㎜）を用いて沈線文状に施文される。頸部文様帯は、縄文施文後に７条の直線を描き、直線間には縦位の刺突を行う。縦位刺突は５単位認められ、直線横帯文を５ブロックに縦位区画する。Ⅳ文様帯は直線横帯内を同一原体で押し引き列点文、山形文で充塡する。Ⅴ文様帯はカーブの弱い連弧文を呈する。

高杯526は器壁の厚い重い土器である。527の脚部は、棒に粘土を貼りつけて成形したものと考えられ、径８㎜の穴が残る。

＜出土状況：図版145＞　本住居址では、完形に近い状態で復元された土器群が床面付近より出土している。遺物の出土分布は、Ａ群・入口部壁際付近、Ｂ群・入口より両壁側付近、Ｃ群・奥壁付近に別れ、Ｃ群では石器と土器が、Ａ，Ｂでは土器がまとまっている。Ｃ群では太型蛤刃石斧、砥石が床面付近に位置し、砥石の下から高杯527が出土した。付近からは擦り切り石、太型蛤刃石斧未製品が床面よりやや浮いて壁直下より出土した。Ｂ群では壷520が２地点の床面に散在する形で出土した。底部を除き完形に近く復元されたが、頸部が壁際方向にやや浮いており、一次埋没時に投げ込まれた可能性もある。Ａ群では523，524，526が図示部分完形に復元できた。523は図示部分が床面上に正位の状態で置かれており、526は床面に正位の状態で置かれていたものが転倒した状態を示す。524は破片の状態で壁直下に散在していた。

Ａ，Ｂ，Ｃ群の遺物は出土状況、土器型式的にも一括資料として扱って良いものと思われる。なお、土器と伴に太型蛤刃石斧未製品等の石器が共伴していることが特記されよう。

SB402（第45，46図528～536：PL.104）

528～531が甕、532が鉢、533～536が壷である。

台付甕529の円形浮文は、受口部と胴最大径部に互い違いに各６箇所貼付し文様帯を鋸歯状に区画する。534は細頸系の無果花型壷である。口縁部は大きく外反し、外面にハケを残す光沢あるミガキを、内面にナデを施す。胴部はハケ→ナデ→光沢のあるスジ状のミガキを施し、胴上半はタテミガキ、下位はタテとヨコのミガキが認められる。頸部文様帯は簾状文のみの施文であるが類例は多くない。535は胴最大径がソロ

パン玉のように張るタイプの壷で、胴外面にハケ調整を行い、Ⅰ，Ⅱ文様帯に刺突文が認められる。

＜出土状況：図版146＞　同住居址は床面が被熱する住居址で、床面直上に炭化材、焼土が散在する。529～534，536は床面直上より破損状況で出土したが、床面直上に遺棄されたこれらの土器群上に火がかけられた様子が窺える。534は床面直上に土器片が散乱し、2次的な被熱を受けて器面が黒色化する。完形近く復元された。奥壁右側の床面直上には、頸部より上位を欠損するほかは、完形状態を保つ壷が壁にもたれかかるように正位状態で出土した。整理段階で不明となり図示できないが、この壷を＜不明壷＞と呼んでおく。不明壷の周囲には、台付甕529が図示部分完形で、赤彩壷533が破損状態で、鉢532が破片で出土した。いずれも2次的な被熱を受けているが、不明壷の壁側部分は直接被熱して橙褐色に酸化し、炭化材等があたった部分は2次的な黒斑が確認できる。不明壷の2次的な黒斑と534の黒色化は、遺棄された土器群上で火が焚かれたことの傍証ともなろう。土器型式的には一括資料として扱って良い。

SB404（第46，47図537～545）

537～540が壷、541～545が甕である。いずれも埋土中からの出土で、床面上からの出土はない。

537は波状文の懸垂文で、Ⅱ～Ⅴ文様帯の地文には縄文施文がない。沈線文以外の部分は毳いミガキが施される。頸部文様帯は沈線文による擬似簾状文となる。

甕543の胴部文様は横羽状文と斜線文部を図示する。同文様帯には縦羽状文も認められ、3つの文様構成が混在する。こういった現象は新相に顕著となる。

SB405（第47図546～547：図版147：PL.100）

本住居址からは多量の土器片加工有孔円盤が床面直上から出土した。小型土器547は有孔円盤集中地点より出土した。鉢546も床面直上からの出土である。

SB406（第47図548～555）

548～549が壷、550が無頸壷、551～553が甕、554が鉢、555が有孔鉢である。

548は有段部外面に太い刺突列点文を施す受口状口縁壷である。刺突列点は、板状原体の小口部で直角に突いている。同部に刺突を施す例は栗林様式には認められず、日本海方面の影響が指摘できるが、他の要素は栗林的であり、折衷土器としてとらえることができる。

鉢554は、図示した傾きが異なる。実際には430と同様な傾きになると思われる。有孔鉢555は、内外面ハケ調整を残す粗製土器である。

＜出土状況＞　549，551，552，555が床面より出土した。同住居址の検出面は、床面ぎりぎりまで下げており、他の土器もほぼ同レベルに位置したものと思われる。

SB407（第47図556～557）

556～557は壷である。いずれも精製ミガキを施す。556は口縁部内外面に精製ミガキを施す袋状口縁壷である。

＜出土状況＞　556は床面直上より、557は主柱穴内より図示部分完形状態で出土した。出土状態より556と557は一括遺物として扱って良いものと思われる。

SB409（第48～52図558～616　第56図670：PL.15～17，100）

558～585が壷、586が高杯、587～594が鉢、595～616，670が甕である。

壷は単純口縁外反壷が主体であるが、受口状口縁壷（571～573）も認められる。口縁部は短く外反するもの（561）が残存し、アサガオの花状に大きく開くもの（564）も認められる。564の口縁部は後期壷に傾斜した形状を示す。

調整は胴部調整に特徴がある。①精製のミガキを行うもの（559，561，562，564，566，568，571）。②ハケ調整後ナデを行い、荒くスジ状のミガキを施すもの。このスジの部分のみが光沢をもつ（558，565，569，570）。③ハケを残す荒いミガキで、よく観察しないとミガキが不明なもの（560，563，579，580）。④ハケ調整を行うもの（567，572）等がある。口縁部はハケ→ヨコナデが基本であるが、内面のみミガキを加えるもの（559，561，564，571，577）と内外面にミガキを加えるもの（562）とがある。

558は淡い赤彩を施す精製壷である。赤彩はハケ調整後に施しており、その後ミガキを加えている。淡い赤彩を施す手法が理解される。胴部最大径部に1箇所隆帯が認められる。

562のⅡ文様帯には沈線文・刺突文が認められる。両者は同一原体で施文し、その原体は径4㎜の棒であることが理解できる。懸垂文壷564の口縁部は、外面にハケ→ナデ、内面にミガキ調整を行う。胴下半部は下から上に向って軽いケズリを施し、ミガキを加えている。垂下文は櫛描直線文3条を中央→右→左という順に重ねて1単位とする。連弧文は右から左へ描き、左回転で文様を重ねている。懸垂文壷568の垂下文は4単位で、同様な文様構成の類例は少ない。櫛描波状文が基本であるが、波状文を2条重ねるもの1単位、波状文間に刺突文を列点状に配置するもの2単位、波状文を2対1組とするもの1単位となる。581は櫛描波状文と横走沈線文の多段横帯文を構成とするが、櫛原体に特徴がある。原体は径1.5㎜のヒゴ4本と径3㎜の棒1本を結束している。径3㎜のヒゴは横走沈線文の原体であり、櫛原体と連結させることにより、櫛描波状文の上に波状沈線文を描いたような効果を出している。

577は異系統の壷で、日本海側の影響が考えられる。肉眼観察によれば色調は褐色で、胎土等は在来のものと同様である。口縁部は外面がタテハケ→ヨコナデ、内面がヨコハケ→ヨコナデ→軽いミガキを施す。口縁端部に45度下方から刺突する。頸部から胴上位に文様帯をもつが、胴部には無文帯がありミガキ調整される。文様帯は横走沈線文帯に3本1組の棒状浮文を3箇所縦位に貼りつけ、横走沈線に併行させる形で刺突を加えている。棒状浮文を貼付した後、上位から下位に向って櫛描横帯文を施文する。櫛描文は右回りに1周する畿内型である。最下段の刺突列点文は横走沈線文と同一原体で刺突している。

小型赤彩壷585、高杯586は口縁部および杯部を欠損し、欠損部を研磨することによって再加工して転用する。585は完存する。

甕599は口唇部に指オサエを施し、胴部外面下半にハケを残す荒いミガキ、内面に精製ミガキ（上半ヨコ・下半タテ）を施す。コの字重ね文甕603は地文に中部高地型櫛描波状文を施す。604はコの字重ね文を施文した後、口縁部から文様帯、胴下半に致るまでミガキを施す。文様帯までミガキを施す例は少なく、ミガキ調整甕との関係が想定される。コの字重ね文は区画帯が消失しており、型式的に新相を示す。605の文様帯は縦羽状文くずれと斜位施文の波状文によって構成される。608，614は横走短線文を文様とする。いずれも上から下へ払い、右回りに施文する。608の原体はササラ状工具である。

内面の調整は、①精製ミガキを施すもの（599，601，604，610，612）。②ハケを残す荒いミガキを施すもの（597，598，602，603，606，607，608，614）。③ハケを施すもの（595，596，600，609，611，613）。④ナデを施すもの（605）と多様化している。

＜出土状況：図版148＞　本住居址埋土はレンズ状堆積をなす。一次埋没後の窪地には何層かの炭化物と焼土層の互層が認められ（3～4層）、同層中より多量の土器が集中して出土した。床面直上からは若干の土器が出土しているがその量は僅かであり、第一次埋没後の炭化層に廃棄された土器群が主体を占める。土器群は各器種に及ぶが、完形に復元される個体は少なく、出土状況も破片の状態で散在していた。多量

の土器は炭層中に一括して廃棄された様子が窺える。

SB410（第52図617～621）

617が壺、618～619が甕、620～621が鉢である。617～620は埋土中、621は主柱穴より出土した。

617の口縁部は、外面が斜左上がりハケ→ヨコナデ→タテハケ、内面がヨコハケ→ヨコナデ→ヨコミガキを施す。618の受口部文様帯は2本結束櫛によって波状文を左回りに施文する。619のコの字甕は地文に波状文を充塡し、コの字重ねを区画する縦位区画線がない。

SB411（第52図622）

本住居址は床面直上に炭化材、炭化層が密着している。遺物の出土はごく僅かであるが、壺622は床面に押し潰された状態で出土した。

SB422（第52図625～626：PL.103）

625が鉢、626が壺である。いずれも埋土中より出土した。

625は胴最大径よりやや上位に有段部をもち、頸部が長く立ち上がる。有段部以下が文様帯となり、文様帯を鋸歯状に区分して、上位に重三角、下位に重山形沈線文が各々4単位施文される。文様施文後、文様帯も含めて外面にミガキを加える。内面はナデ調整である。色調は褐色を呈し626の橙色壺と対照的な色調を呈する。

SB425（第53～55図631～652，補遺図版250，2921：PL.18，100）

631～639が甕、640～641，652が鉢、642A～651が壺である。

甕634，636，637、鉢640は、口縁端部に板小口による刺突が認められる。639はミガキ調整甕で、ハケ調整後にナデ・ミガキを加え、文様を施文しない。内外面および胴下半部にミガキを施している。640は黄褐色を呈し、器壁も薄い精製鉢である。化粧粘土が剝れて内面の調整は不明であるが、精製ミガキが施されていたであろう。

壺の胴部外面調整は、精製ミガキを施すもの（643，644，645，646）、ハケ調整を施すもの（650）があるが、他はハケを残す荒いミガキを加えている。648の実測図はハケ調整壺のように表現されているが、ハケを残す荒いタテミガキを加えている。胴部2箇所に沈線による記号が認められる。

642Aの連弧文は右から左に向って描き、左回りに重ねている。643の連弧文は7単位で構成され、沈線内のみ赤彩する。645はII，IV，V文様帯に文様施文を行う。II文様帯は右回りに1周する波状文を沈線で上下に区画し、下位に5単位の櫛描J字文を付加する。連弧文は12単位で構成され、右から左に向って描き、左回りに重ねている。

鉢652は鍔上部に黒漆によって鋸歯文を描く。漆部分は内側である。

<出土状況：図版150>　本住居址は、廃絶後の陥没した窪地で火が焚かれており、上層部に炭化層、焼土層が互層にレンズ堆積する（2～4層）。多くの遺物はこの上層より出土したが、床面直上より出土した遺物も若干ながらあり、639，640は壁直下の床面直上より出土した。甕632，注口土器642B，鉢641，壺648，650は2層炭化層より出土したが、床面直上より浮いた状態である。他の遺物に関しては埋土中の出土であるが出土状況については不明である。完存状況で出土したものは甕632と注口土器642Bで、両者は壁際上層で接して出土している。漆塗の鋸歯文をもつ鉢652は破砕状態で出土した。本住居址出土土器群は床面と上層では土器型式に差が認められるが、両者を明確に区分するのは難しい。

SB450（第55，56図653～662：PL.18）

松原遺跡弥生面で確認できる住居址の中で最古段階の住居址である。検出面から床面まで10cmに満たない。遺物は破片資料が若干出土した程度であるが細片を図化した。

SB1102（第57～61図673～714：PL.18～20）

673～688，690～691が壺，689，692～694が鉢、695が鉢か高杯、696が有孔鉢、697～699が高杯、700～714が甕である。

壺の口縁部調整は、外面にヨコナデおよびナデを施し、内面のみにミガキを加えるものがめだつ（674～677，688）。胴部調整は、全体に精製ミガキを施すもの(673，675，679～681)、ハケを残すスジ状のタテミガキを施すもの（674，685）ハケ後ナデ調整のもの（683）等がある。

674はスジ状のミガキを施す典型例である。全体にハケ痕跡を残すが胴下半部はミガキが密で、ハケを残さない。675は頸部に押し出し凸帯をもち、凸帯間はユビナデによって凹線としている。Ⅲ文様帯には沈線区画による垂下文を充塡する。垂下文は右下がりの斜位で類例は多くない。Ⅴ文様帯の円弧文は９～10単位である。677の口縁端部は刺突、682の口縁端部は棒状工具で横から押圧する。678の鋸歯文は沈線文である。

679～681は球胴を呈する細頸壺で、口縁部が短く外反する。いずれも精製ミガキを加えるが、680は器壁が薄く、精緻に成形されて軽いのに対し、679，680は重い壺である。681は成形時の歪みが大きく、文様も乱れており精製壺とは言い難い。681の文様は、２～３条の直線文の下に３～４条の連弧文(弧状単位は３～４単位）を意識している。文様帯以外は精製ミガキを加える。

684，685のⅣ～Ⅴ文様帯は、沈線施文後に縄文を充塡する。文様帯以外の空間には荒いミガキを施し、ハケが残る。684の連弧文は６単位である。683はハケ調整後淡い赤彩を施すがミガキは行わないためベンガラはほとんど定着していない。686は重い壺である。ハケを残すスジ状のミガキが、胴上位ではタテ、下位ではヨコ方向に施される。

赤彩系の小型土器には壺、鉢、高杯がある。鉢689は内外面に精製ミガキを施し、外面に連弧文を右から左に向って描き、左回りに施文する。赤彩壺691は口縁部を欠損する他は完存する。口縁部には意図的な打ち欠きが行われ、そそぎ口状に打ち欠いている箇所もある。695は器壁が薄いところから高杯の可能性もある。

甕は完形に復元できる個体が多く、組成を理解する上で良好な資料である。プロポーションは胴最大径を器高の中位よりやや上位にもち、口径と最大径の差があまりなく、頸部がゆるやかに括れるものが多い。胴部文様帯は縦羽状文が主体となり、波状文が一定量を占める。コの字重ね文は組成に共伴しない。

710の羽状文施文手法は他と異なり、左から右方向に単位文様を描き、右回りに施文する。波状文施文甕711～713のうち、712が畿内型、711，713が中部高地型施文をとり、711が４ブロック、713が６ブロック単位である。714は片口部をもつ甕である。文様構成は、縦羽状文５ブロック単位に垂下文帯が１ブロック加わる。垂下文帯は直線と波状文を交換に右から左へ描いている。３条の沈線を描く円形浮文が７単位貼付されている。

SB1103（SK1726）（第61～64図715～756，補遺図版250，2923～2925：PL.20，21，104，114，122）

715～725が壺、726～729，733が鉢、730～731が有孔鉢、732が高杯、734～756が甕である。

壺は稜の不明瞭な受口状口縁（715，716，720，721）がめだち、胴部調整はスジ状の荒いタテミガキを施すためにハケ調整痕が明瞭に残るもの（715，718，723）が多い。717，719はハケ調整、720，725は精製

ミガキを加える。720は口縁部内外面にも精製ミガキを加える。II文様帯の地文に縄文施文が少ないのも当土器群の特徴である。

722は、III文様帯に沈線文による横帯施文を施すが、上位から2～3段は櫛描施文で充塡する。櫛描原体は2本の櫛歯状工具で、上位は右→左への押し引き列点文、下位は波状文である。723の頸部文様帯は、2本組みの棒状工具を原体とし、沈線文を右回りに施文する。櫛描文の影響を受けていると言えるかもしれない。724は多段横帯文系壺で、II～III文様帯に3本1単位の横走沈線が7段、IV文様帯に横走沈線3本と波状沈線文が、V文様帯に連弧文2条が施文される。地文には縄文が全体に充塡され、色調は褐色を呈する。

甕は、口縁端部にオサエあるいは刺突を施すものが一定量認められ、738，742が指オサエ、他は板の小口による刺突である。その手法は、737，749のように横にやや押し広げるもの、743，744のように突き刺すもの、750のように小口面が太いものとがある。

745は口縁部内外面に1箇所粘土魂が貼りつけられ、748は胴下半部に1箇所刺突が加えられ正面観を示している。747は櫛描羽状文の描き方が唯一他と異なり、斜線を左から右側に描いている。施文手法はIBR型をとる。小型台付甕754，755は強く被熱し、内面に焦げが残る。

<出土状況：図版155，156>　SB1103の土器図版では、多量の土器を提示したが、整理作業の過程で同資料群にはSB1103とSK1726出土遺物が混在し、SK1726出土資料がその主体を占めていることが明らかとなった。SB1103とSK1726は切り合関係にあり、SB1103がSK1726を切っている。SK1726はその一部をSB1103に切られ、SB1103はSK1726埋土内に床を貼る。SK1726はその埋土に焼土層、炭化層が何層にも互層をなし、同層から多量の土器が出土した。形に復元できるものも多い。SK1726埋土中からは以下の土器が出土した（715，717，720～722，724～726，728～731，734，736～738，740～742，745～748，750～752，756）。727，749は、SK1726埋土中出土の土器片と、SB1103の2層黒褐色土層出土の土器片が接合した。

SB1103はSK1726に比べると遺物量は多くない。同住居址は埋土中に焼土、炭化層を含むレンズ状堆積層が認められるが、遺物は床面および同層から出土している。床面上より出土した遺物には716，718，719，723，732，754があり、いずれも破損の状態で完形に復元できるものはない。出土位置から最下層4層に含まれるものと考えられる。

SB1103出土遺物およびSK1726出土遺物は、切り合関係から時間差を想定することもできるが、接合関係および土器型式から近接した時間差であると考えられる。

SB1106（第65図763～772：PL.102，116）

763，765が高杯、764が高杯か鉢、766が壺、767が有孔鉢、768が鉢、769が深鉢、770～772が甕である。

高杯763は杯内面のみ赤彩を施すが、内外面精製ミガキを加えている。脚部内外面に低い隆帯が認められる。764は器壁が薄く高杯の杯部である可能性が高い。766は大型壺の下半部で、底部に焼成後穿孔される。深鉢769は栗林式土器に類例を知らない。異系統土器であると考える。外面はナデ→縄文施文→ヨコミガキ、内面は精製ヨコミガキを施す。口縁部と胴最大径部に縦位に突起、口縁端部上位に突起が認められる。色調は褐色を呈し、他の土器群と若干の差が認められる。

<出土状況：図版157>　本住居址出土資料は上層（1～3層）出土土器群と、床面出土土器群（5層）とに分けて考えることができ、上層には炭化粒、焼土粒が含まれている。土器はいずれも破片の状態で出土した。上層出土土器群は764～767，770～771である。床面付近出土土器群は、高杯763が入口部の左側ピット内より磨製石斧と伴にほぼ完形状態で、異系統土器769が主柱穴内より1／2個体の状態で、鉢768が床

面直上から出土した。

SB1108（第65，66図773～781：PL.122）

773～775，777～778が壷、776が高杯、779～780が甕、781が土製品である。

773～775はⅣ～Ⅴ文様帯をもち、精製ミガキが施される。773のⅣ文様帯は、沈線による横帯文を直線文と波状文で充塡するが、上位横帯区画を充塡する2条の直線文は、2本結束櫛で施文する。高杯脚776は内面に赤彩表示があるが赤彩は外面のみである。土製品781は頭部で、頸部で欠損する。背面に焼成前穿孔有。

＜出土状況：図版155＞　本住居址は4層に区分され、埋土中層には炭化粒を多量に含む3層がレンズ堆積する。遺物は床面直上の4層出土土器群と3層以上出土土器群とに別れる。床面直上からは773，775，778が散在状態で出土した。注口赤彩壷778は完存し、床面直上に正位状態で埋置されていた。なお、779が1層、人面表現をもつ土製品781が2層、780が3層、776，777が3～4層より出土した。

SB1109（第64図758～762：PL.104，113）

758，760～762が床面上の第3層、759が第2層より出土した。

SB1110（第66図782～795，補遺図版250，2926）

782～787が壷、788が鉢、789が高杯、790～795が甕である。

787は口縁部が欠損するほかは完存する。胴下位から底部にかけて打ち欠き行為が行われている。壷784，785は破片資料であり一括性の保障はない。胴部Ⅴ文様帯の部分で、沈線文間に押し引き列点文が認められる。甕793は胴部が膨らむが、胴最大径が口径を凌ぐことはない。

＜出土状況：図版158＞　本住居址の遺物は床面上の炭層（2層）に多く含まれる。いずれも破片資料で、図示できるものは極めて少ない。打ち欠き部をもつ小型壷787は、主柱穴の掘り方内上層より横位状態で出土した。主柱を抜き取った後に埋置されたものであろう。

SB1112（第67図796～807）

796～802が壷、803～807が甕である。

796～798は壷の頸部文様帯で、いずれも沈線文で鋸歯文を描く。鋸歯文内は796が櫛原体1本のヒゴで刺突、797がヘラで斜線を描き、798が短横線を沈線で描いて充塡する。800の受口部外面には、2本結束の棒状工具で2条の波状沈線文を施文する（波状沈線文b）。

＜出土状況＞　796～807はいずれも細片から図化した。いずれも下層2～3層より出土した。

SB1113（第67，68図808～816：PL.113，115）

808～810が壷、811，813～816が甕、812が蓋である。

壷810は完形の小型赤彩壷であるが、図では赤彩表示のスクリーントーンが欠落している。頸部の段および胴部の注口も認められない。甕の内面調整は、811がハケ→ナデ、813，814がミガキ、815がハケである。受口状口縁壷809の受口部はゆるやかに変化し稜が認められないが、受口状口縁甕811，816の受口部の外面は稜をもちシャープである。811，816の外面は2本櫛による波状文が施文される（櫛描波状文b）。

＜出土状況：図版161＞　808～812，814～816は床面直上層から出土した。810は口縁部を打ち欠き、胴部に焼成後穿孔を施したもので、床面直上に横位状態で遺棄されていた。入口右側コーナー部分からは、床面よりやや浮いたレベルで小型土器（ミニチュア）が埋置され、付近からは管玉も出土した。図示した

土器群は型式的に一括資料として扱って良いものと思われる。

SB1115（第68図818～821）

818，820は最下層の第２層から、819，821は床面上から出土した。小型壷821は完存状態で主柱穴間に横転した状況で遺棄されていた。出土状況および土器型式学的にも一括資料として考えて良い。

SB1118（第68，69図822～835：PL.21，110）

822～825，831が甕、826～830，832～835が壷である。

甕823の頸部波状文は中部高地型で、部分的に２段となる。824，825のそれは畿内型施文である。823の羽状文は4単位に施文し、空間を斜線文で充塡する。

壷の文様は、Ⅲ文様帯に施文するもの（833～835）と、施文しないもの（826～830，832）とがあるが、後者のⅢ文様帯部分にはミガキを施している。全体に口縁部内外面にミガキを施すもの（830，833，835）がめだつ。835のⅡ文様帯は押し出し状の凸帯を形成するが、中央の横走沈線は２条の沈線を施文した後、ユビナデによって凹部を形成する。

＜出土状況：図版161＞　住居址埋土中央にはレンズ状堆積の炭化層（第２～３層）が認められ、床面直上にまで及ぶ。遺物は２次堆積土の炭化層に集中する傾向にある。土器は破損状態で床面上にも散在するが、完形に復元できるものはない。822，829～830，833が床面上から、823，834，835は同一主柱穴内から出土した。土器は掘り方内上層から出土し、壷834は頸部を下位に向けた斜位の状態で、甕823、壷835は破片の状態で埋置されていた。

SB1119（第70～72図836～857：PL.21，22，114）

836～846が壷、847，849が鉢、848が筒形土器、850～857が甕である。

壷の調整は、ミガキ調整が主体であり、ハケあるいはナデ調整のものはない。精製ミガキを施すもの（836～838，842，845）がめだち、他はハケ痕跡を残してもミガキは丁寧である。836，842は、Ⅴ文様帯に畿内型の櫛描施文を施す。842の下段施文は、波状文を描く手法で、右から左方向へ施文原体を動かし、短斜状に施文する。大型太頸壷840，841は、外面および口縁部内面にミガキを施し、内面にはハケ後ナデを施す。849は底部が水平に張り出し、口縁が筒状に直立する鉢である。張り出し端部に刺突を施し、同部に円孔を１孔穿つ。

甕は頸部および受口の括れが弱いものがめだつ。同タイプは頸部に文様が施文されないものが多い。大型甕（851～853）の内面は精製ミガキが施される。甕855の胴部文様は、壷の文様要素である連弧文が櫛で充塡される。本来、羽状文、波状文が充塡される位置に、櫛描連弧文を充塡する稀な例である。連弧文は左から右に向って描き、右回りに文様帯を重ねており、中部高地型施文手法をとる。連弧文は７単位で、１単位あたりの施文方向は上から下へ施文する。胴中位には櫛描施文後、刺突がやはり連弧状に施される。胴下半外面はハケ後タテヘラミガキを施し、内面はハケ後調整でミガキは施さない。内面下位には焦げが付着しており、甕として使用されたことが理解できる。

＜出土状況：図版162＞　壷836は完形状態で主柱穴掘り方上層から出土した。口縁部を打ち欠き、横位に近い斜位状態で埋置する。837～856は個体に復元できたものが多いが出土状況の記録がない。

SB1120（第72図858～866：PL.115）

858，859は蓋と無頸壷のセット、860～862が壷、863～866が甕である。

無頸壷と蓋には対面状の２箇所に紐縛り用の円孔が２孔あけられている。重ねるとルーズながらほぼ対応する。蓋は無頸壷の口唇より外側にとび出し、無頸壷に対して蓋が密着しない。

＜出土状況：図版162＞　床面直上から５点の土器が出土した。北側コーナー床直では、完存状態の土器４点と磨製石鏃１点が遺棄されていた。小型甕863は横転した状態で、無頸壷859、蓋858は蓋が被せられた状態で横転して出土した。小型甕866は正位の状態でおし潰されていた。このまとまりは住居廃絶儀礼と密接に関わっているであろう。提示資料は土器型式的に一括資料として扱って良い。

SB1121（第73，74図867～891）

867～879が壷、880，883～884が鉢、885が台付鉢、881，886～891が甕、882が蓋である。

壷の頸部には、868～870に押し出し条の凸帯が、871に貼り付けの凸帯が認められる。871は細片であり、他の遺物との共伴関係を断定できないが、凸帯上に沈線をひき、その後縦に刺突する。日本海側に分布する手法の影響も想定される。876の櫛による押し引きの施文手法も日本海側に分布する。874～879はⅣ，Ⅴ文様帯を有する土器片を拓本で図示した。

885は台が付く鉢で外面に赤彩を施している。図ではスクリーントーンが落ちている。内面はハケを残す荒いタテミガキで、頸部の締りが強い鉢の内面下部に似る。高杯とは考え難い。

甕は頸部に１条の櫛描横走文を施文するものが多く、簾状文も認められる。胴部文様帯は縦羽状文を主体とし、横羽状文、コの字重ね文が共存している。881は図版の天地が逆か？。

＜出土状況：図版163＞　本住居址は住居廃絶後の一次埋没以後、焼土、炭化層が互層となってレンズ堆積する（２層）。この２次堆積土の炭化層は、中央部では床面直上にまで及び、図示した多くの土器がこの２層から破片で出土した。出土土器量は多いが形に復元されるものは少ない。なお、炭化層が遠していない床面直上から遺物の出土がないことから、提示した土器は窪地に廃棄された土器群であろう。

SB1122（第74図892～896）

892～893が壷、894～895が鉢、896が甕である。893の肩部には記号が７箇所、横帯に描かれる。

＜出土状況＞　遺物の出土量は極めて少ない。893を除き破片から図化した。894が１層、892～893，895～896が２層より出土した。896はSB1121の第１層出土破片と接合した。

SB1123（第75～77図904～937：PL.23，100，123）

904～912が壷、913が鉢、914が小型赤彩壷、915～916が高杯、917が無頸壷、918～919が蓋、920～937が甕である。本住居址出土土器は、破片が多量な割に復元される個体が少ない。

壷は口縁部に強いヨコナデを施し、外面をナデあるいはハケ、内面をミガキする個体がめだつ。壷908は図示した胴部のみ施文をする。

甕はコの字重ね文を施文する個体が一定量認められ、920，921が小型台付甕、927が胴最大径を上位にとる平底甕となる。小型台付甕には、波状文を充塡するものが一定量共伴し、施文手法には中部高地型と畿内型とがある。924の受口外面は、櫛による斜線を充塡した後、波状沈線文を充塡する。櫛でRL縄文を表現した疑似縄文であろう（実測図では縄文表現となっている）。929は器壁が厚く重い。931は器壁が薄く軽いが、このような薄甕は類例が多くない。932は、内外面のハケ調整後にミガキを施すことはない。口縁部外面に意識的に輪積み痕を残している。胴部中位には、沈線文の原体と想定される竹管を押圧し、器面が内側に窪んでいる。937の文様は、乱れた縦羽状文部分と、斜線文部分より構成される。斜線文は左上がりにはね上げるものと、右下がりにかきおろす両者があり、一定の法則はない。

<出土状況：図版164，PL27>　本住居址は第一次埋没土上層に炭化層と焼土層が互層となり（第3層）、床面中央部にまで及ぶ。遺物は主にこの炭化層から出土している。第3層からは個体に復元できない土器片が多量に出土しているが、甕は個体に復元できるものが若干認められる。一方、床面直上には、3層内出土土器とは廃棄時が異なり、住居廃絶時に遺棄されたと想定される土器もある。無頸壷917、甕929、高杯916は図示し得た部分が完存し床面に横転、鉢913は破片で床面に密着していた。

本住居出土土器群は上下層の接合関係がめだつ。以下、土器ナンバーと出土層位（カッコ内）を示す。904（1），905（3．4），907（3．4），908（4），909（1．4），910（2．3．4），911（1．3），912（1．4），913（1．2），914（3），915（3），916（1．4），919（2），922（1），923（1．3），924（2），925（4），926（1），927（1．2．4），928（2．4），931（2．4），932（1．2），933（1．2），934（1．2．4），935（1．3．4），936（2．3．4），937（1．2．4）

SB1124（第77，78図938～947：PL.24）

938～940，944～945が壺、941が無頸壺、942～943が小型赤彩壺、946が鉢、947が台付甕である。

938は太頸の壺として捉える。器面が荒れて調整は不明瞭であるが、胴部外面はハケ後にナデ調整を施しているものと思われる。内面はハケ調整で、ミガキを施すことはない。内外面に火を受けた痕跡はない。口縁部は外面がヨコナデおよびタテハケで調整し、内面はミガキを施している可能性が高い。

<出土状況：図版164>　本住居址は一次埋没後、その窪地で火が焚かれ炭化層が床面直上にまで及び、床面中央部も被熱して酸化する。遺物は個体に復元可能な土器群が、床面中央部では床面直上に、壁周辺ではやや浮いた状態で出土している。938～947はすべて一次埋没後の火入れ行為後に、形状を保った状態で廃棄された様子が窺える。赤彩土器の無頸壷941、小型赤彩壷942、鉢946は床面よりやや浮いて逆位の状態でコーナー付近にまとまっていた。ほぼ完形の状態を保つ。甕944，945は赤彩土器群付近の床面から出土した。横転し破損状態であったがほぼ完形に復元された。壺938は床面直上に大破片が押し潰された状態で散在し、底部は壁直下にやや浮いた状態で検出された。

これらの出土状況から938～947は一次埋没後一括廃棄された可能性が強い。土層セクションは住居の北側を切っており、遺物が集中して出土した南側と異なると考えられる。南側では2層がレンズ状に床面まで達する。

SB1125（第78，79図948～962：PL.116）

948～952が壺、953が高杯、954が有孔鉢、955が蓋、956～962が甕である。

952の口縁部は内側のみ赤彩ミガキを施し、外面はミガキを施すが赤彩をすることはない。実測図では赤彩表示が欠落している。胴外面には淡い赤彩を施す。蓋955の外面は櫛歯1本で弧を描き、その内部を2重に押し引き列点文で充塡する。中心部は刺突。円孔は対面上に2ヶ所穿孔される。

<出土状況：図版165>　948～962のうち、955，961以外は埋土下層の炭化物を多く含む第2層から出土した。床面よりやや浮いて破片で散在する。土器群は離れた地点の破片同士が接合するところから投げ込まれた可能性が高い。接合してもその多くが完形に復元できない。

955，961は主柱穴掘り方の下層より、955は完存の状態で、961は押し潰された状態で出土した。961は完形に復元された。

SB1126（第79～82図963～989：PL.24～26）

963～965，967～971が壺、966，973が鉢、972が蓋、974～988が甕である。989の器種判別については難

躇するが太頸壺として理解する。

当住居址出土土器群は、高温で被熱しており、色調が黄橙褐色から橙褐色を呈す。器面が荒れて調整が不明瞭なものが多い。同時に、甕の煤、焦げ等も高温被熱によって失われており、使用痕跡が確認できない。大きく歪んでいる土器（971，977，978）も何例か認められるが、966のみは被熱が弱い。

壺は細頸のもの（963，965，968，970）がめだつ。965，970は細頸系を呈するもの、口縁部が大きくアサガオの花状に開くことが特徴となる。963，964，967は横に外反ぎみに開き、前者とは異なる。胴最大径は968を除き、下位にとるものが多く、ソロバン玉状に張り出し、球胴とならない傾向にある。968は縦長の形状をとる。

鉢966は、内外面に赤彩ミガキを施すが、実測図では赤彩表示が欠落している。内面下半は赤彩が薄くごく僅かであることから頸部を有する鉢となる可能性が大きい。

甕は、胴最大径が口径を凌ぐ球胴タイプ（982～988）がめだつが、そのうち櫛描施文を行わないもの（985～988）が一定量存在する。同タイプは985のようにハケあるいはハケ後にナデ調整を施すものと、986～988のように最終調整に精製ミガキを行うものとがある。ナデ・ミガキ甕として位置づけることができるが、内面はミガキを施さないか、軽いミガキのものが多い。

989の文様構成は、胴上半部に壺Ⅳ，Ⅴ文様帯のモチーフを、頸部簾状文以上に甕の文様モチーフをもつ。胴下半部外面は丁寧なタテミガキ、内面は左上りハケ後丁寧なミガキを施す。残存部分に焦げ、煤の痕跡は認められないが、高温で失われている可能性がある。形状・文様構成からは壺、甕の判別がつきにくい折衷型ではあるが、胴上半部の文様構成から太頸壺として理解した。

＜出土状況：図版166＞　本住居址は、廃絶後の一次埋没土である4層が堆積した後、その窪地を利用して火が焚かれている。床面中央部は熱を受けて橙褐色に酸化被熱し、上部に炭化層が広がる。床面の被熱は強く、温度はかなり上昇していたものと想定される。

土器群は第一次埋没土直上から破片で多量に出土し、形状を復元できる個体が多い。また、土器群は住居址奥壁側から内部方向に廃棄された状況を呈し、出土レベルは、奥壁側が床面より高く、内部ほど床面に近い位置となる。壁側では土器が一次堆積のレンズ堆積に乗るため、壁に向かって出土レベルが高くなる傾向にある。床面直上の土器群P１～P12（図版166）を西群、床面よりやや浮く土器群P13～P15を東群とする。西群出土土器に963，965～966，968，973～975，977～981，983、東群出土土器に969～970，972，976がある。964，967，971，982，984～987は主に東群から出土し、西群エリアの破片と接合した。その接合関係から東群、西群出土土器は一括廃棄された可能性が高い。

本住居址出土遺物の多くは橙褐色に酸化被熱し、歪みをもつ個体がほとんどである。火が焚かれている開放状態の窪地に土器が廃棄されたものであろうか。あるいは土器焼きが行われたものであろうか。973，977は床面直上の焼土ブロック混土層中に完形の状態で出土したが、歪みが激しく接合できない部位も認められた。989は奥壁左側の主柱穴内より破片の状態で出土した。なお、土器型式的には963～989は良好な一括遺物としてとらえて良いものと思われる。

SB1131（第82図992：PL.107）

992は口縁部を欠く外は完存する壺で、胴下半部に焼成後穿孔が施される。

＜出土状況＞　壺992は床面直上に横位の状態で遺棄されていた。残存部が完形に復元されたが、口縁部破片は認められない。口縁部を打ち欠き、胴部に焼成後穿孔を施す。

SB1134（第82～84図993～1010：PL.26，27，105，107，115）

993，996が鉢、997が高杯あるいは鉢、994～995，998～1004が壷、1005～1010が甕である。

996，997は鉢、高杯の判別に躊躇する。997はその傾き、器壁の薄さから高杯となる可能性が大きい。鉢993は、外面のミガキが荒く、内面はハケ調整する。

壷は完形に復元できるものが数点あり、1003は欠損なく完存し、胴上半部に焼成後穿孔を行う。胴部調整は、精製ミガキを施すもの（998，1002，1003）とハケを残す荒いミガキを施すもの（1004）とがある。口縁部内外面の調整は、双方にミガキを施すもの（1000，1003）、内面のみにミガキを施すもの（998）、双方ともハケ・ナデ調整のもの（1002，1004）とがある。赤彩ミガキを施す壷1001は、強く被熱して部分的に灰白色化をなし、特に口縁部内面は灰白色化し発泡する。

甕1010は、胴最大径下半外面に煤が付着し、内面下位には焦げ痕が確認できる。

＜出土状況：図版167＞　本住居址の出土状況は、床面直上に完形土器が集中して遺棄される典型例である。壷998，1000，1002，1004、甕1005～1010が床面直上から出土した。壷998，1000は近接し、998は完形状態で横位に、1000は図示部分が破損状態で出土した。壷1002、甕1007は近接して完形個体が床面上に押し潰されていた。甕1006，1008，1009は壁直下床面上より出土した。1008，1009は完形状態で横転し、1006は図示部分完形で逆位に伏せられていた。1006は器台転用の可能性がある。甕1005は床面上に横転し押し潰されており、壷1004は胴部に隆帯をもつ壷で床面上に横位状態で、押し潰されることなく完存していた。大型甕1010は床面上に破砕された状態で出土した。床面上で故意に割られていることが理解できる。壷1003は主柱穴掘り方上層より完形で横位に出土した。胴上位の焼成後穿孔部を上位に向けて埋置しており、穿孔の意図が埋置方法に反映している。本住居址の土器群は遺棄方法を理解しようとする場合有効なデータとなった。

998～1010は一括資料として良好な資料である。

SB1135（第84～89図1011～1063：PL.27～31）

1011～1031は壷、1032が蓋、1033～1034，1036が鉢、1035が高杯、1038が有孔鉢、1037，1039～1063が甕である。甕の復元率がかなり良好で、甕の容量別組成を知る上で重要である。

壷は第Ⅱ文様帯のみを有するもの（1011～1016，1020，1022～1024）が主体となる。胴上半は精製ミガキを施すもの（1014，1024）と、ハケ調整あるいはハケを残すミガキを施すもの（1020，1022～1023）とがある。精製ミガキを施す1016と1018は外面全体に淡い赤彩を施す。装飾壷1027は第Ⅱ文様帯と第Ⅳ文様帯の間に文様空白部があると思われる。1028は頸部文様帯上位で段を有し、口縁部が大きく外反する。横走沈線間は上位が押し引き列点文、下位が刺突文となる。

甕の復元率は高く、容量的にも小型のサイズから大型のサイズまでそろっている。組成の中に台付甕が認められないこと、波状文施文の甕が極めて少ないことが特徴となる。文様構成は縦羽状文施文の甕が主体であるが、上位から下位に向って文様を施文するＩＡＲ型（第８図）が半数以上となるのも特異である。大形のサイズでは稜のあまい受口状口縁甕がめだち、1062のように受口部がはっきりとしないものも認められる。

＜出土状況：図版167＞　本住居址は、壁直下の第一次埋没レンズ堆積土中に焼土粒を多量に含み、床面直上には炭化材が残る被熱した住居址である。住居廃絶時に火が焚かれていることが理解される。炭化材の上位には炭化粒を多量に含む層が堆積しており、土器群は床面よりやや浮いた同層中から多量に出土した。

土器群は破片の状態で住居址内一面に散在し、レベル的には床面よりやや浮いて水平堆積をなしていた。いずれも炭化材よりは上位に位置している。接合関係図を作成すると、接合関係に一定の法則はなく、遠

くに位置するものも接合関係にある。よって本住居出土土器群の出土状況は、火が焚かれた後、破砕状況で多量の土器を廃棄した結果であると考えたい。しかしながら、本土器群は完形個体に復元できるものが多量に存在することから廃棄直前に完形個体を破砕している可能性がある。廃棄パターンの一類型として提示することができる。本土器群は型式的にも良好な一括資料として位置づけることができ重要な一群である。

SB1136（第89～91図1064～1087，補遺図版250，2927～2928：PL.31，32，105）

1064～1075が壺、1076，1081～1087が甕、1077～1078が鉢、1079が蓋、1080が高杯である。

実測図壺1064には、淡い赤彩のスクリーントーン表示があるが、実際には赤彩されておらず、表示のミスである。頸部文様帯に2本組みの沈線文が認められる。上部は簾状文風、下部は直線文である。1066のII文様帯は2本沈線で文様帯を区画し、その中央に1本の沈線を引き、直交する形で刺突文を施す。

壺は文様で飾るものと飾らないものとがあり、頸部のみに文様施文する個体は胴部にハケを残すミガキを施す傾向にある。1068はハケを残すミガキ手法をとる。1070の胴下半部は、軽いヨコケズリを施した後、タテミガキでケズリを隠している。口縁部の形態は横に大きく広がり、端部が外反ぎみに反りかえるもの（1070～1073）、口縁端部が反りかえるもの（1070，1072）とがある。頸部文様帯は1072，1073が押し出し凸帯となり、中央の沈線はユビナデが施され、凸帯を盛り上がらせる効果を出す。1075は多段横帯文をもつ細頸壺である。口縁部内外面は精製ミガキが施される。

甕は受口状口縁甕が一定量を占める（1083，1085～1087）。受口部外面は立ち上がりの稜が明瞭なもの（1083，1085，1086）と、不明瞭なもの（1087）とがある。内面の調整は、精製ミガキを施すもの（1087）。上半部はミガキが弱くハケを残し、胴下半部を特にミガキ込むもの（1082，1084）。ハケ調整をそのまま残すものなどがある。1081のコの字重ね文は「司」状で、文様を左回りに施文する。

＜出土状況：図版169＞　多量の土器は、SB1135と同様に床面よりやや浮いて破損状態で出土した。出土層位は埋土下層の3～4層中であるが、同層は炭化層ではない。

多くの土器がまとまって出土し、遠く離れた地点の破片が接合する現象はSB1135と同様である。その廃棄方法は同一であると言って良い。廃棄のあり方をつかめる良好な出土状況である。壺1068，1070，1071，1075はまとまった地点の同一層で出土した。1068，1070，1071は完形に近く復元され、1075は破片資料である。1068，1070，1071の一括性は保障されよう。

SB1137（第92図1088～1097：PL.108）

1088～1090が壺、1091～1097が甕である。壺1090の底部には1箇所穿孔が認められる。磨滅が激しく、焼成前穿孔か焼成後穿孔か判別がつきかねるが焼成後穿孔と考えたい。甕1094は、図示部分が完存し、胴下位の欠損部分は水平に打ち欠きされている。何らかの用途で転用されたものと思われる。

＜出土状況：図版170＞　本住居址は、一次埋没後に窪地で火が焚かれ、第4層の炭化層がレンズ状堆積し、床面中央部では直上にまで及ぶ。1088～1097はこの炭化層より出土した。床面上に遺棄された個体はなく、4層中に廃棄された土器である。甕1094は図示した部分が完存し、逆位に埋置されていた。1095は横位に押し潰された状態で出土したが、1094，1095はいずれも第4層直上に位置する。1088～1097は一括性の高い土器群である。

SB1142（第93～95図1098～1131：PL.32～34）

1098～1109が壺、1110～1112が高杯、1113～1114が鉢、1115～1131が甕である。

壺は、口縁が大きく開くもの（1098，1103，1105）がめだち、1103，1105については口縁端部が外反ぎみに反りかえる。大きく開く口縁に対して、1099，1102のように、短く外反するもの、口縁が直立するもの（1104）も共伴する。

甕1124の胴下半部外面は、軽いヨコケズリを施した後、ミガキが施される。甕のケズリは類例が多くはないが、古相の甕に同手法は認めることができない。1125，1129は斜線文・横羽状文等の文様構成が乱れている。1126の胴外面には煤が付着し、下位は被熱する。内面は、外面の被熱部分対応部分に焦げが付着し、使用状況が窺える。1127の底部形態は類例が少ない。大型甕1129の内外面は精製ミガキされる。

<出土状況：図版173>　本住居址は埋土中層に炭化粒を含む2～3層がレンズ堆積をし、1～3層より多量の土器が破損状態で出土している。土器の出土量が最も多いのは2層である。1～3層出土と記録された土器群は以下の通りである（1099～1100，1102，1104～1109，1111，1113～1114，1116～1119，1121～1129，1131）。床面直上には若干の土器が認められた。壺1099はその主体が床面直上におし潰されていたが、2層出土土器片と接合した。高杯1110も床面直上出土と2層出土の土器片が接合した。

土器群は住居址中央部に列状にまとまって検出され、甕を中心に個体に復元されるものが多く認められた。その出土状況からも一括性の高いものと考えることができる。

SB1143（第96，97図1134～1157：PL.34，35）

1134～1144が壺、1145～1146が鉢、1147～1148が高杯、1149が小型土器、1150～1157が甕である。

壺1137は、多段横帯文をII～IV文様帯に充塡する。形状は頸部で屈折し、口縁部が大きく広がる。調整は内外面にミガキを施す。1135は器面が荒れ調整が不明瞭である。IV文様帯の並行沈線文のうち一箇所のみが弧状を示す。1138でも胴の1部だけに刺突文が、1139では波状沈線文が施文されるのは全体の3／4で、1／4の部分には2本の並行沈線文が充塡される。1140の櫛描文施文手法は畿内型である。1141については、口縁内面も淡い赤彩が施されるが図では赤彩表示が欠落している。

台付甕1151の羽状文施文方法は他と異なり、1条あたりの施文は常に左から右方向に行う。1152はササラ状の原体で斜線文を施文し、頸部にＬＲ縄文を帯状にころがして頸部文様帯としている。

<出土状況：図版174，175>　遺物は、床面直上に遺棄されたものはなく、埋土下層3～5層から破損状態で出土した。同層は一次埋没後に堆積した層で、炭化粒・焼土粒を含む。

赤彩鉢1146は棟持柱の掘り方内より出土した。鉢は完存し、最下部に逆位で埋置されていた。

SB1145（第97，98図1158～1162）

1158，1160～1161が甕、1159が壺、1162が蓋である。1158の口縁端部はハケ原体で刺突し、左側に寄せている。

<出土状況：図版177>　甕1161は主柱穴内より、他は主柱穴付近の床面直上より出土した。

SB1144（第98～100図1163～1187B，補遺図版253，2961：PL.35）

1163～1177が壺、1178が高杯、1179～1187Bが甕である。

1168は細頸系の壺で、口縁部が大きく外反する。口縁および胴部にミガキを施し、IV～V文様帯に淡い赤彩を施す。1163は頸部が筒状にのび、口縁部が屈折して短く外反する。器面が荒れて調整が不明瞭である。壺の破片は、頸部から口縁部がめだち、その多くが被熱する（1166，1170～1174）。1172は特に強く被熱し、灰色～赤茶褐色に変化する。壺の口縁部が何らかの用途で転用されていたのではないかと推測される。完形の状態で出土した小型壺（1167，1175，1177，1177）等は被熱していない。

＜出土状況：図版176＞　本住居址は床面が被熱する住居で、埋土内で火焚き行為を行う例とは異なる。床面および壁面が強く被熱して橙褐色に酸化する。埋土内での火焚き行為の場合、壁面が被熱酸化することはない。埋土最下層の4～5層は炭化材および、炭化粒、焼土粒を多量に含み、同層より多量の土器片が出土した。復元できるのは小型品のみで、破損状態で出土して個体に復元できないものが多い。

壷1177は壁直下の方形ピット内から出土した。完形壷1177を正位の状態で据え置き、甕胴下半部の1187Bを蓋にしていた。蓋の最上部は床面に若干頗を出していたものと思われる。埋置土器の上部には炭化材が残っていることから、同住居に火がかけられる前から埋置されていたことは明らかである。

SB1146（第100～102図1188～1200：PL.35～37，106）

1188～1200は全て壷である。

本住居址出土遺物の主体は壺で構成され、廃棄の特殊例として指摘することができる。完存あるいは完形に復元できる個体が多い。色調は黄白色ないしは黄橙色，橙色をなす。ほとんどが2次的な被熱や器面の剝離があり、調整が観察しずらいものが多い。

形状は、胴最大径部分がソロバン玉状を呈し、最大径が下位に位置して下膨れ状となる。口縁部はアサガオの花状に大きく外反する。文様構成は、第Ⅱ文様帯のみを施文するもの（1188～1190）、第Ⅱと第Ⅳ・Ⅴ文様帯に施文し、Ⅲ文様帯が空白となるもの（1191～1194）、第Ⅱ～第Ⅴ文様帯すべてを充塡するもの（1195～1200）とがある。文様帯以外のミガキは、器面の残りの良い1194で観察すると、口縁部内外面、胴部上半および下半のいずれも精製ミガキが施されている。多くの個体が精製ミガキを施していたものと思われるが、口縁部内外面のミガキがめだつように思われる。

1199の実測図では、胴上半部に焼成後穿孔があるように図示したが、同部は剝離痕跡で穿孔はしていない。1195は胴中位で打ち欠きを行い、打ち欠き面を調整することで無頸壷として転用する。

＜出土状況：図版177＞　埋土中から出土した1188～1200の13個体はすべて壷であり、他の器種はない。完存および完形に復元される個体が多い。土器群は床面直上に堆積する2～3層の焼土、炭化層より出土した。1190，1192，1198は完存し、横転した状態で出土した。他は破損状態で出土したが、1188，1189，1193，1194，1196，1199，1200は完形近く復元された。1193，1194，1200についてはいくつかのブロックに散在したものが接合し、他はまとまっていた。

本同住居址はSB1144と同様に壁面まで酸化被熱する被熱住居である。出土した土器群は壷のみで構成され、火入れ行為を行った後、壷だけを完形あるいは意識的に打ち欠いて、竪穴内に廃棄したものと考えられる。壷の一群は、住居廃絶に伴う何らかの行為と密接に関連している。

SB1154（第102図1201～1204）

1201が壷、1202が高杯、1203～1204が甕である。

1202は高杯の杯部と考えて図示したが、観察の結果、大型高杯の脚部と判断した。よって天地が逆になっている。外面に淡い赤彩を施す。甕1203外面はヨコハケ調整後ナデが施され、ハケを残す。文様を施さない同タイプの甕はハケ調整後、ナデあるいはミガキが施されることが多い。

SB1155（第102～107図1205～1268：PL.37～39，102）

1205～1232，1236が壷、1233～1235，1237が高杯、1238が無頸壷、1239～1240が鉢、1241が有孔鉢、1242～1268が甕である。

1205～1216は壷の口縁部を図示した。口縁部が大きく外反するもの（1207，1209～1211）と、短く直立

的に立ち上がるもの（1213～1216）がある。1205～1206，1208は頸部文様帯を内側から押し出し、文様帯を凸帯風に仕上げるが、1205のように沈線をさらに指ナデし、縄文帯を凸帯状に押し出す例もある。1214は口縁部から頸部にかけて縄文をころがすが、口縁部全体に施文する例は非常に少ない。

1217～1223は、文様施文が認められない胴部を図示した。ミガキを施さないもの(1221)、ハケを残すミガキを施すもの（1217～1218)、精製のミガキによってハケを残さないもの（1220，1222～1223）とがある。ソロバン玉の形状に近く下膨れを呈する1221を除き、球胴志向がめだち、胴最大径もやや高いことが特徴となる。

1224～1232は、全体のプロポーションが理解できるもの、Ⅳ・Ⅴ文様帯部分のプロポーションが理解できるものを中心に提示した。1224は球胴志向系壺のプロポーションを予想させるものである。底部のみを欠損する。1227は精製の壺である。胴上半の第Ⅲ文様帯部分はハケ後、タテミガキを施し、１条だけ櫛描垂下文が認められる。第Ⅳ文様帯には縄文および沈線文、淡い赤彩が施される。胴下半部はヨコハケ→ヨコケズリ→ミガキとなる。1228は文様帯以外精製ミガキされ、胴最大径からやや上位に１箇所隆帯が認められる。高杯脚部1235の外面および杯部内面、広口壺1236の口縁部内面は赤彩ミガキで、実測図ではスクリーントーンが落ちている。

1242～1254は小型の甕を図示した。1242，1243，1247，1249は台付甕であろう。コの字重ね甕1248はそのプロポーションから平底となる可能性が大きい。1246は文様施文に特徴がある。胴部文様帯にＲＬ縄文を全体にころがした後、中部高地型の波状文を施文する。類例は少ない。1253のように口縁部に施文する例は例外的で、あるいは他系統として捉えられるかもしれない。1252の口縁部外面は輪積みの段を残し、内面も稜をもって外反する。

1255～1268はプロポーションが理解できる甕を中心に図示した。いずれも口径と胴最大径の差があまりなく、最大径がやや上位に位置するものが多い。1255の口縁部は横に強く張り出し特徴的である。1263～1268の波状文施文はすべて中部高地型である。1264の施文は１条あたり左から右へ向って施文するところから右上りとなっている。ブロックの切り合いから右回りに施文していることが理解できる。1263，1266，1267もブロックの切り合いは右回りである。1268は１条あたり右から左に向って施文し、ブロックの切り合いは左回りである。

＜出土状況：図版179＞　本住居址の埋土２～３層は炭化粒および焼土粒を多量に含んでいる。土器は２層を中心として多量に出土したが、完形に復元できる個体は少なく、破片状態で住居一面に散在していた。床面付近で出土した個体については出土ポイントを記録しているが、１～２層出土土器片との接合関係もあり、２～３層および床面直上の土器についても一括廃棄されている可能性が強い。

SB1156（第107～110図1269～1301，補遺図版253，2962：PL.40，119）

1269～1281，1287～1289が壷、1282～1283，1295が鉢、1284～1286が高杯、1290～1301が甕である。

頸部文様帯に文様を集中させる壺（1269～1271）は、胴最大径をやや上位にとって、球胴型を呈し、外面および口縁内外面にミガキを施している。Ⅳ文様帯をもつ1277は胴最大径を上位にとりソロバン玉状を呈する。懸垂文をもつ壺1278、多段横帯文系壺1281は胴最大径を下位にとり、下膨れ状を呈す。

甕1291は、受口状口縁外面に２本結束の棒状工具によって波状沈線を施文する。頸部に畿内型の波状文を上から下へ２段施文した後、横羽状文を充塡する。羽状文下段は下から上方向にはねあげる。大型甕1292は、焼成時の歪みが大きいため90度展開した図面も提示した。調整は内外面ハケ調整の後ミガキを施す。胴の対称面に黒班が認められる。使用痕跡については、破片の状態で二次的に被熱しているため観察しずらいが、胴下半部に帯状の煤付着帯が認められる。火にかけられたことは明らかであるが、内面に焦げ、

煤等の付着は確認できない。大型甕の焼成方法、使用方法を考える際良好な資料である。

コの字重ね甕1300の口縁部は、横に強く外反し、他の甕と異なる。1299の文様帯には古い要素と新しい要素が混在する。受口状口縁外面の２本結束の櫛による波状文は新しい要素、胴下半の刺突列点文は古い要素である。本住居址出土資料には横羽状文がめだつ。

<出土状況：図版180>　本住居址の埋土は６層に区分され、下層３～４層に多量の炭化粒、焼土粒が含まれる。第一次埋没後に竪穴内窪地で火が焚かれている。同層からは多量の土器片が破損状況で埋土一面に散在して出土した。

壺1269，1272，1277，1278、甕1292，1293の接合状況図を提示した。いずれの個体も完形あるいは完形に近い状態に復元されたが、２～４ヶ所に破片が散在する状況を呈し、遠く離れた位置のものが接合した例もある。復元できるものはむしろ例外的で、復元できないものが多い。土器群は破砕されて廃棄されたと考えられる。なお、１～４層内の上下間に接合関係がある。

SB1157（第110，111図1302～1317：PL.104）

1302が無頸壺、1303が鉢、1304が有孔鉢、1305が高杯、1306が蓋、1307～1314が壺、1315～1317が甕である。本住居址出土資料は、1311，1317を除いて強く被熱し、黄橙色から茶褐色に変色して剝離が著しい。よって、調整手法も不明瞭なものが多い。また、完形に復元できる資料もほとんどない。

1302は外面上位にミガキの痕跡があり、内面がハケ調整の無頸壺である。蓋1306はツマミがつく可能性が大きい。Ⅱ～Ⅳ文様帯を装飾する壺1312は、上位文様帯の地文にＲＬ縄文、下位文様帯にＬＲ縄文を施文する。文様帯部分には淡い赤彩の痕跡が認められる。

<出土状況：図版181>　本住居址の出土資料は、床面上に乗る２層より破片の状態で出土した。床面よりやや浮いた状況であるが、土器は２層内の一定レベルに堆積する。壺1307，1309は何ブロックかに散在したものが接合し、完形に近い状態に復元された。土器群は破片で廃棄されたものと思われるが、廃棄の一括性は高い。

SB1160（第112～114図1318～1337：PL.41）

1318～1326が壺、1327が鉢、1328が高杯、1329が蓋、1330～1337が甕である。

壺は胴最大径をやや上位にとり、球胴を呈するものが主体となる。被熱して器面が荒れているため、調整が不明瞭なものが多いが、精製にミガキを施すもの（1318）とハケを残す軽いミガキを施すもの（1319）の両者がある。

甕は横羽状文(1332～1335)がめだつ。1335の受口外面には２本櫛による山形文を施文する。大型甕1335は、図示部分はほぼ復元することができた。下から約５cmほどあがった内外面に、幅３～４cmほどの煤の帯が認められ、それより上位はやや煤け、下位には確認できない。完存の状態で火床に置かれた様子が窺える。一方、1330は強く被熱し黄橙色に変質しているが、散在して出土した。1336，1337は大型土器で、胴最大径が頸部，口縁部を凌ぎ球胴形を呈する。いずれも、煤、コゲ等は付着していないが、熱を受けとんでしまっている可能性もある。1336の文様構成は壺の構成であり、内面はハケ調整後ミガキを施す。1337の文様構成は甕の構成であり、内面はハケ調整を施す。1337は最大径以下を打ち欠き、床面直上に正位に埋置されていた。

<出土状況：図版182>　本住居址は壁際３，６層の１次埋没後、その窪地に炭化粒、焼土粒を含む２，４，５層がレンズ状に堆積して床面中央部にまで及んでいる。土器は４，５層中に破片の状態で含まれており、住居中央部では同層に沿って床面直上にまで及んでいる。土器は西側から廃棄された様子が窺える。

甕1330は破砕状態で3箇所に散在していたが完形に近い状態に復元された。散在していたレベルは、中央部では床面よりやや上位、壁周辺では床面よりかなり浮いていた。遠距離間で接合している土器には同様な傾向がある。甕1333，1335，1337は北壁側の壁直下にあたる床面直上に集中して埋置されていた。いずれも図示した部分は完形に復元されたが、1333は横転して破損状態で、1335，1337は完存状態で正位に据え置かれていた。甕の転用方法を物語るものであろうか。

SB1162（第114，115図1338～1353）

1338が壷で人面付土器、1338～1348が壷、1349～1353が甕である。破片資料が中心である。

人面付土器1338は、頭部左側面の破片である。SB1178－1410の人面付土器と形状は等しく、人面部が開口した形態となっている。SB1178例と比べてやや小ぶりで、文様構成も若干異なる。小型壷の口縁部が人面部になるものと思われるが、頸部以下の破片については、詳細な土器選別、接合を行ったが該当するものがなかった。人面付土器は、この破片のみが廃棄されたものと思われる。頭部外面は荒いミガキ、内面はナデが施される。頭部は並行沈線4本＋波状沈線1本＋並行沈線4本が櫛原体1本で1本づつ描かれ、地文に縄文等は施文しない。

壷1342，1345は押し出し凸帯をもち、頸部文様帯の沈線は太い。1342はII文様帯と口縁部の境界が段となる。1343の受口部外面は斜位沈線文で、上から下方向に描かれ、櫛と沈線の先後関係は櫛が先である。1344のIII文様帯は無文帯である。1348では図示した部分に5箇所隆帯が認められる。

＜出土状況：図版181＞　人面付土器1338は先行トレンチ内より出土した破片で、他の遺物との共伴関係は明らかでない。住居址床面からは壺1348が押し潰された状態で出土した。小型壷1340は住居中央部で床面よりやや浮いて完形で出土した。

壷1342，1345，1346，1347はいずれも図示部分が完存し、主柱穴掘り方内より出土した。1345は棟持柱内に横転し、1342は図示部分が正位の状態で出土した。

SB1163（第116図1358～1362：PL.103，108）

1358～1360が甕、1361が小型赤彩壷、1362が高杯である。1361は小型赤彩壷としては口縁部が大きく立ち上がる。胴部に焼成後穿孔が施されている。高杯1362は大型の高杯で、栗林式では最も大型サイズに位置づき、類例は多くない。同資料ではベンガラ分析を実施した。

＜出土状況：図版183＞　甕1358，1359は壁面直下にあたる床面直上より出土した。小型赤彩壷1361は完形で1層から、1360は2層から、高杯136は床面よりやや浮いて出土した。

SB1174（第116～118図1363～1379，補遺図版254，2978：PL.41，42）

1363～1369が壷、1370が鉢、1371，1375が台付甕、1372～1374，1376～1379が甕である。

壷は胴最大径部をやや下位にとり、横広がりとなるもの（1363，1365，1369）と、胴最大径部をやや上位にとり縦長になるもの（1364，1368）とがある。1368は重い壷である。

甕1371～1372は外面をミガキ調整する甕で、1371のようなミガキ調整の台付甕は類例が多くない。

＜出土状況：図版185＞　本住居址床面からは、多量の土器が出土している。壷1367，1369、甕1371，1372，1379は床面直上に遺棄され、押し潰されていた。壷1368，1365は床面直上に散乱し、図示部分が完形に復元された。甕1373，1374は床面直上に1／2個体以上が破損状態で残存した。なお、床面直上には鹿の角（図版185－④）が遺棄されており、床面直上に遺棄された土器の性格を物語っているとも言えよう。壷1364は東壁直下のピット内より破損状態で出土し、炉内出土土器片と接合した。壺1363、甕1378は床面

よりやや浮いた状態で出土した。なお、主柱穴掘り方内より完形の壷が出土した。

SB1172（第118図1380～1383：PL.42，43）

1380～1383は甕である。

1380の垂下文は、波状文と簾状文で構成される。波状文が3箇所、簾状文が1箇所施文され、文様帯を4ブロックに分割する。波状垂下文の類例は多くない。胴部文様の描き方は、波状垂下文3条を右から左へ施文し、次に左横のブロックを波状文帯で充填し、さらにその左に波状垂下文を描くというように右回り施文をする。

1382，1383は大型甕である。1383の胴最大径付近には煤が付着し、火に架けられた痕跡が認められるが、内面に焦げは確認できない。1383は内外面、火に架けられた痕跡はない。

1382の胴外面はハケ調整後、ナデを施し、胴最大径以下は荒いタテミガキを施す。内面もハケ後全体に荒いミガキを施している。1383の胴外面下半および内面はハケ後ナデを施し、ミガキはかけない。

＜出土状況：図版184＞　遺物は炉を中心とした床面直上に、4個体の甕が遺棄あるいは廃棄されていた。大型甕1383は、炉の上位に覆いかぶせるように横位に遺棄したらしく、完形個体が潰れていた。甕180～182はその周囲に破損状態で散在していた。大型甕の性格を考える際、重要な出土状況であろう。

SB1175（第119図1384～1394：PL.112，115）

1384～1386が壷、1387が鉢、1388が蓋、1389～1394が甕である。

壷1385は大型壷で、口縁の内外面に精製ミガキを施す。甕1394はナデ調整甕である。

＜出土状況：図版186＞　本住居址の床面直上からは半完形の土器がいくつか遺棄された状態で出土した。1384～1385，1390～1394は床面直上より出土したが、他の遺物に関しても型式的に共伴した可能性が強い。甕1390～1392は近接して出土し、1391は破片で、1392は完存、1390は台部分のみ欠損し逆位の状態で出土した。台は離れた壁面直下に位置していた。甕1393は横位状態で遺棄され、押し潰されていた。

入口左側主柱穴内には壷1385が埋置されていた。図示部分が完形で、正位の状態で掘り方最上層に据え置かれていた。口縁部分は床面のレベルとほぼ水平である。さらに、口縁部上には甕1394の大破片が覆いかぶせてあった。柱を抜き取った後埋置したものと思われる。

SB1176（第120図1395～1401：PL.112）

1395～1397が壷、1398～1399が蓋、1400～1401が甕である。

1400は甕の口縁部細片である。口縁内面には、ハケ原体の刺突による羽状刺突文が施文される。羽状刺突文はきめ細かな刺突で、栗林系の太い刺突とは施文部位も異なる。文様構成・施文位置から、日本海系の小松式系土器の要素を抽出できる。口唇端部は外側に面取りしており、端部外面に下位から刺突列点文を施す。この刺突の角度も栗林式とは異なる。器面が荒れており、詳細な観察はできないが、外面には左上がりの細かなハケが残り、ヨコナデの痕跡が確認できない。胎土は肉眼観察では他の土器群と変りなく、焼成は他の土器と比べると白っぽく焼き上がっている。搬入品とは考えていない。

＜出土状況＞　遺物は、埋土中から破片が少量出土している。床面直上から出土したのは甕1401のみで1／2残存した。1395～1401は一括資料とは言い難い。

SB1177（第120図1402～1409：PL.105，110）

1402が鉢、1403が高杯の可能性有り、1404が高杯、1405が壷、1406～1409が甕である。

鍔状口縁高杯（1403～1404）の鍔部分は、内面の屈折部が不明瞭なもの（1403）と明瞭な稜を有するもの（1404）とがある。1404は大型高杯で、脚部は大きく横に広がる。杯底部は焼成後穿孔される。

壷1405は4単位の懸垂文があり、3本櫛の垂下文を3～4条垂下させ、沈線文で括っている。懸垂文間には1条の波状沈線を垂下させているが、同部はハケ調整後、ミガキを施すことはない。V文様帯の連弧文は10単位で、胴最大径よりやや上位に施文される。同部分に円形浮文が2ヶ所のみ認められる。頸部文様帯は押し出し凸帯となり、横走沈線は強くヨコナデされ、凸帯の縄文帯が浮き出ている。口縁部内外面および胴下半部は精製ミガキが施される。胴下半に1箇所隆帯が認められる。甕1408の胴下半部にも1箇所隆帯が認められる。

<出土状況：図版186>　壷1405は奥壁主柱穴内より、高杯1404は床面直上より、甕1407，1408は入口部ピット内より出土した。

壷1405は、主柱穴掘り方内上層に完形で埋置されていた。正位の状態で埋められ、その口縁部は床面より飛び出していたらしく、土圧で口縁部が床面上にずれていた。高杯1404は図示部の1／2の破片で、正位状態で出土した。甕1407，1408はいずれも完形状態でピット内に埋置されており、1407は正位の状態、1408は壁側に口縁部をむけ横位の状態であった。いずれもその上位は床面とレベルが一致し水平であり、1407の横には礫が埋め込まれていた。同ピットの埋土は床面と明確に区別できたが、2つの甕の埋置が、住居の使用時か、廃絶時かが問題となる。

SB1178（第121，122図1410～1427　第161図1864B：PL.43，44）

1410が人面付土器、1411～1414，1864Bが壷、1415～1417が鉢、1418が高杯、1419～1427が甕である。

人面付土器（小型壷1410）は左耳部分が欠損する外は完存する。栗林式土器の一型式をなす小形壷の口縁部分に頭部を装着したもので、人面部は開口して顔面表現はない。

文様は、縄文および沈線文で構成され、頭部、II文様帯、III文様帯の一部、IV文様帯に施文される。頭部は、頭頂に5条の連弧文を施し、その間を押し引き列点文で充塡する。背面にはLR縄文施文後、沈線を施文する。IIおよびIV文様帯は並行沈線で区画後、1～2条の並行沈線で充塡するが、IV文様帯では、下段平行沈線区画を描いた後に上段平行沈線区画を設定している。下段区画の2条の並行沈線文は、結束された棒状工具で描かれているものと思われる。III文様帯の人面部前面には連弧文がRL縄文施文後右から左に向って描かれている。III文様帯施文後、IV文様帯上段区画が設定されたものであろう。

調整は細かいハケ原体で緻密に施し、最下部では縦にはねあげ、他の上部ではやや左上がりにはねあげて右回り方向に調整する。胴最大径以下はハケを残し、胴上半のIII文様帯では連弧文の一部と文様帯以外は精製ミガキが施されてハケの痕跡は若干残る程度である。ミガキの幅は3㎜程で、ミガキ痕跡は明瞭に現れず、全体的に光沢をもつ。沈線文施文後にミガキを施している。頭部は丁寧なナデを施した後沈線文施文を行う。開口部の端部は上面を除きミガキされ、下段端部内面もミガキが施される。口縁部の端部下段は上部に比べ前面に飛び出しており、内面もミガキを有する。その形状、ミガキから同部分が片口状機能を有していたとも理解できる。頭部内面も丁寧にナデ調整されていることからも、この人面土器の機能を液体容器と考えておきたい。

壷1411は全体に淡い赤彩が施される。V文様帯の連弧文は左から右に向って描き、左回りに施文する。1412の横走沈線はかなり乱れている。1413の口縁部は意識的に打ち欠きされているものと考える。

<出土状況：第1分冊遺構本文編第37図>　本住居址の埋土は、住居址廃絶後レンズ堆積をなしており、上層の窪地では火が焚かれている。人面土器1410および甕1419，1426、壷1422は床面よりやや浮き、レンズ堆積土中の炭化粒、焼土互層より下位から出土した。住居廃絶後の窪地に埋置あるいは廃棄されたこと

が窺える。人面付土器は完形状態で、耳の部分以外は欠損もない。横位状態で遺棄されており、その脇に敲打具と思われる扁平の河原石とミニチュア土器があり、単なる廃棄ではないものと思われる。さらにその脇からは甕1422が破損状態で出土した。甕1426は図示部分が横位の状態で押し潰されていた。床面直上からは壷1412、甕1424が出土した。なお、他の遺物については出土層位が明らかでないが図示部分が完存するものが多い。一括性に疑問があり、人面付土器の年代を決定するデータが提示できない。

SB1181（第123図1428～1431：PL.102）

1428～1430が壷、1431が高杯である。

＜出土状況：図版187＞　同住居址は壁直下まで床面全体に炭化層が分布し、住居廃絶直後に火が焚かれたことが理解される。土器は破片状態でレンズ状に出土しており、1428～1430は床面より浮いて出土した。高杯1431はほぼ完存し、床面より出土した。

SB1184（第９，123，124図96，1433～1439：PL.102，111，114）

96，1433～1435が壷、1436が鉢、1437が高杯、1438～1439が甕である。

1436は直立する杯部に扁平な脚がつく。壷1435は図示部分が完存する太頸壷である。口縁部および胴下半部に意識的な打ち欠き行為を行っている。

甕1438の口縁部は強く屈折し、直線的に外反する。1439は大型の甕で、調整は外面にヨコハケを施し、下半にタテミガキを、内面にヨコハケ後精製ミガキを施す。外面には胴最大径を中心に、その上下に煤が付着するもの、内面に焦げ、煤が確認できない。大型甕の一般的傾向を示している。

＜出土状況：図版188＞　図示した1434～1439は床面直上および主柱穴内より出土し、一括性の高い資料である。壷1433，1434は壁面直下より集中して破損状態で出土し、いずれも完存しない。大型甕1439は主柱穴間の床面直上に破損状態で散乱していたが埋置されたものが押し潰された状況ではない。1436は図示部分が完在し床面直上に横転していた。

壷96（第９図）は、主柱穴掘り方内に完形状態で埋置されていた。口縁部を下位に向けた斜位の状態であった。壷1435、鉢1437、甕1438は、壷36が出土した反対側の主柱穴内より出土した。いずれも破損状態であった。

SB1186（第124，125図1440～1449：PL.106，111）

1440が鉢、1441～1445が壷、1446～1449が甕である。

1440は頸部をもつ鉢である。口縁部と底部が欠損する外は完存する。口縁部は短く外反するか、受口状を呈するものと思われるが、頸部までヨコナデが及んでいる。Ⅳ文様帯は櫛歯による押し引き列点文で構成する。櫛は４本で右回りに押し引く。鋸歯文は４単位で、斜線はすべて同一方向である。

壷は、口縁部が発達し長く外反する例（1442～1445）がめだち、胴部最大径が下位に下がり下膨れ状を呈するものが主体となる。1441は頸部文様帯に竹管による刺突を行う。竹管の径は４㎜である。実測図1445では胴部に淡い赤彩の表示があるが、赤彩はない。

＜出土状況：図版189＞　本住居址の床面直上からは1443，1440，1445，1449が出土した。壷1443は入口左側の壁直下から完存状態で出土し、横転していた。広口壷1440は奥壁側主柱穴間より図示部分完形で出土した。床直に正位の状態に埋置されていた。甕1449は入口ピット脇に逆位に置かれていた。

なお、他の遺物については１～２層出土のものが多い。壷1442は２層出土であるが、床直出土の1443と型式的に同一であった。２層には多量の炭化物、土器片を含んでいる

SB1189（第125～128図1450～1474：PL.44～46，110，112）

1450～1458が壷、1459～1460が高杯、1461～1474が甕である。

壺1452は頸部文様帯に連弧文をもつ壺である。単位は7単位。1単位あたりは右から左側に描き、逆時計回りに連弧文を重ねている。1454は口縁部内面に段をもち、外縁部に縄文および山形沈線文による文様帯をもつ。紐孔と突起が4箇所認められる。

1461は平底の可能性が高いコの字甕である。胴最大径に有段部をもち、同部に刺突を施す点は古相を示すが、破片資料であり共伴関係は明らかでない。甕は、胴最大径を中位にもち、口径に対して胴最大径がややはり出すもの（1465～1467，1470，1472）がめだつ。文様は縦羽状文が主体構成となる。1470は大型傾向の甕であるが、胴最大径付近に煤が付着し、内面下部には焦げが認められる。1475～1476は、SB1189とSB1190の破片資料が接合したものである。

＜出土状況：図版191＞　図示した1450～1474は、住居跡中央部に破砕された状態で集中していた。レベル的には床面よりやや浮いた埋土3層中に位置し、壁近くに位置する土器のレベルが中央部に比べてやや高くなっているところから、住居廃絶後、一次堆積をした窪地に多量の土器が廃棄されたものと思われる。完存していた土器は小型赤彩壺1458のみで、他は破片が飛び散った状況を示し、破損状態で廃棄された様子が窺える。壺1453，1454は別の主柱穴内より出土した。1453は図示部分がほぼ完形でピット上層部に横位に、1454は頸部で打ち欠き、口縁部はピット最上層に正位状態で、肩部は床面に埋置されていた。1457，1462は上層土器と炉内出土の破片が接合した。以上のことから、一括性の高い資料として位置づけることができる。

SB1190（第128図1477～1483：PL.108）

1477が甕、1478が鉢、1479～1483が壺である。

＜出土状況：図版189＞　1475～1477，1479，1481～1483は床面より浮いて破片の状態で出土した。1475～1476は切り合関係にあるSB1189埋土中出土破片と接合した。SB1190が古くSB1189が新しい。

鉢1478、小型壺1480は隣接して壁面直下の床面直上から出土した。いずれもほぼ完存し、鉢は伏せて壺は横転状況で検出された。住居廃絶儀礼と密接に結びつくものであろう。

SB1257（第129図1489～1492：PL.112，115）

1489が壺、1490～1492が甕である。　＜出土状況：図版194＞　1489～1492は住居址入口部分の床面直上から破砕された状態で出土した。一括性の高い資料である。

SB1248（第130図1493～1502：PL.105）

1493～1500が壺、1501～1502が甕である。ほとんどの土器が被熱しており、調整が確認しづらい。

1500は太頸で、多段横帯文を有する壺である。横走沈線で区画された横帯部は、縄文地文の山形文充塡帯と、ミガキによる文様空白部が交互に配置される。沈線内は赤彩を行う。壺はⅡ文様帯のみ装飾するもの（1493）、Ⅱ，Ⅴ文様帯のみ装飾するもの（1494）、Ⅱ～Ⅴを装飾するもの（1500）が共存する。

＜出土状況＞　本住居址は床面直上に炭化材、焼土が広がる床面が被熱した住居である。1493～1502はすべて床面直上から出土し、壺1493、甕1502は完形個体が横転、押し潰されており、他は破損状態で出土した。一括性の高い資料である。

SB1258（第131図1503～1511　第161図1864E：PL.46）

1503～1505，1864Eが壷、1506～1511が甕である。

懸垂文をもつ壷1503は、Ⅳ文様帯に横走沈線3条、Ⅴ文様帯に連弧文5条をＬＲ縄文を地文として施文する。Ⅳ文様帯とⅤ文様帯の境界部には連弧文2連につき1箇所、円形浮文を添付する。ミガキは口縁部の内外面、懸垂文間、胴下半部に施される。口唇部には縄文と2対1組の突起が認められる。小型壷1505は、頸部で水平に打ち欠かれる外は完存し、底部は裏側から打ち欠き、穿孔する。胴上半に図示した2つの窪みは、発掘時の傷で、図示しないことが正しい。図版161，壷1864Eは大型太頸壷である。

小型台付甕1510は、緻密な波状文が施文される。原体を1周器面から離さずに施文する畿内型として判断したが、静止面に見える部分もあり決め難い。小型甕の施文には中部高地型と畿内型の判断に迷うものがある。

<出土状況：図版194>　1503～1511はすべて床面直上から出土した。壷1503，1505、甕1506は単体で遺棄され、1503，1506は床面直上に押し潰されていた。一括性の高い資料である。

SB1260（第132図1519～1524：図版195）

1519～1522が壷、1523～1524が甕である。1529～1521，1523～1524は床面直上より出土した。

SB1261（第132，133図1525～1537，補遺図版254，2985）

1525～1533が壷、1534～1537が甕である。

本住居址のほとんどの遺物は、二次的に被熱して器面が荒れており調整等の観察がしにくい。色調は黄橙色～橙色に変化している。

1533は太頸壷である。大型壷で器形全体を復元できたものは少ない。口縁部の内外面は精製ヨコミガキを、胴上位はタテ、下位はヨコの精製ミガキを施す。

<出土状況：図版196>　1525～1537はすべて床面直上から出土し、炉上を中心として破砕状態で散在していた。壷大型壷1533はその破片が炉上から壁直下まで散在しているが、壁直下では床面よりやや浮いている。住居廃絶後あまり時間が経たないところで一括廃棄されたものであろう。

SB1262（第133，134図1538～1549：PL.107，108，109）

1538～1544が壷、1545が高杯である。1546，1548～1549が甕、1547が有孔鉢である。

壷は胴部が球胴型に張り出すもの（1538～1540，1542）がある。1542は大型壷で、復元できた例は多くない。甕は倒鐘型のもの（1548）と、頸部の括れが強く胴部が球状に張り出すもの（1549）がある。

<出土状況：図版196>　1538～1549は、すべて床面直上あるいはピット内からの出土である。土器は住居址全体に破片状態で散在し、遠く離れたところとの接合関係が多い。破砕状態で廃棄された様子が窺える。壁付近の遺物も床面より浮いていないことから、住居廃絶直後廃棄されたものと思われる。

壷1538は主柱穴掘り方上層から出土した。完存し、口縁部をやや上位に向けて横位状態で埋置されていた。

SB1263（第135，136図1550～1569：PL.47，101）

1550～1552，1567が壷、1553が無頸壷、1554～1555が小型土器、1556～1557が高杯、1558～1560が鉢、1561～1566，1568～1569が甕である。

無頸壷1553は、口唇部が著しく扁平に内傾するもので、開口部が狭くなるタイプである。小破片であるが、体部全体を装飾するものと想定され、横走沈線内は2列の押し引き列点文で充塡される。破片資料な

がら古相を示す。小型土器1555の胴上半は、擬似縄文が施文される。懸垂文壺1567のⅣ文様帯上段には３条の横走沈線があり、上段は刺突文で、下段は押し引き列点文で充塡する。Ⅳ文様帯とⅤ文様帯連弧文との境界には刺突文が施される。

＜出土状況：図版197＞　本住居址は、レンズ堆積後の窪地中央部に床面まで円形の穴を掘り込み、そこで火を焚いていると思われる。住居址中央部の床面直上から上層にかけて、土器が破損状態で一定量出土した。土器は離れた位置と接合関係にあり、破砕状態で穴の中に廃棄されたものと思われ、廃棄時の一括性を指摘できる。

SB1264（第136図1571～1578：PL.115，116）

1571は壺、1572，1577は小型土器、1573～1574は鉢、1575～1576，1578は甕である。

コの字重ね甕1578は、胴外面下半をヨコケズリ後、タテミガキを、胴内面は精製のヨコミガキを施す。1577は台付甕を範型とする小型土器で、台付甕の機能を理解する上で重要である。

＜出土状況：図版197＞　鉢1574、甕1575～1577は、壁直下の床面直上に遺棄されていた。

SB1276（第137図1579～1586，補遺図版254～255，2986～2988：PL.48）

1579～1580が壺、1581～1583が鉢、1584～1586が甕である。

1579と1580は細頸系壺と太頸壺である。1580は多段横帯系の文様構成をとる。Ⅱ～Ⅳ文様帯は上段から横走沈線２条＋２本対連弧文（結束原体で施文10単位）＋沈線で区画された櫛描直線文＋山形文・押し引き列点文＋沈線で区画された櫛描直線文＋櫛描波状文＋沈線＋押し引き列点文となる。

甕1585は、中部高地型櫛描文施文手法をとるが、１条あたりの施文幅が長い。破片資料だと畿内型と判断されかねない。

＜出土状況：図版198＞　1579～1580，1582～1586はすべて床面直上から出土した。壺1579，1580は同一地点に破片の状態でまとまって出土し、他は散乱していた。鉢1581は主柱穴掘り方より出土した。完存し、正位の状態で柱痕を覆っていた。同資料は一括性が高い。

SB1277（第137図1587～1593：PL.102，116）

1587～1588が鉢、1589が小型土器、1590～1591が高杯、1592が有孔鉢、1593が台付甕である。

鉢1588の文様帯は、径４㎜の竹管で、沈線、刺突、押し引きを行う。実測図1590は、口縁屈曲部の内外に稜線が入っているが、内外ともに稜はなく、緩やかに外反する。台付甕1593は畿内型の波状文を施すが、１条と３条の波状文上に２対の浮文が貼付され、６単位に縦区画する。図示した部分の１ヵ所のみ、区画内中央の２条めに浮文が認められる。

＜出土状況：図版198＞　1589，1593は完存し、床面直上より出土した。台付甕1593は壁直下の周溝上に位置し、横位状態で遺棄されていた。

SB1280（第138図1600～1601：PL.113）

1600～1601は甕である。1600の頸部波状文は４段で、上から下方向に重ねる。同文様帯は通常１段で、４段という例はきわめて少なく、後期に近い様相である。頸部文様帯は通常畿内型施文を行うが、同文様帯は中部高地型施文で、６ブロックに分れている。

＜出土状況：図版199＞　甕1600は棟持柱脇の床面直上に潰れた状態で、甕1601は入口部ピット内より出土した。

SB1281（第138図1602～1605：図版200）

1602～1605は壷である。1604と1605は同一個体で、1604がII～III文様帯、1605がIV文様帯である。懸垂文は櫛描波状文で、押し引き列点文によって囲まれる。II文様帯に簾状文、IV文様帯に沈線で囲まれた櫛描直線文が施される。壷1602は、壁直下の床面直上に遺棄されていた。

SB1282（第139～142図1606～1652：PL.48～50）

1606～1627が壷、1628～1629，1631～1632が鉢，1630が有孔鉢、1633～1634が高杯、1635～1652が甕である。

壷の調整は、ミガキが荒くハケを残すもの（1606）が主体となる。文様は、II文様帯に集中するもの（1608～1608）、IIとIV文様帯に施すもの（1611，1615，1620）II～V文様帯に多段横帯文構成をとるもの（1623～1624）等がある。IV～V文様帯は、ミガキを施さないもの（1616～1617，1620～1621）が多く、文様も粗雑化傾向となる。1611は実測図最下端部の文様帯に横走沈線が施文されているが実測図では欠落している。1616の連弧文は、右から左に描き右回転で施文されている。

小型壷1627の胴部には記号文が5ヶ所描かれている。鉢1631は、ハケ調整後に文様を施文し、内外面にミガキを施すことはない。高杯1633は杯部に比べて脚部が大きく開くもので、粟林式の高杯としては脚部が発達する。杯と脚部の接合には、大きな円版を充填する。

甕1642は口縁部外面にLR縄文を施文する。1644は乱れぎみの斜線文を左回りに施文し、頸部の一部に波状文、胴部の一部に羽状文（図示部分）を施文する。1652は外面に精製ミガキ、内面にヨコハケを施す。2次的な被熱があり不明な点も多いが、煮沸具として使用していないように観察される。

<出土状況：図版201，202>　本住居址の埋土はレンズ堆積をなし、埋土全体の各層に炭化粒、焼土粒を含む層が認められる。1606～1652のほとんどは炭化粒・焼土粒を含む層を中心に出土しており、土器もレンズ状に堆積している（図版201）。床面直上に遺棄されている土器はほとんどない。

土器は、破損状態で住居址中央部から出土した。完形に復元できる個体は少ない。散在した破片は、遠く離れた位置の個体とも接合する。これは、破砕状態であった土器を窪地に廃棄したことを物語っている。接合関係は、層位を越えて接合しており、型式的に差が認められる土器であっても、土器の新旧と層位の上下関係が逆転する場合もある。

SB1283（第142図1653～1654：図版202）

1653が甕、1654が有孔鉢である。有孔鉢1654は完存し、床面直上から正位状態で出土した。甕1653は埋土中位より破片で出土した。

SB1284（第143図1658～1662：PL.103，124）

1658～1659が小型赤彩壷、1660，1662が壷、1661が蓋である。

小型赤彩壷は、1658が口縁部の一部を、1659が口縁部を欠く外は完存する。1659は内部にベンガラが入っていた。1658の口縁部には紐縛り孔が5単位確認される。口縁部に突起があり、底面裏側も赤彩ミガキされる精製された壷である。胴最大径下半には隆帯が1箇所認められるが、注口部と隆帯との位置関係は、人面土器1410の隆帯と正面との位置関係と同一である。壷における正面観と隆帯の位置については、一定の意味が込められているものと考えられる。

1662は多段横帯文系の壷である。胴最大径以上には縦位の鰭が3箇所付着していたことが剝離痕跡から明らかである。同様なものはSB1282－1623にも認められるが、鰭はII～V文様帯にかけて付随する。

<出土状況：図版203>　同住居址の埋土上層である3層からは石材剝片および台石等が出土した。1658～1662はこれらの石材と層位的に共伴する。小型赤彩壷1658，1659は、床面より浮いて単体で出土し、1662は埋土中に正位の状態で据え置かれていた。周囲に壷の頸部が数点まとまっていた。1658，1659，1662は図示部分が完存する。本住居址出土資料は一括性の高い資料である。

SB1289（第143，144図1667～1676）

1667～1673が壷、1674が高杯、1675が甕、1676が鉢である。

大型壷1673は、破片の状態で二次的に被熱する。黒色化した破片と、黄橙色の破片がとなり同志で接合し、煤けた破片が市松文様化する。本住居址では、二次的に被熱して調整が不明瞭な土器が多い。

<出土状況：図版206>　本住居址の床面上に乗る2層は多量の炭化粒・焼土粒を含んでいる。壷1667，1670，1671、鉢1676は床面直上に散在していた。入口部ピット上からは壷1668，1669，1673がまとまっていた。同部分では図示していない資料もあるが、壷のみで構成されている。壷1668は図示部分が完存し横転していた。壷1669は横転して押し潰されており、壷1673は正位の状態で据え置かれたものが押し潰され、破砕状態でまとまっていた。その際二次的に被熱している。1668，1669，1673は正位の状態で入口部ピット上に埋置された可能性がある。1667～1673は一括資料としてとらえて良い。

SB1291（第144図1677～1683：PL.120）

1677～1678が壷、1679が有孔鉢、1680が鉢、1681～1683が甕である。

壷1677，1678は、口縁部が大きく外反し、その内外面を精製ミガキを施す。1677の頸部は押し出し凸帯となり、中央の横走沈線を指ナデする。II，IV，V文様帯の櫛描文は太い櫛である。

甕1682は横位施文、1683は羽状施文である。いずれも、図示中央部分に他と異なるモチーフが表現されている。

<出土状況：図版207>　本住居址は、一次堆積土の3層が堆積した後、2層の炭化粒・焼土粒層が厚くレンズ堆積する。住居址中央部では2層が床面直上にまで及んでいる。土器の出土レベルは高低が認められるが、いずれも炭化粒、焼土粒層から出土した。炉の上部からは壷1677、甕1682，1683が破損状態でまとまって出土した。そのあり方は火床を封鎖する行為ともとらえることができる。

SB1290（第145図1684～1692）

1684～1685が壷、1686が高杯、1687～1692が甕である。土器は強く被熱しており、色調が黄橙色～橙色に変化する。器面が荒れて調整が不明瞭なものが多い。

甕1687，1691は文様モチーフの流儀から外れた施文を行う。1687の胴部文様は乱れた斜線文で、一定の位置で斜線の方向を変えている。1691の上位文様は中部高地型の波状文を施し、本来ミガキを施す胴下位には乱れた斜線文を右回りに施文する。波状文→斜線文という順位である。文様施文流儀の崩壊を示す例で、こういったものと横位羽状刺突文を口縁内面に施す破片（1690）が一緒に出土している。

<出土状況：図版207>　1684～1692は床面直上より出土した。甕1684，1685、甕1689は押し潰された状態で出土した。特に壷1684はピットと密接に関わるものであり、同一地点から出土した高杯杯部1686は蓋であった可能性がある。

SB1292（第146図1693～1700：PL.105，112）

1693～1694，1696が壷、1695，1697が鉢、1698～1700が甕である。

1693，1694の形状は胴最大径がソロバン玉状に張り出すが、扁平ではない。1694については天地が逆の可能性もある。1696は工字文系のモチーフをもつ横帯構成の壺である。V文様帯に工字文系文様をあてる。横帯文中には上段と下段に、竹管による押し引き列点文が右回りに施文され、地文にはLR縄文が横帯文様帯全体に認められる。口縁内外面には精製ミガキが施され、内面には淡い赤彩が確認できる。

SB1293（第147～149図1701～1735：PL.109，110，117）

1701～1714が壷、1715が高杯、1716が鉢、1717～1718が有孔鉢、1719～1735が甕である。

壷はIV～V文様帯に施文部をもつものを含め、胴最大径が張り出し、ソロバン玉状を呈するもの（1701，1702，1704，1705）が主体となる。1706，1707の頸部は、押し出し凸帯をとり、口縁部は大きく外反し、内外面に精製ミガキを加える。1713の受口部外面には2本歯結束による波状文が施文される。

甕1720は斜線文で、左下りであるが、途中から右下りとなる。1721は全体に斜線文を施文した後に、波状文を重ねて施文する。1724は残存率1／3で全体の様子が明らかでないが、一部のみ波状文を施文し、上部に斜線文を重ねている。1730は胴全体に波状文を垂下させる。類例は多くない。

＜出土状況＞　本住居址の埋土はレンズ堆積を示し、床面上に堆積する5層と、埋土中層にあたる3層に炭化粒を含み土器片を包含する。提示した1701～1735の土器群の多くは破損状態で3層炭化層から出土した。少なくとも2回以上の廃棄が行われた状況を示しているが、土器型式的には変化が認められない。

SB1294（第150，151図1749～1759：PL.50，108）

1749が鉢、1751が高杯、1752～1753，1759が壷、1750，1754～1758が甕である。

本住居址出土土器の多くは、二次的に被熱し、灰白色～黄橙色～橙色を呈するものが多い（1752，1754～1759）。特に1757，1759は灰白色～黄橙色に色調が変化し、大きな歪みをもつ。1757は楕円形に歪み、口縁部も大きく彎曲する。1757は胴部が扁平に歪み、炸裂した部分同志が互い違いに入り込んでいる。色調は灰白色で、温度がかなり上昇していたと思われる。

被熱歪み土器1759は、I，II，IV文様帯に文様施文する。IV文様帯の構成は、横走沈線文帯の上段と下段に櫛描直線文を充塡する。

＜出土状況：図版208＞　本住居址埋土はレンズ堆積をしており、多量の焼土粒を含む2層が床面まで達して、床面の一部は強く酸化被熱する。1749～1759は2層焼土層と密接な関連があり、床面より浮いて出土し、被熱したものが多い。1757，1759は大きな歪みをもつ。甕1755は唯一、個体が遺棄された状況で出土した。出土位置は主柱穴上にあたる。壷1753，1759、甕1756，1757，1758は押し潰された状態でまとまって出土し、1757，1759は破片が周囲にも散在している。土器は強く被熱しており、1757，1759は青灰色に、他は黄褐色に色調が変化していた。廃棄後の被熱状況が理解できる一群で、廃棄時の一括性をおさえることができる良好な資料である。

SB1296（第149，152図1738～1739，1760～1768：PL.109，110）

1739，1760～1762が壷、1738，1765～1768が甕、1763～1764が鉢である。

壷1739，1760は胴最大径部に文様をもつ。1739の連弧文は、右から左に描き、左回りに施文する。胴上半の波状沈線は図示部分のみ施文する。1760の文様帯は図示部分のみで、乱れた重山形文を左回りに施文する。

＜出土状況：図版209＞　1738～1768の出土資料のうち、1765～1766を除いた個体はすべて床面直上より押し潰された状態で出土した。壁面直下の床面付近に位置するものが多いことから、住居廃絶時に遺棄さ

れた土器群である。甕1738，1762、鉢1763は隣接して出土した。甕1768は、壺1762の胴部で蓋をした状態で横転していた。壺1760は破片で散在していた。鉢1764は破砕の状態で炉内より出土した。壺1739，1761、台付甕1767は個体で出土した。以上の出土状況により、同資料群は一括性の高い資料と言えよう。

SB1303（第152図1769～1771）

1769が壺、1770～1771が甕である。

＜出土状況＞　本住居址は床面直上に炭化材が認められる被熱した住居である。壺1769は図示部分が完形で、胴下半は意図的に打ち欠かれている。主柱穴脇の床面直上に正位の状態で埋置されていた。炭化材との位置関係から火をかける前に据え置かれていたことが指摘できる。床面上には他に土器は認められない。

SB1302（第153，154図1772～1789：PL50，51）

1772～1779が壺、1782が鉢、1783が高杯、1780～1781，1784～1789が甕である。

壺は、Ⅱ文様帯のみ施文するもの（1772）。Ⅱ，Ⅳ～Ⅴ文様帯に施文するもの（1774～1776，1779）。Ⅱ～Ⅴ文様帯に多段横帯系文様を施文するもの（1777～1778）とがある。甕は横羽状文をもつものが一定量を占める（1786～1788）。

＜出土状況：図版211＞　土器群は床面よりやや浮いて破損状態で出土した。甕1787を除くと単体で遺棄されたものはなく、接合関係から破片が散在する状況を呈していた。住居廃絶後、一定の期間を経て廃棄されたものと思われるが、廃棄時の一括性は高い資料である。

SB1304（第154～156図1790～1805：PL.51，52）

1790が鉢、1792～1793が高杯、1794～1797が壺、1791，1798～1805が甕である。

1791～1793は脚部の接合に充塡技法を用いている。壺1796，1797は、胴最大径部分に焼成後穿孔または隆帯が認められる。

＜出土状況：図版212＞　床面直上からは遺棄、廃棄された土器群が多量に出土した。出土状況は、個体が完存し遺棄されたものと、破片の状況で散らばるものとがある。遺棄されたものには壺1797、甕1798，1800，1804，1805がある。いずれも横位状態で床面に押し潰された状態で出土した。破片で散らばるものには壺1795，1796、甕1802，1803等がある。壺1796、甕1803の大型破片は、炉を封じるような形で炉上に集められていた。

SB1305（第156，157図1806～1813：PL.102，106，115）

1806，1809～1812が壺、1807～1808が小型赤彩壺、1813が甕である。

1806は縦長タイプのプロポーションをとる壺で、最大径をやや上位にとる。類例はあまりない。胴最大径の前後に、隆帯と連弧文が認められる。1809の文様構成は、Ⅱ文様帯の櫛描簾状文間に波状沈線文を、Ⅲ文様帯の横走沈線文間に櫛描直線文を充塡する。甕1813は、胴上半部にLR縄文を2段施文する。

＜出土状況：図版212＞　本住居址床面上には炭化粒、焼土粒、炭化材を含む層が薄く広がる。提示した土器1806～1813は床面直上に位置するものと、同層出土のものがある。後者はやや浮いている。

壺1806，1809，1810、甕1813は床面直上から出土した。壺1806、甕1813は奥壁側直下に横位に遺棄されていた。壺1809，1810は図示部分が完存し、1810は正位の状態で出土し、1810に関しても正位に埋置されたものが横転した状態であった。これらは一括としてとらえることができ、住居内で火が焚かれる以前に

置かれたものであろう。壺底部1811は炉床として、赤彩壺1807は図示部分が完存し、炉の上部から出土した。

SB1306（第157～160図1815～1860：PL.52～54，106，117）

1815～1833が壺、1834，1835が蓋と無頸壺のセット、1836が赤彩小形壺、1837が鉢、1838が高杯、1839が有孔鉢、1840～1843が台付甕、1844～1860が甕である。

壺は、器面の状態にもよるが、荒いミガキでハケを残すもの（1815～1817）がめだち、1826のように精製ミガキを施すものは少ない。頸部文様帯に押し出し凸帯をもつもの（1818～1819，1824～1825，1831，1832）が多い。押し出し凸帯は、凸帯部を2条押し出す例が多いが、凸帯間の横走沈線には指によるヨコナデ、あるいは太い沈線を施し、断面がU字になるもの（1819，1832）と、板状の工具でヨコナデを施し断面がコの字になるもの（1818，1825，1830）とがある。1824は口縁の内外面に赤彩を施すが、実測図では内面の赤彩表示が落ちている。口縁外面のみ淡い赤彩である。1830は大形壺で、受口部に片口をもつ。1831は大型の太頸壺である。1834，1835は無頸壺と蓋のセットである。

甕は、プロポーションの全容が理解できるものが多い。口径が胴最大径を凌ぎ頸部の括れが弱いもの（1845～1846，1850～1851，1853～1855）、口径と胴最大径がほぼ等しく頸部が括れるもの（1847，1852，1855～1856，1858，1859）、胴最大径が口径を大きく凌ぎ頸部が狭いもの（1848，1857）がある。

<出土状況：図版213，214>　本住居址埋土はレンズ堆積を呈し、住居廃絶後の一次堆積土である6層上で火が焚かれ、多量の土器が廃棄されている。土器群は壁周囲の一次埋没土周辺を除き、住居址中央部分の窪地一面に散在する。層位的には2～5層に位置するものと考えられる。

図示した土器はすべて炭化粒を含む2～5層出土で、住居廃絶時に床面に遺棄されたものはない。土器は破砕状態で散在し、復元されうるものも、その接合関係は広範囲となり、層位的にも上下関係が認められる。よって破損状態の土器を廃棄したものと考えられ、一括廃棄の可能性が強い。

3　土壙出土の土器（SK）

松原遺跡の弥生中期集落は多数の土壙が調査された。このうち59基の土壙より出土した栗林式土器について報告する。実測図は「弥生・総論4　弥生中期・土器図版」編の図版162～196に掲載している。

SK127（第162図1865，1867～1868：PL.54）

1865が甕、1867が鉢、1868が壺である。

<出土状況：図版285>　埋土は7層に区分され、水平堆積をなし、炭化粒・焼土粒を多量に含む褐色土と、黄褐色土が互層となっている。被熱面と炭化粒を含む層のあり方から、土壙内では少なくとも3回以上火が焚かれたことが想定できる。遺物は3層を中心に破損状態で出土した。2回目の火が焚かれた後廃棄されたものであろう。

SK131（第162図1869～1875：PL.54）

1869，1873が甕、1870が高杯、1871～1872が鉢、1874～1875が壺である。

1874が細頸壺、1875が太頸壺で、いずれも精製ミガキを行う。1874は沈線文施文後縄文をころがす。1875の口縁部は緩やかな受口部をもち、胴部内面は上位にヨコミガキを密に、下位に荒いミガキを施す。

<出土状況>　埋土中より破損した土器片が集中する状態で出土した。完形品で出土したものはない。

SK133（第163図1876～1882：PL.55）

1876～1877が壺、1878が小型甕、1879～1880が鉢、1881～1882が大型鉢である。

1881～1882の胴部文様は壺の文様構成をとる。よって、広口壺として捉えることも可能であるが、内面のミガキも考慮して大型の鉢として理解したい。

SK141（第163図1883，補遺図版255，2992）

1883は無頸壺の蓋である。つまみについては欠損により確認できないが、存在しないと思われる。縄文と沈線文で飾られる。

SK143，149，150（第163図1884～1887）

1884，1887は扁平な底部をもつ鉢である。1885は大型鉢、1886は壺である。

＜出土状況　SK149：図版286：PL.53＞　SK149は楕円形のプランを呈し、すり鉢状に掘り込まれた土壙で、底面が平坦となる。検出面はやや掘り下げており、実際の規模は図面より大きく、深さは80cmほど測る。一次埋没土が堆積した後に火が焚かれ、焼土・炭化粒層が厚く互層に堆積する（第2分冊遺構図版編PL53）。1885～1886は破片で同層より出土した。

SK151（第164，165図1888～1906：PL.55，56）

1888～1898が壺、1899～1900が鉢、1901～1906が甕である。

壺は胴最大径をやや上位にとるもの（1889～1891）が主体で、下膨れ状の壺は少ない。口縁部は短く外反する（1890，1895）。外面は1894を除き、精製にミガキが施される。

1891の胴部文様帯では、文様帯上段の横走沈線、下段の連弧文2単位が実測図から欠落している。横走沈線は5条で、横帯の充塡は空白帯＋波状沈線＋空白帯＋波状沈線となる。その下位に二連の連弧文がある。1895，1896のV文様帯の沈線内は赤彩する。

甕は頸部の括れが弱いもの（1902～1904）と括れをもつもの（1901，1905～1906）とがある。文様は横羽状文（1902，1904，1906）がめだつ。

＜出土状況：図版287：PL.54＞　礫床木棺墓SM22の下層に位置する楕円形の土壙で、底面はすり鉢状を呈する（第2分冊PL54ではSK156断面と表示されているがSK151断面が正しい）。土器は炭化粒を多量に含む最下層より破損状態で出土し、上層からの出土はない。土器の取り上げでは形態を残すものは認められなかったが、整理段階で多くの個体が復元された。廃棄方法の一つのパターンとして捉えることができよう。一括性の高い資料である。

SK153（第166図1907～1910：PL.56，57）

1907，1909～1910が壺、1908が甕である。

壺の胴部はソロバン玉状を呈するもの（1907）と、球胴を呈するもの（1909～1910）とがある。最大径はやや上位に位置する。

＜出土状況：図版287 PL.54＞　図示した土器はいずれも底面直上より出土し、一括遺物として捉えられる（PL54）。1907は完存し、横位に埋置され、押し潰されていない。1909，1910は同一地点から出土し、1908は完存し逆位の状態であった。

SK156（第167，168図1916～1940，補遺図版255，2994：PL.57～59）

1916～1927が壷、1928～1931が鉢、1932が有孔鉢、1933～1940が甕である。

壷は20cm前後の小型壷（1916～1920）が多く出土している。プロポーション、文様構成は普通サイズの壷をコピーしているものと思われる。普通サイズの壷は胴最大径をやや上位にとるもので占められ、細頸壷は特に細いもの（1922，1925）と、細いもの（1921，1924，1926）とがある。

文様および調整は、精製ミガキを施すものが主体である。胴外面のミガキ調整については、胴部文様帯部分にミガキを加えないもの（1923，1924）と、Ⅲ～Ⅴ文様帯に文様施文後ミガキを加えるもの（1922，1925～1926）とがある。1924はⅣ文様帯の一部のみに波状沈線文を施文し、90度左側の胴最大径部分に焼成後穿孔を行う。1926はⅣ文様帯に多段横帯施文が施される。横走沈線で区画し、櫛描直線文と押し引きの櫛描斜線文で充塡される。1927は太頸の壷である。Ⅲ文様帯は横走沈線で充塡されるものと思われる。

鍔状口縁鉢1930は、屈折部内面に明瞭な稜をもって外反する。杯部外面に段を持つタイプは古相に認められる。

<出土状況：図版287　PL.54>　SK156はSK151と切り合い関係にあるが、埋土はSK151最下層に認められた炭化粒を含む層は認められず、褐色土の単一層である。土器は下層に集中し、その多くは破損状態で検出されたが、床面に遺棄された一群も認められた（第2分冊遺構図版PL54）。壷1924は口縁部以外は完存し、頸部を下に向けて斜位状態で埋置されていた。胴部穿孔は横に向けられていた。壺1926、甕1933～1935はまとまり、壷1926は図示部分が完存して正位の状態で、他は破損してまとめられたかの状態で出土した。以上の土器群は最下層に位置する一括遺物である。

SK158（第169，170図1941～1951，1953：PL.59，60）

1941～1944が壷、1945～1947が鉢、1948が有孔鉢、1949が高杯、1950～1951，1953が甕である。

壷1942，1943は文様施文後、Ⅲ文様帯以下に、文様帯上も含めて精製ミガキを施す。大型甕1951は胴最大径外面に有段部をもち、ハケ工具による刺突が施される。内外面に精製ミガキを施すが、外面には煤が付着するのに対して、内面にはコゲ等は確認できない。他の大型甕と同様な傾向を示す。

<出土状況：図版288　PL.55>　埋土は2層に区分され、下層は炭化粒・焼土粒を含む褐色土である。土器は2層およびその直上から破片の状態で出土し、遺棄された形跡はない。小型鉢1945のみ完存し、逆位の状態で出土した。比較的多くの遺物が出土した。

SK159（第170図1954～1956）

1954～1956が壷である。1956は頸部文様帯下位に記号文が等間隔に描かれているものと思われる。

<出土状況：図版287　PL.55>　埋土はSK158と同様に2層に区分され、下層に炭化粒・焼土粒が認められる。壷1954～1956は図示部分完存し、底面に貼りついた状態で出土した。1954は完存し、口縁部を下位に傾けていた（PL55）。

SK163（第170～171図1957～1975：PL.60，61，125）

1957～1964が壷、1965～1967が鉢、1968が大型鉢、1969～1975が甕である。

1958は胎土に多量の黒雲母を含む。松原遺跡の土器に黒雲母を含むものは少なく注意される。内眼観察による色調は他の土器と変わりない。混和材が他からもたらされたものか、土器自体が千曲川左岸地帯からもたらされたものか検討したい。1959は横走沈線文による多段横帯区画を櫛描直線文と櫛描短斜線文で交互に充塡する。1960の淡い赤彩はⅣ～Ⅴ文様帯に対して施されるが、僅かな残りである。

大型鉢1968は、工字文および調整が丁寧な精製土器である。文様帯と口縁の境界に段がある。沈線内赤

彩、口縁部の内外面にもヨコナデ後精製ミガキが施される。紐孔は対面上に2箇所認められる。

甕は3形式に別れ、1975，1970，1974がその代表となる。1970の頸部文様帯（直線文）が実測図で欠落している。横羽状文の比率が少ない事は同セットの特徴である。

<出土状況　SK163：図版288 PL.55>　SK163は2つの掘り方が連結した状態で、遺物も北側の一群と南側の一群とにその掘り込み内で別れている（第2分冊遺構図版編PL55）。埋土は周辺の土壙群と同様に下層に炭化粒・焼土粒を含む層があり、土器は同層中より破損状態で集積して出土した。

壺1960は押し潰された状態で出土したが、本来、口縁部を上に向けて斜位に遺棄されたようだ。口縁部は打ち欠きされていたが、接合作業時に完形に復元されていることから、打ち欠き行為は同遺構内で執り行われている。壺1962は完存し、口縁部を下に向けて斜位に埋置していた。

SK164（第172，173図1976～1997，補遺図版256，2996：PL.61，62）

1976～1984が壺、1985が高杯、1986～1988が鉢、1990が高杯か蓋、1989，1991～1997が甕である。

1976～1977は太頸系の壺である。1979は胴部に焼成後穿孔が二箇所ある。図示部分の穿孔部より90度右側に0.7cm×2.5cmの長方形の穿孔が認められる。1980は色調、焼き上がり等が他の土器群とは異質で、整理段階で他遺構の遺物が紛れ込んだ可能性がある。SK164の一括資料としてとらえることには問題があるかもしれない。1981は櫛描直線文を施文した後、横走沈線で櫛描文を区画する。V文様帯は、縄文→連弧文という順位、連弧文は右から左に描き、左回りに施文している。

甕1992，1995は胴最大径から頸部にかけて、直立的に立ち上がるタイプである。大型甕1996は内面に精製ミガキを施し、内面に焦げはなく、外面に煤が付着する。

<出土状況：図版290 PL.55>　SK164の埋土には底面よりやや浮いて河原石が散在し、礫群より上層には炭・焼土粒の互層が認められる。遺物の出土状況に関する記録はないが、その多くが炭・焼土の互層より出土したものと思われる。壺1979は完存し、底面に埋置されていた。

SK190（第174図2005～2008）

2005～2008はII文様帯の形骸化の進んだ壺である。

<出土状況：PL.56>　SK190はすり鉢状を呈する土壙で、遺物は底部付近より破片で出土した。壺が中心となり、その器種構成はSK191出土資料と類似する。時間的にもSK191と同時期である。

SK191（第175～176図2009～2021：PL.63，64）

2009～2020が壺、2021が甕である。

大型甕2021を除き壺のみで構成される。完存するものはなく、破損の状態から1／2 ～ 2／3に復元できたことから、破損状態で廃棄された様子が窺える。2015，2021は強く被熱する。

2009は太頸系の壺であり、口縁部が短く外反し、胴部がソロバン玉状を呈す。懸垂文は5本1組の櫛で施文され、他の文様も櫛描文施文原体のヒゴを用いて施文する。よって、1本あたりの沈線は細い。II文様帯の擬簾状文は緩やかに結束された結合原体で刺突し、押し引いて施文したものと思われる。懸垂文間および口縁内側には、赤彩ミガキが施される。2010，2014はいずれも太頸系の壺で、2014の胴部には竜目痕跡が認められる。頸部文様帯の擬似簾状文は、1本あたりを左から右側に描いて、右回りに施文する。口縁部内面のみ赤彩する点は2009と同様である。2015は細頸系壺で、胴最大径が下位に下がり、下膨れ状を呈する。2016は緩やかな受口状をなす口縁部となり、口縁部外面と頸部文様帯に、2本組の原体で描かれた波状沈線文が施文され、付加文として鋸歯状沈線文が付く。胴文様帯にも複合鋸歯文が施文される。

＜出土状況：第1分冊遺構本文編第83図＞　SK191埋土内出土土器群は、松原遺跡出土の栗林式土器様相の「様相3」に位置づけ、松原栗林式土器群の中で最も新相を示す基準資料として取りあげたことがある。（青木一男　1996年「松原遺跡弥生編整理中間報告」『長野県埋蔵文化財センター紀要5』）

SK191は、松原西地区のⅠF14グリッド（第2分冊　図版29）に所在し、囲郭溝SD12，29の内側で両者の合流付近に位置する。囲郭空間内では、SD291～293，275等およびSD12，29によってさらに囲郭された北東隅空間に位置するようにも読みとれる。平地式建物址SBH44、後期初頭の竪穴住居址SB214に切られており、これらの遺構よりも所属時期は古い。

同遺構は直径4.2m、深さ1.3mを計る円形プランの断面擂鉢形で、基本土層Ⅶ層黄褐色砂混じりシルト層を深く掘り込み、湧水点にまで達している。その形状と他の遺構が掘り込まない湧水点にまで達しているところから井戸としての機能が想定され、同様な遺構はSK301にも認められるが多くはない。

断面形は2段の掘り込みであるが、上段部分は土層を観察せずに掘り下げている。下段部分はレンズ状堆積をなし、3層に区分された。遺物は最下層の3層より壺を中心に破損状態で出土した。完存状態で遺棄あるいは廃棄されたものはなく、井戸の機能停止後に廃棄された様子が窺える。

出土土器には他の遺構出土遺物と接合関係にあるものもある。形概化した懸垂文をもつ壺2009は、完形近く復元することができたが、約15mほど離れた環濠SD12埋土内出土の小破片2517（第216図）と接合した。2517はSD12の埋土上層3層より出土している。SD12埋土3層は、炭化・焼土互層の上位に乗る層で、濠はほぼ窪地化していたものと思われる。様相3に位置づく2009が、環濠SD12上層出土資料と接合したことは、環濠の埋没過程を考える上でも重要である（第1分冊遺構本文編第83図）。

SK192，195（第177図2022～2027）

2022～2024が壺、2025～2027が甕である。

2022は貼り付け凸帯をなし、凸帯上は横走沈線を1条施文し刺突を施している。

＜出土状況　SK192＞　SK192は大型の楕円形土壙で、埋土は2層に区分されてその下層に焼土・炭化粒を多量に含む。土器の多くは下層より出土した。

SK200（第177，178図2028～2033）

2028～2030が壺、2031～2033が甕である。

2028，2030いずれもハケを残す調整である。2030の胴最大径から下位にかけては2箇所の隆帯が確認でき、下位のものは剝離していた。

＜出土状況：PL.56＞　SK200は擂鉢状の断面を呈し、中層以下は炭化物を含む層と酸化面の焼土層とが互層となり、少なくとも2回火が焚かれている。土器は炭化粒・焼土層中より破片が集積した状態で出土した。火が焚かれた後、廃棄されたものであろう。

SK345（第179図2043～2059）

2043～2049が壺、2050～2055が鉢、2056～2059が甕である。

壺は細頸系（2043，2044，2046）と太頸系（2045）とがあり、文様には工字文系が認められる（2048～2049）。

＜出土状況：図版293 PL57＞　礫床木棺墓SM103に近接する不整形の土壙（第2分冊　図版293では縮尺が1／40で提示されているが1／80が正しい。）で、礫床木棺墓に敷かれた同質の礫と伴に土器片が散在していた。SK164と類似点をもつ土壙である。埋土は下層に炭化粒を含む層が確認できる。遺物は新相を示す

遺物と古相を示す遺物が混在する。

SK1333（第180～182図2070～2082，補遺図版257，3017：PL.64，65）

2074～2075が高杯、2076が無頸壺、2077，2082が甕、2070～2073，2078～2081が壺である。

無頸壺2076は、端部を面取りする。壺2078の口唇部には擬似縄文が施文される。壺2079の胴外面は、上位にナデ状のミガキ、下位に軽いケズリ後荒いタテミガキを施す。2080は淡い赤彩が施された壺で、全面にミガキ調整をする。連弧文は左回りに施文される。2081は広口壺で、胴外面はハケ→縄文→沈線文→ミガキとなり、文様帯にもミガキが加えられる。

甕2082は受口状口縁をもつハケ調整甕で、不規則な施文を行っているため、90度づつ回転した図を示した。外面はヨコハケ調整後、胴下半は丁寧な精製タテミガキが施され、上位に施文される。頸部は簾状文と波状文で構成され1周しない。胴部は波状垂下文、波状文、斜線文よりなる。

＜出土状況：図版295＞　SK1333は下層に2層に渡って炭化物を含む層が厚く堆積し、同層を中心に多量の土器片が検出された。土層説明では炭化物層と説明されているにすぎないが、土壙の形状、遺物の出土状況から考えると、これらの層は焼土層、炭化物層等による互層を呈していたものと推察される。土器は破片の状態であったが、形に復元できるものが多く、打ち欠きされた個体が一括廃棄された様子が窺える。

SK1335，1349，1353，1371，1373（第183図2083～2095，補遺図版257，3020）

2083，2087～2088が甕、2084～2086，2089～2095が壺である。

壺2086は頸部文様帯を含め、全体に淡い赤彩を施す。2095は懸垂部を押し引き列点文で充填する。

＜出土状況　SK1353：図版296 PL.58＞　上層と下層に炭・灰・焼土の互層が認められ、遺構内で2度以上火が焚かれた様子が窺える。遺物は底面直上より出土したものと炭、焼土互層内より出土したものがある。コの字重ね甕2087は脚部を欠損する外は完存し、底面壁ぎわに正位の状態で遺棄されていた（第2分冊 PL58）。

＜出土状況　SK1371，SK1373：図版297 PL.58＞　SK1371とSK1373は近接する土壙である。SK1371では壺の口縁部がまとまって出土した。

SK1377（第184図2096～2106：PL.66）

2096～2102が壺、2103～2107が甕である。

壺は精製ミガキを施すもの（2096～2097）、ハケ調整のもの（2098）、赤彩を施すもの（2099）とがある。甕の頸部文様帯には、簾状文（2103，2105）、直線文（2106）を施すもの、無文のもの（2104）とがある。

＜出土状況　SK1377：図版297 PL.59＞　土層断面を観察すると、土壙内で3度以上火が焚かれた様子が窺える。土器は土壙下層に破片の状態で集積して出土した（第2分冊PL59）。

SK1382（第184図2107：PL.117）

＜出土状況：図版298＞　甕2107は破片の状態で、2層炭化物層より出土した。

SK1393（第185図2108～2113）

2108～2110が壺、2111が鉢、2112～2113が甕である。

2108とSK1377－2099は接合し、同一個体であった。いずれも細片から図化したため、形状が異なっている。再実測図を提示しなくてはならない。甕2112は変形した縦羽状文が上下2段に施文される。

<出土状況：図版298 PL.59>　SK1393は埋土中層に炭化粒・焼土粒の堆積土（2層）が認められる。遺物は2層を中心として破片の状態で出土した。

SK1396（第185，186図2114～2126）

2114～2121が甕、2122～2126が壷である。

甕は受口状口縁甕を4点図示した。2120を除いて受口部、外面の稜が明瞭なもので、2118では内外面を精製ヨコミガキ、2119ではヨコナデ、2121ではヨコナデ後LR縄文を施す。壷は2122が口縁内外面に赤彩、2125頸部文様帯には押し出し凸帯を有す。2126胴部には焼成後穿孔が認められる。

<出土状況：図版298 PL.59>　埋土は炭化物・焼土粒を多量に含む黒褐色土で、下層に多量の土器が破片の状態で詰まるかのような状態で出土した。

SK1400（第186，187図2127～2139）

2127～2136が壷、2137が小型土器、2138が高杯、2139が赤彩小型壷である。

壷は口縁部が大きく外反するもの（2129～2134）が主体で、Ⅱ文様帯には押し出し凸帯が一定量認められる（2129，2132～2133）。2132，2133のⅡ文様帯中央凹線は板ナデによって施文される。

<出土状況：図版299 PL.59>　埋土は炭化粒・焼土粒を含む。壷が多く口縁部が完存する例がめだち、SK1371と廃棄内容が類似する。

SK1695，1699（第187図2140～2143）

2140～2141が口縁部外面に輪積み痕を残す甕、2142，2143が鉢である。

<出土状況　SK1695：図版299 PL.59>　土壙底面より破片の状態で出土した。

SK1714（第187～190図2144～2165，補遺図版258，3021～3032：PL.66～68，109）

2144～2151，2159が壷、2152～2158，2160～2165が甕である。

壷は器高に対して胴最大径部が大きく張り出すもの（2144，2148～2149）と、張り出しが弱いもの（2145～2147）とがある。胴部が張り出すものは頸部が細く締まり、口縁部が大きく外反するハケ調整痕を残す壷である。2148，2149のⅡ文様帯は沈線→縄文の順で施文し、2148については最後に2本櫛の波状文を施文する。2149のⅣ文様帯は2段のLR縄文を施文する。2150は胴部文様帯に連弧文をもつ大型壷である。図示部分は完存し、欠損部は水平に打ち欠かれている。胴最大径部に焼成後穿孔が認められる。

甕2157の胴部波状文は一見すると畿内型に見えるが、詳細に観察すると静止部が確認される。こういった中部高地型施文がしばし見受けられる。2158は畿内型櫛描波状文を上から4段、下位に斜線文を施文する。一部格子目文の部分が有る。2158，2161の口縁端部の刺突はハケ原体で行っているが、刺突が細かい事が特徴である。

<出土状況：図版299 PL.60>　埋土は3層に区分され、2～3層に炭化粒を多量に含む。土器は破砕された状態で2～3層に集積していたが、形状が理解できるものも存在した。

SK1717，1718，1735（第190図2166～2169，補遺図版258，3033：図版300：PL.111）

2166～2167，2169が甕、2168が壷である。

2168は口縁部が大きく外反する。Ⅱ文様帯は押し出し凸帯をなし、横線は板でヨコナデされる。垂下文、連弧文等に簡素、省略化が窺える。

SK1750，1787，1895，1861（第191図2170～2178：PL.68）

2170～2173が壷、2174～2178が甕である。

甕2178は内外面全面が黒色化した甕である。焼成時に意図的に黒色化したものと思われる。

SK1865，1914，1945（第192図2179～2183：PL.68）

2179～2180，2183が甕、2181～2182が壷である。甕2183は畿内型波状文帯の一部にコの字重ね文１単位が施文されるものと思われる。コの字重ね文部分のみに縄文が施文される。

＜出土状況　SK1914＞　SK1914は柱穴の掘り方で、壷2181が逆位に埋置されていた。後の整理段階で、掘立柱建物ST2157の柱穴であることが判明し、同建物出土の土器として位置づいたが、土器図版編ではSK1914で図化されているため本項で記しておく。

SK1947，1948（第192図2184～2186：PL.68，69）

2184～2186は礫床木棺墓SM112に付随して埋置された完形甕で、それぞれの土器に土壙番号がつけられている。

2184は受口状口縁甕で、文様構成は中部高地型櫛描文を５ブロックに充塡し、さらに５単位の垂下文で文様帯を区画する。波状文のブロックと垂下文のブロックは重ならない。垂下文は１単位のみ３条の簾状垂下文であるが、他は２～３条の垂下文である。

2185は完存し、その上位に大破片2186が覆っていた。2185底部には焼成後穿孔が認められる。2185は畿内型波状文施文後、垂下文で文様帯を区画する。内外面、ヨコハケ調整後施文を行い、胴下半および内面はハケを残す荒いミガキを施す。胴外面には煤が内面にはコゲが対称面に認められ、火にかけられて使用されたものが転用された。2186は強く被熱し、黄橙色を呈する土器である。

2184，2185は礫床木棺墓の構築時期を知る手がかりとなる重要な土器である。

＜出土状況　SK1947，1948：図版302，325 PL.60＞　SK1947，1948は、明確な土壙プランが明らかではない。いずれも横位に埋置されて完存していたが土圧で押し潰されていた。礫床木棺墓SM112の脇に埋置され、土器の上面と礫床面がほぼ同レベルである。（第２分冊 PL60）。2185には底部穿孔があり、2186で覆っていたことから、土器棺墓が想定されるが、骨片等の所見はない。

SK1952，1957，1961（第193，194図2190～2203：PL.69）

2190，2203が壷、2191～2192が鉢、2193が高杯、2194～2202が甕である。

＜出土状況　SK1952：図版302＞　擂鉢状を呈する土壙である。埋土内より多量の土器が破損状態で集積して出土した。良好な一括資料として位置づけることができる。

SK1963，1972，1973，1975，1979（第194図2204～2210）

2204，2210が甕、2205，2207～2209が壷、2206が鉢である。

甕2204の口縁部は直線的に外反し、内外面にミガキは施さない。2205は外面全体に淡い赤彩を施す。

＜出土状況　SK1973：図版304＞　SK1973は埋設土器で、掘り方は明瞭でない。壷2207，2208は図示部分が完存し、2208上に2207を覆いかぶせて正位の状態で埋置していた。壷2207の口縁および胴下半、2208の胴上半は水平に打ち欠きされている。土器棺を想定している。

SK1994（第195図2211～2220：PL.118）

2211～2215が壷、2216が鉢、2217～2219が甕、2220が無頸壷である。2214，2215は横走沈線で区画されるⅡ文様帯幅が広く、押し引き列点文が横走沈線に付属する。2218はハケ調整後にミガキを施す。

<出土状況：図版306>　埋土は、炭化粒・焼土が互層となり、同層から破損状態で出土した。

SK1995（第195図2221～2226）

2221～2222が壷、2223～2226が甕である。

壷2221の頸部文様帯は連弧文で構成されるが、図示部分のみ波状沈線文を施文する。

<出土状況：図版306>　土器は底面にまとまって出土した。2221～2222は完存した。

SK1996，1999，2001（第196図2227～2232）

2227が甕、2228～2232が壷である。

2228の懸垂文は図示部分の1条のみである。V文様帯は複合の連繋で、上下6単位で構成される。上位すべて重弧文、下位には2単位のみ鋸歯文が認められる。

<出土状況　SK1999：図版306>　SK1999はSB1307上に位置し、同住居址の埋設過程の中で掘り込まれた土壙と解釈している。土器はすべて壷で、埋土中層に大型破片となって集積していた。

4　旧河道出土土器

(1)　提示土器の選択

地下に埋没していた旧河道の浅谷は3地点で確認された（第23図）。SD100，101，102があり、SD100と101は調査地点が異なったため遺構番号が変っているが同一河道である。旧河道の調査は、短期間に調査が進められた結果、遺物の層位的な取り上げが細部に渡って実施されていない。このため、一括資料の認定、遺物群の層位学的検討が難しいが、土器に限らず、石器、木器等他の遺物についても同様である。

旧河道出土土器については、出土コンテナ数468箱中、70箱について任意に接合作業を実施した。接合率が全体の15%なのは、一括資料の認定がしやすい竪穴住居址、土壙の接合作業に時間をかけた結果、接合に要する時間に限界があったということよりも、一括資料の認定ができず、一級資料となり得ない旧河道出土土器群の接合を控えたことによる。

本節で提示する旧河道出土土器は、限られた資料の中から抽出した資料で、旧河道に廃棄された土器の時間的、内容的特徴を示すものではない。各河川址に栗林期の包含層が存在することを示す程度のものであり、遺物群の構造的な把握ができる資料ではない。接合作業が実施されていない400箱あまりについては、今後の調査、研究に期待するところである。

(2)　旧河道出土土器

①SD100出土土器（第197～199図2233～2286：PL.69～71）

2233～2239，2243～2246が小型壷、2240～2242，2247～2249が小型赤彩壷、2250～2270が壷、2271～2273が蓋、2274～2277が鉢、2278～2279が高杯、2280～2281が台付甕、2282～2286が甕である。

壷2233～2253は小型品を中心に集めた。小型品の口縁部は欠損したものが多く、意識的に打ち欠き行為を行っている可能性もある。2254～2260は大型壷である。2260～2270は特徴的な口縁部のみを抜き出して提示したもので、類例が特に多い訳ではない。2261は頸部文様帯に矢羽根状沈線文を施すもので、類似文様構成は南関東地方の受地だいやま式にも認められる。文様構成要素では、2262～2265が新相様式に、2268～2270が古相様式に認められる。甕は、2284，2285が中期でも古相を、2286が後期初頭の様相を示す。

②SD101出土土器（第200～203図 2287～2363：PL.71～73，100，113）

2287～2291，2293～2296が小型壷、2292が小型赤彩壷、2297～2305，2307～2319，2321～2327，2329～2338が壷、2306が小型土器、2343が無頸壷、2320，2328，2339～2342，2344～2350が鉢、2351～2353が高杯、2354～2363が甕である。

2287～2296は小型壷を図示した。2297は頸部文様帯部に懸垂文が、下部は横帯文構成となり、初源的な懸垂文を予察させるものであるが、共伴遺物は明らかではない。2316～2319はⅢ文様帯が横帯構成となり、2316が櫛描直線文と櫛描短斜線文ａによる横帯、2317が櫛描直線文と櫛刺突短斜沈線文ｂによる横帯を横走沈線で区画する。2313～2315は沈線内を赤彩する。壷2330は口縁内面に羽状刺突文および櫛描縦位区画文を施文する。北陸地方の系譜を引く文様構成と思われる。

2343は球形を呈する無頸壷で、類似する形態は多くない。地文に中部高地型櫛描文を最上段に直線文、以下波状文を充塡し、その後沈線施文を行う。沈線文は多段横帯構成をとり、最上段櫛描直線文帯に山形沈線文、胴部に波状沈線文を施文する。

甕はSD100出土土器群と同様に古い型式と新しい型式が認められる。2356は３本組の条線で左から右へ斜線文を充塡する。口縁端部からかきおろしている。2356が最も古相、2354～2358が古～中相、2361～2362が新相～後期初頭、2363が後期初頭、2360が後期２段階に位置しよう。

③SD102出土土器（第204図2364～2371：PL.73）

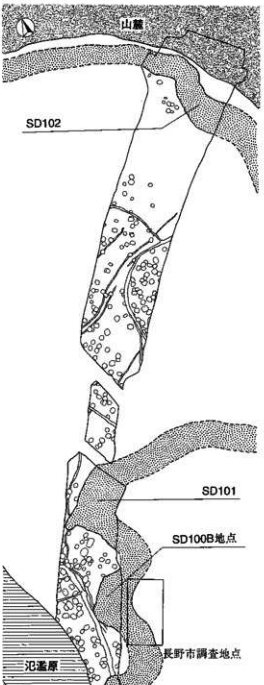
2364～2368が小型壷、2370が壷、2369が鉢、2371が甕である。

SD102は、SD100，101と同様に一定量の出土遺物が存在するが、接合作業は不充分であり、提示した土器が出土内容を示すものではない。ただし、SD100，101で少数ながら認められた弥生時代後期初頭の遺物が含まれていないことが指摘できる。

(3)　土器の出土状況

SD100の土器出土状況についてふれてみたい。弥生時代中期における浅谷SD100の状況については遺構本文編で提示したが、遺物が出土する場所はほぼ限定されていた。

SD100 B地点の浅谷下部の土層図Ａ，Ａ′（第２分冊図版329）を例にとると、河道の攻撃面側に粒子の荒いシルトおよび砂層（２～４層）が堆積しており、同地点では西側に旧河道流路が認められた。遺物の多くはこの河道堆積物である粒子の荒いシルトおよび砂層から出土した。中期の遺物が旧河道河床から出土していることを物語っているが、



第23図　旧河道の位置

後期の遺物が浅谷の傾斜部から出土していることと対象的である。

SD100は弥生時代中期段階には水の流れがあり、後期後半段階には水の流れがない。中期の遺物廃棄は河床部に行われているのに対し、後期では浅谷の傾斜部に行われていることが特記されるところである。

5　囲郭溝出土土器

(1) 囲郭溝と土器

松原遺跡の弥生中期集落域は、いくつかの囲郭溝によってその空間が区画されている(第24図)。各々の溝はその機能した時期に差があったものと想定される。溝に廃棄された土器からその時期を読みとることができよう。また、各々の溝によって土器量に差が認められ、出土状況も異なっている。土器の出土状況から溝の存続期間、廃絶段階の様相を読み取ることができる。

本節では囲郭溝出土の土器について扱い、個々の土器の特徴については土器観察表(第8～52表)、出土状況は囲郭溝土器出土状況（第4表），SD12土器出土状況（第5～7表）に提示する。

(2) 囲郭溝SD1027，1083，1089，1215，1305出土土器

SD1027，1083，1215，1305は松原東地区の囲郭溝（環濠）である（第24図)。

まず、SD1027とSD1083の関係についてふれておかねばならない。両者は同一囲郭溝であるが、調査が2年度に渡り遺構番号が別にふられたため、地区によって異なった遺構番号で遺物がとりあげられることになった。SD1027とSD1083は整理段階でSD1027で呼称するように統一した。しかしながら、注記はSD1027，SD1083で行われているため、調査段階の遺構名で提示することにした。なお、調査段階ではVUグリッドがSD1027、VP・VQグリッドがSD1083としてとりあげられている。遺物の出土量は松原西地区の囲郭溝に比べて少ない。

①SD1089

人面土器片2376（第204図）は遺物図版編ではSD1027出土資料として提示を行った。また、遺物注記もSD1027と記載されている。

ところが，調査担当者から人面土器はSD1089，ⅢA21グリッド付近（遺構図版編 図版59）の埋土中から出土したことが知らされ、遺物図版編で提示したSD1027埋土出土土器群と共伴しないことが明らかとなった。よって、本文をもって、人面土器片2376がSD1089から単独で出土したことを明示する。SD1089はSD1027を切っており、人面土器はSD1027土器群より新しいことになる。

人面土器2376はⅢA21グリッド、埋土から破片で出土した。顔面は、筋の通った高い鼻、彫りの深い切れ長の目、口が残存する。目は工具で押圧して表現され貫通しない。その目は細めて遠くを見透かすような表情である。眉は盛り上げて、鼻の穴が2つ表現されている。

顔面の状態から同人面部は中型サイズ壷の頭部として位置づくことが推定される。この形態の人面付土器は群馬県有馬遺跡14号墓に認められる後期型の人面土器へ引き継がれることになるのだろう。長野盆地では人面土器2376の系譜上にある類例が榎田遺跡等で出土している。なお、人面付土器の遺跡内でのあり方については第Ⅱ部第1章第5節（第1分冊）でまとめているので参照されたい。

②SD1027（第204図2377～2381）

2377～2378が壷、2379～2380が鉢、2381が甕である。

③SD1083（第205，206図2382～2403：PL.73，106）

2382～2386，2390～2391が壷、2392～2393が小型壷、2387～2389が小型赤彩壷、2394～2396が高杯、2397～2398，2403が甕、2399～2400が台付甕、2401～2402が鉢である。

④SD1215（第206図2404～2406）

2404が壺、2405が鉢、2406が台付甕である。

⑤SD1305（第206，207図2407～2422）

2407～2414が壺、2415～2422が甕である。壺は2407が完形に復元され、2408～2412などの頸部から口縁部2413の胴は残存率が高い。甕は1／4以下の破片資料がほとんどであり、濠に共伴する資料であるかどうかは明らかでない。全体に遺物の出土量は多くない。

⑥遺物出土状況

SD1027、SD1305埋土は3～4層に大別される（第1分冊第104図）。1次埋没土の3～4層上に2層が厚く堆積する。土器は、第1次埋没土上の3層ないしは2層下層を中心に出土した。濠の掘削から一定期間が経過し、しかも濠が機能していた段階の廃棄が想定される。

遺構溝	図版	土器No.	グリッド	層位
SD1027	204	2377		3層暗褐色
〃	〃	2378		〃
〃	〃	2379		
〃	〃	2380		4層暗褐色
〃	〃	2381		2層暗褐色
SD1083	205	2382	VQ15	3層
〃	〃	2383	VQ14	2,3層
〃	〃	2384		
〃	〃	2385		
〃	〃	2386	VQ15	
〃	〃	2387	VQ15B・VR11A	3層
〃	〃	2388	VQ14	2,3層
〃	〃	2389	VQ12	2,3層
〃	〃	2390	VQ15	

遺構溝	図版	土器No.	グリッド	層位
SD1083	205	2391	VQ14	2,3層
〃	〃	2392	VQ14	2層
〃	〃	2393		2層
〃	〃	2394		2層
〃	〃	2395	VQ14B	1層
〃	〃	2396		2層
〃	〃	2397		3層
〃	206	2398	VQ14	2,3層
〃	〃	2399	VQ15	3層
〃	〃	2400	VQ15A	3層
〃	〃	2401		3層
〃	〃	2402		3,4層
〃	〃	2403		2,3層

第4表　囲郭溝土器出土状況一覧

(3) 囲郭溝SD12，18出土土器

SD12，18は松原遺跡西地区（大大グリッドⅠ，Ⅱ区）に位置する囲郭溝（環濠）である（第24図）。SD12とSD18は並列する地区もあるが、囲郭する空間は別であり、二重環濠とはならない。松原東地区の囲郭溝に比べて土器の出土量が多いことが特徴である。

①SD18土器出土状況（第207～210図2423～2449：PL.73～74）

SD18は、SD12に並列する断面V字型を呈する濠で、その規模はSD12に比べて小さい（第24図）。SD12が検出された段階では明らかとならずに、その後若干掘り下げて精査したところ検出できた囲郭溝である。埋土の検討からSD12より先に埋没していること、出土土器からは、その掘削がSD12以前であることが判明した。SD18の土器は、SD12と同様に破損状態で出土し、SD12と比較すると出土量は少ない。土器が中層以下から散慢に出土することは、濠の機能した時期が短かったことを暗示している。

2423～2440が壺、2441が高杯、2442～2449が甕である。

2425～2426はハケ調整壺、2427はハケ後ミガキ調整を施す壺である。2428～2431は細頸系の壺で、Ⅳ～Ⅴ文様帯に文様を施文する。沈線、縄文施文を行った後に文様帯部分を含めて精製ミガキを施す。細頸壺2429，2431は、胴最大径をやや上位にとり、頸部が細頸に締る古相形態を示す。細片2435～2436も細頸壺である。2437はSD12ⅠG11グリッド出土土器2559（第219図）と同一個体で、SD18と12が同時に開口していた時期の存在を暗示している。

甕は2447を最古相とし、新相の形態を呈する甕は認められない。2443の口縁部にはヨコナデ調整を認めることはできない。大型甕2444，2446は器壁が薄く丁寧に成形されている。2446は強く被熱しており、外

面剝離が著しい。2448は畿内型櫛描文を施文する。

② SD12土器出土状況（第210～244図2450～2836：PL.74～92，101，102，103，104，107，109，115，126）

SD12は松原遺跡で最も幅広く深い濠である（第24図）。基本土層第Ⅴ層黄褐色シルト層が最上層の窪地に落ち込んでいたため明瞭に検出ができた。土器は中層からの出土量が最も多く、第Ⅴ層の落ち込みより下位の上層からも一定量まとまって出土した。下層からの出土はほとんどない。

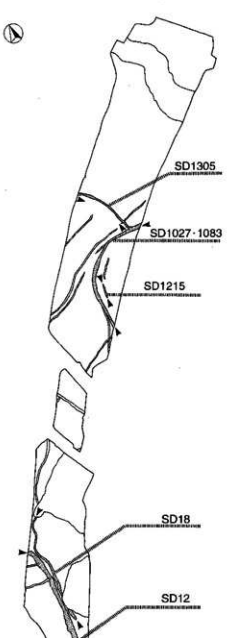
濠の中層には炭化粒，灰，焼土粒層が何層も互層に堆積する部分（第4層）が確認できる。この炭化層は、地点、グリッドによって堆積の厚さに差がみられるが、濠の鍵層となっている。遺物は同層を中心にその前後する層から出土しているが、これは濠がある程度埋没してV字型からU字型に浅くなった段階で火が焚かれ、土器が廃棄されたことを物語っている。この段階には、濠掘削土で構築されたであろう土塁も機能を停止していると思われる。廃棄された土器は多器種に及ぶが、完形土器が検出されたものは稀で、破損状態で堆積していた。広い範囲で破片が接合して完形に復元できるものも認められる。これらのことから、火焚き行為と破損土器廃棄行為という現象を読みとることができよう。

③SD12土器提示方法

SD12はおびただしい土器が出土した濠である（第25図）。報告者はその70％の発掘調査を担当したが、濠の調査は充分であるとは言い難い。調査時間の限界という表面的な問題ではなく、担当者の問題意識（当時、濠内埋土の自然科学的分析についての意識はなかった。）の限界が調査に表象されていたと語っても良い。

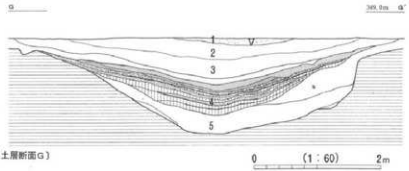
SD12は多量の土器を出土した。個別の土器の解説は本節では行わない。土器観察表（第8～52表）を参照されたい。出土状況については、次のように扱っている。

土器図版（第4分冊）の土器群は調査グリッド毎にまとめ、上層～下層まで一括して提示している。よって土器群の空間的なまとまりは示しているが、層位的な区分はされていない。遺物のさらに詳細な出土状況は「SD12遺物出土状況」（第5～7表）で検索していただきたい。



第24図　囲郭溝の位置

この一覧表では、8m方眼の中グリッドを便宜的に4m四方のグリッドに4分割して、出土位置を示した。4分割したグリッドは、8m方眼グリッドの北西マスを起点として、時計回りにA・B・C・Dと呼称した。8m方眼のグリッド名がⅠK22とすると、その内部の4つのグリッドは、ⅠK22A～ⅠK22Dとなる。また調査の状況によっては4mグリッドを2つ合わせABとかBCと表現することもある。その空間から出土したことになる。



第25図　SD12土層断面図

層位的な遺物の取り上げは、埋土中層の炭化粒、焼土粒の互層を鍵層にして、大きく5層に大別して行っているため1～5層で示す(第25図)。調査グリッドによっては炭化粒、焼土粒が認められない地点も存在したが、層位の比較によって層を特定している。

第1層	黄褐色砂層	基本土層V層対応層
第2層	暗褐色粘土質シルト層	
第3層	暗褐色砂質シルト層	上層土器群の包含層
第4層	暗灰色粘土質シルト層	焼土粒、炭化粒の互層を形成、鍵層
第5層	灰褐色粘土質シルト層	上層に比べ粘性強い

SD12土層断面図（土層断面G）

断面中央部の焼土粒・炭化粒の互層部分をまとめて4層とした。同層中からは、多量の土器片が出土している。

図版	土器No.	出土グリッド	層位
210	2450	A15	
210	2451	A15	
210	2452	A10	
210	2453	A15	3層(下層)～5層
210	2454	A15	3層(下層)～5層
210	2455	A15	
211	2456	A15	5層
211	2457	A15	3～4層
211	2458	A15	3～4層
211	2459	A15	3層
211	2460	A15	3層・5層
211	2461	A15	3層・4層
211	2462	A15	
211	2463	A15	
211	2464	A15	5層
211	2465	A15	5層
211	2466	A15	3層
212	2467	A10・A15	3層～4層
212	2468	A15・B16	3層(下層)～4層
212	2469	A10・A15	3～4層
213	2470	A10	3層
213	2471	A15	3層
213	2472	A15	3層
213	2473	A15	
213	2474	A15	
213	2475	A15	3層(下層)～4層
213	2476	A15	3層(下層)～4層
213	2477	A15	
213	2478	A15	3～5層
213	2479	A15	
213	2480	A15	3～4層
213	2481	B16	3層(下層)～5層
213	2482	B16	5層
213	2483	B16	3層(下層)～4層
213	2484	B16・Q1CD	5層
213	2485	B	
213	2486		
214	2487	B16	3層(下層)～4層
214	2488	B16	5層
214	2489	B16	
214	2490	B21	4層炭化層
214	2491		
214	2492	B21	2～4層
214	2493		
214	2494	B21	2～3層
214	2495	B21	3層
214	2496	B21	3層
214	2497	B21	4層炭化層
214	2498	G1D	4層炭化層(下層)
214	2499	G1D	4層炭化層
214	2500	G1D	
214	2501	G1D	4層炭化層(下層)
214	2502	G1C	
214	2503	G1D・G6AB	2層・4層炭化層
215	2504	G1D・G6AB	2層
215	2505	G1D	4層炭化層
215	2506	G1D	4層炭化層
215	2507	G1D	4層炭化層
215	2508	G1D・G6AB・G11	4層炭化層～5層
215	2509	G1D	4層炭化層
215	2510	G1D	4層炭化層(下層)
216	2511	G6AB・G11	2～3層
216	2512	G6AB	2層
216	2513	G6AB	2層
216	2514	G1D	
216	2515	G6AB	2層
216	2516	G6AB	2層
216	2517	G6AB	2層
216	2518	G6AB	2～3層
216	2519	G6AB	2層
216	2520	G6	4層～5層
216	2521	G6C	4層炭化層
216	2522	G6BCD	4層～5層
216	2523	G6C	4層炭化層
216	2524	G11AB	4層炭化層
216	2525	G6	4層炭化層～5層
217	2526	G6AB	4層～5層
217	2527	G6AB	4層～5層
217	2528	G6	4層炭化層～5層
217	2529	G6AB	4層～5層
217	2530	G6AB	4層～5層
217	2531	G6AB	3層
217	2532	G6	4層炭化層
217	2533	G6AB	4層～5層
217	2534	G6C・G11AB	4層炭化層
217	2535	G1D・G6AB	2層～4層炭化層
217	2536	G6CD	4層炭化層
218	2537	G11	3層・4層
218	2538	G6C	4層炭化層
218	2539	G11	4層炭化層
218	2540	G11CD・G16AB	3層(下層)4層炭化層(下層)
218	2541	G11AB	4層炭化層(下層)～5層
218	2542	G11AB	3層・4層炭化層
218	2543	G11CD	4層炭化層(中層)
218	2544	G11CD	3層(下層)4層炭化層
218	2545	G	4層炭化層
218	2546	G11AB	4層炭化層
218	2547	G11CD	4層炭化層
218	2548	G11	5層
218	2549	G6CD	4層炭化層
218	2550	G11AB	4層炭化層
219	2551	G11CD	3層・4層炭化層
219	2552	G11	4層炭化層
219	2553	Q11CD	3層
219	2554	G11CD	4層炭化層
219	2555	G11CD	3層(下層)
219	2556	G11CD	3層(最下層)
219	2557	G11CD	4層炭化層
219	2558	Q11AB	3層・4層炭化層
219	2559	G11	3層(最下層)～5層
220	2560	G11CD	3層・4層炭化層
220	2561	G11	3層・4層炭化層
220	2562	G11CD	3層(下層)
220	2563	G11CD	4層炭化層
220	2564	G11	3層(下層)
220	2565	G11CD	3層・4層炭化層
220	2566	G6C・G11	4層炭化層
220	2567	G11AB	3層・4層炭化層
220	2568	G11CD	4層炭化層
220	2569	G11CD	4層炭化層
220	2570	G11CD	3層(最下層)・4層炭化層
220	2571	G11CD	3層(下層)・4層炭化層
220	2572	G11CD	4層炭化層
220	2573	G11CD	4層炭化層
220	2574	G11CD	4層炭化層
220	2575	G6C・G11AB	4層炭化層
220	2576	G11	4層炭化層
220	2577	G11AB	4層炭化層・5層
221	2578	G6・G11	4層炭化層
221	2579	G6C・G11	4層炭化層
221	2580	G11CD	3層(下層)
221	2581	G16ABC	4層炭化層
221	2582	G11CD・G16ABC	3層(下層)・4層炭化層
221	2583	G16ABC	3層(下層)・5層
222	2584	G16CD	4層炭化層
222	2585	G16C	4層炭化層

第5表　SD12土器出土状況　(1)

図版	土器No.	出土グリッド	層位
222	2586	G16C	3層(下層)・4層炭化層
222	2587	G16C・G21AB	
222	2588	G16AB	3層
222	2589	G16C	4層炭化層
222	2590	G16CD・L1B・G21CD	3層(最下層)・4層炭化層
222	2591	G16	3層・4層炭化層
223	2592	G16C	5層
223	2593	G16CD	4層炭化層
223	2594	G16CD・L1B・G21CD	3層(最下層)・4層炭化層
223	2595	G11CD	3層(下層)
223	2596	G16AB	3層(最下層)・4層炭化層
223	2597	G16AB	3層(最下層)
223	2598	G16C	3層
223	2599	G16AB	4層炭化層
223	2600	G16AB	5層
223	2601	G16C	4層炭化層
223	2602	G16C	3層
223	2603	G16AB	2～3層
223	2604	G16AB	4層炭化層
223	2605	G16AB	4層炭化層
223	2606	G16C	
223	2607	G16C	3～4層炭化層
223	2608	G16AB	2～3層
223	2609	G16C	4層炭化層
223	2610	G16C	4層炭化層
224	2611	G16C	4層炭化層(下層)
224	2612	G11	4層炭化層
224	2613	G16AB	4層炭化層
224	2614	G16C	3層～4炭化層
224	2615	G21C	2層・3層
224	2616	G21B	3層(下層)・4層
224	2617	G21CD	2層・3層
224	2618	G21CD	2層
224	2619	G21CD	2層
224	2620	G21B	2層・4層
224	2621	G21BCD	2層・4層(下層)
224	2622	G21B	3層・4層
225	2623	G21C	4層
225	2624	G21B	3層・4層
225	2625	G21B	3層(下層)
225	2626	G21CD	2層
225	2627	G21CD	2～4層
225	2628	G21CD	2層
225	2629	G21CD	2層
226	2630	G21C	2層～4層
226	2631	G21B	3層(下層)～4層
226	2632	G21B	3層(下層)～4層
226	2633	G21B	3層(下層)・4層(最下層)
226	2634	G21B	3層～4層
226	2635	G21B	3層(下層)
226	2636	G21B	3層(下層)
226	2637	G21B	3層
226	2638	G21B	3層
227	2639	G21B	3層(下層)～4層
227	2640	G21CD	2層・3層
227	2641	G21B・L6DC	3層(下層)～4層
227	2642	G21B	3層
227	2643	G16ABC	3層～4層
227	2644	G21AB	3層(下層)～4層
227	2645	G21B	3層
227	2646	G21CD	4層
227	2647	G21B	3層(下層)～4層
227	2648	G21B	3層(下層)～4層
228	2649	G21CD	4層
228	2650	G11CD・G21AB	4層
228	2651	G21B	4層
228	2652	G21B	3層(下層)
228	2653	G21	4層

図版	土器No.	出土グリッド	層位
228	2654	G21B	4層(最下層)
228	2655	G21B	3層(下層)
228	2656	G21B	3層(最下層)
228	2657	G21BCD	3層(最下層)・4層
228	2658	G21B	3層～4層
228	2659	G21	4層
228	2660	G21AB	3層
228	2661	G21B	4層
228	2662		4層
228	2663	G21AB	3層
228	2664	G21B	4層
228	2665	G21B	3層(下層)
228	2666	G21B	4層
229	2667	G21B	3層
229	2668	G16C・G21AB	3層～4層
229	2669	G21CD	4層
229	2670	G21B	3層
229	2671	G21B	3層・4層
229	2672	G21CD	4層
229	2673	G21AB	
229	2674	G21AB	3層
229	2675	G21CD	4層
229	2676	L1B	4層
229	2677	L1B	4層(下層)
229	2678	L1	4層
229	2679	L1B	4層
229	2680	L1CD	4層(上層)
230	2681	L1	4層
230	2682	L1	4層
230	2683	L1	4層
230	2684	L1	4層
230	2685	L1	
230	2686	L1CD・L6B	4層(上層)
230	2687	L1	4層
230	2688	L1	
230	2689	L1CD	4層(上層)
230	2690	L1C	5層
230	2691	L1CD	4層(上層)
230	2692	L1	4層
230	2693	L1B・L21CD	4層
230	2694	L1CD	4層(上層)
231	2695	L1C・L6	4層(上層)・5層
231	2696	L1	5層
231	2697	L1B	2層・4層
231	2698	L1・L11CD	3層
231	2699	L6C・L11B	4層炭化層
231	2700	L6C	4層炭化層
231	2701	L6	4層炭化層
231	2702	L6C	4層炭化層
231	2703	L6CD	5層
231	2704	L6CD	5層
231	2705	L6B	5層
231	2706	L6CD	
232	2707	L6	5層
232	2708	L6CD	3層・4層(上層)
232	2709	L6C	4層(上層)
232	2710	L6C	4層炭化層
232	2711	L1・L6B	4層(上層)・5層
232	2712	L6C	4層炭化層
233	2713	L6C・L11A	4層(上層)
233	2714	L6C	4層炭化層
233	2715	L6C	4層(最下層)
233	2716	L6CD・L11B	4層・5層
233	2717	L1B	5層
233	2718	L6C	4層炭化層
233	2719	L6C	4層(下層)
233	2720	L6AB	4層(上層)
233	2721	L6C	4層炭化層

第6表　SD12土器出土状況　(2)

図版	土器No.	出土グリッド	層位
233	2722	L6CD	3層・4層(下層)
234	2723	L1・L6	4層(下層)
234	2724	L1・L6	4層炭化層
234	2725	L11AB	3層・4層(上層)
234	2726	L11CD	3層
234	2727	L11CD	3層
234	2728	L11D	3層
234	2729	L11D	4層(上層)
234	2730	L11CD	3層
234	2731	L6C・L11B	4層炭化層
234	2732	L11B	
234	2733	L11B	4層炭化層
235	2734	L16CD	4層(上層)
235	2735A	L16CD	4層炭化層
235	2735B	L16CD・L21AB	4層(上層)
235	2736	L16CD	4層(下層)
235	2737	L16CD	4層(上層)
235	2738	L21AB	4層炭化層
235	2739	L21	4層(上層)～5層
235	2740	L21AB	4層炭化層
235	2741	L21	4層炭化層
235	2742	L21AB	4層炭化層
235	2743	L21	4層～5層
235	2744	L21AB	4層～5層
236	2745	L21CD	4層～5層
236	2746	L21AB	4層(下層)
236	2747	G16AB	4層炭化層
236	2748	L21CD	4～5層
236	2749	L21	4～5層
236	2750	L21	4層(上層)
236	2751	L21CD	4層～5層
236	2752	P20・Q11CD Q16AB・G21B	3～4層
236	2753	P20AB	4層炭化層
236	2754	P20AB	4層炭化層
236	2755	P20AB	4層炭化層
237	2756	P20・Q16AB	4層炭化層
237	2757	P20AB	4層炭化層
237	2758	P20AB	4層炭化層
237	2759	P20AB	4層炭化層
237	2760	P20AB	4層炭化層
237	2761	P20	4層炭化層
237	2762	P20	4層炭化層
237	2763	P20AB・Q16AB	4層炭化層
237	2764	P20AB	4層炭化層
238	2765	P20	4層炭化層
238	2766	P20AB・Q11CD	4層炭化層
238	2767	P20	4層炭化層
238	2768	Q1CD	4層炭化層
238	2769	Q1AB	4層炭化層
238	2770	Q1CD	4層炭化層
238	2771	Q1CD	4層炭化層
238	2772	Q1	4層炭化層

図版	土器No.	出土グリッド	層位
238	2773	Q1CD	4層炭化層
238	2774	Q1CD	4層炭化層
239	2775	Q1	4層炭化層
239	2776	Q1CD	4層炭化層
239	2777	Q1CD	4層炭化層
239	2778	Q1CD	4層炭化層
239	2779	Q1CD	4層(下層)
239	2780	Q1CD	4層(下層)
239	2781	Q1CD	4層炭化層
239	2782	Q1CD	3～4層
239	2783	Q1	4層炭化層
239	2784	Q1CD	4層炭化層
239	2785	Q1CD	4層(下層)
239	2786	Q1CD	4層炭化層
239	2787	Q1	4層炭化層
239	2788	Q1CD	4層炭化層
239	2789	Q1CD	4層(下層)
240	2790	Q1	4層炭化層
240	2791	Q1	4層炭化層
240	2792	Q1CD	4層炭化層
240	2793	Q1・B16	4層炭化層
240	2794	Q1	3層
240	2795	Q1	4層炭化層
240	2796	Q6AB	3～4層
240	2797	Q6AB	3～4層
241	2798	Q6AB	3～4層
241	2799	Q6AB	4層炭化層
241	2800	Q6AB	4層炭化層
241	2801	Q6AB	3～4層
241	2802	Q6CD	4層(下層)
241	2803	Q6AB	4層炭化層
241	2804	Q6AB	3～4層
241	2805	Q6AB	4層炭化層
241	2806	Q6AB	3～4層
241	2807	Q11CD	4層炭化層
242	2808	Q11	4層炭化層
242	2809	Q11	
242	2810	Q11CD	4層炭化層
242	2811	Q11CD	3～4層
242	2812	Q11	3～4層
242	2813	Q11CD	5層
242	2814	Q11AB	4層炭化層
242	2815	Q11CD	4層(上層)
242	2816	Q11CD・P20	4層炭化層
243	2817	Q16AB・P20AB	4層炭化層
243	2818	Q16AB	4層炭化層
243	2819	Q16AB・P20	4層炭化層
243	2820	Q16AB	4層炭化層
243	2821	Q16AB	4層炭化層
243	2822	Q16AB	4層炭化層
243	2823	Q16AB・P20	4層炭化層
243	2824	Q16AB	4層炭化層

第7表　SD12土器出土状況　(3)

6　土器観察表

(1)　遺物観察表についての考え方

松原遺跡の弥生中期面の調査では、コンテナ3200箱程の土器が出土した。担当者は、その膨大な情報の中から新たな情報を選択して土器本文編および図版編に報告した。その<選択>は担当者の選択であり、多くの研究者によって協議され決定されたものではないことは語るまでもない。その<選択>が充分なものであったかどうかは、今後松原遺跡の資料を紐解き活用される方々が評価することになるだろう。

報告書の土器提示は、選択の可否を議論することなく、情報として提示される。報告担当者が選択した

土器は、実測図、文章、観察表の形で他者に提示されるのである。その形は報告者の視点で選択されることになる。よって、報告書で膨大に提示される情報は視点を変えると使えないものとなってしまう。そんな不充分な選択の危険性についても報告者は認めておかねばならない。

松原遺跡弥生時代中期の土器実測、トレースは担当者の指導の下、整理補助員が行った。担当者は、①成形・調整　②施文手法について指導を行い、①ではハケ、ミガキの方向と両者の関係、ナデ、ヨコナデ等の手法について、②では、原体のめやすがつくような表現、施文順位等が理解できるような表現を心がけた。①のミガキについては実際に表現することはせずに、その方向を矢印で示すことにした。しかし、方向が理解できないミガキに関しては表現できないため、ミガキかナデか図面上では理解できないという問題が生じることになる。土器実測図は土器を理解するための概念図の作成であると理解しているが、1個体の土器実測図にできるだけ多くの情報を吹き込むことを志向してきた。多くの時間と予算をかけて作成した土器実測図にも欠落はあろう。その欠落情報を補完するのが写真プレート、解説文章、観察表である。

観察表では、土器実測図で理解し難い情報を提示しようと考えた。観察表と写真プレート、解説文章の差は何かと考えた場合、写真プレートと文章は多目的な情報を提示する場と考え、観察表は報告者の選択を意志する報告ジャンルと考えた。観察表では主にａ容量、ｂ文様の施文順位、ｃ縄文原体、ｄ残存率について提示した。よって、実測図面で充分に情報を伝える個体によっては、観察表に提示していないものもある。観察表も報告者の個人的な目で行われることは語るまでもない。この提示をさらに資料批判して高めていくことも重要かと考える。そのために長野県の場合、埋文センターから移管された報告書刊行後のデータは県立歴史館が図書館方式でデータを公開している。活用されたい。

(2)　土器の観察

観察表の作成は青木が行った。ただし、土器容量の測定は北陸学院短期大学小林正史先生に実施していただき数値を掲載した。縄文文様の観察は贄田明が行い、その分析については考察編で掲載予定である。縄文文様の観察はサンプルを抽出する方法をとったため、遺構番号3桁代の竪穴住居址出土資料を中心に行い掲載した。

当観察表では、土器の計測値等、土器実測図から導くことのできる情報は極力はぶき、観察表のスリム化をはかるとともに、色調，胎土，焼成の質については、観察者の視点が深まっていないため観察の対象から外すことにした。後者については、小林正史氏、徳永哲秀氏が詳細な観察を行っており、本書分析編でその成果が語られている。

重点を置いた観察項目は櫛描文の施文手法である。中部高地型櫛描文の施文手法については、栗林様式から箱清水様式への変化を探ること、また、その手法について分析するため、特に壺の胴部文様について類型化をはかった。しかしながらこのデータは観察者の観察結果であり、当データの使用に関しては実物の土器に当たって追試あるいは資料批判が必要となろう。その中から、中部高地型櫛描文についての議論が生まれて来ることを期待している。

土器観察表凡例

Ⅰ．写真PL，図版，遺構名，土器No.

上記は「弥生・総論4　弥生中期・土器図版」編のナンバーを示している。(一部本書のナンバーもあり)

Ⅱ．容量

完形品あるいは完形に近い個体について容量を計測した（単位は㎖)。推定値の場合は（　）で示した。容量の測定については、北陸学院短期大学小林正史先生に測定していただいた。

Ⅲ．残存率

実測図に提示した部分についての残存率を7段階に区分した。区分は完存、完、3／4、2／3、1／2、1／4、1／4下で、完存と完の差は、前者が欠損なく完形状態、後者が接合によって完形状態のものをさし、1／4下は1／4以下の個体を示す。あくまでもめやすにすぎない。なお、図示部分についての残存状態であるため、胴下半部をすべて失っている個体でも完存とか1／4といった残存率も存在する。

Ⅳ．施文手法

胴部に櫛描文を施文する甕について、櫛描文施文手法の類型を観察して提示した。施文手法の類型は「第1章第3節4(5)　施文手法の類型化」22～24ページに提示してある。参照されたい。

Ⅴ．縄文

縄文原体および施文順位について提示した。複数の文様帯に縄文施文が存在する場合は、特にことわりがない限り同原体で施文しているものとする。部位毎に異なる場合は、頭に部位を示した。

例)　口擬縄文 ⅣLR → 口唇部は擬似縄文で、Ⅳ文様帯はLR縄文を施している。

縄文施文と沈線文施文の前後関係を示した。

例)　沈→縄　　沈線を施文した後に縄文をころがすもの

　　縄→沈　　縄文をころがしておいてその上位に沈線を施文するもの

Ⅵ．成形・調整・施文等　特記事項

①土器部位名称の略号

土器の部位については、その略号をゴシック体で示し、成形、調整に関する説明の頭に示した。略号の内容は下記の通りである。

口 → 口縁部　　**口内外** → 口縁部の内面と外面

口内 → 口縁部の内面

口外 → 口縁部の外面

受口 → 受口状口縁の受口部外面文様帯

胴 → 胴部　　**胴内外** → 胴部の内面と外面

胴内 → 胴部の内面

胴外 → 胴部の外面

胴外上位 → 胴部の外面でも上位の部分

胴外下位 → 胴部の外面でも下位の部分

内外 → 内面と外面　　**内** → 内面　　**外** → 外面

脚 → 脚部

②文様帯部位名称の略号

文様帯の部位についてはその略号をゴシック体で示し、文様帯解説の頭に略号を示した。Ⅰ～Ⅴ文様帯については「第1章第3節4

⑵文様帯の設定」15ページに提示してある（第3図）。略号の内容は下記の通りである。

Ⅰ～Ⅴ　Ⅰ　口縁端部文様帯

Ⅱ　頸部文様帯

Ⅲ　胴部上位文様帯

Ⅳ　胴部中位文様帯（横帯文）

Ⅴ　胴部中位文様帯（連繋文）

③櫛描文施文手法説明について

櫛描文施文手法を説明するために、頸に櫛描文の「櫛」をゴシックで付し、その手法を説明した。この内容は主に壺の櫛描文施文手法を示している。

例1）　櫛羽→波

矢印が入った場合、頸部文様帯（Ⅱ文様帯）と胴部文様帯（Ⅲ文様帯）の施文先後関係を示している。この場合、胴部の羽状文施文後に頸部の波状文が施文されたことを示している。

例2）　櫛簾→羽（4単位）

頸部の簾状文施文後、胴部の羽状文が施文されたことを示している。カッコ内は胴部羽状文の最位ブロック単位（第6図）を示している。

例3）　櫛羽状文4単位

胴部文様帯の説明は略号ではなく名称を示した。単位は胴部羽状文の最位ブロック単位を示している。

例4）　櫛垂下6単位

垂下文の単位を示した。垂下文が6単位であることを示している。

懸垂文をもつ壺については、懸垂文の単位及び施文手法を示すために「懸」をゴシック体で付し、その単位および手法を説明した。

例1）　懸4単位　2条右→左　刺突列点文

懸垂文の単位は4箇所で4単位。懸垂文の垂下文は櫛描直線文を2条右から左へ施文して、その回りを押し引きの刺突列点文で囲んでいる。

例2）　懸波状文5単位

懸垂文の単位は5単位。懸垂文の垂下文は波状文で構成されている。

④調整手法

調整手法についてはカナで表記し、その内容については「第1章3節3調整手法」11～12ページで解説している。参照されたい。

例1）　口外　タテハケ→ヨコナデ　　胴下位　ハケ→ヨコケズリ→精ミ

口縁外面にヨコハケ後ヨコナデを施し、胴下位にハケ調整後、ヨコケズリ、精製なミガキを加える。

例2）　赤彩ミガキ

ミガキ手法が伴った赤彩手法で定着した赤彩

例3）　淡い赤彩

ミガキ手法が伴わない赤彩手法で定着した赤彩

例4）　精製ミガキ

密に施されたミガキ手法でミガキ下部の調整手法がめだたないもの

⑤文様とその施文手法

文様については漢字で表記し、その内容については「第1章第3節」12～13ページで解説している。参照されたい。

例1）　Ⅱ6～7条の連弧文10単位

頸部文様帯の沈線文の単位を示している。条は横走する沈線文の本数（6～7本）。単位は連繋する沈線文の弧の数で10単位であることを示している。

写真PL	図版	遺構名	土器No.	器種	容量	残存率	施文手法	縄文	成形・調整・施文等　特記事項
1	1	SB214	1	壺	5.14	完			外ハケ（2と同一個体か）
	〃	〃	2	壺		1/4下		LR	□内外ハケ→ヨコナデ
	〃	〃	3	壺		1/4下			Ⅱ撚走沈線内を斜行沈線で重複する
	〃	SB221	8	壺	8.70	1/4下			内ハケ　原体が胴上半と下半で異なる
	〃	〃	9	壺	(11.98)	1/2		LR左→　沈→縄	Ⅳ山形沈線文　一部施文
	2	〃	13	壺	0.50	3/4			Ⅲ垂下文6単位　櫛2条L　Ⅳ連弧文L
	〃	〃	14	壺		完			Ⅲ突起2単位
	〃	〃	16	小型土器	0.10	完			赤彩
	〃	〃	17	鉢	(1.37)	1/2			赤彩
	〃	〃	18	壺		1/4下			Ⅰ沈線　左→右R
	〃	〃	19	甕	4.65	1/2	ⅡAR	LR　縄→沈	内上位ヨコハケ残し　下位タテミガキ　受2本結束沈線
	〃	〃	20	甕	8.75	3/4	ⅡAR	LR→	内ヨコハケ
	〃	〃	23	有孔鉢	2.01	1/4			外ナデ　内ハケ(ミガキなし)
	〃	SB231	24	壺	1.29	1/4下			□強くヨコナデ内壁　外ハケ
	〃	〃	25	壺		1/2下		LR→	縄Ⅰ・Ⅱ原体異なる
	〃	〃	26	壺		完		LR→	縄沈→縄(付加条風草語)→沈
	〃	〃	28	台付甕		完			コの字重ね文
1	3	SB228	30	壺		2/3			外ミガキ　Ⅱ擬似簾状文
1	〃	〃	31	壺		完			外タテハケ→タテミガキ　Ⅱ擬似簾状文4単位
	〃	〃	32	壺		完			外タテハケ→タテヘラミガキ(密)　内のみ赤彩
	〃	〃	33	壺		1/4下			Ⅱ単節直線文+ヘラ描櫛歯文　無彩
1	〃	〃	34	高杯	1.04	完			脚　内ハケ→ナデ→ヨコナデ
1	〃	SB245	35	壺	6.52	完			Ⅱ右→左R　Ⅳ L　外ハケ→ミガキ
1	〃	〃	36	壺		完			Ⅱ連弧文5単位・原体結束　施文R　外精製ミガキ
1	〃	〃	37	甕	4.51	完	Ⅱ L	LR→　縄→沈	櫛羽状文5単位
	〃	SB246	38	壺		2/3			被熱歪み土器　外精製ミガキ
2	4	〃	39	壺	3.08	完		LR→	□ヨコナデ　胴外ハケ・弱いミガキ
2	〃	〃	40	壺	5.48	2/3		LR→　沈→縄	□外ヨコナデ　内ミガキ　胴外ハケ
	〃	〃	41	壺		2/3		LR→	胴外精製ミガキ
	〃	〃	42	壺	(4.00)	2/3		LR→　2段施文	胴外ハケ
2	〃	〃	43	壺	6.45	2/3		LR→　縄→沈	胴外上位ハケ　下位ハケ→ミガキ　ケズリ
	〃	〃	44	壺		完		LR→　沈→縄	胴外ハケ
	〃	〃	45	壺		1/2		LR→　縄→沈	被熱歪み　胴外ハケ(一部ミガキ)
	〃	〃	46	壺		2/3		LR→　縄→沈	胴外ハケ
	〃	〃	47	壺		1/2		LR→　縄→沈	胴外ハケ
	〃	〃	48	壺		完		LR→	□ハケ→ヨコナデ　外反
	5	〃	49	壺	8.65	2/3		LR→　沈→縄	胴外ハケ
	〃	〃	50	壺	(5.56)	1/2		LR→	Ⅳ一部縄文　胴外ハケ→ミガキ
2	〃	〃	51	壺	2.84	2/3		LR→　縄→沈	Ⅳ胴最大径部分に隆帯　胴外ハケ
	〃	〃	52	壺	(6.89)	1/4		LR→　縄→沈	胴外精製ミガキ
	〃	〃	53	壺	4.30	1/2			胴外ハケ→ミガキ　隆帯
2	〃	〃	55	壺	7.18	2/3		LR→	□ヨコナデ　胴外上位ハケ→ナデ　下位ハケ　隆帯
2	〃	〃	56	壺		2/3		LR→　縄→沈	胴外ハケ→ミガキ
	〃	〃	57	壺		完		LR→	櫛歯4本による　簾状文・直線文
	〃	〃	58	壺	(0.62)	2/3		LR→　縄→沈	
	〃	〃	59	壺		2/3		LR→　縄→沈	櫛整撫文
3	6	〃	60	壺	3.11	完		LR→　縄→沈	Ⅲ垂下文9条　Ⅳ左→右L
2	〃	〃	61	壺	3.12	2/3			Ⅲ垂下文7条
	〃	〃	62	壺	1.60	2/3			
	〃	〃	63	壺	1.11	2/3			
3	〃	〃	64	壺	1.00	2/3			
	〃	〃	65	甕		2/3			内外ハケ　被熱　楕円に歪む
	〃	〃	66	甕		1/4下	Ⅲ La		被熱歪み有
3	〃	〃	67	甕	9.04	完	Ⅲ L		櫛原体ヤヤラ状　細く彫り深い　内ナデ
3	7	〃	68	甕	5.28	完	Ⅰ R	LR→	櫛羽状文の間隔が開く
	〃	〃	69	甕	0.80	1/2	L	RL→	櫛羽→波
	〃	〃	70	甕		1/4	ⅡAR	LR→	櫛波2段(上から下)→羽
	〃	〃	71	甕		1/2	Ⅰ R	LR→	櫛羽→波
	〃	〃	72	甕		1/2	XA		□刺突
3	〃	〃	73	甕	11.64	1/4	ⅠAR		内ハケ→ミガキ
4	〃	〃	74	甕	26.86	3/4	Ⅰ R	LR→	受口沈線(2本結束)　櫛波上→下　内ハケ→ナデ
	〃	〃	75	甕		完			台付甕脚部
	〃	〃	76	甕		完			台付甕脚部
	〃	〃	77	甕		完			台付甕脚部
	〃	〃	78	甕		完			台付甕脚部
	〃	〃	79	鉢	0.80	1/2			内外ミガキ　注口部有
	8	〃	80	甕	16.29	3/4			内外ミガキ確認できない
3	〃	〃	81	甕	12.20	2/3	ⅠBR	LR→	受口波状沈線R　胴外下半ミガキ
4	〃	SB260	82	壺		1/2		LR→　縄→沈	Ⅱ最上段縄文帯凸状に成形
	〃	〃	83	壺		1/4下		LR→	縄　縄→沈→ミ
	〃	〃	84	壺		1/4下		LR→　縄→沈	淡い赤彩　沈線内のみの可能性有

写真PL	図版	遺構名	土器No.	器種	容量	残存率	施文手法	縄文	成形・調整・施文等 特記事項
4	8	SB260	85	壺	(2.57)	完		LR→	櫛波状沈線　上2本は一周しない
4	〃	〃	86	壺		完		LR→	Ⅲ沈→縄Ⅱ・Ⅳ原体異なる)→刺点→ミガキ
	〃	〃	87	壺		1/4		RL→？	
	〃	〃	88	壺		1/4		LR→	Ⅰ沈線内赤彩
	〃	〃	89	壺		1/4			Ⅰ刺突
4	9	〃	90	壺	9.13	完		LR？附加条風	Ⅰ突起4　外縄・細→沈→精製ミガキ
4	〃	〃	91	壺		1/2		LR	Ⅲ横走沈線内細直・簾状文・精ミ
	〃	〃	92	壺		完		LR	縄付加条風　沈→縄　Ⅱ精製ミガキ
	〃	〃	93	壺	4.53	1/4			胴外沈→ミガキ　沈線内淡い赤彩
5	〃	〃	94	広口壺	1.27	完		LR 附加条風	胴外下半タテハケ→ケズリ→ミガキ　内下半ヘラミガキ
5	〃	〃	95	広口壺	1.87	完			Ⅰ刺突　精製ミガキ
5	〃	SB1184	96	壺	5.52	完			内外陸帯剥離
5	〃	SB260	97	壺	4.70	完			外精製ミガキ
	〃	〃	98	鉢	1.86	1/2		LR	内外精製ミガキ　波状沈線　右→左 I.
5	10	〃	99A	鉢	2.23	1/2		LR	内外精製ミガキ
	〃	〃	99B	小型土器		2/3			外ミガキ　輪積痕　赤彩
5	〃	〃	100	鉢	4.11	1/2		LR	内外精製ミガキ　櫛R
	〃	〃	101	鉢	1.27	1/4下		LR　縄→沈→ミ	内外精製ミガキ　口刺突
	〃	〃	102	鉢	0.65	1/2			口突起6単位？
5	〃	〃	103	甕	4.03	完	VGR		口縁文原体で押圧　櫛垂下文4単位
5	〃	〃	104	甕	2.82	完	VFR		口押圧　櫛垂下文5単位
5	〃	〃	105	甕	1.20	完	VFR LR		内ヨコハケ→ナデ
5	〃	〃	106	甕	(0.99)	完	VER LR		内ヨコハケ→ミガキ
5	〃	〃	107	甕	0.93	完	VER LR		口刺突
5	〃	〃	108	甕	2.41	完	Ⅲ Rb RL		内外精製ミガキ　口指オサエ
6	〃	〃	109	甕	4.62	1/2	Ⅲ Ra LR		口指オサエ
6	〃	〃	110	甕	1.04	完	Ⅲ L		外下位タテケズリ→タテミガキ
6	〃	〃	111	甕		2/3	Ⅲ Rb LR←？		内ヨコハケ→ミガキ
6	〃	〃	112	甕	2.87	完	Ⅲ R LR		内外精製ミガキ
6	11	〃	113	甕	6.92	1/2	Ⅰ BR LR	口指オサエ	内外精製ミガキ　最大径外側突列点・連弧状
	〃	〃	114	甕	(4.99)	完	Ⅰ BR LR		櫛羽状文8単位　口指オサエ
	〃	〃	115	甕		1/4			外ハケ　内精製ミガキ　口指オサエ
	〃	〃	116	甕		1/4			外ハケ　内精製ミガキ　口隆帯1箇所
	〃	〃	117	有孔鉢		完			内外ハケ残す精製ミガキ
	〃	SB261	118	壺		2/3			外精製ミガキ　隆帯の内面亀裂
	〃	〃	119	壺		1/4下		LR　縄→沈・櫛	外精製ミガキ
	〃	〃	120	壺		1/2		LR　沈→縄	外精製ミガキ
	〃	〃	121	壺	(3.04)	1/3		LR	外精製ミガキ　沈線内赤彩
	〃	〃	122	壺		1/4下		LR	頸部系多段横帯文壺　頸部突起有
	〃	〃	123	甕		1/4			
	〃	〃	125	甕		1/4下		LR	口オサエ
	12	〃	126	甕	0.79	1/3	Ⅰ R LR		
	〃	〃	127	甕		1/4下	Ⅰ AR		
	〃	〃	129	鉢	0.21	1/2			
	〃	SB264	130	甕		1/4	V R	LR	内ミガキ
	〃	〃	131	甕	2.22	1/2	VFR	LR	櫛垂下文5単位？
108	〃	〃	132	甕	2.14	完	Ⅲ R		内外ハケ残すミガキ　光沢有
	〃	〃	133	甕	7.84	3/4	Ⅲ		櫛下位斜縦はR
	〃	〃	134	甕		1/3	Ⅲ L	LR	外刺突　右側に押し引き風　口オサエ
	〃	〃	135	甕	0.94	完	Ⅰ AR		櫛波(上→下)　中部高地型3回静止 R
	〃	〃	136	甕	1.15	1/2			
	〃	〃	137	鉢	1.26	1/2		LR	内外ミガキ
105	〃	〃	138	壺	2.80	完		LR	外ハケ調整後　肩部粗いミガキ
	〃	〃	139	壺		1/2		LR	
	13	SB265	140	壺	6.25	1/3		LR　沈→縄	外横帯部精製ミガキ　下位ハケ
	〃	〃	142	壺	4.72	完		LR　粗い縄文	胴外上位ハケ　下位ナデ
	〃	〃	143	壺	0.53	完			口突起2対4単位　孔4箇所
100	〃	〃	144	鉢	1.29	完			口突起6単位　孔1箇所
	〃	〃	145	鉢	0.97	1/3			
	〃	〃	146	鉢	0.77	1/3		LR	内外ミガキ
	〃	〃	148	高杯		完			脚外部有段　円盤充填
	〃	〃	149	壺	13.80	3/4	Ⅲ		櫛糸縄文2段に重ねる　内ミガキなし
	14	〃	150	甕	2.11	3/4	Ⅲ La		Ⅰ刺突
	〃	〃	151	甕		完	Ⅰ BR		櫛頸部・簾状風の波状文
	〃	〃	152	甕	4.17	完	Ⅰ DR		櫛羽状部分と短横線縦列部分有
	〃	〃	153	甕		3/4		口縁LRL？	外ハケ残す粗いミガキ　内ミガキなし
	13	〃	154	大型鉢	(10.24)	1/2			内外精製ミガキ
	14	SB266	155	甕	7.66	3/4	ⅢRb	擬似縄文	内外精製ミガキ
	〃	〃	156	甕	7.37	完	Ⅰ BR	LR	口外　タテハケ→ヨコナデ
	〃	〃	157	甕		2/3	VIFR	LR	
	〃	〃	158	壺		1/4			懸垂(2条1単位左→右)→沈

写真PL	図版	遺構名	土器No.	器種	容量	残存率	施文手法	縄文	成形・調整・施文等　特記事項
	14	SB266	159	壺	0.26	1/2		RL？	外北線横帯間に一部縄文施文有
6	15	SB267	161	壺	6.15	2/3		LR　縄→沈	胴外ハケ　口ヨコナデ・ナデ
6	〃	〃	162	壺	5.21	3/4		複RLRか？	胴外ハケ後 粗いミガキ　光沢有
	〃	〃	163	壺		完		LR	Ⅱ連孤文　左から右に描き し 6回静止
	〃	〃	164	壺	(5.36)	3/4		LR　縄→沈	Ⅱ連孤文　右から左に描きR 5回静止
	〃	〃	165	壺		完		無R	Ⅱ沈線太い　押し出し凸帯
	〃	〃	166	壺		完		複LRL	Ⅱ2本結束片口有の山形文　口縁部大きく開く
	〃	〃	167	壺		完		LR	口縁部大きく開く
	〃	〃	168	壺		3/4		LR	口ヨコナデ・ナデ　胴ハケ
	〃	〃	169	壺	8.57	3/4			胴外上位タテミガキ　下位ヨコミガキ
	16	〃	171	壺		1/3			被熱橙褐色　他の土器と異なる
6	〃	〃	172	壺		2/3			Ⅳ山形文+横走沈線4条　Ⅴ鋸歯文
6	〃	〃	173	壺	1.37	完			口突起
	〃	〃	174	赤彩壺		完			
7	〃	〃	175	甕	2.13				
7	〃	〃	176	甕	6.98	完	Ⅰ BR	LR	縄付加条風単節縄文　櫛波→羽　内ハケ
	〃	〃	177	甕	6.73	3/4	Ⅰ BR	RL	内ミガキ
7	〃	〃	178	甕	0.76				
	〃	〃	179	台付甕	0.86	完			コの字重ね文6単位
	〃	〃	180	有孔鉢	0.85	1/2			外ハケ→ナデ　内ハケ →ミガキ
	〃	SB268	181	壺		1/4		LR　沈→縄	
	〃	〃	182	壺		1/3			口刺突
	〃	〃	183	壺		1/4下			縄頸壺肩部　櫛描短斜線+沈+斜格子目
	〃	〃	184	鉢(高杯)	0.69	1/4			口刺突
	〃	〃	185	甕		1/3	Ⅲ Ra		
	17	SB271	186	壺		完		LR	細頸系多段横帯文壺
	〃	〃	187	壺	0.51	2/3			櫛直線文4条　連孤文1条　沈波状沈線
	〃	〃	188	甕	6.56	完			内外精製ミガキ　ミガキ調整痕
119	〃	〃	189	甕	4.90	完	Ⅲ Ra		口縁文原体で刺突　1箇所羽状文ⅡA
	〃	SB272	190	壺		3/4			外ハケ→ナデ　内ハケ
	〃	〃	191	壺		1/2			外精製ミガキ　白色系に焼き上げる
102	〃	〃	192	高杯	0.84	完			
	〃	SB273	194	壺		1/4下		LR　附加条風	
	〃	〃	196	壺		1/4下			横走沈線内 櫛による押し引き列点文R・直線文
	〃	〃	199	甕		1/4下	Ⅲ	LR	口指オサエ
	〃	〃	200	鉢	0.61	1/3			
	18	SB274	201	壺		3/4		LR　沈→縄→ミ	外精製ミガキ　白色系に焼き上げる
	〃	〃	203	壺		1/4下		LR	外LR状文+押し引き列点文
	〃	〃	204	壺		1/4下			細頸壺頸部　淡い赤彩
	〃	〃	205	壺		1/4下		LR　沈→縄	Ⅱ横走沈線
	〃	〃	206	壺		1/4下			横走沈線内　櫛による短斜線文・直線文
	〃	〃	207	壺		1/4下			貼付け凸帯　凸帯上面横走沈線→刺突
	〃	〃	208	壺		1/2			胴外上位ハケ→粗いヘラミガキ　下位ミガキ
	〃	〃	209	小型土器		完	F.		櫛垂下6単位　1単位のみ3条の垂下文で充填
	〃	〃	210	小型土器		完			
	〃	〃	211	甕		1/3	Ⅱ R	LR	口オサエ　胴胸突
	〃	SB275	212	鉢	1.03	1/4			
	〃	SB277	213	壺		3/4		LR	口内外面赤彩ミガキ
	〃	〃	214	壺		3/4			口突起2対4単位
	〃	〃	215	壺		1/3			Ⅲ懸波状文2条左→右　列点下→上
	〃	〃	216	鉢	1.53	1/2			外ミガキ　内口縁部のみミガキ　胴部ハケ
	〃	〃	217	甕	0.74	3/4	ⅦAR	LR	
	〃	〃	218	甕	19.93	3/4	Ⅰ AR	LRL　縄→沈	内ハケ
	19	SB281	219	甕	3.73	1/3			外ハケ　内ナデ
119	〃	〃	220	甕	1.62	完	ⅨAR		口刺突
	〃	SB282	221	鉢	0.83	1/3		LR	内外精製ミガキ
	〃	〃	222	壺		1/3		LR	口刺突　内外精製ミガキ
	〃	〃	223	甕		1/4	Ⅰ BR	RL	口指オサエ
	〃	SB284	224	壺		完		LR	内外ミガキ
	〃	〃	225	壺		1/3		LR縄→沈→ケン	
	〃	〃	226	壺		1/3			懸4単位　2条右→左　刺突列点文
	〃	〃	227	壺	(2.00)	完			孔対面2箇所　外　淡い赤彩
103	〃	〃	228	壺	0.61	完			外精製ミガキ
	〃	〃	229	壺	0.20	完			外ミガキ
	〃	〃	231	壺		2/3		LR	Ⅳ連孤文
	〃	SB286	232	鉢	1.33	1/3			外コビナデ　内ハケ→ミガキ　粗製土器
	〃	〃	233	壺		1/3		Ⅱ・Ⅳ RLR	縄沈→縄　Ⅱ凸帯 横走沈線　Ⅲ精製ミガキ
	〃	〃	234	壺		1/3		LR 附加条風	縄Ⅰ,Ⅱ上段とⅡ下段の原体異なる　沈→縄
101	20	〃	235	鉢？	0.83	完			横走沈線内　刺突列点文
104	〃	〃	236	壺		3/4			内外赤彩ミガキ
	〃	〃	238	甕	(2.27)	1/2	Ⅰ AR	LR	口内外陸帯

写真PL	図版	遺構名	土器No.	器種	容量	残存率	施文手法	縄文	成形・調整・施文等　特記事項
	20	SB287	239	壷		1/3		LR　縄→沈	Ⅱ連孤文4本結束右→左に描き
	〃	〃	240	壷		1/2		LR　縄→沈	懸鈎状文5単位　被熱歪み土器　淡い赤彩
	〃	〃	241	壷		2/3		LR　縄→沈	被熱歪み土器　淡い赤彩
	〃	〃	242	壷		完		LR　縄→沈→ミ	外上位ナデ・ハケ→ミガキ　下位ヨコハケ→ミガキ光沢有
	〃	〃	243	壷		完			内外ナデ
	〃	〃	247	大型甕	37.23	3/4	ⅠBR	LR	内ハケ　ミガキを加えない
	21	SB290	248	壷		完		LR　沈→縄	口ヨコナデ　胴外ハケ
	〃	〃	249	甕	0.98			RL	
	〃	SB302	250	壷		1/4下		LR　縄→沈	縄頸系多段横帯文壷
	〃	〃	251	壷		1/4下		LR　縄→沈	壷胴部外精製ミガキ
	〃	〃	252	甕		1/4下	Ⅰ R		外胴有段部に刺突
	〃	〃	253	甕		1/4下	Ⅰ R		口刺突　外面に輪積み有段部
	〃	〃	254	甕		1/4下	Ⅸ		
	〃	〃	255	甕			VIFR	LR	
	〃	SB306	256	壷	7.03	1/4		LR　沈→縄	Ⅱ横走沈線文・擬補直線文+波状沈線文　外ハケ
	〃	〃	257	壷		2/3		RL	口ナデ・ヨコナデ　胴外ハケ
	〃	〃	258	壷		1/2			外上位ハケ→ミガキ　下位ハケ→ヨコケズリ→ミガキ
	〃	〃	259	甕		1/4下		LR	
	〃	〃	260	甕		1/4下	Ⅰ R		外最下位・施文後　軽いケズリ→ミガキ
100	〃	〃	261	鉢	1.73			RL	
7	22	SB303	262	壷	5.73	3/4		口擬縄文 ⅣLR	縄→沈　口外ヨコナデ　胴上位ハケ　下位ナデ
	〃	〃	263	壷		3/4		LR	口外ヨコナデ→ハケ　内赤彩　胴外ハケ
	〃	〃	264	壷		2/3		LR	口外ヨコナデ→ハケ　胴外ハケ
	〃	〃	265	壷	(3.77)	2/3			外精製ミガキ
7	〃	〃	266	壷	4.50	完		LR	口外ヨコナデ　胴外ハケ
	〃	〃	267	壷		1/4下			外淡い赤彩　沈線内のみか？
	〃	〃	268	壷	0.17	完			
7	〃	〃	269	甕	4.92	3/4	Ⅸ AR	LR	楕波状文帯4ブロック分割中部高地型R 内精製ミガキ
	〃	〃	270	甕	1.51	完	ⅠBR	LR	内底ミガキなし
7	〃	〃	271	甕	1.21	完	ⅠBR	LR	楕波状文上→下　上縁内型　下4回静止
103	23	SB307	272	壷	0.26	完		LR	外精製ミガキ
	〃	〃	274	甕	1.29	1/2	ⅦAR	LR	櫛中部高地型　3ブロック分割
	〃	〃	275B	鉢	0.76	完存			内面にベンガラ残存　分析試料
	〃	SB309	275A	壷	1.15	1/2		LR	口内面の入赤彩　外精製ミガキ　白く焼き上げる
8	〃	〃	276	壷	8.09	3/4		Ⅱ撚糸縄文	Ⅱ　沈→撚縄(ハケ痕突)　胴外ハケ残すミガキ
8	〃	〃	277	壷	2.35	3/4	Ⅰ R	R	楕波→羽
	〃	〃	278	台付甕？		1/4下			外意下→横縄充填(左→右)　内精製ミガキ
	〃	〃	279	壷	(14.21)	1/4下	ⅠBR	LR	内ハケ
8	〃	〃	280	高杯		2/3			内2次転用の痕付着
	〃	〃	282	鉢	0.40	1/3			外　剪圧痕の剥離あり
	〃	SB310	284	鉢	1.35	1/3			口緩やかに内彎する
	〃	〃	285	鉢	0.41	完			突起4箇所　孔1箇所　内外ミガキ
	〃	〃	286	甕	0.94	完	Ⅱ AR		櫛羽状文・斜線文混合　内外ミガキ　口刺突
	24	SB312	288	壷		2/3		LR　沈→縄	Ⅲ懸鈎状8単位　Ⅳ～Ⅴ淡い赤彩
	〃	〃	289	甕	(16.99)	完	VIER	LR	楕垂下ブロック区画
	〃	SB313	290	壷		完		LR　縄→沈	Ⅱ重山形文3単位　埋土中より出土
	〃	SB314	291	鉢	0.95	3/4			
	〃	〃	292	甕	9.28	2/3	ⅠBR		楕波→羽　口指オサエ
	〃	SB316	293	壷		完		LR　縄→沈	Ⅱ押し出し凸帯板　ヨコナデ
	〃	〃	294	壷		3/4		擬似縄文	外精製ミガキ　重い壷
	〃	〃	295	鉢	0.78	3/4			内外精製ミガキ
	〃	〃	296	甕		完	Ⅰ R		
	〃	〃	297	甕	7.66	1/2	ⅠBR	LR	楕原体ザラ状　内精製ミガキ
	25	SB317	298	壷	(3.63)	2/3			外ハケ一部ミガキ　光沢有
	〃	〃	299	壷		2/3			外ハケ
	〃	〃	300	壷		3/4			外精製ミガキ　白く焼き上げる　注口はない
	〃	〃	301	鉢	0.61	1/2			突起4単位か？
122	〃	〃	302	壷		2/3		RLR	精製土器　胎土を精選し薄く仕上げる
	〃	SB318	304	壷		1/4下			外沈→波　淡い赤彩　ミガキ
	〃	〃	305	壷		1/4下			懸原体2本結束　2条左→右
	〃	〃	306	壷		3/4			懸鈎状文8単位　内外精製ミガキ
	〃	〃	307	小型土器	0.15	2/3			
	〃	〃	308	甕	0.55	1/3	Ⅰ R		縄Ⅰa RLR　Ⅰb LR　縄→沈
	〃	〃	309	甕		1/4下		RL	楕波上→下　格子目文
	〃	〃	310	甕	14.78	3/4	ⅠAR		楕波→羽　内外ミガキなし
8	26	SB319	311	壷	8.49	完		LR	外精製ミガキ　胴最大径部に焼成後穿孔
	〃	〃	312	壷		完			外ハケ残すミガキ　胴最大径のみヨコミガキ
	〃	〃	313	壷		完			外ミガキ　重い土器
8	〃	〃	314	壷	3.24	完		LR　縄→沈	口外ナデ・ハケ→ヨコナデ　内ミガキ　胴外精製ミガキ
	〃	〃	315	壷		完			口外ヨコナデ　胴外精製　Ⅱ連→刺突　Ⅳ文様帯有
	〃	〃	316	壷		2/3			Ⅲ精製ミガキ　Ⅴ連孤文10単位

写真PL	図版	遺構名	土器No.	器種	容量	残存率	施文手法	縄文	成形・調整・施文等　特記事項
	26	SB319	317	壺		1/4下			Ⅴ文様帯部分　櫛歯沈線文
	〃	〃	318	壺		1/4下			Ⅱ文様帯部分 擬縄状文
	〃	〃	319	壺		1/4下			Ⅲ類4単位　縦1本で下に押し引き
	〃	〃	320	壺		1/4下			Ⅲ文様帯 懸垂文　精製ミガキ
8	〃	〃	321	壺	0.93	完			白く焼き上げる
	〃	〃	322	甕		1/2			コの字重ね文4単位？　櫛波状文 中部高地型
	〃	〃	323	甕	(3.49)	1/2		RLR	コの字重ね文4単位
	27	〃	324	甕	0.29	完			コの字重ね文5単位
	〃	〃	325	台付甕？	0.33	1/4	Ⅲ AR	RL	縄破条気味に施文　内ミガキ
	〃	〃	326	台付甕？	0.54	3/4		LR	外ハケ→ナデ　内ミガキ
	〃	〃	327	高杯		完			内ミガキ
	〃	〃	328	壺		3/4			外ハケ(ミガキなし)　内面に把手有
100	〃	〃	329	鉢	0.83	3/4		LR　縄→沈	
121	〃	SB320	330	壺	0.43	3/4		LR を斜位施文	縄沈→縄　外ハケ残すミガキ
	〃	〃	331	壺		1/4		LR　縄→沈？	Ⅱ6～7条の連弧文(沈線文)
	〃	〃	332	有孔鉢	0.83	2/3			内外精製ミガキ
	〃	〃	333	壺	6.06	3/4			外ハケ残すミガキ
	〃	SB324	334	甕		1/3		LR	口突起　櫛歯内型波状文？
	〃	〃	335	台付甕	1.85	1/2		LRL	コの字重ね文4～5単位　波→コ
105	〃	〃	336	壺	2.39	完			口縁部打ち欠き
100	〃	SB323	337	鉢	2.13	1/2			
	〃	〃	338	鉢		1/4下			脚上面　細歯沈線文部分は無彩　他赤彩
	〃	〃	339	有孔鉢	1.88	1/3			
	28	SB325	340	壺		2/3			外ハケ残す弱いミガキ
	〃	〃	341	壺	0.32	完		LR	口縁部打ち欠き？
	〃	〃	342	広口壺	5.76	2/3		LR	外薄い赤彩部のみタテミガキ　内ハケ
114	〃	〃	343	甕	3.05	完	Ⅲ R	LR	櫛ヤリ状　内胴下位のみタテミガキ
	〃	SB326	344	甕	2.00	3/4			外ミガキ　内弱いミガキ
	〃	〃	345	甕	1.20	3/4			外ハケ→ミガキ　内下位のみミガキ
	〃	〃	346	台付甕	0.75	3/4			外ミガキ
116	〃	〃	347	台付甕	0.87	完		R	櫛2本1組結束原体-波状文　左から右に描きR
	〃	〃	348	甕	3.22	1/4	R	LR	櫛中部高地型
	〃	〃	349	甕		1/4	Ⅰ BR		口上位からの刺突　櫛歯文乱れ有
	〃	〃	350	鉢	(2.07)	1/4			外波状沈線文風　口刺突
8	29	SB328	351	壺	9.78	完		LR　沈→縄	外胴上半ミガキ　下半精製ミガキ
	〃	〃	352	壺	(7.49)	1/4下			口ハケ→ヨコナデ　Ⅴ細-波状沈線
9	〃	〃	353	壺		3/4		LR　縄→沈	口ハケ→ヨコナデ　沈1a-b 2本1組結束沈線R
9	〃	〃	354	壺	5.88	2/3		LR　縄→沈	外精製ミガキ
	〃	〃	355	壺		1/3			外淡い赤彩
	〃	〃	356	小型壺		完			欠損部を研磨　小型鉢として転用
	〃	〃	357	壺		完			小型鉢として転用か？
9	〃	〃	358	高杯	0.38	3/4			内外赤彩
	30	〃	359	甕	5.75	完	Ⅰ BR		櫛羽→波(畿内型)
9	〃	〃	360	甕	2.06	完	Ⅰ BR	LR	櫛直→羽
	〃	〃	361	甕	11.05	1/4	Ⅲ La	LR	
	〃	〃	362	甕		1/4下			内外ハケ→軽いミガキ
	〃	〃	363	甕		1/4	Ⅰ AR		櫛羽→亟　原体2本歯2つ結束
	〃	〃	364	甕		1/2			コの字重ね文
9	〃	〃	365	甕	2.42	完		LRL　縄→沈	コの字重ね文5単位
	〃	SB329	366	壺	0.76	完			外ハケ→ミガキ
	〃	〃	367	壺		1/2			外精製ミガキ
	〃	〃	368	壺		1/4下			口内面精製ミガキ
	〃	〃	369	甕	0.69	完	Ⅱ AR		口刺突
	〃	〃	370	甕	0.80	2/3		LR	櫛斜線文+ズレた羽状文
	31	SB331	371	壺	(1.06)	2/3			外ミガキ
	〃	〃	372	壺		2/3			外ミガキ
	〃	〃	373	甕	6.39	1/2	Ⅰ BR		口オサエ　内ハケ(ミガキなし)
	〃	〃	374	甕	6.26	1/2	Ⅱ L		口刺突　内ハケ→ミガキ
	〃	〃	375	甕	0.76	3/4			コの字重ね文 4単位櫛描施文
	〃	〃	376	台付甕		1/4	Ⅰ AR		蕨縄状文
101	〃	〃	377	有孔鉢	1.57	完			内淡いミガキ
104	〃	〃	378	壺		完			内外精製ミガキ
	〃	SB332	379	鉢	0.80	3/4			内外無彩　精製ミガキ
	〃	SB351	380	壺		1/4			外ハケ残すミガキ
	〃	〃	381	壺		1/3			縄膨壺　沈線内赤彩
	〃	〃	382	壺	0.25	完			施文原体櫛
101	〃	〃	383	鉢	1.25	1/2			ヘラ描き沈線による細歯文　外タテミガキ　内ヨコミガキ
	32	SB352	384	壺		1/4下		LR	櫛波　沈
	〃	〃	385	甕	2.03	1/2			内ミガキ
	〃	〃	386	甕	1.87	1/3	Ⅸ R	LR	台付加技法
	〃	〃	387	台付甕？		1/4下	Ⅱ AR		受口状口縁　櫛受口部波状文　羽→羽

写真PL	図版	遺構名	土器No.	器種	容量	残存率	施文手法	縄文	成形・調整・施文等　特記事項
	32	SB352	388	壺		1/4下			口Ⅰb上から刺突　櫛塵→羽
	〃	〃	389	鉢	0.70	1/2			片口有
	〃	SB353	390	鉢	1.05	2/3			外下部無彩・ミガキ
	〃	〃	391	台付甕	0.82	完	Ⅶ AR	LRL　縄→沈	内外ハケ→軽い ミガキ
9	〃	SB354	392	壺	5.74	完			口ヨコナデ　肩外上位ハケ→ナデ　下位ケズリ→ナデ
	〃	〃	393	壺	5.55	完			外ハケ→ナデ　胴底成後穿孔
	〃	〃	394	壺		3/4			外精製ミガキ　底部焼成後穿孔
	〃	〃	395	壺	1.19	完		LR　縄→沈	外ミガキ
	〃	〃	396	壺	(4.15)	2/3		LR	口ヨコナデ　Ⅱ精製ミガキ　Ⅳ LR縄文帯
	33	〃	397	甕	4.93	1/4下	Ⅲ L		口刺突　櫛波(上から下)→斜
9	〃	〃	398	甕	1.80	3/4	Ⅲ R	LR	櫛波(上から下)中部高地型→斜　内精製ミガキ
119	〃	〃	399	甕	0.65	3/4	Ⅲ R		口刺突　櫛波→斜　内精製ミガキ
10	〃	〃	400	甕	2.05	完	Ⅰ BR	LR	櫛波(鎧内型)→羽
	〃	〃	401	甕		1/2	Ⅰ AR	RLR	櫛波(鎧内型)→羽
	〃	〃	402	甕	2.24	3/4	Ⅳ Ra		口オサエ　内ハケ→軽いミガキ
10	〃	〃	403	甕	1.13	完	Ⅶ R		外波状沈線で垂下7単位　口刺突
10	〃	〃	404	壺	0.93	2/3		擬似縄文	撚糸布圧痕カ?　コの字重ね文10単位
	〃	〃	405	鉢	1.75	3/4	Ⅲ L		片口部有
10	〃	〃	406	鉢	2.92	2/3		LR	内外精製ミガキ
	〃	〃	407	鉢	2.22	1/2			口内ハケ→精製ナデ
	〃	〃	408	無頸壺	0.60	1/4			内外赤彩・ミガキ(内スクリーントーン欠落)
	34	〃	409	鉢	1.35	2/3			内外赤彩・ミガキ
10	〃	〃	410	鉢	1.89	3/4			内外赤彩・ミガキ
	〃	〃	411	鉢	0.63	1/3			内外赤彩・ミガキ
	〃	〃	412	小型土器	0.05	1/2			内外軽いミガキ
110	〃	SB355	413	甕	3.26	2/3	Ⅲ R		櫛刺縄文上下2段　上段→下段　堆土上層出土
	〃	SB359	414	壺		1/2		LR　縄→沈	口突起4箇所以上　外ヨコナデ　胴ハケ残すミガキ
	〃	〃	415	壺	1.50	完			外精製ミガキ
	〃	〃	416	壺		1/4下			懸垂状文　Ⅱ軽いケズリミガキ
	〃	〃	417	鉢	1.37	1/2			外ナデ　内ミガキ　粗製鉢
	〃	〃	418	高杯		2/3			口縁直立　底部に穿
	〃	〃	419	鉢(?)		完			内外ミガキ　底部ナデ
10	〃	SB360	420	無頸壺	1.85	2/3			内ハケ→ナデ
10	〃	〃	421	壺	1.84	2/3		LR	内肩部ケズリミガキ(実測図を修正)
10	〃	〃	422	鉢	3.09	1/2			内ハケ→ナデ
10	35	〃	423	壺	4.09	完		LR　縄→沈→ミ	外ハケ残す精製ミガキ　Ⅱ・Ⅰ字文系
	〃	〃	424	壺		1/3			外精製ミガキ　沈→ミ　Ⅴ・Ⅰ字文系
10	〃	〃	425	壺	(6.99)	完		LR　縄→櫛	外ハケ→ヘンカケ→ミガキ　精製ミガキ
11	〃	〃	426	壺	7.03	2/3		LR	Ⅱ鋼条横走革新縄文　口ハケ→ヨコナデ　外ハケ
11	〃	〃	427	壺	5.41	完		LR 縄→櫛→沈	口ミガキ　外精製ミガキ　胴焼成後穿孔
11	〃	〃	428	壺	5.91	完		LR　沈→縄	外ハケ
	36	〃	429	壺	18.55	3/4			
11	35	〃	430	鉢	1.11	2/3			孔1箇所
11	〃	〃	431	甕	1.69	完	Ⅰ BR	LR	櫛羽→羅　内ハケ→ナデ
	〃	〃	432	甕		1/4下	Ⅰ	擬似縄文	
	36	〃	433	甕		1/4	Ⅱ AR	RL	櫛羽→羅
	〃	〃	434	甕		3/4	Ⅱ AR	RL	櫛羽→羅
11	〃	〃	435	甕	2.77	2/3	Ⅰ R	擬似縄文?	櫛羽→羽　口オサエ　色調褐色系
12	〃	〃	436	甕	11.30			LR	
11	〃	〃	437	甕	12.86	完	Ⅰ AR	LR	櫛羽状文6ブロック羽→羅　内精製ミガキ　黄褐色系
12	37	〃	438	甕	6.59	完			櫛格子目文→羅　色調褐色系
	〃	〃	439	壺	15.24	2/3		LR　縄→沈	外精製ミガキ　内ミガキ
12	〃	〃	440	甕	5.71	1/2	VER LR		口ヨコブロック
12	〃	〃	441	甕	33.68	3/4	Ⅰ BR	RL	内精製ミガキ
12	〃	〃	442	甕	3.04	2/3	ⅦAR	RL　(図方向逆)	内精製ミガキ
	38	〃	443	甕	6.01	1/4	Ⅰ AR	LRL? +刺突	櫛羽→波
	〃	〃	444	甕		1/4下	Ⅰ R		羽状文原体　棒状1本づつ
	〃	〃	445	壺	(0.63)	2/3	Ⅲ L		口刺突
13	〃	〃	446	甕	0.49	完	Ⅶ R	LR	
	〃	〃	447	甕		完			台付甕脚　充填技法
	〃	〃	448	甕		完			台付甕脚
13	〃	SB362	449	壺	5.20	3/4		Ⅰ LR?	Ⅱ擬似縄文　外ハケ残すミガキ
	〃	〃	450	壺		2/3			口ハケ　外精製ミガキ　胴最大径部に記号
	〃	〃	451	壺		完			外精製ミガキ
	〃	〃	452	壺	0.67	2/3		擬似縄文?	外精製ミガキ　淡い赤彩
	〃	〃	453	壺	1.07	2/3		LR　縄→沈	Ⅱ櫛波状文有
13	39	〃	454	壺	6.64	完		LR　縄→沈	懸7単位　波2条左→右
13	〃	〃	455	甕	12.45	完	Ⅱ AR		Ⅰb上から刺突　顆一部櫛波状文
	〃	〃	456	甕	7.91	1/4下	Ⅰ R	擬似縄文? 粗い	櫛羽→波
	〃	〃	457	甕	(1.25)	3/4	Ⅱ AL		櫛羽状文7単位
13	〃	〃	458	台付甕	0.70	2/3			コの字重ね5単位　櫛原体による施文

写真PL	図版	遺構名	土器No.	器種	容量	残存率	施文手法	縄文	成形・調整・施文等　特記事項
	39	SB362	459	鉢		1/4			外撚歯文(ヘラ)文様以外赤彩　内ナデ
	〃	〃	460	鉢		1/4下			外撚歯文(ヘラ)　内外赤彩
	〃	SB361	461	壷		1/4		LR　縄→沈	Ⅲ～Ⅳ文様帯　沈線文
	〃	〃	462	壷		1/4下		LR　縄→沈	Ⅳ文様帯　沈線文
	〃	〃	463	壷		1/4下		LR　沈→縄	Ⅳ文様帯　沈線文
	40	〃	464	甕		1/4下			SB360-444と同一個体
	〃	〃	465	甕		1/4下	Ⅲ R		
	〃	〃	466	台付甕？		1/4下			楕円状文　コの字重ねくずれ　櫛原体施文
	〃	SB363	467	壷	10.91	1/3			外精製ミガキ
	〃	〃	468	壷		完		LR　縄→沈	□波状沈線文R
	〃	〃	469	壷		完		LR　縄→ミ	□外ミガキ　Ⅲ精製ミガキ
	〃	〃	470	壷	0.27	完			外精製タテミガキ　内ヘンガラ痕跡有
	〃	〃	471	甕	5.07	1/4	Ⅰ BR		楕ナデラ状　内ハケ→ナデ
	〃	〃	472	甕	21.60	2/3	Ⅰ AR		内精製ミガキ　煤・コゲなし
	〃	〃	473	鉢	0.66	2/3			内ナデ
	41	SB364	474	壷	4.57	1/4		RLR？	縄縄似縄文？ □外ヨコナデ→ヨコミガキ　胴外精ミ
	〃	〃	475	壷		1/2		LR　縄→沈	□外ヨコナデ　外タテハケ→ミガキ
	〃	〃	476	壷	(12.03)	1/4下		撚似縄文	外ハケを残すミガキ
13	〃	〃	477	壷		2/3			外精製ミガキ　淡く赤っぽい
13	〃	〃	478	壷		2/3		LR	Ⅱ直弧文　外精製ミガキ
14	〃	〃	479	壷	0.86	完		LR　縄→沈	懸4単位　列点文　櫛上→下
14	〃	〃	480	壷		1/4下		LR　縄→沈	懸4単位？　波5条左→右　□無彩
	〃	〃	481	鉢	2.16	1/4			
	〃	〃	482	鉢	0.39	3/4			孔1箇所
	〃	〃	483	壷		1/3			淡い赤彩
	〃	〃	484	壷		完			垂底部(あげ底)　内ナデ
	〃	〃	485	鉢		1/3			外赤彩　内口縁のみ赤彩(スクリーントーン欠落)
	〃	〃	486	壷		1/3		R	口縁部　内外精製ミガキ
	〃	〃	487	甕		1/4下			
	〃	〃	488	台付甕？		1/4下			楕円状文　沈線歯状線文
	〃	〃	489	甕		1/4下	Ⅱ R		
14	42	SB369	490	壷		2/3			外精製ミガキ　黄橙褐色～黄白色
14	〃	〃	491	壷		1/4下		LR　沈→縄→ミ	外多段横帯文系　細頸壷
	〃	〃	492	壷		1/4		LR　縄→沈	懸波→沈　頸外精製ミガキ
	〃	〃	493	壷		1/4下		LR　縄→沈	外下半　精製ミガキ
	〃	〃	494	壷	(2.93)	1/3			外精製ミガキ
	〃	〃	495	壷		2/3			外精製ミガキ
	〃	〃	496	壷		2/3		LRL　縄→沈	□外ヨコナデ　内ミガキ
14	〃	〃	497	甕	(5.91)	2/3	VFR		楕波→直　垂2条1組
14	〃	〃	498	甕	0.65	2/3	VER	LR　縄→沈	楕垂6単位　頸外段差部刺突
	〃	〃	499	甕		1/4下	Ⅰ AR		楕篠→羽
14	〃	〃	500	甕		1/4下	Ⅲ R	LR	□オサエ
101	〃	SB384	501A	鉢	1.19	完			外ハケ→ナデ　内ハケ
	43	SB373	501B	壷		完		L RR ER附加	□内外ミガキ　内肩部コマミガキ
	〃	〃	502	壷		2/3		LR　縄→沈	外上位　ハケを残すタテミガキ
	〃	〃	503	壷	(8.22)	2/3			外ハケ→ナデ　重い壷
101	〃	〃	504	鉢	1.97	1/2		LR	内外精製ミガキ
	〃	〃	505	鉢	0.44	1/4下			
	〃	〃	506	壺・鉢(？)		1/4下			組歯文　区画沈線　斜線ヘラ
	〃	〃	507	甕	0.93	完	Ⅲ R		楕ナデラ状
114	〃	〃	508	甕	6.00	3/4	Ⅲ L	LR	楕斜→波　内精製ミガキ
114	〃	〃	509	甕	18.85	3/4		LR　附加条風	楕波状文4回静止　R
	〃	〃	510	甕	7.67	2/3	Ⅰ BR		楕波(上から下)→羽
115	44	〃	511	台付甕	0.40	1/2		LR　縄→沈	コの字重ね　5単位
	〃	〃	512	台付甕	0.38	3/4	Ⅰ BR		□刺突　胴部刺突
	〃	〃	513	台付甕		2/3	Ⅲ L		外下位ハケを残すミガキ
	〃	SB403	515	壷	4.20	2/3		LR	外上位精製ミガキ　□ハケ
103	〃	〃	516	壷	0.73	3/4			
	〃	〃	517	鉢	0.76	1/4下			
101	〃	〃	518	鉢	0.48	完			
112	〃	〃	519	甕	8.09	2/3	ⅦAR		楕3条1単位　2箇所のみ　浮文4単位
15	45	SB401	520	壷	7.31	1/3		LR　縄→沈	Ⅰ・Ⅳ・Ⅴ文様　原体撚　胴下半のみ赤彩
	〃	〃	521	壷		2/3			Ⅱ擬似縄文
	〃	〃	522	壷		2/3		LR　縄→沈	Ⅱ擬縄→沈　□内外精製ミガキ
15	〃	〃	523	壷		2/3		LR　附加条風	縄→沈　懸6単位タシ→沈　□外ハケ
15	〃	〃	524	台付甕	2.06	完		LR　附加条風	縄→沈　コの字重ね　5単位
15	〃	〃	525	甕	8.91	1/4	Ⅰ BR		胴外ハケ残すミガキ　内ハケ　□オサエ
15	〃	〃	526	高杯	0.69	完			円孔 対面2箇所
	〃	〃	527	高杯		完			柱状脚
	〃	SB402	528	甕		1/4	Ⅰ R	LR　縄→沈	内ハケ　受外2本結束沈線
	〃	〃	529	台付甕	0.78	3/4		LR　縄→沈	浮文6単位　櫛歯文状に配置

写真PL	図版	遺構名	土器No.	器種	容量	残存率	施文手法	縄文	成形・調整・施文等　特記事項
	45	SB402	530	台付甕	0.61	1/3		LR 附加条風	コの字重ね文　内精製ミガキ
	46	〃	531	甕	6.84	3/4	I BR		櫛原体ナナラ状
	〃	〃	532	鉢	0.41	1/2			
	〃	〃	533	壺		2/3			内下位ハケ→ナデ
104	〃	〃	534	壺	5.29	2/3		LR　縄→刺	口刺突　胴ハケ→ナデ→ミガキ　精製壺
	〃	〃	535	壺		3/4			口刺突　II斜行沈線　胴ハケ
	〃	〃	536	壺		近		LR　沈→縄	縄 条の横走有　外ハケを残すミガキ
	〃	SB404	537	壺	(7.65)	2/3			整8単位　外軽いミガキ
	〃	〃	538	壺		完		LR　縄→沈	口外ヨコナデ　内ミガキ
	〃	〃	539	壺		1/3			外精製ミガキ
	〃	〃	540	壺		完			
	〃	〃	541	甕	4.68	1/4下	III R		
	47	〃	542	甕		1/4下	I BR		
	〃	〃	543	甕		2/3	II R		櫛原横羽状 斜線混合
	〃	〃	544	台付甕	0.95	1/3	II AR	LR	櫛波→羽
	〃	〃	545	台付甕	0.99	1/3		LR　縄→沈	コの字重ね文
100	〃	SB405	546	鉢	1.46	3/4			内外精製ミガキ
	〃	〃	547	小型土器	0.10	完			孔1箇所のみ　内外ミガキ
	〃	SB406	548	壺		1/4下		LR　縄→沈	口外ハケ　内ミガキ　有段部刺突
	〃	〃	549	壺		3/4		LR　縄→沈	口外ヨコナデ　内ミガキ
	〃	〃	550	無頸壺		1/4下			
	〃	〃	551	甕		1/2			外ハケ→ナデ　内ハケ→軽いミガキ
	〃	〃	552	甕		1/2	VIII AR	LR	
	〃	〃	553	台付甕		1/2			脚部
	〃	〃	554	鉢		1/4下			
	〃	〃	555	有孔鉢	3.16	1/3			外ハケ→ナデ　内ハケ
	〃	SB407	556	壺		1/2		LR 0段多条？	縄距細い　口外ナデ　内ミガキ　刺突
	〃	〃	557	壺		完		LR　縄→沈	外 口・胴精製ミガキ
16	48	SB409	558	壺	5.59	完		LR　縄→沈	外 口ハケ　胴ハケ→ナデ→ミガキ　淡い赤彩(欠)
	〃	〃	559	壺		1/2		LR　縄→沈	外 口ヨコナデ　胴精製ミガキ
	〃	〃	560	壺		2/3		R　縄→沈	外 口ヨコナデ　胴粗いミガキ
16	〃	〃	561	壺	4.62	2/3		LR　沈→縄	外 口ヨコナデ　胴精製ミガキ
15	〃	〃	562	壺		2/3		LR　縄→沈	外 口・胴精製ミガキ　II刺突文
	〃	〃	563	壺		3/4		LR	縄付加条風沈→縄　外 口・胴ハケ→粗いミガキ
16	〃	〃	564	壺	6.11	3/4		LR　縄→沈	整6単位　外 口ハケ　胴軽いケズリ→ミガキ
	〃	〃	565	壺		1/2		LR　節細い	縄沈→縄　外口ヨコナデ　胴ハケ→ナデ→ミガキ
16	〃	〃	566	壺		1/2			外精製ミガキ
	〃	〃	567	壺		1/2		LR　縄→沈	I斜状沈線文　外ハケ
	49	〃	568	壺		3/4		LR　縄→沈	整4単位（櫛 波状文・刺突）　外 口・胴精製ミガキ
	〃	〃	569	壺		1/2		LR　縄→沈	外ハケ→ナデ→ミガキ
	〃	〃	570	壺		1/2		LR　縄→沈	外ハケ→ナデ→ミガキ
	〃	〃	571	壺		1/3		LR　沈→縄	外ロナデ　胴精製ミガキ　口内精製ミガキ
	〃	〃	572	壺		1/2		LR	内外ハケ　口ヨコナデ
	〃	〃	573	壺		1/3		LR	内外ミガキ
	〃	〃	574	壺		1/2		LR　縄→沈	外ヨコナデ　内ヨコハケ
	〃	〃	575	壺		2/3		LR　縄→沈	内外ヨコナデ
	〃	〃	576	壺		2/3		LR　縄→沈	内外ヨコナデ
16	〃	〃	577	壺		2/3			鳥系統土器(文章で詳説)
	〃	〃	578	壺		1/2			櫛波状文（鳥内型）
	〃	〃	579	壺		1/2			外ハケ　整4単位？
	〃	〃	580	壺	0.61	1/2		LR　縄→沈	外粗いミガキ　III・整2本結束波状文
	〃	〃	581	壺		1/4下			櫛+沈線文 波状原体特殊
	〃	〃	582	壺		1/4下		LR　沈→縄	外ハケ
	〃	〃	583	壺		1/2			ハケを残すミガキ
	〃	〃	584	壺		2/3		LR　縄→沈	外精製ミガキ(タテ・ヨコ混合)
15	50	〃	585	壺	0.64	完			口縁部欠損・再加工
	〃	〃	586	高杯		2/3			杯部欠損・再加工
	〃	〃	587	鉢	(2.46)	1/4下			内下位精製ミガキ
100	〃	〃	588	鉢	0.30	2/3			突起4単位？
	〃	〃	589	鉢	2.35	1/4下			片口有り　外下位無彩ミガキ
	〃	〃	590	鉢	2.45	1/4下		LR　縄→沈	外面無彩
	〃	〃	591	鉢		1/4下			鉢外面 漆による彩前文
	〃	〃	592	鉢		1/4			外ナデ　内ハケ　口突起
	〃	〃	593	鉢		1/4下			内外ナデ　口突起
	〃	〃	594	鉢		1/4			内外ハケ →ミガキ　口突起
16	〃	〃	595	台付甕	0.68	完	VIII R		外ハケ　内ハケ　突起4単位
17	〃	〃	596	台付甕	0.31	完	VII?	LR	内外ハケ　突起4単位
	〃	〃	597	甕	0.81	完	VFR	LR	内外タテミガキ
	〃	〃	598	甕	0.51	1/3	VFR	LR	内ミガキ　櫛波→擦
17	〃	〃	599	甕	1.69	完	VFR		整2条1対5単位　内外ミガキ
17	〃	〃	600	甕	1.83				

写真PL	図版	遺構名	七器№	器種	容量	残存率	施文手法	縄文	成形・調整・施文等　特記事項
	50	SB409	601	甕	0.75	1/2	VⅢAR	LR	内外ミガキ
	〃	〃	602	甕		1/3		LR	格子目文　施文L
	〃	〃	603	甕		1/3		LR	コの字重ね文　地文・波状文・中部高地(上→下)
17	51	〃	604	甕	2.17	3/4			コの字重ね文　外全域ミガキ　内精製ヨコミガキ
17	〃	〃	605	甕	1.10	2/3			櫛羽状文+波状文
	〃	〃	606	甕	1.36	1/3	Ⅱ R	L	内外ミガキ
	〃	〃	607	甕	2.85	1/2	Ⅰ R	LR	櫛簾状文3本1組　内ミガキ
17	〃	〃	608	甕	3.32	2/3			櫛ヤサラ状　口棒状工具押圧
	〃	〃	609	甕	5.65	1/2	Ⅲ L	LR	外ナデ　内ハケ　口ヨコナデ
	〃	〃	610	甕		1/4下	Ⅰ R	擬似縄文	内精製ミガキ
	〃	〃	611	甕	3.36	2/3	Ⅰ BR	LR	口外ヨコナデ　内ミガキ　胴内ハケ
	〃	〃	612	甕		1/3	Ⅰ BR	LR	口外ヨコナデ　胴内精製ミガキ
17	〃	〃	613	甕	6.81	1/2	Ⅰ BR		口刺突(押圧)　胴内ハケ
	〃	〃	614	甕		1/3	Ⅳ R	LR	横走短縄文上→下　内粗いミガキ
	52	〃	615	甕	2.21	3/4		LR	縄端位及び斜位　内ミガキ
17	〃	〃	616	甕	8.56	2/3		LR	櫛状→重　格子目文L
	〃	SB410	617	壺		2/3		LR　沈→縄	Ⅱ～Ⅲ刺突・山形文・押引き列点文
	〃	〃	618	甕	(2.46)	完	Ⅰ AR		櫛羽状8単位　廉→羽　内精製ミガキ　受2本櫛
	〃	〃	619	甕		1/4下			コの字重ね　地文・波状文　コの字区画線なし
	〃	〃	620	鉢	0.30	1/3			内外ナデ
	〃	〃	621	鉢	2.61	1/3			外　下位無彩ミガキ
	〃	SB411	622	壺	(4.88)	1/2			胴外ハケ　口外ハケ　内ミガキ
	〃	SB414	623	台付甕	0.40	1/3			外櫛波状文+斜状沈線文(鋸歯文風)
	〃	〃	624	壺		1/4下			Ⅱ棒描直線文　Ⅲ懸垂・沈線・ミガキ
103	〃	SB422	625	鉢	1.03	3/4		LR　順位不明	V重三角文4単位　胴外ミガキ　内ナデ
	〃	〃	626	壺	6.54	2/3			外精製ミガキ
	53	SB412	627	鉢		1/4			懸2条左→右　懸垂文間タテミガキ
	〃	〃	628	甕		1/4下	Ⅰ R	LR	口緩やかな受口状口縁
	〃	〃	629	甕	11.08	1/2	Ⅰ BR	LR	胴内上位ハケ　下位粗いミガキ
	〃	〃	630	鉢	0.25	1/2			内外赤彩ミガキ（スクリーントーン欠）
	〃	SB425	631	台付甕	0.50	2/3	Ⅸ R	LR	内精製ミガキ
	〃	〃	632	台付甕	0.17	完			外ナデ　内ミガキ
	〃	〃	633	甕		1/3	VFR		外刺突・ミガキ　内精製ミガキ
	〃	〃	634	甕		1/4下	Ⅲ L		内精製ミガキ　口刺突
	〃	〃	635	甕		1/2	Ⅲ Rb	LR	内精製ミガキ
	〃	〃	636	甕		1/3	Ⅰ R		内精製ミガキ　口刺突
	〃	〃	637	甕	1.44	3/4	Ⅰ BR	LR	櫛状文10単位　羽→波　内精製ミガキ
	〃	〃	638	甕	1.00	2/3	Ⅰ BR		櫛羽→撫
	〃	〃	639	甕	2.56	完			外上位ハケ→ナデ　下位ミガキ　内ミガキ
	〃	〃	640	鉢	1.99	1/4			外精製ミガキ　内調整不明瞭
100	〃	〃	641	鉢	1.77	完			
	54	〃	642A	壺	5.94	1/4		LR　沈→縄	口外ハケ→ヨコナデ　胴外ハケ残すミガキ
	〃	〃	643	壺	7.55	1/2		LR　沈→縄	口外ヨコナデ　内ミガキ　胴外精製ミガキ
	〃	〃	644	壺		1/4下			文様施文後　文様上部も精製ミガキ
18	〃	〃	645	壺	5.23	3/4		RL	口外ヨコナデ　外精製ミガキ
	〃	〃	646	壺	5.40	1/4下		RL	外精製ミガキ
	〃	〃	647	壺		1/3		LR	口内外ナデ　胴外ハケ残すミガキ
18	〃	〃	648	壺	3.72	3/4			口ミガキ　胴外ハケ残すタテミガキ
	〃	〃	649	壺		2/3			口内外ナデ　胴外ミガキ
	55	〃	650	壺	(5.07)	2/3		LR　縄→沈？	口ヨコナデ　胴外ハケ
	〃	〃	651	壺		1/4			
18	〃	〃	652	鉢	0.44	2/3			脚外面 黒漆縦書文
	〃	SB450	653	壺		1/4下			
	〃	〃	654	壺		1/4下			
	〃	〃	655	壺		1/4下			
18	〃	〃	656	甕	0.52	1/2			
	〃	〃	657	甕		1/4下			
	〃	〃	658	甕		1/4下			
	〃	〃	659	甕		1/4下			
18	56	〃	660	甕	5.15	1/4			
	〃	〃	661	甕		1/4下			
	〃	〃	662	鉢		1/4下			
	〃	SB246	663	壺		1/4		単LR	縄極めて細かい節
	〃	〃	664	壺		1/3			
	〃	〃	665	壺	6.58	1/3			
	〃	〃	666	壺		1/4		単LR	
	〃	〃	667	甕	10.84	1/2			
10	〃	SB360	668	壺	2.37	3/4		RL　縄→沈	
	〃	〃	669	壺		1/2		LR　縄→沈	
	〃	SB409	670	甕	3.59	1/3			
	57	SB267	671	壺	5.96	2/3		LR　縄→沈	

写真PL	図版	遺構名	土器No.	器種	容量	残存率	施文手法	縄文	成形・調整・施文等 特記事項
	57	SB267	672	甕	13.45	2/3		LRL 縄→沈	
19	〃	SB1102	673	壷	4.76	3/4		LR 縄→沈	口外ヨコナデ→ミガキ　胴外精製ミガキ
19	〃	〃	674	壷	4.27	2/3			口外ヨコナデ 内ミガキ　胴外ハケ残すミガキ
19	〃	〃	675	壷	5.11	3/4		LR	Ⅱ沈→縄　Ⅴ縄→沈 口外ヨコナデ 内ミガキ 胴外精ミ
	〃	〃	676	壷		完		LR 縄→沈→波	口外ヨコナデ 内ヨコミガキ　胴外ハケ→ミガキ
	〃	〃	677	壷		2/3		LR 縄→沈→ミ	口外ハケ 内ミガキ　胴外精製ミガキ
	〃	〃	678	壷		1/2		LR 縄→沈	青灰色被熱 調整不明瞭　Ⅱ鋸歯沈線文
19	58	〃	679	壷	5.19	完		LR	胴内外精製ミガキ
18	〃	〃	680	壷	4.79	1/3		LR 縄→沈	胴内外精製ミガキ
	〃	〃	681	壷	6.64	完			胴文様帯以外 精製ミガキ　Ⅳ直線　Ⅴ連弧
	〃	〃	682	壷		3/4		LR 縄→沈	口外ヨコナデ→ハケ 内ハケ　押圧胴外ミガキ
	〃	〃	683	壷		3/4			胴外ハケ 淡い赤彩
	〃	〃	684	壷		2/3		LR 附加条風	縄沈→縄　胴外ハケを残すヨコミガキ
19	〃	〃	685	壷	14.80	2/3		LR 縄→沈	口内外ハケ→ヨコナデ→ヨコミガキ　胴外粗いミガキ
	59	〃	686	壷		3/4			外上位タテミガキ 下位ヨコミガキ(ハケ残す)
	〃	〃	687	壷		3/4		LR 縄→沈	口ヨコナデ　胴外ハケ
	〃	〃	688	壷	0.68	3/4		LR 縄→沈	口外ナデ 内ミガキ
	〃	〃	689	鉢	1.51	2/3		LR 縄→沈	内外精製ミガキ(内ヨコミガキ)
18	〃	〃	690	壷	2.03	完			内ハケ→ナデ
18	〃	〃	691	壷	1.33	完			頭部打ち欠き　片口状の打ち欠き部有
	〃	〃	692	鉢	0.76	3/4			
	〃	〃	693	鉢	(1.37)	1/4			
	〃	〃	694	鉢	0.58	1/2			
	〃	〃	695	鉢か高杯	1.07	2/3			器壁薄い 高杯の可能性あり
	〃	〃	696	有孔鉢	1.06	1/3			外ナデ　内調整不明瞭
	〃	〃	697	高杯		完			充填技法
	〃	〃	698	高杯		完			
	〃	〃	699	高杯		完			脚部内外面に隆帯1箇所有
	〃	〃	700	台付甕		完			外ハケ→ナデ　内ハケ
	〃	〃	701	甕		2/3	ⅠBR		内ハケ
	〃	〃	702	甕	0.74	1/2	ⅨAR	LR	内外ミガキ
	〃	〃	703	甕	7.89	完	ⅠBR	LR	縄Ⅰa, Ⅰb施文　櫛羽→簾　外タテミガキ
	60	〃	704	甕	4.59	完	ⅠBR	LR	櫛波(上から下)→羽(6単位)　外ハケ残すミガキ
20	〃	〃	705	甕	4.61	完	ⅠBR	LR	櫛羽→波(上から下) 羽5単位　外ナデ
19	〃	〃	706	甕	2.60	完	ⅠBR		櫛簾→羽 (4単位)　内精製ミガキ
	〃	〃	707	甕	11.74	完	ⅠBR		櫛波(上から下)→羽
	〃	〃	708	甕	7.61	3/4	ⅠBR	LR	外タテミガキ　内ハケ残すヨコミガキ
20	〃	〃	709	甕	1.04	完	Ⅰ R	口Ⅰa擬似縄文	櫛羽状文8単位　胴外タテミガキ 内ハケ残すミガキ
	〃	〃	710	甕	1.11	完		LR	櫛羽状文9単位　胴外ナデ 内ハケ→ナデ
	〃	〃	711	甕	1.65	完	ⅨBR	LR	櫛波4ブロック単位　胴外ハケ→ナデ　内精製ミガキ
20	〃	〃	712	甕	7.78	完	Ⅶ R	LR 縄→沈	胴外ハケ残すタテミガキ 内タテミガキ
	〃	〃	713	甕	6.51	完	ⅧAR	LR ⅠaⅠb施文	櫛波6ブロック単位　胴外ハケ→ナデ 内ヨコハケ→ナデ
20	61	〃	714	甕	2.74	3/4	ⅠBR		櫛羽→簾 羽状文+垂下文
	〃	SB1103	715	壷		2/3			口内外ミガキ　胴外ハケ残すミガキ
	〃	〃	716	壷	1.68	2/3			口内外ハケ→ナデ　Ⅱ連弧文6単位
	〃	〃	717	壷	2.07	3/4		LR 沈→縄	縄斜位施文(横条)　口外ハケ→ヨコナデ　胴外ナデ
	〃	〃	718	壷	(8.90)	1/4			口外ハケ 内ハケ→ナデ　胴外ハケ残すミガキ
	〃	〃	719	壷		完			懸5単位　外ハケ
	〃	〃	720	壷	12.78	2/3		LR 縄→沈→ミ	口内外精製ミガキ　胴外ミガキ
	〃	〃	721	壷		2/3			円孔 対面2箇所
	〃	〃	722	壷		1/4下		LR 縄→沈	沈線文・櫛2本押し引き列点・波状文
	62	〃	723	壷	4.37	3/4			口外ナデ　胴外ハケ残すミガキ　Ⅱ2本結束沈線
104	〃	〃	724	壷	(7.62)	完		LR 縄→沈	口外ハケ 内ミガキ 段あり 褐色系
	〃	〃	725	壷		1/4下		LRL縄→沈→ミ	外精製ミガキ
	〃	〃	726	鉢	1.14	1/4		ⅠaLR ⅠbRLR	縄原体異なる　外ケズリ→ヨコミガキ　内ヨコミガキ
	〃	〃	727	鉢	1.25	2/3			円孔1箇所
	〃	〃	728	鉢	1.61	1/3			
	〃	〃	729	鉢	0.50	1/4			
	〃	〃	730	有孔鉢	0.69	1/2			内外ハケ→ナデ
	〃	〃	731	有孔鉢	0.52	2/3			内外ハケ→ナデ
	〃	〃	732	高杯		完			内面しぼり痕
	〃	〃	733	鉢		1/3			外ナデ　内ミガキ
	〃	〃	734	甕		2/3		LR 附加条風	内ハケ
	〃	〃	735	甕		1/4			櫛横走短線文(ササラ状)左→右R
20	〃	〃	736	甕	0.66	完	Ⅳ L	LR	櫛一部横羽状(下位 下から上へ施文)
20	〃	〃	737	甕	4.72	完	ⅠBR	LR	櫛羽→波 羽6単位　外タテ・ヨコ精製ミ　内精製ミ
20	〃	〃	738	甕	3.59	完	ⅠBR	Ⅰ 擬似縄文	櫛羽→波 羽6単位　外ハケ残すミガキ
	〃	〃	739	甕	1.62	3/4	Ⅰ R	LR	櫛簾→羽　内ナデ
122	63	〃	740	甕		1/2	ⅠBR	Ⅰ 擬似縄文	擬似縄文 布目痕か　櫛簾→羽
	〃	〃	741	甕	3.28	1/2	ⅠBR	LR	櫛羽→波(上から下)　内ミガキ
	〃	〃	742	甕	3.71	1/4	ⅠBR	LR	櫛波(上から下)→羽　内精製ミガキ

写真PL	図版	遺構名	土器No.	器種	容量	残存率	施文手法	縄文	成形・調整・施文等　特記事項
	63	SB1103	743	甕		1/2	Ⅰ R		□刺突
	〃	〃	744	甕		1/3	Ⅰ BR		□刺突
	〃	〃	745	甕	4.13	1/4	Ⅰ R	LR	櫛原体ササラ状　内ハケ残す粗いミガキ
	〃	〃	746	甕		1/3	Ⅰ BR		内ハケ残す粗いミガキ
21	〃	〃	747	甕	9.86	2/3	Ⅰ BL	LR	櫛羽→波　内外精製ミガキ
	〃	〃	748	甕	7.15	1/4	Ⅰ BR	LR	胴外一部刺突　下位粗いミガキ
114	64	〃	749	甕	(10.01)	1/4下	Ⅲ Ra		□小口刺突　内ハケ
	〃	〃	750	甕	(4.31)	1/2	VGR	LR	□小口刺突　胴外タテミガキ　内ヨコミガキ
	〃	〃	751	甕		1/4下	Ⅶ R	LR	□内精製ミガキ　胴内ハケ残すミガキ
	〃	〃	752	甕		1/3	VGR		□外二本結束櫛波状文
	〃	〃	753	甕	(3.62)	1/2			□刺突　胴外ヨコハケ→ナデ→垂下2条(左→右)
	〃	〃	754	甕	0.46	1/2	Ⅶ R		外強波熱　内オコゲ
	〃	〃	755	甕	0.50	1/4	Ⅶ R	RL	外強波熱　内オコゲ
	〃	〃	756	甕		2/3			櫛縦羽状→斜線　内ハケ
	〃	SB1104	757	甕	22.65	2/3	Ⅲ L	LR	櫛斜→直線文（中部高地型）　□刺突
113	〃	SB1109	758	甕	2.67	完	Ⅰ BR	LR	櫛ササラ状　羽状文6単位　内ミガキ
	〃	〃	759	壺		1/3	ⅨAR		擬似縄文　櫛簾→波　内ミガキ
	〃	〃	760	高杯		完			
104	〃	〃	761	蓋		完			外ハケ→ミガキ　内ミガキ　粗製土器
	〃	〃	762	鉢	0.37	2/3			外ミガキ　内ヨコナデ
102	65	SB1106	763	高杯	0.81	2/3			内外精製ミガキ　内面のみ赤彩
	〃	〃	764	高杯か鉢	0.87	1/3			脚端開い
	〃	〃	765	高杯		1/3			柱状脚
	〃	〃	766	壺		1/3			外精製ミガキ　内ハケ　焼成後穿孔
	〃	〃	767	有孔鉢	2.65	1/3			内外ナデ
	〃	〃	768	鉢	0.12	2/3			□鍔部外面に突起
116	〃	〃	769	深鉢		1/3		RL	縄上位RL　下位RL斜位横条混じる　異系統土器
	〃	〃	770	甕	(5.12)	1/3	Ⅰ BR	LR　縄→沈	外2本結束櫛波状文
	〃	〃	771	甕		1/3	Ⅰ BR	LR	
	〃	〃	772	甕		1/3	Ⅲ L		□オサエ　胴内ハケ
	〃	SB1108	773	壺		2/3		LR　縄→沈	外精製ミガキ　横帯文中櫛直線文2条有
	〃	〃	774	壺		1/2		LR　縄→沈	外精製ミガキ
122	〃	〃	775	壺		1/2		擬似縄文	撫→沈　外精製ミガキ
	〃	〃	776	高杯		1/3			低脚
	66	〃	777	壺	2.18	2/3			内ハケ→ナデ
	〃	〃	778	壺	0.30	完			
	〃	〃	779	甕	2.00	1/4下	VGR	LR	
	〃	〃	780	甕		1/4下	Ⅰ R		□刺突
	〃	〃	781	土製品		完			頸部以下欠損
	〃	SB1110	782	壺		完			Ⅱ貼りつけ突帯　刺突
	〃	〃	783	壺		1/4下			Ⅰ・Ⅱ複合鋸歯文　□外ハケ　複合鋸歯文
	〃	〃	784	壺		1/4下		縄文原体検討	Ⅳ・Ⅴ連孤文　押引き列点文　精製ミガキ
	〃	〃	785	壺		1/4下			Ⅴ重三角文　押引き列点文
	〃	〃	786	壺		1/4下		LR　縄→沈	Ⅴ複合鋸歯文　地文に縄文　波い赤彩
	〃	〃	787	壺	0.79	完		LR	胴下半部　打ち欠き　底部焼成後穿孔
	〃	〃	788	鉢		1/4			内下位ナデ　無彩
	〃	〃	789	高杯		完			
	〃	〃	790	甕		1/2	Ⅰ BR	LR	
	〃	〃	791	甕	0.91	1/3	VGR		内精製ミガキ
	〃	〃	792	甕		1/4	Ⅰ R		櫛羽→波　□刺突
	〃	〃	793	甕		1/4下	Ⅰ BR		櫛羽→波(上から下)　内ハケ
	〃	〃	794	甕		1/4	Ⅰb	擬似縄文ハケ	□外小口刺突
	〃	〃	795	甕		1/3		LR	□櫛波状文
	67	SB1112	796	壺		1/4			Ⅱ鋸歯文内　タシ刺突
	〃	〃	797	壺		1/4下			Ⅱ鋸歯文内　ヘラ斜線文
	〃	〃	798	壺		1/4下			Ⅱ鋸歯文内　短横線(沈線)
	〃	〃	799	壺		1/4			Ⅱ横走沈線文
	〃	〃	800	壺		完		Ⅰb	縄文施文有　□2本沈線　内外ナデ
	〃	〃	801	壺		1/2			Ⅱ　横走沈線1本
	〃	〃	802	壺		2/3			注口部なし
	〃	〃	803	甕		1/4下			櫛直線文　波状文　短斜線文
	〃	〃	804	甕		1/2	XAR	LR	□ヨコナデ　内ミガキ
	〃	〃	805	甕		1/4下		LR	受口波状文(中部高地型)　胴コの字重ね文
	〃	〃	806	甕		1/4下		Ⅰa, Ⅰb LR	縄　縄→沈　外ミガキ
	〃	〃	807	甕		完			台付甕　脚部
	〃	SB1113	808	壺		2/3		LR　縄→沈	
	〃	〃	809	壺		2/3		LR　附加条風	胴外精製ミガキ　受口ゆるやかな受口　片口
	〃	〃	810	壺	0.94	完存			□縁打ち欠き後調整　胴焼成後穿孔率彩(トーン文)
	〃	〃	811	甕		1/3	ⅨAR		□2本結束櫛　胴波状文(中部高地型)
	〃	〃	812	蓋		3/4			内外ナデ
	〃	〃	813	台付甕	2.22	1/2	Ⅰ BR		内ミガキ

写真PL	図版	遺構名	土器No.	器種	容量	残存率	施文手法	縄文	成形・調整・施文等 特記事項
115	67	SB1113	814	台付甕	0.91	3/4		LR　縄→沈	胴コの字4単位　コ→波　内ミガキ
	68	〃	815	甕	16.36	1/3	I BR	LR	櫛ヤヲラ状　内ハケ
113	〃	〃	816	甕	22.61	1/2	I BR	LR　縄→沈	□波状文2本結束櫛
	〃	SB1114	817	壺	1.60	1/2		LR　縄→沈	Ⅱ頸部に段　外被熱により調整不明瞭
	〃	SB1115	818	甕	1.65	1/4	I BR	擬似縄文か？	櫛羽→波
	〃	〃	819	甕		1/4	I R		□刺突　内ミガキ
	〃	〃	820	壺	0.43	2/3			外ミガキ
	〃	〃	821	壺	0.36	完存			Ⅱ　2本沈線
	〃	SB1118	822	甕	1.17	1/2	IX R	LR	櫛歯1本あたりが太い
110	〃	〃	823	甕	2.51	3/4	I BR	LR	櫛羽状文4単位+斜線文1単位羽→波(中部高地型)
	〃	〃	824	甕		1/2	I R	LR	□指すヂエ　胴内ミガキ　櫛波(畿内型)→羽
	〃	〃	825	甕		2/3	I BR	擬似縄文	櫛波(畿内型)→羽　胴内ミガキ
21	69	〃	826	壺	9.65	1/4下		LRの2段施文	縄　縄→沈　□内ナデ　外ヨコナデ　胴外ミガキ
	〃	〃	827	壺		1/2			外ミガキ　沈線内彼く彩彩
	〃	〃	828	壺	(4.01)	1/4下		LR	外ミガキ
	〃	〃	829	壺		1/2			□内ミガキ　外ナデ　胴外精製ミガキ
	〃	〃	830	壺		完		LR　沈→縄？	□内外ミガキ　胴ハケ
	〃	〃	831	台付甕？		完			外ミガキ　内ナデ
21	〃	〃	832	壺	8.51	1/2		LR　縄→沈	外ミガキ　全体に彼く彩彩　(スクリーントーン欠落)
21	〃	〃	833	壺		3/4		LR	□内外ミガキ　オヂエ
21	〃	〃	834	壺	3.21	3/4		LR　縄→沈	外ミガキ
	〃	〃	835	壺		完		LR沈→縄→刺	懸5単位　Ⅱ押し出し凸帯
21	70	SB1119	836	壺	5.66	完存			櫛Ⅳ・V畿内型　外精製ミガキ
	〃	〃	837	壺		3/4		LR　縄→沈	外精製ミガキ
	〃	〃	838	壺		2/3			外精製ミガキ
	〃	〃	839	壺		完		LR	内外ミガキ
22	〃	〃	840	壺	17.10	1/3			外ミガキ
22	〃	〃	841	壺	17.57	2/3			外ミガキ
	〃	〃	842	壺		1/3			櫛畿内型
	71	〃	843	壺		2/3			
	〃	〃	844	壺		1/2			□外ミガキ　内ナデ　頸部有段
	〃	〃	845	壺		1/2			外精製ミガキ
	〃	〃	846	壺		3/4		LR　縄→沈	懸9単位　Ⅱ波状沈線内赤彩　Ⅲ文様間赤彩
	〃	〃	847	鉢	1.39	1/3			
	〃	〃	848	間形土器		1/3			外赤彩ミガキ　内ナデ
	〃	〃	849	鉢		完			外刺突 赤彩　脚に1孔　内ナデ
22	〃	〃	850	甕	5.63	3/4	I BR		櫛羽状文5単位+斜線文1単位　羽→波　内ミガキ
114	〃	〃	851	甕	18.37	1/3	I BR		内精製ミガキ
	〃	〃	852	甕		1/2	III Rb	RLR	内精製ミガキ
	〃	〃	853	甕		1/4下	III L	I a, I b LR	内精製ミガキ
22	72	〃	854	甕	8.30	1/2	I BR	LR　2段施文	内ミガキ
22	〃	〃	855	甕	9.36	2/3		LR　縄→沈	櫛波→連孤文　胴外ヘケ→タテミガキ　内ハケ
	〃	〃	856	台付甕	5.54	1/4下	VIII R		□刺突
	〃	〃	857	台付甕		完			内外ミガキ
	〃	SB1120	858	蓋		完存			内ハケ　円孔対面2箇所
	〃	〃	859	無頸壺	1.10	完存			内ハケ　円孔対面3箇所
	〃	〃	860	壺		完			懸5単位　沈線区画沈線有　懸→波　浚い赤彩
	〃	〃	861	壺		1/4下			Ⅳ・V文様帯　Ⅲ文様帯空白
	〃	〃	862	壺		1/4下		LR　縄→沈	Ⅳ・V文様帯
115	〃	〃	863	壺	0.55	完		I a LR	コの字重ね文　4単位　円形浮文
	〃	〃	864	甕	(2.97)	2/3	IX AR	LR	
	〃	〃	865	甕	1.45	2/3	I R		櫛羽→羽　内ナデ
	〃	〃	866	甕	1.28	3/4		LRか？	内外ハケ→ナデ
	73	SB1121	867	壺		2/3			頸部有段
	〃	〃	868	壺		2/3		LR	外精製ミガキ　Ⅱ押し出し凸帯
	〃	〃	869	壺		1/3		LR　縄→沈	□内外精製ミガキ　胴外精製ミガキ
	〃	〃	870	壺		3/4		LR　縄→沈	□内外ミガキ
	〃	〃	871	壺		1/4下			Ⅱ貼りつけ凸帯　沈線→刺突
	〃	〃	872	壺		1/2			外ハケ残すタテミガキ
	〃	〃	873	壺		3/4			外ハケ残すタテミガキ
	〃	〃	874	壺		1/4下			壺胴下半部
	〃	〃	875	壺		1/4下		LR　縄→櫛	壺Ⅳ文様帯(Ⅲ文様帯無文)
	〃	〃	876	壺		1/4下			壺Ⅳ文様帯(Ⅲ文様帯無文)　櫛押し引き列点文
	〃	〃	877	壺		1/4下		LR　縄→沈	壺Ⅳ・V文様帯
	〃	〃	878	壺		1/4下			壺Ⅳ・V文様帯
	〃	〃	879	壺		1/4下		LR　縄→沈	壺V文様帯
	〃	〃	880	鉢		1/2			内面浚い赤彩
	〃	〃	881	台付甕？		完			内外ナデ(図天地逆？)
	〃	〃	882	蓋		3/4			内外ナデ
	〃	〃	883	鉢	1.66	1/3			
	〃	〃	884	鉢	0.65	2/3			円孔1箇所のみ

写真PL	図版	遺構名	土器No.	器種	容量	残存率	施文手法	縄文	成形・調整・施文等　特記事項
	73	SB1121	885	台付鉢		3/4			外赤彩ミガキ（スクリーントーン欠）内ハケ→ナデミガキ
	〃	〃	886	甕		1/4下			平底コの字重ね甕の可能性有
	〃	〃	887	甕		1/3		LR　縄→沈	受口2本沈線
	74	〃	888	甕	2.59	1/3	Ⅲ Rb	LR	櫛波一羽　羽状3段　最下段R
	〃	〃	889	甕	1.32	1/2	I BR	LR	櫛羽→直
	〃	〃	890	甕		1/4下	I CR	LR	櫛羽→簾　口刺突
	〃	〃	891	甕		2/3	I CR	LR　附加条風	櫛羽→簾
	〃	SB1122	892	壷		1/3		LR　縄→沈	外ハケ　淡い赤彩
	〃	〃	893	壷	0.50	2/3			記号7箇所　外ハケ残すミガキ
	〃	〃	894	鉢		1/4			
	〃	〃	895	鉢		1/4下			外櫛描き連弧文
	〃	〃	896	台付甕	0.61	1/3	X	LR　縄→沈	櫛波一簾　内ミガキ
117	〃	SB1127	897	甕	3.78	完	Ⅲ Rb	R	外コハケ→羽状文（ヤサラ状）　内精製ミガキ
	〃	〃	898	壷		1/2		LR　縄→沈	口内外ミガキ　凸帯（沈線→刺突）
	〃	〃	899	鉢	1.39	2/3			
	〃	SB1129	900	壷	0.97	完存			
	〃	〃	901	壷		3/4		LR 附加条風？	縄縄→沈　原体異なる　口外ヨコナデ　内ミガキ
	〃	SB1130	902	高杯					
	〃	〃	903	甕			Ⅲ L		櫛直→斜　口オヤエ
	75	SB1123	904	壷		2/3		LR　沈→縄	口外ヨコナデ・ハケ　内ヨコナデ→ミガキ
	〃	〃	905	壷		2/3		LR　縄→沈	口外ヨコナデ・ナデ　内ミガキ
	〃	〃	906	壷		3/4		LR　沈→縄	縄原体異なる　口外ヨコナデ→ハケ　内不明瞭
	〃	〃	907	壷		2/3		LR　縄→沈	口外ヨコナデ→ハケ　内ミガキ
	〃	〃	908	壷		1/2			胴中位に一部施文
	〃	〃	909	壷	(3.63)	3/4			外ハケ残す粗いミガキ
	〃	〃	910	壷		1/2			外ミガキ
	〃	〃	911	壷		1/3			外ハケ
	〃	〃	912	壷		1/3		LR　縄→沈	
100	〃	〃	913	鉢	0.24	3/4			
	〃	〃	914	壷					
	〃	〃	915	高杯（？）	0.56	1/4			
	〃	〃	916	高杯		3/4			脚部削痕　壷に転用か？
23	〃	〃	917	無頸壷	0.98	完存			円孔対面に2箇所　内ナデ
	〃	〃	918	壷		2/3			内外ミガキ
	〃	〃	919	壷		1/4			内外精製ミガキ
	〃	〃	920	台付甕	0.58	1/2		LR　2段施文	コの字重ね6単位か？
23	〃	〃	921	台付甕	1.23	3/4		LR	コの字重ね6単位　三角状
	〃	〃	922	台付甕	0.40	3/4	Ⅷ R	LRか？	内ミガキ
	〃	〃	923	台付甕	0.44	2/3	Ⅶ R	RL	垂下沈線文4単位
	76	〃	924	台付甕	0.86	2/3	Ⅷ R	I a RL	縄 I b擬似縄文（ハケ刺突）　内ミガキ
123	〃	〃	925	壷	0.60	3/4	Ⅶ R	口・胴擬似縄文	内ミガキ
	〃	〃	926	甕	0.65	1/2	Ⅷ R	RL	内ミガキ
23	〃	〃	927	壷		1/2		LR	コの字重ね9単位　平底甕か？
	〃	〃	928	甕	1.28	1/2	I BR	LR	櫛簾→羽
23	〃	〃	929	甕	1.31	完存	I BR	LR	内外ハケ
	〃	〃	930	壷	0.91	完	I BR	LR	櫛羽状文5単位+斜線文1単位
23	〃	〃	931	甕	3.41	2/3	I R	LR	櫛羽状文3単位+斜線文1単位
23	〃	〃	932	甕	3.47	3/4	Ⅲ R	LR	櫛ヤサラ状　内外ハケ　外 竹管圧痕
	〃	〃	933	壷	5.00	2/3	VIER	LR	櫛ブロック5単位　内精製ミガキ
23	〃	〃	934	甕	6.11	1/3	I R	LR	口コナデ　胴内外ミガキ
23	〃	〃	935	壷	5.83	3/4	I AR	LR	櫛波3段（上→下）　内ハケ残すミガキ
	77	〃	936	甕	13.73	2/3	Ⅲ Rb	LR	外ミガキ　内ハケ
23	〃	〃	937	甕	10.88	完		LR	櫛乱れた縦羽状文と斜線文　内ハケ
24	〃	SB1124	938	壷	16.26	完			外ハケ→ナデ　内ハケ　被熱痕跡はない
	〃	〃	939	壷		2/3		LR	外ミガキ　淡い赤彩
	〃	〃	940	壷		1/3			外ミガキ
24	〃	〃	941	無頸壷	1.09				
	〃	〃	942	壷	0.19	完存			円孔対面2箇所　脚に突起1箇所
24	〃	〃	943	壷	0.49	完存			注口部完存
24	78	〃	944	壷	5.60				
24	〃	〃	945	壷	5.28	完		LR　縄→沈	口外ヨコナデ・ハケ　胴外ハケ残すミガキ
24	〃	〃	946	鉢	2.31	2/3			内ヨコハケ→ナデ
	〃	〃	947	台付甕	0.88	1/3			コの字重ね文
	〃	SB1125	948	壷		1/3		RL	外ハケ残すミガキ
	〃	〃	949	壷		3/4		LR　縄→沈	外粗いミガキ　淡い赤彩
	〃	〃	950	壷		2/3			外精製ミガキ
	〃	〃	951	壷		1/2			外ハケ残すミガキ
	〃	〃	952	壷		3/4		LRか？	懸6単位　口内面のみ赤彩　外ミガキ
	〃	〃	953	高杯		1/2			
	〃	〃	954	有孔鉢		2/3			内外ミガキ
	〃	〃	955	壷		完存			内外無彩ミガキ　原体櫛歯1本

写真PL	図版	遺構名	土器No.	器種	容量	残存率	施文手法	縄文	成形・調整・施文等　特記事項
	79	SB1125	956	台付甕	1.35	1/2	Ⅷ R	撚糸縄文	
	〃	〃	957	甕	1.34	2/3	Ⅶ R	LR	外下半ハケ
116	〃	〃	958	台付甕	1.03	1/3			内外ミガキ
	〃	〃	959	甕		2/3	Ⅰ R		櫛羽状文5単位　羽→直
	〃	〃	960	甕		1/2	Ⅰ BR	LR	櫛羽→波
	〃	〃	961	甕	2.96	完	Ⅰ BR		櫛ヤナギ状　外ヨコハケ→羽状
	〃	〃	962	甕		2/3		LR	コの字重ね5単位　外ヨコハケ→コの字
24	〃	SB1126	963	壺	5.00	3/4		LR　沈→縄	器面荒れ調整不明瞭　黄橙色　胴部記号
	〃	〃	964	壺	3.55	1/2		LR	器面荒れ調整不明瞭　黄橙色　Ⅱ斜走沈線
25	〃	〃	965	壺	6.64	3/4		LR	□外ナデ　内ミガキ　Ⅲ精製ミガキ　黄橙色
	〃	〃	966	鉢		完			内外赤彩ミガキ　類部有する鉢
	〃	〃	967	壺		2/3		LR	器面荒れ調整不明瞭　黄橙色
25	80	〃	968	壺	4.79	3/4			器面荒れ調整不明瞭　外精製ミガキ　黄橙色
	〃	〃	969	壺	0.59	2/3			器面荒れ調整不明瞭　黄橙色
	〃	〃	970	壺		完		LR	器面荒れ調整不明瞭　黄橙色　懸3単位
25	〃	〃	971	壺	5.89	1/3		LR	器面荒れ調整不明瞭　橙色　被熱歪み
	〃	〃	972	壺		1/3			橙白色　外ナデ　内ミガキ
	〃	〃	973	鉢	0.61	3/4			茶褐色　外ヨコナデ・ナデ　内ヨコハケ
	〃	〃	974	台付甕？	0.99	1/2	Ⅰ BR		橙色　内ミガキ
	〃	〃	975	台付甕？		1/3		LR	橙色　コの字重ね文
	〃	〃	976	台付甕？	0.69				
	〃	〃	977	甕	2.93	完	Ⅷ R	LR	橙色　櫛6ブロック単位　内ハケ→ナデ　歪み
	〃	〃	978	甕	9.43	3/4	Ⅰ BR	LR	黄橙色～灰白色　櫛羽状文4単位　羽→直　歪み
25	81	〃	979	台付甕	3.68	2/3	ⅧAR	LR	黄橙色　内ミガキ　歪み
	〃	〃	980	甕	1.98	2/3	VER	LR	黄橙色　櫛撫→波
	〃	〃	981	甕	1.11	2/3	Ⅰ R	LRか？	橙色　内ミガキ
	〃	〃	982	甕		1/4下	Ⅰ R		黄橙色　内ミガキ
	〃	〃	983	甕	(5.25)	1/2	Ⅰ BR	LR	器面荒れ調整不明瞭　橙色
25	〃	〃	984	甕	8.54				
	〃	〃	985	甕	13.98	1/4			器面荒れ調整不明瞭　黄橙色　内外ハケ
	〃	〃	986	甕	(7.31)	2/3		LR	黄橙色　外ヨコナデ　精製ミガキ　内ナデ
25	82	〃	987	甕	8.73	1/2			外ヨコナデ　精製ミガキ　内ハケ→ナデ
	〃	〃	988	甕	5.20	1/3			外ヨコナデ　精製ミガキ　内ミガキ？
26	〃	〃	989	壺	(12.24)	1/2		LR　縄→沈	外ヨコナデ　下半ミガキ　内精製ミガキ
	〃	SB1132	990	甕	1.96	完	Ⅷ R		櫛胴波状（中部高地5ブロック）→頸波状　内ミガキ
116	〃	〃	991	甕	1.19	2/3	Ⅰ BR		櫛羽→簾　内不明
107	〃	SB1131	992	壺	5.21	完			□内ハケ　内ミガキ　胴外ミガキ
26	〃	SB1134	993	鉢	1.25	3/4			外ハケ→ミガキ　内ハケ
	〃	〃	994	壺		1/4下			外ハケ→施文　Ⅱ複合蛇苗文
	〃	〃	995	壺		2/3			直整歪文　□外ヨコナデ　内ミガキ
	〃	〃	996	鉢	2.02	1/4			内外ミガキ
	〃	〃	997	高杯？		1/4			鉢の可能性もある
26	83	〃	998	壺	5.86	3/4			□外ハケ　内精製ミガキ　胴外精製ミガキ　V6単位
	〃	〃	999	壺	6.38	1/4下			胴外ミガキ
26	〃	〃	1000	壺		1/2			□内外ミガキ
26	〃	〃	1001	壺		2/3			強度熱による灰白色化　口縁内面発泡
105	〃	〃	1002	壺	4.96	3/4			□内外ヨコナデ→ミガキ　外精こ　Ⅱ2本組波状沈線
26	〃	〃	1003	壺	4.82	完存			□内外ヨコナデ→ミガキ　胴外精製ミガキ
107	〃	〃	1004	壺	4.45	完			□外ハケ・ヨコナデ　内ハケ→ナデ　胴外タテミガキ
115	〃	〃	1005	甕	2.17	1/2			外ハケ→ナデ　内ハケ
	〃	〃	1006	甕		1/3	Ⅰ CR		内ハケ
26	〃	〃	1007	甕	1.88	完	Ⅰ BR		櫛羽状文4単位+斜縞1単位
27	84	〃	1008	甕	1.36	完	Ⅰ BR		櫛簾→羽(6単位)　内精製ミガキ
	〃	〃	1009	甕	1.12	完	Ⅰ BR		櫛羽状文4単位　内ハケ
27	〃	〃	1010	甕	11.46	完			櫛羽(4単位)→直
	〃	SB1135	1011	壺		3/4			外ハケ残すミガキ
	〃	〃	1012	壺		1/3			外ミガキ
	〃	〃	1013	壺		2/3			外精製ヨコミガキ
	〃	〃	1014	壺	(3.79)	2/3			外精製タテミガキ
27	〃	〃	1015	壺	(4.02)	2/3			□外ナデ　内ミガキ　胴外ミガキ
27	〃	〃	1016	壺	5.26	3/4			外精製タテミガキ　淡い赤彩（スクリーントーン欠落）
27	〃	〃	1017	壺	0.28	完			外ミガキ　記号（1箇所）
	〃	〃	1018	壺		完			□内外精製ミガキ　外ミガキ　淡い赤彩（スクリーントーン欠）
	〃	〃	1019	壺		3/4			□外ハケ　内不明　胴外ハケ
27	85	〃	1020	壺	5.49	3/4			□内外ハケ　胴外ハケ
	〃	〃	1021	壺		2/3			□外ミガキ　内不明　胴ハケ　Ⅱ押引き列点文
28	〃	〃	1022	壺	4.43				
	〃	〃	1023	壺	5.21	2/3			外ハケ
	〃	〃	1024	壺		2/3			□外ヨコナデ　内ナデ　胴外精製ミガキ
28	〃	〃	1025	壺	(10.42)	2/3			□内外ミガキ　胴外精製ミガキ
28	〃	〃	1026	壺	11.02	2/3			胴外タテ・ヨコミガキ

写真PL	図版	遺構名	土器No.	器種	容量	残存率	施文手法	成形・調整・施文等 特記事項
28	86	SB1135	1027	壷		2/3		外精製ミガキ　V6単位
	〃	〃	1028	壷		2/3		懸5単位　口外ヨコハケ・ヨコナデ　内ミガキ
28	〃	〃	1029	壷	5.27	2/3		懸5単位　V4単位
	〃	〃	1030	壷		1/2		口外ヨコナデ・ナデ　内ミガキ　穿孔4箇所
27	〃	〃	1031	壷	1.35	完		頸部と胴部上段に段有り　突起5箇所
	〃	〃	1032	蓋		2/3		内外ミガキ
	〃	〃	1033	鉢		1/4		
	〃	〃	1034	鉢		1/4		
	〃	〃	1035	高杯		3/4		脚内面赤彩
	〃	〃	1036	鉢	0.15	完存		外ナデ　内ハケ　口縁部1箇所片口状に打ち欠き
28	〃	〃	1037	甕	0.20	1/2	I BR	櫛羽状文3単位　内ハケ
	〃	〃	1038	有孔鉢	1.60	3/4		内外ミガキ
28	〃	〃	1039	甕	0.28	1/2		外ハケ→ミガキ　内ハケ
29	〃	〃	1040	甕	0.55	2/3		外ナデ　内ハケ
29	〃	〃	1041	甕	1.03	3/4		外ハケ→ミガキ　内精製ミガキ
29	〃	〃	1042	甕	1.42	3/4		外ハケ→ミガキ　内ハケ
29	87	〃	1043	甕	1.64	1/2	I AR	内精製ミガキ
29	〃	〃	1044	甕	2.81	3/4	I AR	櫛直→羽　羽状文6単位　内ハケ→ナデ
	〃	〃	1045	甕		完	I AR	櫛羽状文5単位+斜線文1単位　内精製ミガキ
29	〃	〃	1046	甕	1.92	3/4	I BR	櫛直→羽　羽状文6単位　内ナデ
	〃	〃	1047	甕	1.65	3/4	I AR	櫛羽状文6単位　内ミガキ
29	〃	〃	1048	甕	3.79	3/4	I AR	櫛羽→波　羽状文5単位　内ミガキ
29	〃	〃	1049	甕	3.05	1/2	I BR	櫛直→羽　内ミガキ
29	〃	〃	1050	甕	3.13	完	I BR	櫛波→羽　羽状文6単位　内ハケ→ナデ
30	〃	〃	1051	甕	3.28	3/4	I AR	櫛羽→波　羽状文5単位　内ミガキ
30	〃	〃	1052	甕	1.99	3/4	I BR	櫛羽→波　内ハケ→ナデ
30	〃	〃	1053	甕	1.42	1/3	I BR	内精製ミガキ
30	〃	〃	1054	甕	0.72	2/3	I CR	内ミガキ
30	88	〃	1055	甕	3.46	3/4	I BR	櫛直→羽　羽状文7単位　内ハケ→ナデ
30	〃	〃	1056	甕	9.87	2/3	I BR	櫛羽状文7単位+斜線文1単位　内精製ミガキ
	〃	〃	1057	甕	7.93	2/3	I AR	櫛羽状文6単位　内精製ミガキ
30	〃	〃	1058	甕	18.44	2/3	I R	外下位ハケ　内精製ミガキ
31	〃	〃	1059	甕	10.25	2/3	I AR	内精製ミガキ
30	89	〃	1060	甕		3/4	Ⅶ R	内ハケ
31	〃	〃	1061	甕	10.70	3/4	I AR	外器面荒れ調整不明瞭　内ミガキ
31	〃	〃	1062	甕	20.86	3/4	I AR	内外精製ミガキ
	〃	〃	1063	甕	11.54	2/3	I AR	内外ミガキ
	〃	SB1136	1064	壷		3/4		口内外ミガキ　Ⅱ2本組沈線　外無彩スクリーントル
	〃	〃	1065	壷		3/4		口外ハケ　内ミガキ　Ⅱ押し引き列点 L
	〃	〃	1066	壷		2/3		口外ミガキ　内不明　Ⅱ沈線+刺突
	〃	〃	1067	壷		2/3		口外ハケ　内不明
31	90	〃	1068	壷	6.05	3/4		口外ナデ　内ミガキ　胴外ハケ残すミガキ
105	〃	〃	1069	壷	3.69	2/3		外ミガキ　頸部に段有
32	〃	〃	1070	壷	6.30	完		外(器面荒れ調整不明瞭)ミガキ　下位 ヨコケズリ→ミガキ
32	〃	〃	1071	壷	15.92			
	〃	〃	1072	壷	(3.34)	2/3		口内外ミガキ　Ⅱ2段目沈線太い。沈線施文後ヨコナデ
31	〃	〃	1073	壷		3/4		口外ヨコナデ・ナデ　内精製ミガキ　胴外精製ミガキ
	〃	〃	1074	壷		1/2		外ヨコ・タテミガキ
	91	〃	1075	壷		3/4		口内外精製ミガキ
	〃	〃	1076	甕	3.17	1/2		外ヨコハケ→ミガキ　内ハケ→ミガキ
32	〃	〃	1077	鉢	2.11	1/4下		外ミガキ　内口縁のみミガキ・ハケ・ナデ
	〃	〃	1078	鉢	0.54	1/4		内外ミガキ
	〃	〃	1079	蓋		1/2		内外ミガキ
	〃	〃	1080	高杯		2/3		脚部剥痕による調整・転用
32	〃	〃	1081	台付甕	0.91	2/3		コの字重ね（司状）
	〃	〃	1082	甕	1.85	完	I BR	櫛羽→波　羽状文5単位　内ミガキ
	〃	〃	1083	甕	11.44	2/3	I AR	櫛羽→波　内ハケ
32	〃	〃	1084	甕	4.53	3/4	I AR	櫛羽状文6単位　内下位ハケ→ミガキ
	〃	〃	1085	甕	1.72	1/2	I AR	櫛羽→簾　内ヨコミガキ
32	〃	〃	1086	甕	3.34	2/3		外下位ハケ→ミガキ　内ハケ
	〃	〃	1087	甕		1/3	ⅧCR	内精製ミガキ
	92	SB1137	1088	壷		1/2		外ミガキ　Ⅱ押し出し状
	〃	〃	1089	壷		2/3		口外ヨコナデ→タテハケ　内ミガキ　外ミガキ
	〃	〃	1090	壷		1/3		外精製ミガキ　内ヨコハケ　底部 焼成後穿孔
	〃	〃	1091	甕	(2.61)	2/3		コの字重ね文4単位　地文LR縄文　浮文有
	〃	〃	1092	甕		1/3	Ⅷ R	内ミガキ
	〃	〃	1093	甕		1/4下	ⅨAR	
	〃	〃	1094	甕		完	I BR	櫛羽→簾　羽状文7単位　内精製ミガキ
108	〃	〃	1095	甕	3.18	完	I BR	櫛羽→波　羽状文7単位　内ハケ残すミガキ
	〃	〃	1096	甕		1/3	I BR	内精製ミガキ
	〃	〃	1097	甕	4.59	3/4	VER	内ミガキ

写真PL	図版	遺構名	土器No.	器種	容量	残存率	施文手法	成形・調整・施文等　特記事項
33	93	SB1142	1098	壺	4.39	3/4		口内外ミガキ　頸外精製ミガキ
32	〃	〃	1099	壺		2/3		口外ヨコナデ　内ミガキ　頸外ミガキ　口刺突　Ⅴ重三角文
	〃	〃	1100	壺		2/3		口外ヨコナデ・ハケ　内ミガキ　Ⅱ縄文一刺突
	〃	〃	1101	壺		2/3		口外ヨコナデ・ナデ　内ミガキ　頸外ハケ
	〃	〃	1102	壺		1/3		口外ヨコナデ・ナデ　内ナデ
	〃	〃	1103	壺		2/3		口内外,頸外精製ミガキ　口縁外反
	〃	〃	1104	壺		1/4		口外ナデ　内ミガキ　口縁直立
	〃	〃	1105	壺		2/3		口外ヨコナデ・ナデ　内ミガキ　口縁外反　懸垂文
	〃	〃	1106	壺		1/3		Ⅱ沈線→縄文→ミガキ
	〃	〃	1107	壺		1/3		Ⅱ沈線→縄文→ミガキ(精製)
	〃	〃	1108	壺		1/3		全体的に淡い赤彩　懸垂文
	〃	〃	1109	壺		1/4		Ⅱ沈線間を櫛描直線文で充填→押し引き列点文　懸垂文
33	94	〃	1110	高杯	0.95	2/3		脚部内面ミガキ　杯部・脚部円盤充填
	〃	〃	1111	高杯	0.89	1/2		
	〃	〃	1112	高杯		2/3		脚部内面ミガキ
33	〃	〃	1113	鉢	1.72	2/3		片口有
	〃	〃	1114	鉢	0.95	1/3		紐通り孔有
	〃	〃	1115	甕	0.73	1/3		外ハケ→ナデ　内ハケ
	〃	〃	1116	甕	0.24	1/2	Ⅷ R	2本沈線垂下4単位？
	〃	〃	1117	甕	0.66	1/2	Ⅷ R	内ミガキ
	〃	〃	1118	甕	(1.16)	1/2		コの字重ね　内精製ミガキ
	〃	〃	1119	甕		1/2	Ⅰ BR	内ハケ→ナデ
33	〃	〃	1120	甕	4.47	2/3	Ⅰ AR	櫛羽状文7単位　内ミガキ
	〃	〃	1121	甕	1.47	2/3	Ⅰ AR	櫛摩→羽(5単位)
	〃	〃	1122	甕	2.70	1/4下	Ⅰ BR	内ミガキ
	〃	〃	1123	甕	1.93	1/4下	ⅧAR	内ミガキ
33	〃	〃	1124	甕	3.15	完	Ⅰ BR	櫛羽状文4単位　外下半ヨコケズリ→タテミガキ　内精製ミガキ
	〃	〃	1125	甕	3.04	2/3		櫛乱れた斜線文　垂下1箇所
33	95	〃	1126	甕	7.44	3/4	Ⅰ AR	櫛羽状文6単位
34	〃	〃	1127	甕	3.97	2/3	Ⅰ BR	櫛羽→波　羽状文8単位　外精製ミガキ
	〃	〃	1128	甕		1/4下	Ⅰ BR	櫛羽状文
33	〃	〃	1129	甕	17.56	2/3	Ⅲ Lb	櫛斜→波　頸内外精製ミガキ
	〃	〃	1130	甕		1/3		内外ヨコハケ→精製ミガキ
	〃	〃	1131	甕		1/4下	Ⅰ BR	口内ミガキ　頸ハケ→ナデ
	〃	SB1150	1132	甕		1/3	ⅧAR	内ミガキ
	〃	SB1151	1133	甕				
34	96	SB1143	1134	壺	5.06	2/3		外ミガキ　Ⅱ, Ⅳ, Ⅴ 山形沈線文
	〃	〃	1135	壺		1/2		器面荒れ調整不明瞭　Ⅴ横走沈線文一部のみ弧状
	〃	〃	1136	壺		1/3		外ミガキ
34	〃	〃	1137	壺	7.34	3/4		口内外,頸外ミガキ　頸下位ヨコケズリ
	〃	〃	1138	壺		1/3		Ⅳ2本櫛波状文　Ⅴ波状沈線間一部刺突
	〃	〃	1139	壺		2/3		Ⅳ波状沈線は全体の1/4　他は直線文で充填
	〃	〃	1140	壺		1/3		口内外,頸外精製ミガキ　Ⅱ, Ⅳ義内型
	〃	〃	1141	壺		2/3		口外ナデ　内ミガキ　内外狭い赤彩　トーン欠落
	〃	〃	1142	壺		3/4		内外ミガキ
	〃	〃	1143	壺		2/3		外ミガキ
34	〃	〃	1144	壺	2.20	3/4		
34	97	〃	1145	鉢	1.23	1/2		
34	〃	〃	1146	鉢	2.99	完存		内下位精製ミガキ　無彩
	〃	〃	1147	高杯		完		外凸帯上沈線
	〃	〃	1148	高杯		完		外凸帯
	〃	〃	1149	小型土器				杯部内面のみ赤彩
	〃	〃	1150	甕		1/4		コの字重ね
	〃	〃	1151	台付甕	0.47	1/3		内ミガキ
	〃	〃	1152	甕		1/3	Ⅲ L	ⅡLR縄文　Ⅲ斜線文・サザラ状
	〃	〃	1153	甕		1/3	Ⅷ R	内ミガキ　口指オサエ
	〃	〃	1154	甕	4.03	1/3	Ⅰ BR	内ミガキ
	〃	〃	1155	甕	3.76	完	Ⅰ BR	櫛波(上から下)→羽　羽状文5単位　内外精ミ
34	〃	〃	1156	甕	7.44	1/2	Ⅰ BR	櫛羽→波
35	〃	〃	1157	甕	(10.88)	1/4	Ⅰ BR	内ミガキ
	〃	SB1145	1158	甕		1/3	Ⅰ R	口刺突　内精製ミガキ
	〃	〃	1159	壺		1/4		
	98	〃	1160	甕		1/4下	Ⅰ BR	
	〃	〃	1161	壺		1/4		口指オサエ
	〃	〃	1162	蓋		1/4		内外面赤彩
35	〃	SB1144	1163	壺	4.91	1/2		器面荒れ調整不明瞭
	〃	〃	1164	壺		2/3		口外ヨコナデ・ハケ　内ミガキ
	〃	〃	1165	壺		2/3		外精製ミガキ　Ⅱ擬似縄文
	〃	〃	1166	壺		3/4		器面荒れ調整不明瞭
35	〃	〃	1167	壺	0.97	完存		外精製ミガキ　下半精製タテミガキ
35	〃	〃	1168	壺	5.35	3/4		口外タテミガキ　内ヨコミガキ　頸外精製ミガキ　Ⅳ～Ⅴのみ淡い赤彩

写真PL	図版	遺構名	土器№	器種	容量	残存率	施文手法	成形・調整・施文等　特記事項
	99	SB1144	1169	壺		1/2		外ヨコミガキ　Ｖ直菱形文
	〃	〃	1170	壺		3/4		器面荒れ調整不明瞭　被熱　Ⅱ有段
	〃	〃	1171	壺		3/4		器面荒れ調整不明瞭　被熱　Ⅱ押し出し凸帯
	〃	〃	1172	壺		2/3		器面荒れ調整不明瞭　強被熱　歪み大　Ⅱ有段
	〃	〃	1173	壺		2/3		器面荒れ調整不明瞭　被熱　Ⅱ有段
	〃	〃	1174	壺		3/4		懸8単位　□内外ミガキ
	〃	〃	1175	壺	0.46	完存		外ナデ
	〃	〃	1176	壺	0.53	完存		外ミガキ
35	〃	〃	1177	壺	3.12	完存		外赤彩　ミガキ
	〃	〃	1178	高杯		1/4		外ミガキ　内ヘケ
	〃	〃	1179	台付甕	0.88	1/4下		コの字重ね　□刺突
	〃	〃	1180	甕		1/3		コの字重ね（司状）　□指オサエ
	〃	〃	1181	台付甕	5.44	1/2		コの字重ね
	〃	〃	1182	台付甕	0.85	1/4下		外ハケ→ミガキ　内ミガキ
	〃	〃	1183	甕		1/2	Ⅰ R	内ハケ→ナデ
	100	〃	1184	甕	7.40	1/4下	Ⅲ	
35	〃	〃	1185	甕	8.09	2/3	Ⅰ BR	櫛羽状文6単位+斜線文1単位　内ハケ残すミガキ
	〃	〃	1186	甕		1/4	Ⅰ R	内ヘケ
	〃	〃	1187A	甕	2.03	2/3	Ⅰ AR	櫛羽→直　内ミガキ
106	〃	SB1146	1188	壺	6.82	完		黄橙色被熱　外ミガキ
37	〃	〃	1189	壺	5.42	完		黄橙色被熱　外ミガキ
37	〃	〃	1190	壺	0.71	完存		外ミガキ
	〃	〃	1191	壺		完		外精製ミガキ
36	101	〃	1192	壺	3.33	完存		外精製ミガキ　Ｖ5単位
36	〃	〃	1193	壺	8.24	完		黄橙色被熱　Ｖ5単位　外精製ミガキ
36	〃	〃	1194	壺	4.95	完		□内外,頸外精製ミガキ　Ｖ6単位
35	〃	〃	1195	壺		完		黄橙色被熱　懸7単位　胴下位精製ミガキ　Ｖ8単位
36	〃	〃	1196	壺	2.25	完		黄橙色被熱　懸7単位　□外ハケ→ナデ　内不明
36	〃	〃	1197	壺	7.34	2/3		黄橙色被熱　□内外ミガキ
36	〃	〃	1198	壺	3.03	完		□内外ミガキ　Ｖ6単位
37	〃	〃	1199	壺	3.13	完		黄橙色被熱　焼成後穿孔は間違い→刺離痕
37	102	〃	1200	壺	8.51	完		黄橙色被熱　外下半ミガキ　Ｖ6単位
	〃	SB1154	1201	壺	0.67	完存		□外ヨコナデ　内ミガキ　胴外ミガキ
	〃	〃	1202	高杯	0.44	完		外ミガキ　淡い赤彩（スクリーントーン欠落）　内タズリ・ナデ（天地逆）
	〃	〃	1203	甕	1.54	2/3		外ヨコハケ→ナデ　内ハケ残すミガキ
	〃	〃	1204	甕	0.71			
	〃	SB1155	1205	壺		2/3		□内外ミガキ　頸外精製ミガキ　Ⅱ中央沈線ヨコナデ
	〃	〃	1206	壺		1/2		器面荒れ調整不明瞭　Ⅱ2本結束波状沈線　押し出し凸帯
	〃	〃	1207	壺		2/3		□外ヨコナデ・ハケ　内ミガキ　外 淡い赤彩
	〃	〃	1208	壺		1/2		□内外,頸外ミガキ
	〃	〃	1209	壺		3/4		□内外,頸外精製ミガキ
	〃	〃	1210	壺		3/4		□外ヨコナデ・ハケ　内ミガキ　Ⅱ刺突
	〃	〃	1211	壺		3/4		□外ヨコナデ・ハケ　内ミガキ
	103	〃	1212	壺		2/3		□外ヨコナデ・ハケ　内ナデ　胴外ハケ・ナデ
	〃	〃	1213	壺		1/3		器面荒れ調整不明瞭
	〃	〃	1214	壺		2/3		□外LR縄文　内精製ヨコミガキ　頸外精製タテミガキ
	〃	〃	1215	壺		1/4		□内外,頸外精製ミガキ
	〃	〃	1216	壺		1/2		□外タテミガキ　内ヨコミガキ　□刺突
	〃	〃	1217	壺	4.00	2/3		外ハケ残す粗いタテミガキ
	〃	〃	1218	壺		2/3		外ハケ残す粗いミガキ
	〃	〃	1219	壺		2/3		外ハケ残す粗いタテミガキ
	〃	〃	1220	壺		2/3		外精製ミガキ
	〃	〃	1221	壺	4.29	2/3		外ハケ→ナデ　淡い赤彩（スクリーントーン欠落）
	〃	〃	1222	壺		2/3		外上位精製タテミガキ　下位精製ヨコミガキ
	〃	〃	1223	壺		2/3		外上位ヨコハケ→精製タテミガキ　下位精製ヨコミガキ
37	104	〃	1224	壺	7.63	完		□外ヨコナデ　内ヨコミガキ　胴外精製ミガキ　隆帯
37	〃	〃	1225	壺	1.31	完存		外ハケ残すミガキ
	〃	〃	1226	壺		完		外ナデ
38	〃	〃	1227	壺	11.21	3/4		□内外ハケ→ヨコナデ　胴上ハケ→タテミガキ・下ヨコハケ→ヨコケズリ→ミガキ
38	〃	〃	1228	壺	2.28	3/4		外精製タテミガキ　Ｖ連弧文8単位　浮文
	〃	〃	1229	壺		1/4下		
	〃	〃	1230	壺		1/4		外ハケ　Ｖ連弧文
	〃	〃	1231	壺		1/4下		外ハケ残すミガキ　Ⅳ2本結束沈線・縄文・押し引き列点　R
38	〃	〃	1232	壺		2/3		Ⅳ櫛押し引き　R
	〃	〃	1233	高杯		1/2		内ミガキ
	〃	〃	1234	高杯		1/3		
	〃	〃	1235	高杯		1/2		脚外,杯内赤彩（スクリーントーン欠落）　脚内ミガキ
38	105	〃	1236	壺	2.32	1/3		□内赤彩ミガキ（スクリーントーン欠落）
102	〃	〃	1237	高杯	0.19	3/4		突起4箇所　脚内ナデ（ヘンガラ試料№16）
	〃	〃	1238	無頸壺	0.43	1/4下		内ナデ
	〃	〃	1239	鉢	0.40	1/4		内外ミガキ

写真PL	図版	遺構名	土器No.	器種	容量	残存率	施文手法	成形・調整・施文等　特記事項
	105	SB1155	1240	鉢	2.03	1/2		
	〃	〃	1241	有孔鉢	0.57			内ハケ→粗いミガキ
	〃	〃	1242	甕	0.60	1/3	Ⅶ R	□刺突　胴内ナデ
	〃	〃	1243	甕	1.02	1/4下	VGR	内ミガキ
	〃	〃	1244	甕	0.65	1/4	ⅦAR	内ミガキ
	〃	〃	1245	甕	1.00	1/2	ⅦAR	内ミガキ
	〃	〃	1246	甕	(1.31)	1/3	ⅦAR	櫛波→庫　胴外RL縄文全面施文後 波状文施文
	〃	〃	1247	甕	1.25	1/4下		コの字重ね　内ハケ残すミガキ
	〃	〃	1248	甕	(1.20)	2/3		コの字重ね7単位　内ミガキ 平底か？
38	〃	〃	1249	甕	1.30	3/4		コの字重ね5単位　内タテガキ
38	〃	〃	1250	甕	1.27	1/4	Ⅰ R	□刺突　胴内ミガキ
	〃	〃	1251	甕	1.03	2/3	Ⅰ BR	櫛羽状文5単位+斜線文1単位　胴内ハケ
	〃	〃	1252	甕	1.82	1/3	Ⅰ R	□外輪積み痕残す　胴内ハケ残すナガキ
	〃	〃	1253	甕	1.27	1/4下	Ⅰ BR	櫛波（下から上）→羽　胴内ミガキ
	〃	〃	1254	甕	(2.95)	2/3	Ⅲ R	櫛ヤリガキ　胴内外精製ミガキ
38	106	〃	1255	甕	4.92	1/3	Ⅰ BR	□鉢横に強く張り出す　胴内ハケ
	〃	〃	1256	甕	4.42	2/3	Ⅰ BR	櫛羽状文6単位+斜線文1単位　胴内ハケ→ナデ　□刺突
	〃	〃	1257	甕	1.17	1/2	Ⅰ R	櫛羽→波
39	〃	〃	1258	甕	8.20	完	Ⅰ BR	櫛羽状文5単位+斜線文1単位　胴内精製コマガキ 重い甕
39	〃	〃	1259	甕	(5.94)	1/3	Ⅰ BR	胴内ミガキ
	〃	〃	1260	甕		1/3	Ⅱ R	櫛羽→庫　垂下1単位有　胴内精製ナガキ
	〃	〃	1261	甕		1/4	Ⅰ R	胴内ミガキ
39	〃	〃	1262	甕	13.74	3/4	Ⅲ R	胴内外精製ミガキ　顎一部波状文有 1箇所のみ
	〃	〃	1263	甕	2.23	2/3	Ⅶ R	胴内外ハケ残すナガキ
39	〃	〃	1264	甕	2.40	完存	ⅨBR	櫛波状文帯6ブロック　右上が
39	107	〃	1266	甕	4.31	完	VGR	櫛波状文帯垂下5ブロック　内外ハケ残すナデ
	〃	〃	1267	甕	2.32	2/3	VGR	櫛波状文帯垂下5ブロック　内外ハケ残す粗いミガキ
39	〃	〃	1268	甕	3.80	完	VFL	櫛波状文7ブロック4単位
40	〃	SB1156	1269	壺	5.63	3/4		□内外ミガキ　胴外精製ミガキ 焼成後穿孔 淡い赤彩
	〃	〃	1270	壺	6.18	2/3		□内外ミガキ　胴外ヨコハケ→ミガキ
	〃	〃	1271	壺		1/2		胴外精製ミガキ
	〃	〃	1272	壺	0.93	1/4下		
	〃	〃	1273	小型壺	0.30	完存		外ミガキ
	〃	〃	1274	小型壺	0.17	完存		外ミガキ
	〃	〃	1275	壺		完		□外ヨコナデ→ハケ　内ミガキ　胴ハケ
	〃	〃	1276	壺		1/2		Ⅱ沈線間3条ヨコナデ（板ナデ）
40	108	〃	1277	壺	4.33	完		□外ハケ→ヨコナデ・ナデ　内ミガキ　胴外精製ミガキ　Ⅱ～Ⅲ淡い赤彩
40	〃	〃	1278	壺	3.16	2/3		整7単位　Ⅱ押し出し凸帯　沈線板状による　V6単位
	〃	〃	1279	壺		1/2		□外ヨコナデ→粗いケズリガキ　内ミガキ　片口有
	〃	〃	1280	壺		1/4下		V文様帯　重菱形文・山形文充填
	〃	〃	1281	壺		1/4下		V重山形文
	〃	〃	1282	鉢	0.77	1/2		
	〃	〃	1283	鉢	0.63	1/4		
	〃	〃	1284	高杯		2/3		脚部打ち欠き調整　削痕有
	〃	〃	1285	高杯		2/3		
	〃	〃	1286	高杯		2/3		
	〃	〃	1287	壺		1/4下		Ⅲ文様帯空白　V連弧文・LR縄文
	〃	〃	1288	壺		1/4下		□コナデ　胴連弧文・LR縄文　内ミガキ
	〃	〃	1289	壺		1/4下		Ⅲ文様帯空白　Ⅳ波状沈線+LR縄文
	〃	〃	1290	甕	11.38	3/4	Ⅰ AR	櫛縦羽状文4単位+斜線文1単位　内ミガキ
119	〃	〃	1291	甕	8.13	1/3	Ⅲ La	櫛羽→波（上→下）斜線文下位（下から上）　内精ミ　□2本沈線
40	109	〃	1292	甕	23.62	3/4	Ⅲ Rb	櫛波（上→下）→羽　内ハケ→ミガキ
	110	〃	1293	甕	8.03	1/3	Ⅰ R	器面荒れ調整不明瞭　内ハケ→軽いヨコミガキ
40	〃	〃	1294	甕	7.24	2/3	Ⅲ Lb	櫛羽→波（上→下）　内精製ミガキ
	〃	〃	1295	鉢	0.27	完		外ミガキ　内ナデ
	〃	〃	1296	甕	0.49	1/2	X	□緩い受口　刺突
	〃	〃	1297	甕	4.80	1/2		器面荒れ調整不明瞭　内ミガキ
	〃	〃	1298	甕		1/2		櫛直→波　内ミガキ
40	〃	〃	1299	甕	3.66	2/3		櫛羽→波　羽状文8単位+斜線文1単位　内精製ミガキ
40	〃	〃	1300	甕	2.13	3/4		コの字重ね5単位　内精製ミガキ
	〃	〃	1301	壺	1.83	1/3	Ⅲ L	櫛斜→直　□刺突
	〃	SB1157	1302	無頸壺	3.43	1/2		被熱　黄橙色　外ミガキ？　内ハケ？
	〃	〃	1303	鉢	1.05	3/4		被熱　黄橙色
	〃	〃	1304	有孔鉢	0.82	1/3		被熱　黄橙色　内外ハケ→ナデ
	〃	〃	1305	高杯		1/3		被熱　黄橙色　胴内ナデ
	〃	〃	1306	蓋		3/4		被熱　黄橙色　内ミガキ　孔対面2箇所　ツマミ可能性有
	111	〃	1307	壺	7.36	1/3		被熱　黄橙色　外ミガキ
	〃	〃	1308	壺		3/4		被熱　黄橙色　外上位精製ミガキか？　底部焼成後穿孔
	〃	〃	1309	壺	2.97	2/3		被熱　茶褐色　赤彩ミガキ　刺縄　胴部焼成後穿孔
	〃	〃	1310	壺		2/3		被熱　黄橙色　器面荒れ調整不明瞭
	〃	〃	1311	壺		1/4		（被熱していない）　外ハケ

写真PL	図版	遺構名	土器No.	器種	容量	残存率	施文手法	成形・調整・施文等　特記事項
104	111	SB1157	1312	壺	7.11	2/3		被熱　茶褐色　縄上位文様帯RL縄文・下位LR縄文　胴下半精ミ
	〃	〃	1313	壺		完		被熱　黄橙色
	〃	〃	1314	壺		3/4		被熱　黄橙色　胴外タテミガキ？
	〃	〃	1315	甕	3.52	1/3	I BR	(被熱していない)　内ハケ→ナデ
	〃	〃	1316	甕		1/4 F		被熱　黄橙色　コの字重ね
	〃	〃	1317	甕		1/4	I R	被熱　黄橙色　内ハケ
	112	SB1160	1318	壺		1/3		外精製ミガキ
	〃	〃	1319	壺		2/3		外ハケ残すミガキか？
	〃	〃	1320	壺	0.67	完存		外精製ミガキ
	〃	〃	1321	壺		1/4 F		外ハケ残すミガキか？
	〃	〃	1322	壺	0.84	完存		□外ヨコナデ　内ミガキ　胴外ハケ残すタテミガキ　II一部櫛押し引き
	〃	〃	1323	壺	(0.37)	1/2		外ミガキ
	〃	〃	1324	壺		1/3		外ハケ残すミガキか？
	〃	〃	1325	壺		2/3		外ミガキ　V重山形文
	〃	〃	1326	壺	(3.05)	1/2		外赤彩タテミガキ　胎土白色系
	〃	〃	1327	鉢	1.51	1/4		脚内ナデ
	〃	〃	1328	高杯		2/3		内外ナデ
	〃	〃	1329	壺		1/3		
41	113	〃	1330	甕	9.43	1/3	I BR	強波熱　黄橙色
	〃	〃	1331	甕		1/4	I R	内ハケ→ナデ
41	〃	〃	1332	甕	9.12	2/3	III Lb	櫛直(上から下)→羽
	〃	〃	1333	甕		1/2	III L	内ヨコミガキ
	〃	〃	1334	甕		1/4 F	III R	内ヨコミガキ　□指オサエ
41	〃	〃	1335	甕		完	III Rb	櫛波→羽　受口2本結束櫛による山形文　内ハケ残すミガキ
41	114	〃	1336	甕		1/2		内ハケ→ヨコミガキ
	〃	〃	1337	甕		完	I R	機篦(上から下)　内ハケ
	〃	SB1162	1338	壺		1/3		入面付土器　外ミガキか？　内ナデ
	〃	〃	1339	壺	0.87	1/2		
	〃	〃	1340	壺	0.39	完存		器面荒れ調整不明瞭　ハケ残すミガキ？
	〃	〃	1341	壺		1/4 F		IV文様帯
	〃	〃	1342	壺		1/2		懸9単位　II段押し出し凸帯
	115	〃	1346	壺		2/3		外タテミガキ
	〃	〃	1347	壺		2/3		□外ヨコナデ→ハケ　内ミガキ　胴外ハケ残す精製タテミガキ
	〃	〃	1348	壺	11.09	3/4		□外ミガキ　胴外精製ミガキ　隆帯5箇所
	〃	〃	1349	甕		1/4 F	I BR	内精製ミガキ
	〃	〃	1350	甕		1/4		櫛波→斜　□刺突
	〃	〃	1351	甕	2.18	3/4	VIIAR	櫛4ブロック　内精製ミガキ　台付甕の可能性有
	〃	〃	1352	甕	0.76	1/4	DCR	柴口波状文縦文　内精製ミガキ
	〃	〃	1353	甕		1/4	VFR	内ハケ
	〃	SB1168	1354	鉢	1.11	1/3		内外　赤彩・ミガキ
	〃	〃	1355	壺		1/2		外ミガキ
	〃	〃	1356	甕		1/2	III R	外ハケ→斜線文　内ハケ→ミガキ
	〃	〃	1357	甕		1/4 F	III R	櫛直→羽　内ミガキ
108	116	SB1163	1358	甕	5.29	2/3	I BR	内精製ミガキ
	〃	〃	1359	甕	7.56	1/4 F	III Rb	内ミガキ
	〃	〃	1360	甕	6.54	3/4	I BR	櫛羽状文8単位　内ハケ残すミガキ
103	〃	〃	1361	壺	0.49	完		焼成後穿孔
	〃	〃	1362	高杯		3/4		脚外タテミガキ　内ヨコハケ　杯外ヨコミガキ　大型高杯
	〃	SB1174	1363	壺	6.16	2/3		II上位沈線太い　ヨコナデ　外狭い赤彩　隆帯
	〃	〃	1364	壺		3/4		外ミガキ　隆帯
	〃	〃	1365	壺		2/3		外ミガキ　焼成後穿孔
	〃	〃	1366	壺		3/4		懸9単位　刺突列点で区画　□内外ミガキ
41	117	〃	1367	壺	4.41	3/4		器面荒れ調整不明瞭　胴精製ミガキ
41	〃	〃	1368	壺	3.84	完		□内外ミガキ　胴精製ミガキ
	〃	〃	1369	壺	0.85	2/3		外精製ミガキ
	〃	〃	1370	鉢	1.47	1/3		内外精製ミガキ
	〃	〃	1371	台付甕	1.66	2/3		内外ハケ→ミガキ
42	〃	〃	1372	甕	5.58	完		内外ハケ→精製ミガキ
42	〃	〃	1373	甕	3.89	3/4	III La	内ミガキ
	〃	〃	1374	甕	2.37	1/3		内精製ミガキ
	〃	〃	1375	台付甕				脚部内外ナデ　胴外ハケ　内ミガキ
	〃	〃	1376	甕	0.93	1/2	VII R	内ミガキ
	〃	〃	1377	甕	0.90	1/2	VFR	内ミガキ
	〃	〃	1378	甕		1/3	I BR	内ミガキ
42	118	〃	1379	甕	6.93	完	I BR	櫛羽状文7単位　□刺突
42	〃	SB1172	1380	甕	6.36	2/3	VFR	櫛4ブロック　波状垂下3単位　簾状垂下1単位　簾→巡
42	〃	〃	1381	甕	2.19	2/3	I BR	櫛篦→羽(6単位)
42	〃	〃	1382	甕	26.95	3/4		外ハケ→胴下半粗いタテミガキ　内ハケ→粗いミガキ
43	〃	〃	1383	甕	18.19	1/2	I BR	外下半ハケ→ナデ　内ハケ→ナデ　櫛羽→波
	119	SB1175	1384	壺		3/4		外ハケ残すミガキ
	〃	〃	1385	壺		完存		□内外精製ミガキ　片口有

写真PL	図版	遺構名	土器No.	器種	容量	残存率	施文手法	成形・調整・施文等　特記事項
	119	SB1175	1386	壺	(4.87)	1/3		外精製ミガキ　淡い赤彩
	〃	〃	1387	鉢	0.44	2/3		内外ハケ残すミガキ
	〃	〃	1388	蓋		1/4		内ミガキ　無彩　(スタンプ→トコトル)
	〃	〃	1389	甕	0.51	1/2		内外ナデ　粗製品
115	〃	〃	1390	甕	1.01	2/3		コの字重ね6単位　内ミガキ
	〃	〃	1391	甕	1.70	2/3		コの字重ね7単位　内ハケ残すミガキ
	〃	〃	1392	甕	0.91	3/4	Ⅶ R	内コハケ→ナデ
	〃	〃	1393	甕	7.56	2/3	Ⅲ	内器左上りハケ→ヨコミガキ
112	〃	〃	1394	甕	2.15	3/4		外ハケ→ナデ　内ナデ
	120	SB1176	1395	壺		2/3		外ハケ→ミガキ　底部焼成後穿孔
	〃	〃	1396	壺		2/3		横帯間　LR縄文→ヨコミガキ→LR縄文
	〃	〃	1397	壺		1/2		外下位タテミガキ
	〃	〃	1398	壺		1/2		内外ナデ
	〃	〃	1399	壺		完		内外ナデ
	〃	〃	1400	甕		1/4下		Ⅰ口縁内羽状刺突文　口縁端部刺突列点文　北陸系統
112	〃	〃	1401	甕	3.61	2/3	Ⅰ BR	櫛羽→波　羽状文7単位+斜線文1単位
	〃	SB1177	1402	鉢	0.57	1/4下		
	〃	〃	1403	高杯？	0.94	1/4下		脚部折部　内外面の稜はなく緩やか
	〃	〃	1404	高杯	2.01	2/3		脚部折部　内面明瞭な稜有り
105	〃	〃	1405	壺	2.48	3/4		頸4単位　Ⅳ連弧文10単位　胴下半精製タテミガキ
	〃	〃	1406	甕	1.75	1/2		機格子目文→波
	〃	〃	1407	甕	1.11	完	Ⅰ BR	櫛羽状文3単位+斜線文1単位
110	〃	〃	1408	甕	2.87	完	Ⅰ BR	櫛羽状文8単位+斜線文1単位　内精製ミガキ
	〃	〃	1409	甕		1/4下	Ⅲ	櫛ヤラワ状　内ハケ
	121	SB1178	1410	壺		完存		人面付土器　本文で詳説参照
43	〃	〃	1411	壺		1/3		被熱　褐色　外ミガキ　淡い赤彩
43	〃	〃	1412	壺	(7.39)	2/3		外又接帯ハケ　又接帯より上位ミガキ
43	〃	〃	1413	壺	2.58	3/4		被熱　褐色　外ミガキ？
43	〃	〃	1414	壺		2/3		口内外ミガキ　胴ハケ残すミガキ
	〃	〃	1415	鉢	0.71	2/3		口外輪積み残す　胴内外ナデ
	〃	〃	1416	鉢	0.75	1/2		
	〃	〃	1417	鉢	1.17	1/2		
	122	〃	1418	高杯		2/3		
	〃	〃	1419	甕	0.22	1/2		内ミガキ
43	〃	〃	1420	甕	0.90	完	Ⅶ R	櫛直→波（上から下）
	〃	〃	1421	甕		2/3	ⅦAR	内ミガキ
44	〃	〃	1422	甕	5.25	1/2	Ⅰ R	被熱　黄橙色
44	〃	〃	1423	甕	5.85	3/4	Ⅰ AR	被熱　黄橙色　口刺突
43	〃	〃	1424	甕	0.45	完		外ハケ→クスリ→ミガキ　内ハケ→ミガキ
44	〃	〃	1425	台付甕	4.95	3/4		櫛波状文→乱れた格子目文
44	〃	〃	1426	甕	15.75	3/4		内外ハケ残すミガキ
	〃	〃	1427	甕		1/4	Ⅰ R	被熱　黄橙色
	123	SB1181	1428	壺		2/3		懸6単位　口内外ミガキ
	〃	〃	1429	壺		3/4		懸7単位　口外ヨコナデ→ハケ　内ミガキ
	〃	〃	1430	壺		1/3		Ⅴ連弧文(右から左に描き右回り)　胴下位外ヨコクズリ→ミガキ
102	〃	〃	1431	高杯	0.55	3/4		杯端部内彎
	〃	SB1183	1432	杯	0.29	1/3		外ナデ　内ハケ→ナデ　無彩
	〃	SB1184	1433	壺		2/3		口外ヨコナデ→ハケ　内ミガキ　胴外精製ミガキ
	〃	〃	1434	壺	4.92	3/4		口外ヨコハケ？　胴外ハケ残すミガキ
	〃	〃	1435	壺	11.45	完存		外精製ミガキ　口縁打ち欠き　胴下位打ち欠き
102	〃	〃	1436	鉢	0.21	3/4		杯内の無彩部分はハケ残すミガキ
	〃	〃	1437	高杯	1.27	1/3		
111	124	〃	1438	壺	7.44	1/2	ⅦBR	口直線外反　内面稜　内精製ミガキ
114	〃	〃	1439	甕	25.44	完	Ⅲ Rb	外下半ヨコハケ→タテミガキ　内精製ミガキ
	〃	SB1186	1440	鉢		完		縦書4単位　内ヨコハケ→ナデ
	〃	〃	1441	壺		1/2		口外ハケ→ミガキ　内ミガキ　Ⅱ竹管刺突
	〃	〃	1442	壺	5.86	1/3		被熱褐色化　調整不明瞭　外ミガキ？
106	〃	〃	1443	壺	2.13	完		口外ハケ　内ミガキ　刺突　胴外ハケ残すミガキ
	〃	〃	1444	壺	(8.08)	1/3		被熱褐色化　調整不明瞭
	125	〃	1445	壺		3/4		懸6単位　口外ヨコナデ？　内ミガキ　突起4単位
	〃	〃	1446	甕		2/3	ⅦAR	櫛羽→波
111	〃	〃	1447	甕	7.25	1/2	ⅤFR	櫛直→波　内精製ミガキ
	〃	〃	1448	甕		1/4		コの字重ね
	〃	〃	1449	台付甕	0.53	完	ⅡCR	口直線的に外反　内ミガキ
	〃	SB1189	1450	壺		2/3		外ミガキ
44	〃	〃	1451	壺	5.32	2/3		口刺突　外ヨコナデ　内ミガキ　胴外ハケ残すミガキ
44	〃	〃	1452	壺	5.37	2/3		口刺突　内外ミガキ　胴外ハケ残すミガキ　Ⅱ7単位
	〃	〃	1453	壺		2/3		口内外ハケ→ミガキ　胴ハケ
	126	〃	1454	壺		1/2		口外ハケ　内ヨコミガキ　胴外精製ミガキ　孔突起4箇所
	〃	〃	1455	壺		1/4下		被熱器面荒れ　Ⅱ沈線　ヨコナデ
	〃	〃	1456	壺		2/3		被熱器面荒れ　胴外ミガキ　隆帯

写真PL	図版	遺構名	土器No.	器種	容量	残存率	施文手法	成形・調整・施文等　特記事項
45	126	SB1189	1457	壺		2/3		被熱器面荒れ　調外精製ミガキ　Ⅳ波状沈線文・地文LR縄文
45	〃	〃	1458	壺	0.54	完		欠損部　注口のみ
	〃	〃	1459	高杯		3/4		内コハケ
	〃	〃	1460	高杯		3/4		内コハケ
	〃	〃	1461	甕		1/4下		コの字重ね・地文LR縄文（縄→コ）外段部刺突　内精製ミガキ
45	〃	〃	1462	甕	0.85	3/4	Ⅲ R	内ミガキ
45	〃	〃	1463	甕	8.88	1/2	Ⅲ Lb	内外精製ミガキ　口刺突
112	〃	〃	1464	甕	9.50	完	Ⅰ BR	櫛羽8単位→波　内外精製ミガキ
	127	〃	1465	甕	13.01	2/3	Ⅰ BR	外下位ハケ残す粗いタテミガキ　内ハケ残すミガキ
45	〃	〃	1466	甕	15.99	2/3	Ⅰ BR	櫛羽状文8単位　内ヨコミガキ
	〃	〃	1467	甕	2.21	2/3	Ⅰ BR	櫛羽状文5単位　内精製ミガキ
	〃	〃	1468	甕		1/2	Ⅱ L	口刺突
110	〃	〃	1469	壺	6.26	3/4	Ⅰ BR	櫛羽状文4単位　内精製ミガキ
45	〃	〃	1470	甕	11.99	完	Ⅰ BR	櫛羽状文10単位　内ハケ残すミガキ
45	128	〃	1471	甕	4.58	1/3	Ⅰ BR	櫛波→羽
46	〃	〃	1472	甕	(7.46)	3/4	Ⅰ BR	櫛羽→羽（9単位）　内精製ミガキ
	〃	〃	1473	甕	1.37	2/3	ⅦAR	櫛羽→波　口突起1箇所有
	〃	〃	1474	壺	0.83	完	Ⅰ BR	櫛羽状文7単位
	〃	SB1189	1475	甕	2.71	1/3	Ⅰ BR	器面荒れ調整不明瞭　（SB1190出土破片と接合）
	〃	〃	1476	壺		1/3		口外ハケ　内ミガキ　調外ミガキ　（SB1190出土破片と接合）
108	〃	SB1190	1477	甕	4.66	1/2	Ⅰ BR	内ミガキ
	〃	〃	1478	鉢	0.52	3/4		口縁端部内彎
	〃	〃	1479	壺		1/4下		胴最大径上部　LR縄文→櫛歯文
	〃	〃	1480	壺	0.57	完存		外ミガキ
	〃	〃	1481	壺		1/3		Ⅱ連弧文　Ⅲハケ残すタテミガキ
	〃	〃	1482	壺		3/4		Ⅴ連弧文9単位　外下半タテミガキ
	〃	〃	1483	壺	(0.39)	1/3		
	129	SB1192	1484	壺	5.93	1/3		口外タテミガキ　調外精製ミガキ
	〃	〃	1485	鉢	1.43	1/3		脚部折内外緩やか　突起
	〃	SB1211	1486	鉢	0.40	1/3		
	〃	〃	1487	甕		1/3		調文横帯波い赤彩　内ミガキ
	〃	SB1256	1488	壺		1/3		SB1258の破片と接合
	〃	SB1257	1489	壺		1/4		口調整不明瞭　調外ハケ残すミガキ
	〃	〃	1490	甕	2.41	3/4	Ⅰ BR	櫛羽状文5単位　内ミガキ
115	〃	〃	1491	甕	1.74	完		外ハケ→タテミガキ　内粗いタテミガキ
112	〃	〃	1492	甕	7.92	2/3	Ⅰ BR	内精製ミガキ
105	130	SB1248	1493	壺	4.36	完		口器面荒れ調整不明瞭　調外タテミガキ
	〃	〃	1494	壺	4.45	1/2		外精製ミガキ　Ⅴ連弧文　右から左へ描き左回り
	〃	〃	1495	壺	(2.45)	3/4		
	〃	〃	1496	壺		1/2		
	〃	〃	1497	壺		1/4		緩やかな受口状口縁
	〃	〃	1498	壺		1/4下		受口状口縁
	〃	〃	1499	壺		1/3		外下位タテミガキ　Ⅴ区画内押し引き列点文
	〃	〃	1500	壺	(14.23)	1／3		外沈線→縄文→ミガキ　沈線内赤彩
	〃	〃	1501	甕		1/4下	Ⅰ R	内ミガキ
	〃	〃	1502	壺	2.11	完	Ⅰ BR	櫛羽状文3単位
46	131	SB1258	1503	壺	2.49	完		壺5単位　Ⅴ連弧文9単位　口内外ミガキ
	〃	〃	1504	壺		2/3		口外ヨコナデ→ハケ→ミガキ　調外ミガキ？
	〃	〃	1505	壺	0.53	完存		底部打ち欠き穿孔
46	〃	〃	1506	壺	4.95	完	Ⅰ BR	櫛羽状文4単位　内精製ミガキ
	〃	〃	1507	壺	(8.84)	2/3	Ⅰ BR	櫛羽状文4単位　ササラ状　内精製ミガキ
	〃	〃	1508	甕	3.05	1/4下	ⅦAR	内ミガキ
46	〃	〃	1509	甕	1.84	完	Ⅰ BR	櫛羽状文4単位　内ミガキ
	〃	〃	1510	甕	0.53	完	Ⅶ R	内精製ミガキ
	〃	〃	1511	甕	(1.68)	2/3	Ⅰ R	内ハケ残すミガキ
	〃	SB1259	1512	甕		1/4下	Ⅰ R	口刺突　調廉状文　羽状文
	〃	〃	1513	甕		1/4下	Ⅰ R	口刺突　調羽状文
	〃	〃	1514	壺		1/4下		Ⅳ沈線文　RL縄文
	〃	〃	1515	壺		1/4下		Ⅳ沈線文
	〃	〃	1516	壺		1/4下		Ⅴ連弧文
	〃	〃	1517	壺		1/4下		Ⅴ沈線文　櫛描文
	〃	〃	1518	壺		1/4下		Ⅴ沈線文
	132	SB1260	1519	壺		1/3		口外ハケ　内ミガキ
	〃	〃	1520	壺		2/3		口外ヨコナデ　内ミガキ
	〃	〃	1521	壺		1/3		外器面荒れ調整不明瞭　ミガキ？　Ⅱ斜状沈線文
	〃	〃	1522	壺		1/4下		胴上半　横走沈線・斜状列点文　下半　連弧文
	〃	〃	1523	甕		1/4下	VFR	口横位に直接的に外反　内精製ミガキ
	〃	〃	1524	甕	(4.93)	1/3	Ⅱ L	
	〃	SB1261	1525	壺	5.02	3/4		被熱　黄橙色　外ハケ→ミガキ
	〃	〃	1526	壺	(4.65)	2/3		被熱　橙色　外ハケ→精製ミガキ
	〃	〃	1527	壺		2/3		被熱　橙色　外ハケ→精製ミガキ

写真PL	図版	遺構名	土器No.	器種	容量	残存率	施文手法	成形・調整・施文等　特記事項
	132	SB1261	1528	壺		2/3		被熱　黄橙色　受口状口縁
	〃	〃	1529	壺		3/4		被熱　黄橙色　外ミガキ　Ⅱ押引き列点文
	〃	〃	1530	壺		3/4		被熱　橙色　外ハケ→ナデ
	〃	〃	1531	壺		3/4		被熱　黄橙色　Ⅱ波状沈線3単位+押引き列点文1単位
	〃	〃	1532	壺		1/4下		外精製ミガキ　Ⅲ垂下文(波状沈線)
	133	〃	1533	壺	23.13	2/3		□内外精製ヨコミガキ　頸部製ミガキ
	〃	〃	1534	甕		1/4下	Ⅰ R	被熱　黄橙色　内ミガキ
	〃	〃	1535	甕	0.55			
	〃	〃	1536	台付甕	0.55	完	VFR	被熱　黄橙色　内ミガキ
	〃	〃	1537	甕		1/2	Ⅰ R	被熱　褐色　器面荒れ調整不明瞭
107	〃	SB1262	1538	壺	4.62	3/4		外ハケ残すタテミガキ
	〃	〃	1539	壺	4.48	2/3		外ハケ残す粗いタテミガキ
	〃	〃	1540	壺		2/3		□外ハケ→ヨコナデ　内ミガキ　頸外ハケ
	〃	〃	1541	壺		2/3		□外ヨコハケ→ヨコナデ　緩やかな受口　頸ハケ→ナデ
	134	〃	1542	壺	15.15	1/4下		□外ヨコナデ　内ミガキ　頸外精製ミガキ
	〃	〃	1543	壺	0.97	完存		
	〃	〃	1544	壺		3/4		縦4単位, 区画なし　Ⅱ・Ⅲ沈線内櫛描直線文2条(上→下)
	〃	〃	1545	高杯		2/3		
	〃	〃	1546	甕		1/2		コの字重ね文
	〃	〃	1547	有孔鉢	0.89	2/3		内外ミガキ
108	〃	〃	1548	甕	4.65	完	ⅠBR	櫛羽状文6単位　内外精製タテミガキ　□刺突
109	〃	〃	1549	甕	9.05	完	ⅠBR	櫛羽状文7単位　内外精製タテミガキ　□刺突
	135	SB1263	1550	壺		完		縦4単位　□内外ミガキ　突起5単位
	〃	〃	1551	壺		3/4		被熱　器面荒れ調整不明瞭
	〃	〃	1552	壺		3/4		外ハケ
	〃	〃	1553	無頸壺		1/4下		□縁部横走沈線　押引き列点文
	〃	〃	1554	小型土器		2/3		壺を範型とする
	〃	〃	1555	小型土器	0.13	完		頸外上半縦位縄文
47	〃	〃	1556	高杯	0.55	2/3		
	〃	〃	1557	高杯		完		
	〃	〃	1558	鉢	1.28	3/4		内外精製ミガキ　□縁外面LR縄文
	〃	〃	1559	鉢	0.51	1/2		
101	〃	〃	1560	鉢		3/4		内外精製ミガキ
47	〃	〃	1561	甕	3.11	3/4	ⅠBR	櫛羽状文5単位+斜線文2単位　内精製ミガキ
	〃	〃	1562	甕	5.73	3/4		内ハケ残すミガキ
47	〃	〃	1563	甕	1.40	2/3	ⅠBR	櫛羽状文4単位+斜線文1単位　内ハケ→ナデ
	〃	〃	1564	甕	(3.08)	1/4下	ⅦAR	垂下沈線有
47	〃	〃	1565	甕	0.67	2/3	ⅦAR	内ハケ残すミガキ
47	〃	〃	1566	甕	3.56	1/4		櫛格子目文　□縁上から刺突
47	136	〃	1567	壷	(3.88)	2/3		縦6単位　垂垂文間のみ赤彩
	〃	〃	1568	甕		1/3		櫛横羽状文　ヤサラ状　波→羽　内精製ミガキ
47	〃	〃	1569	甕	4.24	2/3	ⅠAR	内ハケ
	〃	SB1279	1570	壺	0.63	完		外ハケ残すタテミガキ
	〃	SB1264	1571	壺		2/3		被熱・器面荒れ不明瞭　□緩やかな受口
	〃	〃	1572	小型土器		1/2		外ナデ　壺を範型とする
	〃	〃	1573	鉢	0.54	1/2		高杯の可能性有
	〃	〃	1574	鉢	0.22	完存		外ナデ　内ヨコハケ→ナデ
116	〃	〃	1575	甕	1.53	3/4	ⅠBR	櫛ヤサラ状　内斜左上ハケ残すミガキ
	〃	〃	1576	甕	0.51	完		外ミガキ　内ハケ
115	〃	〃	1577	小型土器	0.17	完	VER	□内LR縄文　頸外垂下5単位　内ハケ→ミガキ
115	〃	〃	1578	甕	1.03	完		コの字重ね6単位　LR縄文→沈線
48	137	SB1276	1579	壺	5.90	3/4		□内外器面荒れ　頸外上半ハケ残すタテミガキ　V連弧文8単位
48	〃	〃	1580	壺	3.23	完		□内外精製ヨコミガキ　孔対面2箇所　胴本文参照
48	〃	〃	1581	鉢	1.52	3/4		内面のみ赤彩　□縁内雲状
	〃	〃	1582	鉢	1.22	1/4		鉢部曲部の内面に稜があり, 外面は緩やか　突起5単位？
48	〃	〃	1583	鉢	2.73	1/2		
48	〃	〃	1584	甕	1.90	3/4	Ⅲ L	櫛波→斜　内ヨコミガキ
48	〃	〃	1585	甕	1.42	3/4	ⅦAR	一回あたりの波状縄文が長い
48	〃	〃	1586	台付甕	0.76	2/3	ⅦAR	内ハケ残すミガキ
	〃	SB1277	1587	鉢		1/2		□内外ヨコナデ　無彩
	〃	〃	1588	鉢		1/4		外横走沈線内を波状沈線・刺突・押し引き列点で充填
	〃	〃	1589	小型土器		3/4		内外ナデ
102	〃	〃	1590	高杯	0.51	2/3		内外赤彩
	〃	〃	1591	高杯		完		
	〃	〃	1592	有孔鉢	0.61	1/2		外ナデ　内ハケ→ナデ
116	〃	〃	1593	台付甕	0.54	完	Ⅶ R	胴浮文ブロック6単位　(一箇所のみ中央に浮文有)　内ヨコミガキ
	138	SB1278	1594	高杯	0.11	2/3		
	〃	〃	1595	鉢	0.74	1/4下		
	〃	〃	1596	有孔鉢	0.95	1/2		外ハケ残すヨコミガキ　内ミガキ
	〃	〃	1597	甕		1/2		内外ハケ→ナデ
111	〃	〃	1598	甕	2.25	2/3	VFR	櫛波→垂下　内精製ヨコミガキ

写真PL.	図版	遺構名	土器No.	器種	容量	残存率	施文手法	成形・調整・施文等　特記事項
	138	SB1278	1599	甕	9.59	1/4		櫛波（上から下）→垂下　内外軽いヨコケズリ→ナデ
113	〃	SB1280	1600	甕	7.01	3/4	I BR	櫛波（上から下）→羽　内外精製ミガキ
	〃	〃	1601	鉢	(0.47)	1/2	VMAR	内ヨコミガキ
	〃	SB1281	1602	壺	4.79	2/3		□ヨコナデ　内ミガキ　胴外精製ミガキ
	〃	〃	1603	壺	(0.60)	1/4		Ⅱ～Ⅴ横走沈線+連弧文
	〃	〃	1604	壺		1/4下		1605と同一個体
	〃	〃	1605	壺		1/4下		Ⅱ藤状文　Ⅲ懸垂文（波状）　Ⅳ沈線・櫛直線文
	139	SB1282	1606	壺	(5.94)	2/3		□外ヨコナデ　ハケ　内ミガキ　胴外ハケ残す粗いタテミガキ
	〃	〃	1607	壺		2/3		外精製ミガキ　隆帯
	〃	〃	1608	壺		1/4下		外ハケ残す粗いタテミガキ　隆帯
	〃	〃	1609	壺		2/3		□外ヨコナデ→ハケ　内ヨコナデ　胴外タテハケ→ナデ
	〃	〃	1610	壺		2/3		□外ヨコナデ　内器面荒れ調整不明瞭　Ⅱ擬似縄文　外淡い赤彩
	〃	〃	1611	壺		1/2		□外ヨコナデ　内器面荒れ調整不明瞭　緩やかな受口
	〃	〃	1612	壺		完		□外ヨコナデ　内ミガキ　胴外ハケ残すミガキ　Ⅱ連弧文8単位
	〃	〃	1613	壺		3/4		□内外ヨコナデ・ミガキ　緩やかな受口
	〃	〃	1614	壺		1/3		□内ヨコミガキ
	〃	〃	1615	壺	(4.46)	3/4		器面荒れ調整不明瞭　Ⅳタテミガキ？　Ⅴ連弧文13～14単位
	〃	〃	1616	壺		1/4下		Ⅳ～Ⅴハケ→連弧文右回り施文　Ⅴ以下ミガキ
	〃	〃	1617	壺		1/4		
	〃	〃	1618	壺		1/4下		外ミガキ？
	140	〃	1619	壺		1/2		胴外下位ヨコケズリ→ヨコミガキ
	〃	〃	1620	壺		1/4下		Ⅲ空白帯　Ⅴ櫛直文
	〃	〃	1621	壺		1/4下		Ⅴ櫛直文
	〃	〃	1622	壺		1/4下		Ⅴ重山形文・重三角文間を櫛描波状文で充填
	〃	〃	1623	壺		1/4下		多段横帯文　浮文　押し引き山形文　縦状凸帯が縦位に添付
49	〃	〃	1624	壺	10.85	1/2		多段横帯文
	〃	〃	1625	壺	0.16	1/3		外ナデ
	〃	〃	1626	壺	0.68	3/4		外精製ミガキ
	〃	〃	1627	壺	0.50	2/3		□内外,胴精製ミガキ　記号5単位
	〃	〃	1628	鉢	0.23	1/2		
	〃	〃	1629	鉢	0.34	1/2		□外LR縄文　ナデ
	〃	〃	1630	有孔鉢	1.16	1/3		内外ハケ
48	〃	〃	1631	鉢	3.51	3/4		外ハケ→沈線→縄文　連弧文5単位右回り　内ヨコハケ　□指オサエ
	〃	〃	1632	鉢		1/4		□ヨコナデ　内ミガキ
	〃	〃	1633	高杯	0.81	1/4下		脚内ナデ　円版充填
	〃	〃	1634	高杯		完		
	〃	〃	1635	壺	0.39	2/3	VFR	櫛波状文6ブロック　垂下5単位
49	141	〃	1636	台付甕	0.56	完	IXAR	櫛波状文6ブロック　内ハケ残すタテミガキ
	〃	〃	1637	台付甕		完		内外ミガキ
49	〃	〃	1638	台付甕	1.86	2/3		内外ハケ残すミガキ
	〃	〃	1639	甕	1.61	2/3	VFR	内ハケ
	〃	〃	1640	甕	(8.23)	2/3	VMAR	内精製ミガキ
	〃	〃	1641	甕	2.68	1/3	VMAR	垂下文（波状沈線）　内精製ミガキ
	〃	〃	1642	甕	2.08	1/2	I BR	□縦外LR縄文　櫛羽→波　内精製ミガキ
49	〃	〃	1643	甕	4.86	3/4	I AR	櫛羽状文8単位　内ミガキ
49	〃	〃	1644	甕	5.98	3/4		櫛斜線文+縦羽状文・波状文
	〃	〃	1645	甕		1/4下		コの字重ね
	〃	〃	1646	甕		1/4下		コの字重ね　文様乱れ
	〃	〃	1647	甕		1/4下		コの字重ね
50	142	〃	1648	甕	5.29	完	I AR	胴外タテミガキ　胴内上位ヨコハケ→ヨコミガキ　下位左上りハケ→ヨコミガキ
50	〃	〃	1649	甕	4.29	3/4		内外ハケ
49	〃	〃	1650	甕	2.19	1/2	Ⅲ R	内ミガキ
	〃	〃	1651	甕	8.89	1/3		内ハケ残すミガキ
49	〃	〃	1652	甕	13.32	2/3		外精製ミガキ　内ヨコハケ→ナデ
	〃	SB1283	1653	甕	9.41	1/2	I BR	櫛羽→簾　内ハケ→ナデ
	〃	〃	1654	有孔鉢	0.89	2/3		外ナデ→タテハケ　内ヨコハケ
	〃	SB1288	1655	壺		1/4下		Ⅳ～Ⅴ文様帯
	〃	〃	1656	壺		1/4下		Ⅳ～Ⅴ文様帯
	〃	〃	1657	鉢		2/3		器面荒れ調整不明瞭　内外ナデ？
103	143	SB1284	1658	壺	0.42	完存		□縦縄り孔5単位　突起（2対）　胴　隆帯
	〃	〃	1659	壺	0.39	完存		ヘラ刺入り
	〃	〃	1660	壺		1/2		□外ハケ・ヨコナデ　内器面荒れ調整不明瞭　胴外ミガキ　□オサエ
	〃	〃	1661	壺		完		内外ミガキ
124	〃	〃	1662	壺		2/3		胴外ハケ→ナデ→沈→縄　縦状凸帯　縦位に3箇所添付
	〃	SB1287	1663	甕	2.57	1/2	I BR	櫛羽→波
	〃	〃	1664	甕	(4.35)	1/3	I BR	櫛羽→波（上から下）　内ハケ→ミガキ
	〃	〃	1665	甕	1.12	完		外タテミガキ　内ヨコハケ→ミガキ
	〃	〃	1666	壺	3.25	1/2		外器面荒れ調整不明瞭　タテミガキ
	〃	SB1289	1667	壺	2.13	1/3		外器面荒れ調整不明瞭　ハケ残すミガキ
	〃	〃	1668	壺	2.02	1/2		外ハケ→ミガキ
	〃	〃	1669	壺		1/2		外器面荒れ調整不明瞭

写真PL	図版	遺構名	土器No.	器種	容量	残存率	施文手法	成形・調整・施文等 特記事項
	144	SB1289	1670	壺		3/4		□外ヨコナデ・ナデ　内ミガキ　胴外ハケ残すミガキ　□刺突
	〃	〃	1671	壺		完		Ⅱ連弧文7単位　□外ハケ→ヨコナデ
	〃	〃	1672	壺		1/3		内外ミガキ　Ⅱ縄文→羽状文
	〃	〃	1673	壺	19.91	3/4		2次被熱　外ハケ残すミガキ
	〃	〃	1674	高杯		完		無彩　内外精製ミガキ
	〃	〃	1675	甕		1/2	Ⅰ BR	櫛羽→簾
	〃	〃	1676	鉢	0.63	1/3		
120	〃	SB1291	1677	壺		3/4		□内外精製ミガキ　Ⅱ押し出し凸帯ヨコナデ　Ⅲ精製ミガキ　Ⅴ6単位
	〃	〃	1678	壺		完		□内外精製ミガキ
	〃	〃	1679	有孔鉢	0.41	1/4		内外精製ミガキ
	〃	〃	1680	鉢	1.08	1/3		
	〃	〃	1681	甕		1/4下	Ⅰ R	内ミガキ
	〃	〃	1682	甕	1.45	1/2	Ⅰ R	□刺突　櫛横位施文(図示中央部のみ斜位施文)
	〃	〃	1683	甕	(4.53)	2/3	Ⅰ BR	櫛直→垂下→羽(羽状文6単位)図示部分のみ垂下文　内ミガキ
	145	SB1290	1684	壺	3.61	1/3		器面荒れ調整不明瞭　□内外ミガキ？　胴外ミガキ　Ⅱ2本沈線
	〃	〃	1685	壺	2.94	3/4		器面荒れ調整不明瞭　胴下位ヨコケズリ→ケズリミガキ
	〃	〃	1686	高杯	0.89	1/2		器面荒れ調整不明瞭
	〃	〃	1687	甕		1/2		器面荒れ調整不明瞭　乱れた横位斜縄文　内ナデ
	〃	〃	1688	甕	(4.27)	1/2		器面荒れ調整不明瞭　外ハケ→ミガキ　隆帯　内ハケ→ミガキ
	〃	〃	1689	甕	16.51	1/2		器面荒れ調整不明瞭
	〃	〃	1690	甕		1/4下		内面羽状刺突文　外波状文　□隆線縄文　北陸系統
	〃	〃	1691	甕		1/2	R	器面荒れ調整不明瞭　上位波状文(中部高地型)　下位斜縄文
	〃	〃	1692	甕	2.67	1/4	VGR	内ミガキ
	146	SB1292	1693	壺		1/3		外精製ミガキ
	〃	〃	1694	壺		1/4		天地逆の可能性もある
	〃	〃	1695	鉢		1/4下		外ハケ→ミガキ　押し引き列点文　内ハケ・ミガキ
105	〃	〃	1696	壺	(2.53)	2/3		□内外精製ミガキ　内の赤淡い赤彩　胴外縄文・押し引き列点R
	〃	〃	1697	鉢	1.99	3/4		孔1箇所　突起5単位
	〃	〃	1698	甕		1/3	Ⅲ Lb	櫛羽状文弱い　内ハケ
	〃	〃	1699	甕	6.28	1/2	Ⅰ BR	全口外面の硬明瞭　胴内ミガキ
112	〃	〃	1700	甕	6.27	1/2	ⅦAR	内ミガキ
	147	SB1293	1701	壺		1/2		外精製ミガキ　図面修正必要
	〃	〃	1702	壺		1/4		外精製ミガキ　淡い赤彩
	〃	〃	1703	壺		2/3		外ハケ
	〃	〃	1704	壺		1/4下		外胴上半ハケ→ミガキ
	〃	〃	1705	壺		2/3		外ハケ残すミガキ
	〃	〃	1706	壺		2/3		□内外胴外精製ミガキ
	〃	〃	1707	壺		1/3		□外ヨコナデ　内ミガキ　Ⅱ押し出し凸帯(ヨコナデ有)　Ⅲ精製ミガキ
	〃	〃	1708	壺		1/4		
	〃	〃	1709	壺		1/4下		Ⅳ・Ⅴ文様帯
	〃	〃	1710	壺		1/4下		Ⅳ・Ⅴ文様帯
	〃	〃	1711	壺		1/4下		Ⅴ文様帯　淡い赤彩
	〃	〃	1712	壺		1/4		□内外粗いミガキ　刺突
	〃	〃	1713	壺		2/3		□外ヨコナデ　内ミガキ　受口2本結束櫛による波状文
	〃	〃	1714	壺		2/3		
	〃	〃	1715	高杯		完		内ヨコハケ
	〃	〃	1716	鉢	0.45	1/2		内外ミガキ　無彩
	〃	〃	1717	有孔鉢	1.14	1/4		内外精製ミガキ
	〃	〃	1718	有孔鉢	2.15	2/3		内外ヨコハケ→ミガキ
	148	〃	1719	甕		2/3	Ⅰ BR	櫛羽→波
	〃	〃	1720	甕	0.75	1/3	Ⅲ L	櫛斜→波　途中から斜縄の方向転換
	〃	〃	1721	甕		1/4		櫛斜縄文施文後 波状文施文
	〃	〃	1722	甕	1.34	1/3	VFL	内ミガキ
110	〃	〃	1723	甕	2.16	2/3	Ⅰ BR	内ミガキ
	〃	〃	1724	甕	3.71	1/3	Ⅲ R	櫛一部波状文施文後 斜縄文
	〃	〃	1725	甕		2/3	Ⅰ BR	櫛羽→直　羽状文7単位　内ミガキ
110	〃	〃	1726	甕	4.68	1/3	Ⅰ BR	内ヨコハケ→ミガキ
117	〃	〃	1727	甕	4.44	完	Ⅰ BR	櫛直→波　羽状文4単位　内ヨコハケ・ヨコミガキ
117	〃	〃	1728	甕	2.98	3/4	Ⅰ BR	□刺突　内ヨコハケ
	〃	〃	1729	甕	3.82	2/3	Ⅰ AR	櫛羽→直　内ミガキ　□縄文→刺突
	〃	〃	1730	甕	(5.98)	3/4		櫛波状重下→頸部波状文　□蕾擬似縄文
109	149	〃	1731	甕	5.71	2/3	Ⅰ BR	櫛羽状文6単位+斜縄文1単位
	〃	〃	1732	壺		1/4下	VHR	内ハケ
	〃	〃	1733	甕	(3.16)	1/4下	Ⅲ	
	〃	〃	1734	台付甕	1.79	1/2	VFR	内ミガキ
	〃	〃	1735	甕	1.82	1/3	Ⅰ BR	内ハケ→ミガキ
	〃	SB1295	1736	甕		1/4下		□蕾端上位からの刺突
	〃	SB1297	1737	壺		1/3		焼成後穿孔
109	〃	SB1296	1738	甕	4.84	3/4	Ⅰ BR	内精製ミガキ
	〃	〃	1739	壺	1.03	完存		外ハケ　Ⅴ連弧文10単位　上位波状沈線　図示部分のみ
	〃	SB1298	1740	甕		1/4		受口連弧文(同部施文の連弧文は頸例多くない)

写真PL	図版	遺構名	土器No.	器種	容量	残存率	施文手法	成形・調整・施文等　特記事項
	149	SB1298	1741	壺		1/4下		太頸壺　Ⅱ横走沈線4条
	〃	〃	1742	壺		1/4下		多段横帯文　LR縄文帯・ミガキ帯交互施文
	〃	〃	1743	壺		1/4下		Ⅱ部→波状沈線→櫛→押し引き列点文
	〃	〃	1744	壺		1/4下		懸垂文　拓本天地逆
	〃	〃	1745	壺		1/4下		懸垂文　波状沈線
	〃	〃	1746	壺		1/4下		Ⅳ・Ⅴ文様帯　山形沈線　直三角文
	〃	〃	1747	壺		1/4下		Ⅳ文様帯　波状沈線文
	〃	〃	1748	壺		1/4下		Ⅴ文様帯　1744と同一個体か
	150	SB1294	1749	鉢		1/2		口外擦波状文　胴内外ミガキ
	〃	〃	1750	台付甕		2/3		
	〃	〃	1751	高杯		3/4		脚内精製ミガキ
	〃	〃	1752	壺		1/2		被熱　橙色　外ハケ
	〃	〃	1753	壺		1/2		外ハケ　一部タテミガキ
	〃	〃	1754	甕	1.75	1/3	Ⅰ R	被熱　褐色　内ミガキ
108	〃	〃	1755	甕	2.41	完	Ⅰ AR	被熱　黄橙色　櫛圧→羽　羽状文7単位・斜縄文1単位　内ヨコハケ
	〃	〃	1756	甕	4.90	2/3	VFR	被熱　黄橙色　内ヨコハケ→？
	〃	〃	1757	甕		1/3	Ⅰ BR	被熱　灰白色～黄橙色　櫛羽状文10単位　口縁仮縄文
	151	〃	1758	甕		1/4下		被熱　橙色　櫛波状文（上から下）コの字重ね
50	〃	〃	1759	壺		1/2		被熱　灰白色～黄橙色　Ⅳ沈線文・櫛描文　被熱歪み土器
	152	SB1296	1760	壺	9.89	1/2		口内外ミガキ　胴外精製ミガキ　最大径部は図示部分のみ施文
	〃	〃	1761	壺	2.11	2/3		口外ハケ・ヨコナデ　内ミガキ　胴外ハケ残すミガキ
	〃	〃	1762	壺		2/3		胴外ハケ
	〃	〃	1763	鉢	0.43	1/3		
	〃	〃	1764	鉢	3.08	1/4		
	〃	〃	1765	甕		1/3	Ⅰ AR	櫛羽→羽　口オサエ　胴外擦状文・羽状文・刺突文　内ミガキ
	〃	〃	1766	甕		1/2		受口外縁仮縄文
	〃	〃	1767	台付甕	0.49	完	Ⅰ BR	櫛羽状文7単位　浮文5単位　内ナデ
110	〃	〃	1768	甕	3.97	完	Ⅲ L	内ヨコミガキ
	〃	SB1303	1769	壺		3/4		口内外ヨコナデ　胴外精製タテミガキ　Ⅱ櫛2本
	〃	〃	1770	甕		1/4下		内精製ミガキ
	〃	〃	1771	甕	0.91	1/2	ⅦAR	内精製ミガキ
50	153	SB1302	1772	壺	4.60	1/2		口外ハケ　内ミガキ　胴外精製ミガキ
	〃	〃	1773	壺		1/3		器面荒れ調整不明瞭　胴外ハケ・ミガキ？
	〃	〃	1774	壺	4.81			
	〃	〃	1775	壺	4.75			
	〃	〃	1776	壺		1/4下		Ⅲタテミガキ　Ⅳ沈線・LR縄文　胴下位ヨコミガキ
	〃	〃	1777	壺		1/4下		Ⅲ～Ⅳ横帯文　櫛直線文上に山形沈線文・連弧文・LR縄文
	〃	〃	1778	壺		1/4下		Ⅲ～Ⅳ横帯文　1段置きにLR縄文
	〃	〃	1779	壺		1/4下		Ⅳ・Ⅴ横走沈線内LR縄文波状沈線充填・連弧文
51	〃	〃	1780	甕	1.92	2/3	VGR	櫛垂下6単位　内ミガキ
50	〃	〃	1781	甕	6.44	完	Ⅰ BR	櫛直→羽　外タテミガキ　内ハケ残すミガキ
	〃	〃	1782	鉢	0.39	3/4		外ナデ　内ハケ→ナデ
	〃	〃	1783	高杯		1/2		
	〃	〃	1784	台付甕		1/2		脚部
	154	〃	1785	甕	4.09	1/3	Ⅰ BR	口指オサエ　内ハケ→ナデ
	〃	〃	1786	甕	14.60	1/4下	Ⅲ L	口指オサエ
51	〃	〃	1787	甕	1.95	完	Ⅲ Rb	内精製ヨコミガキ
51	〃	〃	1788	甕	2.59	2/3	Ⅲ Rb	内ヨコハケ→精製ヨコミガキ
	〃	〃	1789	壺	4.14	1/2	ⅦAR	櫛羽→波　受口山形沈線文　内ミガキ
	〃	SB1304	1790	鉢	0.70	1/4下		
	〃	〃	1791	台付甕		完		
	〃	〃	1792	高杯		1/3		
	〃	〃	1793	高杯		3/4		
	〃	〃	1794	壺		1/3		太頸壺　Ⅲハケ残すミガキ　実測図修正必要
	〃	〃	1795	壺	3.11	2/3		口内外器面荒れ調整不明瞭　胴外ミガキ
51	155	〃	1796	壺	5.11	完		胴外精製ミガキ　焼成後穿孔
51	〃	〃	1797	壺	5.02	完		口外ヨコナデ・ハケ　内ミガキ　胴外精製ミガキ　Ⅱ連弧文9単位
	〃	〃	1798	甕	0.55	完		内外ミガキ
52	〃	〃	1799	甕	0.37	完		内外ミガキ　口外輪積み　内面使有
52	〃	〃	1800	甕	3.06	完	Ⅲ Lb	内ミガキ
	〃	〃	1801	甕	5.41	1/4	Ⅲ Rb	内ハケ→ナデ
51	〃	〃	1802	甕	7.26	完	Ⅰ BR	櫛羽→波　波状文8単位　口指オサエ　胴内外精製ミガキ
51	〃	〃	1803	甕	6.07	完	Ⅰ AR	櫛羽状4単位 斜縄1単位　内口縁精製ミガキ・胴左上りハケ→ナデ
52	156	〃	1804	甕	5.98	完	VFR	櫛垂下5単位　内精製ミガキ
52	〃	〃	1805	甕	4.56	完	VFR	櫛垂下5単位　内精製ヨコミガキ
106	〃	SB1305	1806	壺	5.12	完		口外ヨコナデ　内ミガキ　胴外ハケ残すミガキ　前後に隆帯と連弧文
102	〃	〃	1807	壺	1.05	完存		口縁部打ち欠き
	〃	〃	1808	壺		1/2		
	〃	〃	1809	壺		3/4		口外ヨコナデ　内ヨコミガキ　Ⅱ地文縄文　Ⅲ沈線文・櫛直線文
106	〃	〃	1810	壺		3/4		外ヨコナデ　内ヨコミガキ
	〃	〃	1811	壺		1/2		外ミガキ

写真PL	図版	遺構名	土器No.	器種	容量	残存率	施文手法	成形・調整・加文等　特記事項
	157	SB1305	1812	壺		1/2		外精製ミガキ
115	〃	〃	1813	甕	1.87	完		外LR縄文帯2段　内精製ミガキ
106	〃	SB1306	1815	壺	3.99	2/3		外ハケ→ミガキ
	〃	〃	1816	壺		2/3		口外ヨコナデ・ナデ　内ミガキ　Ⅱ押し出し凸帯　(板ナデ)
	〃	〃	1817	壺	(1.67)	3/4		外ハケ残すミガキ
	〃	〃	1819	壺		2/3		口外器面荒れ調整不明瞭　内ヨコミガキ　Ⅱ押し出し凸帯(コビナデ)
	〃	〃	1820	壺		3/4		口外ハケ　内ハケ・ナデ　Ⅱ山形文・押し引き列点文
	〃	〃	1821	壺		完		口内外ミガキ
52	〃	〃	1822	壺	1.22			
	〃	〃	1823	壺	0.31	完存		口内外ナデ　脚外ハケ残すミガキ
	〃	〃	1824	壺		2/3		口外淡い赤彩　内赤彩　Ⅱ押し出し凸帯・押し引き列点文R
	〃	〃	1825	壺		完		Ⅱ押し出し凸帯(ヨコナデ)・刺突
	158	〃	1826	壺		1/2		外精製ミガキ
	〃	〃	1827	壺		1/3		外精製ミガキ　V斜行沈線文
52	〃	〃	1828	壺	4.59			
52	〃	〃	1829	壺	4.45			
	〃	〃	1830	壺		完		口内外精製ミガキ　Ⅱ押し出し凸帯(板ナデ)　縄直線+山形沈線
	〃	〃	1831	壺		2/3		口外ヨコナデ　内ヨコミガキ　磨6単位(波状文3条R)
	〃	〃	1832	壺		2/3		口外ヨコナデ　内ヲ　磨7単位　Ⅱ押し出し凸帯
	〃	〃	1833	壺		1/2		磨5単位(波状沈線で区画)　Ⅱ貼付け凸帯に刺突
53	〃	〃	1834	壺				上位につまみはつかない
53	〃	〃	1835	無頸壺	1.26			
52	〃	〃	1836	壺	0.44			
	〃	〃	1837	鉢	0.89	2/3		底部外面赤彩
	〃	〃	1838	高杯		1/3		内外面赤彩　口唇端部面取り
	〃	〃	1839	有孔鉢	1.04	1/2		内外ミガキ
	159	〃	1840	台付甕		1/3		コの字重ね
	〃	〃	1841	台付甕		1/2		外ナデハケ　内ヨコハケ
53	〃	〃	1842	台付甕	0.81	1/2		コの字重ね　胴外ヨコハケ→コの字(押し引き列点有)　内ヨコミガキ
	〃	〃	1843	台付甕		1/2		外ミガキ
	〃	〃	1844	甕	(1.19)	1/3	I BR	櫛擦→羽　一部波状文　波→羽
	〃	〃	1845	甕	0.88	完	I AR	内精製ミガキ
53	〃	〃	1846	甕	0.80	2/3		
53	〃	〃	1847	甕	7.04	3/4	Ⅲ L	内精製ミガキ
53	〃	〃	1848	甕	5.92	完	VGR	櫛波状文→斜線文→垂下文　内ミガキ
	〃	〃	1849	甕		1/2	Ⅲ	内ヨコミガキ
	〃	〃	1850	甕		1/4下	I R	口刺突　内ミガキ
117	〃	〃	1851	甕	5.79	完	I BR	櫛波(上から下)→羽　羽状文7単位+斜線文1単位　内ハケ→ミ
	160	〃	1852	甕		2/3	VIIAR	内ミガキ
	〃	〃	1853	甕	1.25	完	VHR	櫛垂下文4単位　内ミガキ
	〃	〃	1854	甕	(6.88)			
54	〃	〃	1855	甕	1.42			
54	〃	〃	1856	甕	2.74	完	I BR	櫛羽状文8単位　内外ハケ→粗いミガキ
53	〃	〃	1857	甕	6.76	3/4	I BR	櫛羽状文11単位　内ミガキ
53	〃	〃	1858	甕	19.73	3/4	VFR	内外ヨコハケ
	〃	〃	1859	甕	1.35	完	I BR	櫛羽状文6単位+斜線文1単位
	〃	〃	1860	甕		1/2		内外精製ミガキ　受口　外面有段
	161	SB1307	1861	甕	3.72	完	Ⅲ R	内精製ミガキ　床面直上炭化層より破片状態で出土
	〃	SB1308	1862	鉢		1/2		内ミガキ　無彩　埋土中より出土
	〃	SB1311	1863	壺		1/2		受口緩やか　外ナデミガキ　内ヨコミガキ
113	〃	〃	1864A	甕	3.26	1/2		櫛波文右回り　内ヨコハケ→ミガキ
	〃	SB1178	1864B	壺		1/4		記号一箇所有り
	〃	SB1185	1864C	壺		1/4下		記号複数有り
	〃	〃	1864D	壺		1/4下		記号有り
46	〃	SB1258	1864E	壺	19.25	1/2		口内外ミガキ　胴外ミガキ
	〃	SD12	1864F	壺		1/4		記号複数有り
54	162	SK127	1865	甕	2.77	3/4	Ⅲ La	口指オサエ　内精製ヨコミガキ
	〃	〃	1867	鉢	0.81	1/4		内外赤彩ミガキ
	〃	〃	1868	壺		1/4		外精製ミガキ
54	〃	SK131	1869	甕	3.21	2/3	Ⅲ L	内精製ミガキ
	〃	〃	1870	高杯		1/2		内外赤彩ミガキ
	〃	〃	1871	鉢	1.24	1/4下		内外赤彩ミガキ
	〃	〃	1872	鉢		1/4下		内外赤彩ミガキ
	〃	〃	1873	台付甕		完		外ミガキ
54	〃	〃	1874	壺	4.90	3/4		口内外,胴外精製ミガキ　沈一縄
54	〃	〃	1875	壺	22.99	完		外精製ミガキ　内上位ヨコハケ後ミガキ
55	163	SK133	1876	壺	3.74	1/2		口内外ミガキ　胴精製ミガキ
	〃	〃	1877	壺		1/3		受口内外ミガキ　淡い赤彩　上から刺突　Ⅱ横走沈線
	〃	〃	1878	甕	0.29	1/4	VER	口刺突　内ミガキ
	〃	〃	1879	鉢	0.36	1/2		内外　赤彩ミガキ
	〃	〃	1880	鉢	0.99	1/3		底面裏側赤彩

写真PL	図版	遺構名	土器No.	器種	容量	残存率	施文手法	成形・調整・施文等　特記事項
55	163	SK133	1881	大型鉢	10.14	1/4		外沈線→精製ミガキ　内精製ミガキ
55	〃	〃	1882	大型鉢	(11.22)	1/4下		Ⅰ刺突　外沈線内赤彩残る
	〃	SK141	1883	蓋		1/4		外縄→沈　内ミガキ
	〃	SK143	1884	鉢	0.10	2/3		内外赤彩　裏面ミガキ　脚部に穿孔一箇所有り
	〃	SK149	1885	鉢		1/4下		外淡い赤彩(沈線部のみの可能性有)　内ミガキ
	〃	〃	1886	壷		1/4		外精製ミガキ
	〃	SK150	1887	鉢		完		内外赤彩　裏面ミガキ
	164	SK151	1888	壷	4.81	2/3		外精製ミガキ　隆帯2箇所
55	〃	〃	1889	壷	3.73	1/2		外精製ミガキ　隆帯2(隆帯上にもミガキ)
55	〃	〃	1890	壷	3.00	完		口内精製ミガキ　Ⅴ連弧文7単位　沈→ミガキ
	〃	〃	1891	壷		1/2		外精製ミガキ　Ⅳ横帯文　上位横走沈線1本欠落
	〃	〃	1892	壷		1/3		外精製ミガキ
	〃	〃	1893	壷		1/3		外精製ミガキ　Ⅳ押し引き列点文・鋸歯文
	〃	〃	1894	壷		1/3		外多段横帯文　ハケ→LR縄文→ハケ横走沈線
55	〃	〃	1895	壷	4.85	2/3		懸7単位　連弧文6単位　沈線内赤彩　口外ヨコナデ　内ミガキ
56	〃	〃	1896	壷	7.85	1/2		懸9単位　Ⅴ施文R　沈線内赤彩　外精製ミガキ
55	〃	〃	1897	壷	0.67	完		口外ヨコナデ　内ミガキ　胴外上タテミガキ　下ヨコミガキ　Ⅴ連弧文6単位
55	165	〃	1898	壷	0.45	完		口外ヨコナデ　内粗いミガキ　胴精製ミガキ
	〃	〃	1899	鉢	1.00	1/4下		端部上面LR縄文
	〃	〃	1900	鉢		1/4下		鍔屈折部の内面稜が明瞭　外面に段有り
56	〃	〃	1901	甕	4.78	1/4	ⅠBR	櫛波→羽　口オサエ　内精製ミガキ
56	〃	〃	1902	甕	4.80	完	Ⅲ Lb	口指オサエ　内上位精製ヨコミガキ　下位精製タテミガキ
56	〃	〃	1903	甕	1.41	3/4	ⅤEL	垂下7単位(左から右へ)　内精製ミガキ
56	〃	〃	1904	甕	2.30	3/4	Ⅲ La	内精製ミガキ
56	〃	〃	1905	甕	13.11	3/4	ⅠAR	櫛羽→波　羽状文7単位+斜線文1単位　内精製ミガキ
	〃	〃	1906	甕	9.69	1/2	Ⅲ	櫛波→羽　口指オサエ
56	166	SK153	1907	壷	4.85	完		口内外ヨコナデ　胴外精製ミガキ　Ⅳ波状沈線文は図示部分のみ
57	〃	〃	1908	甕	0.28	2/3	ⅠBR	外刺突列点文　内ミガキ
	〃	〃	1909	壷		2/3		外精製ミガキ
	〃	〃	1910	壷		3/4		外精製ミガキ
	〃	SK154	1911	壷		1/4		白色系に焼き上げて淡い赤彩を行う
	〃	〃	1912	壷		2/3		外精製ミガキ　沈線内赤彩　Ⅴ連弧文9単位
57	〃	SK155	1913	大型鉢	(5.52)	1/2		内外精製ミガキ　口, 胴刺突文　孔対面2箇所
57	〃	〃	1914	甕	8.57	3/4	Ⅲ	口指オサエ　内精製ミガキ
57	〃	〃	1915	甕	8.25	3/4	ⅠBR	櫛羽→波　羽状文11単位　口指オサエ　内精製ミガキ
57	167	SK156	1916	壷	0.47	完		口外ヨコナデ　内ミガキ　外ミガキ　櫛直線文・波状文
57	〃	〃	1917	壷	0.83	3/4		口内外ヨコナデ　外精製ミガキ
57	〃	〃	1918	壷	0.65	2/3		外ハケ→沈線　下部ナデ
	〃	〃	1919	壷		2/3		Ⅱ櫛描直線文　Ⅳ・Ⅴ櫛描直線・波状文　外精製ミガキ
	〃	〃	1920	壷	1.00	2/3		Ⅱ連弧文　外精製ミガキ
57	〃	〃	1921	壷	5.64	2/3		口外ヨコナデ　内ミガキ　胴外精製ミガキ
58	〃	〃	1922	壷	5.95	完		口外ハケ　胴外精製ミガキ　Ⅴ連弧文8単位
	〃	〃	1923	壷		2/3		外精製ミガキ
58	〃	〃	1924	壷	4.31	完存		口外ナデ　内ミガキ　Ⅳ波状沈線一部のみ　Ⅴ重山形文8単位
58	〃	〃	1925	壷	5.12	3/4		懸6単位　口内外ミガキ　胴沈→ミガキ
58	〃	〃	1926	壷		完		胴外ミガキ　Ⅳ横走沈線内(櫛単斜線文・直線文)
	168	〃	1927	壷		3/4		口内外ミガキ　胴外横走沈線・ミガキ
	〃	〃	1928	鉢	0.81			内外赤彩ミガキ
	〃	〃	1929	鉢	0.97	1/4下		内外赤彩ミガキ
58	〃	〃	1930	鉢	0.85	2/3		口唇突起2対か？　刺突文　屈折部稜明瞭　孔1箇所のみ
59	〃	〃	1931	鉢	0.63	1/2		口唇部内彎ぎみ　内外精製ミガキ
58	〃	〃	1932	有孔鉢	1.76	1/3		内外ミガキ
58	〃	〃	1933	甕	1.82	2/3	Ⅲ Rb	口指オサエ　内精製ミガキ
	〃	〃	1934	甕		3/4	Ⅲ L	内ミガキ
59	〃	〃	1935	甕	5.67	3/4	Ⅲ Ra	口オサエ　外輪積み残す
	〃	〃	1936	甕		1/4下	ⅠBR	内ミガキ
59	〃	〃	1937	甕	2.95	完	ⅤE	櫛簾→垂→波(左から右へ描く)　内精製ミガキ
59	〃	〃	1938	甕	0.57	完	ⅤE	櫛垂下5単位
59	〃	〃	1939	甕	(4.56)	3/4	Ⅶ R	口刺突　内精製ミガキ
59	〃	〃	1940	甕		2/3	ⅤFR	櫛垂下6単位　受口連弧文　内精製ミガキ
	169	SK158	1941	壷		1/2		口内外ミガキ
	〃	〃	1942	壷	14.56	1/3		外左上ハケ→文様施文→Ⅳ～Ⅴ文様帯上も含め精製ミガキ
	〃	〃	1943	壷		1/4		外左上ハケ→文様施文→Ⅳ～Ⅴ文様帯上も含め精製ミガキ
60	〃	〃	1944	壷	0.63	完存		Ⅱ櫛直線2条　Ⅳ櫛描直線文間にくずれた波状文
59	〃	〃	1945	鉢	0.20	3/4		内外赤彩ミガキ
	〃	〃	1946	鉢		3/4		裏面ミガキ
	〃	〃	1947	鉢		1/4下		鍔屈折部内面の稜が明瞭
	〃	〃	1948	有孔鉢	1.69			内外ミガキ
	〃	〃	1949	高杯？	0.25	2/3		内外赤彩ミガキ
59	〃	〃	1950	甕	6.96	1/2	ⅠBR	口刺突　内ハケ残すミガキ
60	〃	〃	1951	甕	34.23	1/3	Ⅲ La	外ヨコハケ→施文→ミガキ　胴中央部に段有り、刺突　内精製ミガキ

写真PL	図版	遺構名	土器No.	器種	容量	残存率	施文手法	成形・調整・施文等 特記事項
59	170	SK158	1953	甕	1.61	3/4	VE	櫛直→垂→波　外下半ミガキ
	〃	SK159	1954	壷	0.71	完存		□外ナデ　内ミガキ　Ⅱ櫛描直線文2条　胴外ハケ→ミガキ
	〃	〃	1955	壷		3/4		□内外ハケ・ヨコナデ　胴多段横帯文と思われる
	〃	〃	1956	壷		1/3		記号複数有り
	〃	SK163	1957	壷		1/2		□外ミガキ　内ヨコナデ
60	〃	〃	1958	壺	3.11	3/4		□外ヨコナデ　内ヨコミガキ　頸部以下精製ミガキ
60	〃	〃	1959	壷	(3.14)	2/3		□内外,Ⅲ精製ミガキ(文様帯にミガキ加えず)　櫛単斜線文
60	〃	〃	1960	壷	3.92	完		□内外,Ⅲ精製ミガキ(文様帯にミガキ加えず)　Ⅲ櫛描直線文→縄文
			1961	壷		1/2		Ⅳ櫛描波状文　Ⅳ文様帯以下精製ミガキ
125	〃	〃	1962	壷	1.09	完存		Ⅳ工字文系6単位　Ⅴ連弧文7単位
	〃	〃	1963	壷		完		被熱・茶褐色化　底部焼成後穿孔
	〃	〃	1964	壷		2/3		Ⅴ連弧文状の沈線文　Ⅴ以下精製ミガキ
	171	〃	1965	鉢	0.79	1/2		内外ミガキ
	〃	〃	1966	鉢	0.94			内外赤彩ミガキ
	〃	〃	1967	鉢		1/2		胴部折内面の稜が明瞭
60	〃	〃	1968	大型鉢	3.84	完		外工字文5単位　沈(浅い)赤彩)→縄→ミガキ　□指オサエ　内外精ミ
60	〃	〃	1969	甕	1.60	完	Ⅲ L	被熱・青灰色系
61	〃	〃	1970	甕	1.71	2/3	VER	櫛斜部直線文欠落　直→垂→波(右から左)　□刺突　内外ミガキ
	〃	〃	1971	甕	(2.40)	2/3	I R	内精製ミガキ
	〃	〃	1972	甕	4.32	1/4	I R	内精製ミガキ
	〃	〃	1973	甕	5.94	1/2	I AR	□オサエ
61	〃	〃	1974	甕	7.85	完	I BR	櫛羽状文7単位　斜線文2単位　□オサエ　内外精製ミガキ
61	〃	〃	1975	甕	6.03	完	I R	櫛羽状文7単位　内精製ミガキ　□オサエ
	172	SK164	1976	壷	5.31	1/2		□内外ハケ→ミガキ　胴外精製ミガキ
61	〃	〃	1977	壷	3.26	1/3		胴下半ケズリ　上半ハケ→ナデ
	〃	〃	1978	壷	3.81	1/3		外ハケ残すミガキ
61	〃	〃	1979	壷	2.35	完		外櫛描文→縄文　胴下半ハケ→ミガキ　焼成後穿孔2箇所
	〃	〃	1980	壷		2/3		□内外,胴外精製ミガキ　色調等他と異なる　混入の可能性有り
61	〃	〃	1981	壷	0.78	完		横走沈線内 櫛描直線文充填→櫛→沈　連弧文7単位→縄→沈
	〃	〃	1982	壷		2/3		撫6単位　□外ヨコナデ　内ミガキ
62	〃	〃	1983	壷	1.46	1/3		外ミガキ
61	〃	〃	1984	壷	5.64	2/3		□内外　胴外　ミガキ　Ⅱ刺突文
	〃	〃	1985	高杯		3/4		脚部調整　壷として転用か
62	〃	〃	1986	鉢	0.39	2/3		孔対面2箇所　内外ミガキ
	〃	〃	1987	鉢	1.08			内外赤彩ミガキ
	〃	〃	1988	鉢	0.27	1/4下		内外赤彩ミガキ
62	173	〃	1989	台付甕	0.80	1/2	VIIAR	櫛羽(上から下)→波
	〃	〃	1990	高杯		2/3		内外裏すべて赤彩
62	〃	〃	1991	甕	0.53	1/2		櫛羽状文風直線文→羽状文　□刺突　内ミガキ
62	〃	〃	1992	甕	3.16	2/3	Ⅲ Lb	櫛羽状文3段　3段目がミガキで消されるる
	〃	〃	1993	甕	1.31	1/4	I BR	内精製ミガキ
	〃	〃	1994	甕	4.96	1/2	I CR	櫛波→羽　羽状文構成中に一部垂下文帯(波状文)
62	〃	〃	1995	甕	7.77	3/4	I BR	櫛羽状文15単位　□オサエ　輪積み残す
62	〃	〃	1996	甕	18.87	1/2	Ⅲ	櫛斜線文2段→刺突　内精製ミガキ
62	〃	〃	1997	甕	11.81	完	I BR	受口波状文　鼓内型
	174	SK169	1998	壷		1/4		外多段横帯文　胎土 黒雲母多く含む
	〃	〃	1999	甕		1/4下	Ⅲ	□オサエ
	〃	〃	2000	壷		1/3		Ⅴ乱れた連弧文
	〃	〃	2001	鉢	2.51	1/3		内外ミガキ
	〃	SK170	2002	甕		1/4下	VHR	□指オサエ
	〃	〃	2003	甕	9.36	1/4下		櫛格子目文
	〃	SK171	2004	甕	1.19	1/3	VER	□指オサエ　内ヨコミガキ
	〃	SK190	2005	壷		2/3		□外ヨコナデ　内ヨコミガキ　胴外精製ミガキ
	〃	〃	2006	壷		1/2		□外ヨコナデ　内ミガキ　胴外ミガキ
	〃	〃	2007	壷		2/3		□外ヨコナデ　内ミガキ　胴外ミガキ
	〃	〃	2008	壷	6.88	2/3		外精製ミガキ
63	175	SK191	2009	壷	3.33	1/2		□外ハケ→ヨコナデ　内赤彩　Ⅱ櫛縦簾状文5単位　Ⅲ懸垂間赤彩
63	〃	〃	2010	壷	4.25	2/3		□外ヨコナデ　内ヨコナデ・ミガキ　胴外ミガキ Ⅱ段有り
	〃	〃	2011	壷		1/3		□外ヨコナデ　内不明
	〃	〃	2012	壷		3/4		□外ヨコナデ
	〃	〃	2013	壷		1/4下		Ⅱ矢羽根状沈線文　Ⅲミガキ
63	〃	〃	2014	壷		2/3		□外ミガキ　Ⅱ縦簾状文
63	〃	〃	2015	壷	6.03	2/3		胴外ハケ残すミガキ　被熱・器面荒れ調整不明瞭　下位ヨコケズリ
64	〃	〃	2016	壷	15.72	2/3		□外ハケ残すミガキ　内ミガキ　Ⅰ・Ⅱ2本結束沈線
63	176	〃	2017	壷	15.38	1/4		胴外精製ミガキ　被熱・器面荒れ調整不明瞭
	〃	〃	2018	壷		2/3		外ミガキ　Ⅱ RL縄文
	〃	〃	2019	壷	(5.47)	1/4下		□内外ハケ　胴外ミガキ
63	〃	〃	2020	壷	8.68	1/4下		器面荒れ調整不明瞭
64	〃	〃	2021	甕	25.20	1/4	Ⅲ Lb	□受口内導きみ　被熱
	177	SK192	2022	壷		1/3		□内外ミガキ　□刺突
	〃	〃	2023	壷		1/2		外多段横帯文・縄文帯とかき帯が交互

写真PL	図版	遺構名	土器No.	器種	容量	残存率	施文手法	成形・調整・施文等　特記事項
	177	SK192	2024	壺		1/4		胴外ハケ→ミガキ
	〃	〃	2025	甕	7.97	1/4下		内外精製ミガキ
	〃	SK195	2026	台付甕	0.31	1/3		外乱れた複合櫛歯文　内ミガキ
	〃	〃	2027	甕	1.67	2/3	Ⅲ Ra	内ミガキ
	〃	SK200	2028	壺	5.09	1/3		□内外ヨコナデ・刺突　胴外ハケ残すナデ
	〃	〃	2029	壺		1/3		外ミガキ
	〃	〃	2030	壺		1/4下		外上位ハケ残すミガキ　隆帯二箇所
	〃	〃	2031	甕	3.00	1/4下		コの字重ね　内ハケ
	178	〃	2032	甕	3.63	1/4下	ⅡAL	内ハケ
	〃	〃	2033	甕	12.48	1/4下	Ⅲ	□口唇内面の一部に上位から刺突　内ハケ
	〃	SK237	2034	鉢	1.58	1/4		内外赤彩ミガキ
	〃	〃	2035	壺		1/3		外縄文→重山形沈線文
	〃	SK355	2036	壺		1/4下		外胴下位ミガキ
	〃	〃	2037	壺		1/3		外ミガキ　肩部に焼成後穿孔二箇所
	〃	〃	2038	壺	0.74	2/3		外精製ミガキ
	〃	〃	2039		0.24	1/3		内赤彩ミガキ
	〃	〃	2040	高杯		1/4		外端部に段有り
	〃	〃	2041	甕	3.01	1/4下	ⅠBR	□刺突　内ミガキ
	〃	SK359	2042	甕	7.36	1/3	Ⅰ R	□外輪積み残す　胴内ミガキ
	179	SK345	2043	壺		1/2		□内外ミガキ・赤彩・刺突　Ⅱ凸帯上に櫛描直線文
	〃	〃	2044	壺		1/2		Ⅱ沈線→縄文　頸部簡状　多段横帯文
	〃	〃	2045	壺		1/4下		□内外ミガキ　広口壺
	〃	〃	2046	壺		3/4		□外ヨコナデ→タテハケ→タテミガキ　内ミガキ　胴外ミガキ
	〃	〃	2047	壺	4.29	2/3		外ハケ残すミガキ　隆帯1箇所
	〃	〃	2048	壺		1/4		沈線→精製ミガキ(全体)　Ⅲ工字文系文様帯
	〃	〃	2049	壺		1/3		多段横帯文
	〃	〃	2050	鉢	0.54	1/4		内外精製ミガキ　沈線→縄文→精製ミガキ
	〃	〃	2051	鉢	0.43	1/2		内外精製ミガキ
	〃	〃	2052	大型鉢		1/4下		内外精製ミガキ
	〃	〃	2053	鉢	1.79	1/4下		内外精製ミガキ
	〃	〃	2054	鉢	0.82	2/3		内外精製ミガキ
	〃	〃	2055	鉢	1.20	1/4下		内外精製ミガキ
	〃	〃	2056	甕	2.18	1/2	ⅦAR	□指オサエ　内ミガキ
	〃	〃	2057	甕		1/4下	ⅠBR	内精製ミガキ
	〃	〃	2058	甕		1/4下		櫛口縁端部に至るまで羽状文を充填する
	〃	〃	2059	甕	(5.51)	1/2	Ⅲ L	□ヨコナデ・刺突　内精製ミガキ
	180	SK313	2060	壺		1/4下		Ⅳ・Ⅴ文様帯　胴最大径上位付近
	〃	SK354	2061	壺		1/4下		胴最大径付近 横走沈線内(櫛直線文・櫛押し引き列点文)
	〃	SK356	2062	壺		1/4下		胴上半部(横走沈線・櫛描文)
	〃	〃	2063	壺		1/4下		胴上半部(沈線・縄文・刺突)
	〃	SK551	2064	壺		1/3		□外ハケ→ヨコナデ→ミガキ　指オサエ　内ミガキ
	〃	SK1318	2065	甕		1/2	Ⅲ L	□内面有稜　端部指オサエ　内ミガキ
	〃	SK1319	2066	壺		1/4下		外ミガキ
	〃	〃	2067	鉢		1/3		内外精製ミガキ
64	〃	〃	2068	壺	0.80	3/4		懸10単位　Ⅴ工字文4単位　沈線→精製ヨコミガキ
	〃	SK1326	2069	壺	0.35	完存		外ミガキ
	〃	SK1333	2070	壺		3/4		□内外精製ミガキ　胴外精製ミガキ
	〃	〃	2071	壺		1/2		□内外,胴外ハケ
	〃	〃	2072	壺		完		□外ヨコナデ・ハケ　内ヨコミガキ　Ⅱ櫛描波状文　浮文4単位
	〃	〃	2073	壺		完		□内外精製ミガキ　懸6単位
64	181	〃	2074	高杯	0.83	1/4下		内外赤彩ミガキ
64	〃	〃	2075	高杯	1.29	完		内外赤彩ミガキ
64	〃	〃	2076	無頸壺	2.55	2/3		外ハケ残すミガキ　内ハケ
65	〃	〃	2077	甕	5.68	2/3	ⅠBR	櫛羽状文6単位　□一部指オサエ　内ハケ残すミガキ
64	〃	〃	2078	壺	(1.80)	2/3		外精製ミガキ
65	〃	〃	2079	壺	6.22	完		□内外ナデ　胴外上位ミガキ　下位ケズリ→タテミガキ　Ⅱ縄→沈
65	〃	〃	2080	壺	11.65	3/4		□内外ヨコナデ・ミガキ　Ⅴ連弧文12単位　左回り施文
65	〃	〃	2081	壺	10.58	3/4		□外ヨコナデ・ハケ 内ミガキ胴外ハケ→縄→沈→ミガキⅤ重山形文4単位
65	182	〃	2082	壺	16.65	3/4		櫛頸部藤状文一箇欠く　胴波状垂下・波状・斜線　内外精製ミガキ
	183	SK1335	2083	甕		1/4下	Ⅰ R	内ハケ残すナデ
	〃	SK1349	2084	壺		1/3		外ハケ残すミガキ
	〃	〃	2085	壺		1/3		外ミガキ
	〃	SK1353	2086	壺	5.12	1/4		外ハケ残すミガキ　全面淡い赤彩
	〃	〃	2087	甕	1.96	完存		コの字重ね7単位　受口2本結束櫛波状文　内ヨコハケ →ヨコミガキ
	〃	〃	2088	甕		1/3	Ⅶ R	内ミガキ
	〃	SK1371	2089	壺		1/2		多段横帯文
	〃	〃	2090	壺		2/3		内外ミガキ
	〃	〃	2091	壺		2/3		□内外ミガキ　Ⅱ押し出し凸帯　ヨコ指ナデによる横走沈線有り
	〃	〃	2092	壺		1/2		□外ハケ・ヨコナデ　内ミガキ
	〃	〃	2093	壺		1/4下		内外ミガキ
	〃	〃	2094	壺		1/4下		外ハケ残すミガキ　淡い赤彩

写真PL	図版	遺構名	土器No.	器種	容量	残存率	施文手法	成形・調整・施文等　特記事項
	183	SK1373	2095	壺	2.07	1/3		Ⅲ類垂部押し引き列点文(上→下)充填
	184	SK1377	2096	壺		1/4		外精製ミガキ
	〃	〃	2097	壺		2/3		外精製ミガキ
	〃	〃	2098	壺		完		内外ハケ　内面と外面で調整具が異なる
	〃	〃	2099	壺		1/4		外ハケ→ミガキ　赤彩(下位部分に赤彩を行わない)
	〃	〃	2100	壺		1/3		Ⅳ櫛描波状文
	〃	〃	2101	壺		2/3		□内外,胴外ミガキ　Ⅱ押し引き凸帯・ヨコナデ
	〃	〃	2102	壺		1/4下		内外ヨコナデ　縄部縄文
66	〃	〃	2103	甕	0.67	2/3	Ⅷ AR	櫛波→羽　内ハケ→ナデ
66	〃	〃	2104	甕	1.09	完	Ⅰ BR	櫛羽状文5単位　内精製ミガキ
66	〃	〃	2105	甕	0.35	3/4	Ⅰ R	内ナデ
66	〃	〃	2106	甕	7.46	2/3	Ⅰ BR	内ハケ→ナデ
117	〃	SK1382	2107	甕	5.40	2/3	Ⅰ BR	櫛羽状文6単位+銅鏃文1単位　内ミガキ
	185	SK1393	2108	壺	(5.69)	1/4 F		2099と同一個体　再実測必要
	〃	〃	2109	壺		1/2		外ヨコナデ　内ミガキ　胴外ハケ残すミガキ
	〃	〃	2110	壺		1/2		Ⅲ横走沈線内を櫛描波状文、波状沈線文で充填
	〃	〃	2111	鉢	0.69	1/2		終底折部の内外面後不明瞭
	〃	〃	2112	甕	4.78	1/3	Ⅰ R	櫛羽状文上下2段
	〃	〃	2113	甕		1/4下	Ⅰ R	櫛羽→波
	〃	SK1396	2114	甕	0.87	1/2	Ⅷ R	内ミガキ
	〃	〃	2115	甕	(1.17)	1/3	Ⅷ R	内ミガキ
	〃	〃	2116	甕	(1.21)	2/3	Ⅷ R	内ハケ残すミガキ
	〃	〃	2117	甕		1/4下	Ⅰ BR	内ミガキ
	〃	〃	2118	甕	(8.66)	1/2	Ⅰ BR	櫛羽→波　受口内外ヨコミガキ　胴内ヨコミガキ
	〃	〃	2119	甕		1/3	Ⅰ R	櫛羽→波　内ハケ→ナデ
	〃	〃	2120	甕	1.98	1/2	Ⅰ BR	受縄文
	186	〃	2121	甕	9.34	1/2	Ⅰ BR	櫛羽→波　内精製ミガキ
	〃	〃	2122	壺		完		内外ヨコナデ　淡い赤彩
	〃	〃	2123	壺	(5.40)	1/3		外精製ミガキ
	〃	〃	2124	壺		2/3		Ⅴ櫛描波状文　重三角文
	〃	〃	2125	壺		1/2		Ⅱ押し出し凸帯　ヨコナデ　胴外精製ミガキ
	〃	〃	2126	壺		1/2		外上位ハケ残すミガキ　下位精製ミガキ　焼成後穿孔
	〃	SK1400	2127	壺	3.89	3/4		□内外ヨコナデ　胴外ハケ→タテミガキ
	〃	〃	2128	壺		2/3		□内外ミガキ　胴外ミガキ
	〃	〃	2129	壺		2/3		□外タテハケ→ヨコナデ　内ミガキ　胴外ミガキ
	〃	〃	2130	壺		3/4		器面荒れ調整不明瞭
	〃	〃	2131	壺		2/3		□内外ミガキ
	187	〃	2132	壺		2/3		□オヤエ　Ⅱ押し出し凸帯　板ナデ　扉状文
	〃	〃	2133	壺		3/4		Ⅱ押し出し凸帯　板ナデ
	〃	〃	2134	壺		2/3		器面荒れ調整不明瞭
	〃	〃	2135	壺		1/2		外ミガキ
	〃	〃	2136	壺	0.99	完存		外ミガキ
	〃	〃	2137	小型土器		完		外ナデ
	〃	〃	2138	高杯		3/4		内外赤彩ミガキ
	〃	〃	2139	壺		1/4		脚下半部　外赤彩ミガキ
	〃	SK1695	2140	甕	3.03	2/3	Ⅷ R	□外指オサエ　輪積み残す　胴内ミガキ
	〃	〃	2141	甕	3.89	1/2	Ⅲ	□輪積み残す　胴内ミガキ
	〃	SK1699	2142	鉢	2.54	1/3		内外赤彩ミガキ
	〃	〃	2143	鉢	1.15	1/3		内外赤彩ミガキ
66	〃	SK1714	2144	壺				□内外ヨコナデ・ハケ　Ⅲハケ→ナデ
66	188	〃	2145	壺	6.20			□外ハケ→ナデ,内ミガキ　胴外ミガキ
66	〃	〃	2146	壺	6.48			□外ハケ→ナデ,内ミガキ　胴外ミガキ
66	〃	〃	2147	壺	5.97			□内外ミガキ　胴外ハケ残すミガキ
67	〃	〃	2148	壺	8.32	3/4		□内外ヨコナデ・ハケ　胴外ハケ残すナデ　Ⅱ沈→縄→2本櫛波状文
67	〃	〃	2149	壺	6.81	3/4		□内外ヨコナデ・ハケ　胴外ハケ残すナデ　ⅢLR縄文2段施文
67	189	〃	2150	壺		完		外精製ミガキ　Ⅴ連弧文8単位
	〃	〃	2151	壺	(5.02)	3/4		□外ハケ→ヨコナデ　内ミガキ　胴外ハケ残すミガキ　Ⅱ縄→沈
68	〃	〃	2152	甕	1.13	完	Ⅰ BR	櫛羽状文4単位+斜鏃文2単位
68	〃	〃	2153	甕	1.27	完	Ⅰ AR	櫛羽状文5単位+斜鏃文1単位
68	〃	〃	2154	甕	1.29	完	Ⅷ CR	内精製ミガキ
67	〃	〃	2155	甕	2.31			コの字重ね文
67	〃	〃	2156	甕	6.61	3/4	Ⅰ CR	櫛羽状文　内ミガキ
67	〃	〃	2157	甕	4.66	完	Ⅷ AR	受口2本結束帯による波状文　内ヨコハケ残すミガキ
	〃	〃	2158	甕	5.46	2/3		櫛波状文(上から下)・斜鏃文(一部格子目文)　内ハケ→ナデ
	190	〃	2159	壺		1/4下		Ⅴ縄縄文
	〃	〃	2160	甕	0.95	完存		外LR縄文→波状文→ミガキ
109	〃	〃	2161	甕	5.14	2/3	Ⅰ AR	□刺突　内精製ミガキ
	〃	〃	2162	甕	1.09	3/4		外斜鏃文(ササラ状)→ミガキ　内ハケ残すミガキ
	〃	〃	2163	甕	1.93	2/3		櫛波(上から下)　内ハケ→ナデ
	〃	〃	2164	甕	2.95	3/4	Ⅰ AR	内精製ミガキ
	〃	〃	2165	甕	2.82	2/3	Ⅰ AR	櫛波→羽

写真PL	図版	遺構名	土器No.	器種	容量	残存率	施文手法	成形・調整・施文等　特記事項
	190	SK1717	2166	台付甕	0.72	2/3	Ⅰ R	櫛頸部波状文(図示部分のみ)　羽状文5単位・斜線文1単位
111	〃	〃	2167	甕	7.08	1/2	Ⅰ R	内ミガキ
	〃	SK1718	2168	壷	(7.36)	2/3		□ヨコナデ　Ⅱ押し出し凸帯　板ナデ2条　醸7単位
	〃	SK1735	2169	甕	1.04	2/3	ⅧBR	内精製ミガキ
	191	SK1750	2170	壷	3.14	1/2		□オサエ　胴ハケ→ミガキ
	〃	〃	2171	壷	4.35	1/2		□内外ミガキ　胴外精製ミガキ
	〃	SK1787	2172	壷	(5.27)	1/3		Ⅱ連弧文　Ⅲハケ残すミガキ
	〃	〃	2173	壷		1/2		Ⅳ～Ⅴ櫛描文・北線文
	〃	SK1895	2174	甕		1/4下	Ⅰ R	内ミガキ
	〃	〃	2175	甕	(1.30)	1/2	Ⅶ R	内ミガキ
	〃	SK1861	2176	甕	(1.77)	1/2	Ⅲ L	内ハケ
68	〃	〃	2177	甕	5.84	2/3		櫛羽状文5単位+斜線文1単位　□オサエ
68	〃	〃	2178	甕	6.48	完	Ⅲ La	胴外下位斜線文　ミガキに より消える
	192	SK1865	2179	甕	4.31	1/2	Ⅰ R	櫛波状文2条(上から下)　内精製ミガキ
68	〃	〃	2180	甕	1.21	完	Ⅰ CR	□指オサエ　内精製ミガキ
	〃	SK1914	2181	壷		2/3		Ⅲ精製ミガキ　Ⅳ押し引き列点文　Ⅴ連弧文
	〃	SK1945	2182	壷		3/4		□縁やゆがん受 □　外ハケ・ヨコナデ　内ヨコナデ・ミガキ
	〃	〃	2183	甕		1/3		外波状文(最内)→縄文→沈線文(この平面図は一部)
68	〃	SK1947	2184	甕	8.80	完	VGR	櫛波状文5ブロック　垂下文5単位(1単位簾状文)　内外精製ミガキ
69	〃	SK1948	2185	甕	9.57	完	VHR	櫛垂下文7単位　□指オサエ　内外ハケ残すミガキ　焼成後穿孔
69	〃	〃	2186	甕	6.84	2/3	ⅠAR	櫛羽状文10単位　内ミガキ
	〃	SK1953	2187	甕		完	Ⅰ R	内ミガキ
	〃	〃	2188	壷		1/4		外精製ミガキ
	〃	〃	2189	甕	0.77	3/4	Ⅲ	櫛斜線文(ヤヤラ状)　内ハケ残すミガキ
	193	SK1952	2190	壷		1/3		□内外ヨコナデ・ハケ
	〃	〃	2191	鉢	0.55	完		器面荒れ調整不明瞭　片口有り
	〃	〃	2192	鉢	0.25	完		内外赤彩ミガキ　孔1箇所
	〃	〃	2193	高杯	1.69	1/3		内外精製ミガキ
	〃	〃	2194	甕		3/4	VGR	内ミガキ
	〃	〃	2195	甕		1/2	Ⅰ R	櫛縦羽状文構成に一部斜線文
	〃	〃	2196	甕	19.91	1/4下		被熱器面荒れ　胴外上位ハケ　下位ハケ→タテミガキ
69	〃	〃	2197	甕	4.54			内外ミガキ
69	〃	〃	2198	甕	7.21	1/3	ⅠBR	外下位軽いケズリ→ミガキ　内ハケ残すミガキ
	〃	SK1957	2199	甕	0.98	1/3		櫛格子目文→簾状文　口刺突
	〃	SK1961	2200	甕		2/3	ⅠBR	内ハケ残すミガキ
	194	〃	2201	壷		1/2	Ⅲ	内ミガキ
	〃	〃	2202	甕		1/4下	Ⅲ	□指オサエ　内精製ミガキ
	〃	〃	2203	壷		1/2		□内外ミガキ
	〃	SK1963	2204	甕	2.90	2/3		□直線的に外反　胴外ハケ→斜線文　内ヨコハケ
	〃	〃	2205	壷		2/3		□内外ミガキ　Ⅱ縦歯文5単位　外淡い赤彩
	〃	SK1972	2206	鉢	1.43	1/2		□口唇一部打ち欠き　片口状を呈す
	〃	SK1973	2207	壷		3/4		Ⅱ縄文→沈線　外精製ミガキ
	〃	〃	2208	壷		1/2		ⅣLR縄文→波状状北線文
	〃	SK1975	2209	壷		1/3		Ⅴ複合縦歯文　斜線は同一方向
	〃	SK1979	2210	甕	1.59	完存	ⅦAR	櫛波状文6ブロック　内精製ミガキ
	195	SK1994	2211	壷	(6.21)	2/3		外精製ミガキ
	〃	〃	2212	壷	0.53	完存		Ⅱ頸部外面有段
	〃	〃	2213	壷		3/4		□内外　胴外ハケ
	〃	〃	2214	壷		1/2		Ⅱ最下段　押し引き列点文　胴ハケ残すミガキ
	〃	〃	2215	壷		完		Ⅱ5ブロック　重三角(1)　直弧文(3)　縦歯文(1)
	〃	〃	2216	鉢	(1.66)	1/3		底所面有穿　内面は明瞭
118	〃	〃	2217	甕	1.78	完	ⅨAR	櫛波状文6ブロック　内精製ミガキ
	〃	〃	2218	甕	9.44	1/3		外ヨコハケ→ヨコミガキ　内ハケ→ナデ
	〃	〃	2219	甕		1/2		外ハケ→ナデ　内ヨコハケ
	〃	〃	2220	無頸壷		1/4下		外赤彩ミガキ　内ナデ
	〃	SK1995	2221	壷		2/3		□外ハケ　内ミガキ　Ⅱ連弧文5単位一部波状文　胴外ミガキ
	〃	〃	2222	壷		2/3		□外ハケ　内不明　ⅡLR縄文+櫛押し引き列点文+LR縄文
	〃	〃	2223	甕		1/4	ⅠBR	内ハケ残すミガキ
	〃	〃	2224	甕		2/3	Ⅸ R	内ハケ残すミガキ
	〃	〃	2225	甕	1.09	3/4	Ⅶ R	内ハケ残すミガキ
	〃	〃	2226	甕	2.90	1/4下	ⅦAR	内ハケ
	196	SK1996	2227	甕	3.30	1/2	Ⅲ L	内精製ミガキ
	〃	SK2001	2228	壷		2/3		Ⅱ垂重文1条のみ 他精製ミガキ　Ⅴ重弧文4単位　縦歯文2単位
	〃	SK1999	2229	壷		1/4下		Ⅳ押し引き列点文
	〃	〃	2230	壷	4.34	2/3		外精製ミガキ
	〃	〃	2231	壷	22.13	1/3		外ハケ残すミガキ
	〃	〃	2232	壷		2/3		□内外ヨコナデ・ミガキ
	197	SD100	2233	小型壷	0.49	完存		外精製ミガキ
	〃	〃	2234	小型壷	0.46	完存		外精製ミガキ
	〃	〃	2235	小型壷	0.57	完存		外ミガキ　Ⅱ横走沈線
	〃	〃	2236	小型壷	0.42	完存		外ナデ　淡い赤彩　胴最大径部に焼成後穿孔

写真PL	図版	遺構名	土器No.	器種	容量	残存率	施文手法	成形・調整・施文等　特記事項
	197	SD100	2237	小型壺	0.46	完存		外精製ミガキ　記号　焼成後穿孔　Ⅱ横走沈線　押し引き列点文
70	〃	〃	2238	小型壺	0.26	完存		外ハケ残すミガキ　浮文型示部分の1箇所のみ
	〃	〃	2239	小型壺	0.39	完存		外粗いミガキ
	〃	〃	2240	壺	0.38	完存		赤彩　肩部・焼成後穿孔
	〃	〃	2241	小型土器		完存		赤彩
	〃	〃	2242	壺		完存		赤彩　注口部有
	〃	〃	2243	小型壺	0.59	完存		Ⅱ沈線3条　Ⅳ沈3+波+沈2+LR縄文・波+沈2+LR縄文・波
70	〃	〃	2244	小型壺	0.58	完存		外ハケ→横帯文　浮文刺瘤　図示1箇所のみ
70	〃	〃	2245	小型壺	0.47	完存		Ⅱ櫛直線+沈直線+櫛直線　外ハケ→粗いミガキ
70	〃	〃	2246	小型壺	0.42	完存		外ハケ→粗いミガキ　Ⅲ　J字文6単位
70	〃	〃	2247	小型土器	0.13	完存		赤彩　注口部有　突起6箇所　黒色系に焼き上げる？
	〃	〃	2248	壺	0.42	完存		赤彩　突起4箇所　突起部,頭部有段
	〃	〃	2249	壺	1.10	完存		赤彩　突起5箇所　突起部有段
70	〃	〃	2250	壺	1.96	完存		外ハケ残すミガキ　黄褐色（未使用か？）
	〃	〃	2251	壺	1.47	完存		外ハケ残すミガキ
70	〃	〃	2252	壺	0.93	完存		□内外,胴外精製ミガキ
	〃	〃	2253	壺		1/3		外精製ミガキ　斜状沈線→横走沈線
69	198	〃	2254	壺	5.18	完		外ハケ残すミガキ
	〃	〃	2255	壺		1/2		□外ヨコナデ　外ハケ
	〃	〃	2256	壺	4.00	1/2		胴外上位ハケ残すタテミガキ　下位ハケ残すヨコミガキ
69	〃	〃	2257	壺	4.72	完		外ミガキ
	〃	〃	2258	壺	(4.92)	1/2		□内外,Ⅲ精製ミガキ
	〃	〃	2259	壺	3.45	完存		外精製ミガキ　Ⅳ横走沈線内　押し引き列点文　櫛直線文充填
	〃	〃	2260	壺		1/3		□外タテミガキ　内ミガキ　□縁内部に突出部有（上面ミガキ　裏ナデ）
	〃	〃	2261	壺		完		□内外精製ミガキ　Ⅱ縄文　・矢羽根状沈線文
	〃	〃	2262	壺		2/3		□外ハケ→ヨコナデ　内ミガキ
	〃	〃	2263	壺		完		□外ミガキ　内赤彩・ミガキ　Ⅱ縦撫状沈線文
	〃	〃	2264	壺		1/4下		Ⅱ櫛直線文上 山形沈線文+櫛雷紋雷文（横走沈線・刺突文）+赤彩
	〃	〃	2265	壺		3/4		懸5単位　浮文7箇所　施文→赤彩→ミガキ
70	199	〃	2266	壺		2/3		□外ヨコナデ　ミガキ　内ヨコナデ　胴外ミガキ　刺突格子目文
	〃	〃	2267	壺		2/3		Ⅱ頸部沈線2条施文後　貼付け凸帯　指ヨコナデ→縄文
	〃	〃	2268	壺		完		横走沈線横帯文を櫛直線文・縄文で充填
	〃	〃	2269	壺		1/2		外縄文　内ミガキ
	〃	〃	2270	壺		2/3		□内外ミガキ　Ⅲ横帯区画文各3単位
	〃	〃	2271	蓋		1/4		内外赤彩　つまみ欠損
	〃	〃	2272	蓋		1/4		外のみ赤彩　つまみなし
	〃	〃	2273	蓋		1/4		沈線内赤彩
	〃	〃	2274	鉢		完		内外（裏面含む）精製ミガキ・赤彩　底部外凸帯部1孔　端部に沈線
	〃	〃	2275	鉢		完		外赤彩　内ヨコハケ
	〃	〃	2276	有孔鉢	1.53	2/3		内外精製ミガキ
	〃	〃	2277	鉢		1/2		内外精製ミガキ
	〃	〃	2278	高杯	0.67	完		突起4箇所　内外赤彩ミガキ
	〃	〃	2279	高杯		完		内外赤彩ミガキ
71	〃	〃	2280	台付甕	0.22	完		外7単位中4単位同状重ね　1単位横線　2単位縦線充填
71	〃	〃	2281	台付甕	0.95	完		コの字重ね　5単位
71	〃	〃	2282	甕	1.81	1/2	Ⅰ BR	内精製ミガキ
71	〃	〃	2283	甕	3.04	1/3	Ⅰ R	内ヨコハケ→タテミガキ
71	〃	〃	2284	甕	2.26	1/2	Ⅰ BR	□ヨコナデ・刺突　内精製ミガキ
71	〃	〃	2285	甕	(2.23)	1/4	Ⅲ Rb	櫛横線文→上部斜線文→下部斜線文
71	〃	〃	2286	甕	5.86	2/3	Ⅱ AR	□ヨコナデによるつまみ上げ　内精製ミガキ
71	200	SD101	2287	小型壺	0.71	完存		胴最大径部に隆帯　焼成後穿孔（両者が対面上に位置する）
71	〃	〃	2288	小型壺	0.54	完存		胴外精製ミガキ
71	〃	〃	2289	小型壺	0.82	完		胴外縦描（直線・波状）文→横走沈線→ミガキ　黒く焼き上げる
71	〃	〃	2290	小型壺	0.44	3/4		胴外隆帯1箇所　□刺突
71	〃	〃	2291	小型壺	0.55	完存		胴外浮文1箇所　ハケ残すミガキ　Ⅱ櫛押し引き文
	〃	〃	2292	小型壺	0.43	完		注口　有
	〃	〃	2293	小型壺	0.25	完		注口　欠損後に調整行う
71	〃	〃	2294	壺		2/3		□外ヨコナデ　内ミガキ　Ⅱ2本結束波状沈線2段
	〃	〃	2295	小型壺		2/3		懸5単位　精製ミガキ
	〃	〃	2296	小型壺		2/3		懸4単位　Ⅱヨコナデ・凸帯・慶状文
71	〃	〃	2297	壺		1/3		□外ナデ　内精製　Ⅱ刺突　Ⅲ懸5単位・山形文・刺突列点文
	〃	〃	2298	壺		2/3		外全体淡い赤彩　Ⅱ縄文・刺突列点・櫛直線　Ⅲ縦単斜線文
	〃	〃	2299	壺		3/4		□外ヨコナデ　内ミガキ　外精製ミガキ　Ⅱ押し出し凸帯
	〃	〃	2300	壺		完		□内外ミガキ
	〃	〃	2301	壺		完		Ⅱ押し出し凸帯　横帯文3単位　外精製ミガキ
	〃	〃	2302	壺		2/3		□内外ハケ・ヨコナデ
	〃	〃	2303	壺		2/3		□外ヨコナデ　内精製ミガキ　Ⅱ押し出し凸帯
	〃	〃	2304	壺		3/4		外精製ミガキ　淡い赤彩
	〃	〃	2305	壺				外ハケ→ナデ
	〃	〃	2306	小型土器	0.05	完		ナデ　指
	201	〃	2307	壺	4.21	2/3		器面荒れ調整不明瞭　器形歪み大

写真PL	図版	遺構名	土器No.	器種	容量	残存率	施文手法	成形・調整・施文等　特記事項
72	201	SD101	2308	壷	4.04	2/3		外ハケ残すミガキ　淡い赤彩
72	〃	〃	2309	壷	5.80	2/3		外ハケ残すミガキ
72	〃	〃	2310	壷		2/3		Ⅱ横走沈線+板ヨコナデ+横走沈線　竹管押し引き列点L
	〃	〃	2311	壷		1/2		内外赤彩　精製ミガキ
72	〃	〃	2312	壷		1/2		口外ヨコナデ　内ハケ残すミガキ　胴ハケ残すミガキ　Ⅱ・Ⅲ淡い赤彩
	〃	〃	2313	壷		1/4下		沈線内赤彩
	〃	〃	2314	壷		1/2		沈線内赤彩　沈線→精製ミガキ→縄文
	〃	〃	2315	壷		1/3		沈線内赤彩
	〃	〃	2316	壷		1/4		櫛直線文+櫛斜状単線文
	〃	〃	2317	壷		1/4下		横走沈線内 櫛直線文+短斜線文b充填
	〃	〃	2318	壷		1/4下		横走沈線内 LR縄文+ミガキ　最下段縄文上に斜状沈線
	〃	〃	2319	壷		1/4下		横走沈線内 縄文+山形文
	202	〃	2320	大型鉢		1/4下		工字文系
	〃	〃	2321	壷		1/4下		工字文系
	〃	〃	2322	壷		1/4下		工字文系
	〃	〃	2323	壷		1/4下		工字文系
	〃	〃	2324	壷		1/4下		工字文系
	〃	〃	2325	壷		1/4下		工字文系
	〃	〃	2326	壷		1/4下		工字文系
	〃	〃	2327	壷		1/4下		工字文系
	〃	〃	2328	鉢		1/4下		工字文系
	〃	〃	2329	壷		1/4下		Ⅱ凸帯上 横走沈線→刺突
	〃	〃	2330	壷		1/4下		口内　羽状刺突文3列　縦位直線文　端部刺突　外タテミガキ
	〃	〃	2331	壷		1/4下		肩部　刺突文
	〃	〃	2332	壷		1/4下		胴部　重菱形文
	〃	〃	2333	壷		1/4下		Ⅳ重山形文+櫛山形文
	〃	〃	2334	壷		1/4下		Ⅳ上向き鋸歯文　Ⅴ重弧文か重三角文　文様以外赤彩
	〃	〃	2335	壷		1/4下		肩部　沈線文　押し引き列点文　全体淡い赤彩
	〃	〃	2336	壷		1/4下		肩部　横帯文・斜沈線・刺突文で充填
	〃	〃	2337	壷		1/4下		胴最大径部鋸歯文　沈線内赤彩
	〃	〃	2338	壷		1/4下		Ⅱ連弧文+刺突　沈線内赤彩　Ⅲ懸波状文
72	〃	〃	2339	鉢	3.84	1/2		Ⅰ・Ⅱ連弧文　Ⅱ文様帯上位段有　内精製ミガキ
	〃	〃	2340	大型鉢		1/4下		外沈線文　内ハケ残すミガキ
	〃	〃	2341	鉢	1.59	1/4		内外面赤彩　精製ミガキ（赤彩 スクリーントーン欠落）
	〃	〃	2342	鉢		1/3		内外赤彩　精製ミガキ
72	〃	〃	2343	無頸壷	(1.80)	2/3		櫛直線文上に山形沈線→櫛波状文後 沈線文　円孔対面2箇所
	〃	〃	2344	鉢	0.70	1/2		内外赤彩ミガキ
100	〃	〃	2345	鉢	1.30	1/2		内外赤彩ミガキ
	〃	〃	2346	鉢	1.27	1/3		内外赤彩ミガキ
	〃	〃	2347	鉢	0.63	2/3		内外赤彩ミガキ
	〃	〃	2348	鉢	0.57	1/3		内外赤彩ミガキ
	〃	〃	2349	鉢	0.75	完		内外ミガキ
73	203	〃	2350	鉢	(2.08)	1/2		櫛波状文(上から下)　簾内型櫛直線　内精製ミガキ
	〃	〃	2351	高杯	0.50	1/4		内外赤彩ミガキ
	〃	〃	2352	高杯		3/4		内外赤彩ミガキ
	〃	〃	2353	高杯	0.28	3/4		脚内面ミガキ
72	〃	〃	2354	甕	4.27	1/4	ⅠAR	口外輪積み残す　指オサエ　胴刺突　内精製ミガキ
	〃	〃	2355	甕		1/4下	Ⅲ L	口刺突　内精製ミガキ
	〃	〃	2356	甕		1/4下		口縁外面　斜条線充填　原体3本組
73	〃	〃	2357	甕	1.20	2/3	ⅠBR	内精製ヨコミガキ
73	〃	〃	2358	台付甕	0.55	1/2	ⅤFR	内精製ヨコミガキ
72	〃	〃	2359	甕	3.57	1/2	ⅧAR	口縁,胴部外面　波状文(上から下)
	〃	〃	2360	甕	7.89	完	ⅡAR	外波状文 簾状文 羽状文　内ミガキ
	〃	〃	2361	甕		1/4	ⅠAR	内ミガキ
	〃	〃	2362	甕	(12.25)	1/4	ⅢLb	内ミガキ
113	〃	〃	2363	甕	9.25	1/3	ⅡAR	内ミガキ　頸部波状文一部のみ
73	204	SD102	2364	壷	0.37	完存		外ハケ残すミガキ　Ⅱ横走沈線　ⅣLR縄文→波状沈線
73	〃	〃	2365	壷	0.34	完存		外精製ミガキ　Ⅱ横走沈線・LR縄文　ⅣLR縄文
73	〃	〃	2366	壷	0.36	完存		外ミガキ　横走沈線内櫛直線文・押し引き文　胴注口穴有
73	〃	〃	2367	壷	0.45	完存		Ⅱ～Ⅴ押し引き列点文6段
73	〃	〃	2368	壷	0.74	完存		強被熱　灰色～赤褐色　口縁部発泡　Ⅴ連弧文9単位
	〃	〃	2369	鉢	1.29	1/2		内外赤彩ミガキ
	〃	〃	2370	壷		1/2		Ⅳ上位より ハケ→沈線文
73	〃	〃	2371	甕	4.41	完		口刺突　外コゲ厚く付着　内外煤・コゲで黒い
	〃	SD1027	2376	人面土器		1/4下		人面部分破片　器面荒れ調整不明瞭　外ミガキ？　内ナデ
	〃	〃	2377	壷		1/2		緩やかな受口　器面荒れ調整不明瞭　内ヨコミガキ
	〃	〃	2378	壷		1/3		胴下位軽いケズリ→沈線→ミガキ
	〃	〃	2379	鉢	(0.90)	1/4下		口縁屈折部内面に稜有り　内外赤彩ミガキ
	〃	〃	2380	鉢	0.32	2/3		内外赤彩ミガキ
	〃	〃	2381	甕	7.45	1/3	ⅡBR	器面荒れ調整不明瞭
	205	SD1083	2382	壷	7.17	1/3		口外ハケ・ヨコナデ　内ミガキ　胴外ハケ残すミガキ・赤彩

写真PL	図版	遺構名	土器No.	器種	容量	残存率	施文手法	成形・調整・施文等 特記事項
106	205	SD1083	2383	壺	3.58	2/3		外精製ミガキ 隆帯一箇所
	〃	〃	2384	壺		2/3		被熱 器面荒れ調整不明瞭
	〃	〃	2385	壺		完		被熱 器面荒れ調整不明瞭
	〃	〃	2386	壺		3/4		□外ハケ 内ハケ→ヨコミガキ 胴外ミガキ
	〃	〃	2387	壺	(1.03)	1/2		外全面赤彩(実測図で下半のスクリーントーン欠落) 頸部有段
	〃	〃	2388	壺	0.34	2/3		内外赤彩ミガキ
73	〃	〃	2389	壺	0.78	完存		内外赤彩ミガキ
73	〃	〃	2390	壺		3/4		懸6単位 連弧文10単位
	〃	〃	2391	壺		2/3		懸7単位
	〃	〃	2392	壺		完		Ⅱ連弧文5単位
	〃	〃	2393	壺		1/2		Ⅱ連弧文・刺突文
	〃	〃	2394	高杯		2/3		内外赤彩ミガキ
	〃	〃	2395	高杯		2/3		内外赤彩ミガキ
	〃	〃	2396	高杯		1/4		内外赤彩ミガキ
	〃	〃	2397	甕		1/2	Ⅱ R	□刺突 内ミガキ
	206	〃	2398	甕		1/4下		□刺突 文様変則部の破片と思われる
	〃	〃	2399	台付甕	1.09	1/2		コの字重ね文
73	〃	〃	2400	台付甕	1.75	完存		□ヨコナデ 胴外上ヨコミガキ 下タテミガキ 櫛歯文6単位 内粗いミガキ
	〃	〃	2401	鉢		1/4		□刺突 内ミガキ
	〃	〃	2402	鉢		2/3		内外赤彩(実測図内 スクリーントーン欠落) 焼成後穿孔
	〃	〃	2403	甕		完		焼成後穿孔
	〃	SD1215	2404	壺	2.82	1/3		器面荒れているがミガキと思われる 胴下半焼成後穿孔
	〃	〃	2405	鉢	0.67	2/3		外ナデ 内ヨコハケ
	〃	〃	2406	壺		2/3		外沈線文 横線帯を縦区画 内ナデ
	〃	SD1305	2407	壺	4.93	完		□外ナデ 内ミガキ・刺突 胴外ハケ残すミガキ
	〃	〃	2408	壺		1/2		被熱 器面荒れ調整不明瞭
	〃	〃	2409	壺		完		□外タテミガキ 内ヨコミガキ Ⅱ押し出し凸帯
	〃	〃	2410	壺		完		□外ヨコナデ・ミガキ 内ミガキ Ⅱ擬似縄文
	〃	〃	2411	壺		完		□外ヨコナデ・ミガキ 内ミガキ Ⅱ懸垂下文
	207	〃	2412	壺		2/3		□縁外反 外ヨコナデ 内ミガキ
	〃	〃	2413	壺	(3.81)	3/4		外精製ミガキ
	〃	〃	2414	壺		1/4		外精製ミガキ
	〃	〃	2415	台付甕		完		外ナデ
	〃	〃	2416	甕		1/4下 Ⅰ R		□刺突
	〃	〃	2417	甕		1/4下 Ⅰ R		□指オサエ
	〃	〃	2418	甕	0.37	1/4		コの字重ね
	〃	〃	2419	甕		1/4下		櫛波状文(中部高地型)
	〃	〃	2420	甕		1/4下 Ⅰ R		内ミガキ
	〃	〃	2421	甕		1/4下 Ⅰ R		横直→羽 内ミガキ
	〃	〃	2422	甕		1/4下 Ⅰ R		横羽→直 内ハケ
	〃	SD18	2423	壺		2/3		外赤彩・タテミガキ 内胴上半ハケ→ヨコミガキ
	〃	〃	2424	壺		完		□内外赤彩ミガキ
	〃	〃	2425	壺		2/3		□外ハケ・ヨコナデ 内ヨコミガキ 胴外ハケ
73	〃	〃	2426	壺	2.27	2/3		□外ヨコナデ 内ミガキ 胴外ハケ
74	208	〃	2427	壺	(6.32)	2/3		□外ヨコナデ 内ミガキ
74	〃	〃	2428	壺		完存		外精製ミガキ Ⅴ連弧文10単位 頸部水平に欠損
74	〃	〃	2429	壺	4.89	3/4		胴外精製ミガキ 文様施文→ミガキ(施文上もミガキ)
74	〃	〃	2430	壺		2/3		胴外精製ミガキ 文様施文→ミガキ(施文上もミガキ)
74	〃	〃	2431	壺	4.05	2/3		□内外ミガキ 胴外精ミ 懸6単位 連弧文6単位 (沈線内赤彩)
73	〃	〃	2432	小型壺	0.67	完存		外ハケ残すミガキ 隆帯一箇所
73	〃	〃	2433	小型壺	0.57	完存		外精製ミガキ Ⅳ押し引き列点文
73	〃	〃	2434	小型壺	0.41	完存		懸5単位 連弧文(右から左へ描きL)9単位
	〃	〃	2435	壺		1/4下		維頸壺 頸部
	〃	〃	2436	壺		1/4下		維頸壺 頸部
	〃	〃	2437	壺		1/4下		連弧文最上段 LR縄文で充填 刺突で囲む
	〃	〃	2438	壺		1/4下		維頸壺 肩部 工字文系
	〃	〃	2439	壺		1/4下		維頸壺 肩部 工字文系 上部刺突
	〃	〃	2440	壺		1/4下		懸波状垂下文
	〃	〃	2441	高杯		3/4		内外赤彩ミガキ
	209	〃	2442	甕	(1.14)	1/2 Ⅰ BR		内ミガキ
	〃	〃	2443	甕	3.47	1/2 Ⅲ La		□内外ハケ・ヨコナデなし 胴内ヨコミガキ
	〃	〃	2444	甕	20.42	完 Ⅲ Ra		内精製ミガキ
	〃	〃	2445	甕	3.59	3/4 Ⅰ BR		横羽状文6単位 直→羽
	〃	〃	2446	甕	41.32	完 Ⅰ BR		横羽→直
74	〃	〃	2447	甕		2/3 Ⅰ BR		横羽状文8単位 □刺突 輪積み痕残す 内ミガキ
	210	〃	2448	甕	11.96	2/3 Ⅲ R		□外輪積み痕残す
	〃	〃	2449	甕		1/3 Ⅰ R		□刺突
	〃	SD12	2450	壺		3/4		□内外ミガキ
	〃	〃	2451	壺		1/2		Ⅱ沈線文 連弧状 押し引き列点文
	〃	〃	2452	壺	5.62	1/2		外ハケ
	〃	〃	2453	壺		1/4		Ⅳ2本櫛結束波状文

写真PL	図版	遺構名	土器No.	器種	容量	残存率	施文手法	成形・調整・施文等　特記事項
	210	SD12	2454	壺		1/2		Ⅳ2本櫛結束波状文（太い）　下半ハケ
	〃	〃	2455	鉢	0.38	1/4		外ナデ　内ハケ
74	211	〃	2456	壺	(6.17)	2/3		外ハケ残すミガキ　肩部記号2箇所　45度離れる
	〃	〃	2457	壺		1/3		白色系に焼き上げている
	〃	〃	2458	壺		3/4		墨4単位　懸垂文間精製ミガキ　口内外ヨコナデ
75	〃	〃	2459	壺	5.12	3/4		口内外精製ミガキ　Ⅲハケ残すミガキ
75	〃	〃	2460	壺	4.22	1/2		外文様施文後　文様帯上を含め精製ミガキ
	〃	〃	2461	壺		2/3		Ⅲハケ　Ⅴ沈線→縄文
	〃	〃	2462	壺		3/4		強波熱により灰白色系　口縁部内面発泡
	〃	〃	2463	壺		1/4下		胴最大径　LR縄文・沈線
	〃	〃	2464	壺		1/4下		胴最大径　LR縄文・沈線　工字文系
	〃	〃	2465	壺		1/4下		沈線・櫛・刺突文
	〃	〃	2466	壺	9.11	1/4下		Ⅴ縄文→沈線
	212	〃	2467	甕		2/3		強波熱により灰白色系　歪み大（押しつぶれた状態）　ハケ調整痕
75	〃	〃	2468	壺		2/3		強波熱により灰白色系　歪み大　破損部が互い違いに入り込む
	〃	〃	2469	甕		1/4下		強波熱により灰白色系　歪み大　破損部が互い違いに入り込む
	213	〃	2470	壺		1/4下		Ⅴ縄文→沈線→沈線内ミガキ
	〃	〃	2471	高杯		1/2		内外赤彩ミガキ
	〃	〃	2472	甕		1/4下	Ⅲ Lb	口ヨコナデ　櫛条線4本1単位　横羽状3段→刺突　内ナデ
	〃	〃	2473	甕		1/3	Ⅲ R	口刺突　櫛直→斜　内ハケ
	〃	〃	2474	台付甕		完		外ナデ
	〃	〃	2475	台付甕		1/2	Ⅴ	外ナデ
	〃	〃	2476	台付甕	(0.43)	1/2	ⅤHR	内ミガキ
	〃	〃	2477	甕		1/4下	ⅠBR	口刺突　内ミガキ
75	〃	〃	2478	甕	5.29	2/3	ⅤER	櫛波状文（左→右）　内ミガキ
	〃	〃	2479	甕		1/4下	ⅠBR	内ハケ→ナデ
75	〃	〃	2480	甕	(7.29)	2/3	ⅢAR	内ハケ
	〃	〃	2481	甕	11.68	1/2	Ⅰ R	櫛ヘラ状　波（上から下）→羽　内ハケ
	〃	〃	2482	甕	(2.16)	1/4		外擬貝沈線→櫛波状文　内ヨコミガキ
	〃	〃	2483	高杯	0.25	3/4		脚 削痕による調整　内外赤彩ミガキ
	〃	〃	2484	高杯	0.63	3/4		内外赤彩ミガキ
	〃	〃	2485	小型壺	0.29	完存		Ⅴ連弧文8単位　上位タテミガキ　下位ヨコミガキ　焼成後穿孔
	〃	〃	2486	壺	(1.86)	1/2		外ハケ残す壺
	214	〃	2487	壺		1/2		口内外ヨコナデ　Ⅱ押し出し凸帯　板ヨコナデ
	〃	〃	2488	壺		1/2		口内外ヨコナデ・粗いミガキ
	〃	〃	2489	壺		1/4		装飾　歪み　口内外ヨコナデ　胴外ハケ
	〃	〃	2490	壺		1/4下		Ⅳ矢羽根状沈線3段（縄文地文）
	〃	〃	2491	鉢	0.24	1/3		内外赤彩ミガキ
75	〃	〃	2492	甕	2.87	1/2	ⅠBR	内ハケ
75	〃	〃	2493	甕	0.96	1/2		コの字重ね
	〃	〃	2494	甕	(2.19)	1/4	ⅠBR	内ハケ
75	〃	〃	2495	甕		完	Ⅰ R	櫛羽状文7単位　内精製ミガキ
	〃	〃	2496	甕		1/4下	Ⅲ Lb	頸部刺突
	〃	〃	2497	鉢		1/4下		外連弧文　波状沈線充填　下段押し引き列点文　内精製ミガキ
76	〃	〃	2498	壺	5.17	3/4		口外ハケ・ヨコナデ　内ミガキ　胴外ハケ残すミガキ　図示部分正面
	〃	〃	2499	壺		1/2		胴外ハケ　Ⅳ横走沈線内 簾状文・波状沈線・押し引き列点文
	〃	〃	2500	壺		1/4下		肩部　工字文系
	〃	〃	2501	壺	(4.75)	1/3		口外ハケ　内ミガキ　胴外ハケ残すミガキ
76	〃	〃	2502	壺	0.48	完		外精製ミガキ　焼成後穿孔
	〃	〃	2503	壺		1/2		Ⅱ文様帯より下位と口縁部内 赤彩（スクリーントーン欠落）
	215	〃	2504	鉢	(4.33)	1/4		口上から刺突　外ハケ残すミガキ　内ハケ
	〃	〃	2505	鉢		1/4		内ハケ→ナデ　粗製
76	〃	〃	2506	甕	1.15	3/4		外縄文　内ハケ残すミガキ
	〃	〃	2507	甕	6.09	1/2		櫛波状文（最内型）上→下　羽状文ⅠR　内ハケ
76	〃	〃	2508	甕	25.43	3/4	Ⅲ La	内外面コゲ・煤なし　火にかけた痕跡なし　焼成後穿孔
	〃	〃	2509	甕	4.27	1/2	ⅠBR	内精製ミガキ
76	〃	〃	2510	甕	7.20	3/4	ⅠBR	内精製ミガキ
	216	〃	2511	壺	8.64	1/2		口内外ミガキ　胴外精製ミガキ　Ⅱ横走沈線
	〃	〃	2512	壺		1/2		口外ハケ・ヨコナデ　内ミガキ　Ⅱ擬櫛状沈線文4単位
	〃	〃	2513	壺		1/2		口外ハケ　内ミガキ
	〃	〃	2514	壺		1/4下		Ⅱ擬櫛状沈線文　口口縁内面赤彩
	〃	〃	2515	壺		1/4下		Ⅱ擬櫛状沈線文
	〃	〃	2516	壺		1/4下		Ⅱ擬櫛状沈線文
	〃	〃	2517	壺		1/4下		SK191・2009と同一個体
	〃	〃	2518	壺		1/3		口内外ハケ・ヨコナデ　Ⅱ横走沈線内 櫛波状文充填
101	〃	〃	2519	壺	2.12	1/3		内外ミガキ
	〃	〃	2520	鉢				2497と同一個体
107	〃	〃	2521	壺	5.41	完		口内外ヨコナデ・ヨコミガキ　外上位ミガキ　下位ハケ→ナデ
	〃	〃	2522	壺		2/3		外ハケ→ナデ　焼成前穿孔
	〃	〃	2523	壺		2/3		外ハケ残すミガキ（2522と同一個体の可能性有）
	〃	〃	2524	壺		1/4下		懸垂文間　淡い赤彩　ミガキ

写真PL	図版	遺構名	土器No.	器種	容量	残存率	施文手法	成形・調整・施文等 特記事項
	216	SD12	2525	壷	8.24	1/4下		沈線部のみ赤彩か？
	217	〃	2526	鉢	1.07	1/2		内外ハケ・ナデ
	〃	〃	2527	鉢		1/4下		外有段部
	〃	〃	2528	甕	2.80	1/3	VGR	内ハケ
76	〃	〃	2529	甕	1.95	2/3	I BR	内ミガキ
76	〃	〃	2530	台付甕	1.02	3/4		櫛波状文・畿内型(上から下)→コの字重ね6単位　内精製ミガキ
	〃	〃	2531	台付甕	0.46	2/3	Ⅶ R	内ミガキ
	〃	〃	2532	甕	3.86	2/3	I BR	内ハケ残す軽いミガキ
76	〃	〃	2533	甕	5.12	2/3	I AR	内ハケ
109	〃	〃	2534	甕	7.01	3/4	I BR	内精製ミガキ
	〃	〃	2535	甕	1.42	2/3	Ⅲ	口内外ハケ(ヨコナデなし)　胴内粗いミガキ　粗製土器
	〃	〃	2536	甕	(13.72)	1/4下	I BR	内ハケ残すミガキ
77	218	〃	2537	壷	4.93	3/4		口内外ハケ　胴外精製ミガキ　細頸球胴
	〃	〃	2538	壷	4.81	1/4		外ハケ残すミガキ
	〃	〃	2539	壷		1/3		外ハケ残すミガキ　ⅡLR縄文　Ⅲ肩部一部赤彩
	〃	〃	2540	壷	5.52	2/3		外精製ミガキ　隆帯一箇所
	〃	〃	2541	壷	(7.29)	1/2		口内外,胴外精製ミガキ
	〃	〃	2542	壷		1/4		強被熱　灰白色化　発泡化する
77	〃	〃	2543	壷		1/3		口内外ヨコミガキ　突起5単位　片口有
	〃	〃	2544	壷	1.33	2/3		外タテハケ→ミガキ
	〃	〃	2545	小型壷	0.30	完存		外上位タテミガキ　下位ヨコミガキ
	〃	〃	2546	鉢		1/4下		内外ミガキ
	〃	〃	2547	壷		1/4下		胴最大径　LR縄文　連弧文
	〃	〃	2548	壷		1/4下		胴最大径　重三角文
	〃	〃	2549	壷		1/4下		胴最大径　Ⅳ横走沈線　山形文2単位　Ⅴ重山形文
	〃	〃	2550	壷		1/4下		肩部　多段横帯文
	219	〃	2551	壷	1.60	1/2		文様帯原体　櫛歯1本　口外ヨコナデ　内ミガキ・赤彩
	〃	〃	2552	壷		1/4下		胴下半
	〃	〃	2553	壷		1/4下		懸垂文間・精製ミガキ
	〃	〃	2554	壷		2/3		懸垂文間・精製ミガキ
	〃	〃	2555	壷		2/3		懸垂文間・精製ミガキ　懸7単位　隆帯二箇所
77	〃	〃	2556	壷	3.30	3/4		懸5単位　口内外精製ミガキ
77	〃	〃	2557	壷	(24.50)	2/3		懸6単位　Ⅳ波状沈線→2本結束櫛
	〃	〃	2558	壷		1/4下		2679と同一個体
	〃	〃	2559	鉢	1.78	1/4下		内精ヨコミ 凸帯沈線刺突 連弧上位縄文・刺突囲郭SD18-2437と同一
104	220	〃	2560	壷		1/2		外赤彩ミガキ
104	〃	〃	2561	無頸壷	0.68	1/4		外赤彩ミガキ　内ミガキ
	〃	〃	2562	鉢	0.24	1/2		内外ミガキ
	〃	〃	2563	鉢	0.58	1/3		内外赤彩ミガキ
	〃	〃	2564	鉢	1.87	1/4		内外赤彩ミガキ
	〃	〃	2565	高杯	0.32	3/4		内外赤彩ミガキ
	〃	〃	2566	高杯	0.44			内外赤彩ミガキ
	〃	〃	2567	鉢	0.75	1/4		内外精製ミガキ　注口部有
	〃	〃	2568	甕	1.29	1/2		コの字重ね　原体櫛歯　受口2本結束櫛波状文
	〃	〃	2569	甕	0.76	1/2		コの字重ね　6単位　内ヨコハケ→ミガキ
	〃	〃	2570	甕	0.62	2/3	VGR	垂5単位　受口状口縁
	〃	〃	2571	甕	0.58	1/2	ⅧAR	口刺突
77	〃	〃	2572	台付甕	0.46	完	X	口刺突　内ミガキ
	〃	〃	2573	甕	0.91	1/2		内ミガキ
77	〃	〃	2574	甕	1.63	2/3		緩やかな受口　櫛畿内型施文(上→下)　内ハケ残すミガキ
77	〃	〃	2575	甕	1.56	2/3	I BR	内ハケ
	〃	〃	2576	甕		1/2	X	内ミガキ
	〃	〃	2577	甕	(2.15)	1/3	Ⅲ R	緩やかな受口　櫛ササラ状　内ナデ
	221	〃	2578	甕	7.61	3/4		櫛格子目文　外ハケ　内ハケ→ミガキ
77	〃	〃	2579	甕	6.01	2/3	Ⅱ R	櫛羽状3単位+斜線1単位　波状文正面のみ　口刺突　内精ミ
	〃	〃	2580	甕		1/4下	Ⅲ L	櫛波状文(上から下)→斜状沈線　内ハケ残すミガキ
	〃	〃	2581	壷		1/2		口外ハケ　内ミガキ　胴外ハケ　Ⅱ山形文
	〃	〃	2582	壷	(3.94)	1/2		口外ヨコナデ　内ミガキ　胴精製ミガキ
77	〃	〃	2583	壷	7.83	2/3		口外ヨコナデ・ハケ　内ミガキ　胴外精製ミガキ
78	222	〃	2584	壷	1.86	1/2		口外ハケ・ヨコナデ　内ヨコミガキ　胴上位精ミ　下位ヨコケズリ→ヨコ精ミ
78	〃	〃	2585	壷	4.61	3/4		口外ヨコナデ・ハケ　内ヨコナデ・ミガキ　胴外精製ミガキ
	〃	〃	2586	壷	5.07	1/3		胴外精製ミガキ
	〃	〃	2587	壷	5.12	2/3		外ハケ残すミガキ
	〃	〃	2588	壷	7.83	2/3		外ハケ残すミガキ　Ⅱ擬似簾状沈線文
78	〃	〃	2589	壷	3.88	1/2		Ⅱ・Ⅳ櫛(頸2mm)1本による沈線　Ⅱ刺突有　沈→縄　他精ミ
	〃	〃	2590	壷		1/2		懸櫛垂下2条1単位　外精製ミガキ
	〃	〃	2591	壷	2.52	2/3		赤彩ミガキ
	223	〃	2592	壷		3/4		強被熱・青灰色化　Ⅳ横走沈線内 櫛直線文・LR縄文交互
	〃	〃	2593	壷		1/4下		Ⅳ文様帯　胴最大径上位
	〃	〃	2594	壷		1/4下		肩部垂下文
	〃	〃	2595	壷	0.33	2/3		

写真PL	図版	遺構名	土器No.	器種	容量	残存率	施文手法	成形・調整・施文等　特記事項
	223	SD12	2596	高杯	0.66	2/3		内外赤彩ミガキ
	〃	〃	2597	台付甕		2/3		外ナデ
	〃	〃	2598	高杯		完		内外赤彩ミガキ
	〃	〃	2599	壺		完		外ナデ
	〃	〃	2600	鉢	0.33	完存		外ハケ残すミガキ　内ハケ
78	〃	〃	2601	台付鉢	0.30	完		内外赤彩（実測図内面スクリーントーン欠落）　鋸歯文3単位　被熱
	〃	〃	2602	台付甕	0.41	1/4下		コの字重ね
78	〃	〃	2603	台付甕	0.34	3/4	Ⅶ R	内外ミガキ
78	〃	〃	2604	台付甕	1.29	1/2		外連弧文7単位　内精製ミガキ
78	〃	〃	2605	甕	1.60	完	Ⅰ BR	内ミガキ
	〃	〃	2606	甕	2.02	1/4	Ⅱ L	櫛波状文上→下　内ハケ
	〃	〃	2607	甕	2.37	1/4	Ⅲ L	内精製ミガキ
	〃	〃	2608	甕	0.96	3/4	Ⅰ BR	櫛羽状文7単位　内ハケ残すミガキ
78	〃	〃	2609	甕	1.36	3/4	ⅨAL	□唇外面に横から内面に上から斜状に刺突　櫛4ブロック(縦2,横2)
	〃	〃	2610	甕	2.65	1/4		外ハケ→ナデ　内ハケ
	224	〃	2611	甕		1/2	Ⅰ BR	内ケケ→ミガキ
78	〃	〃	2612	甕	3.80	3/4	Ⅰ BR	櫛羽状文6単位　内ハケ→ナデ
	〃	〃	2613	甕		1/4下		外垂下文K　内精製ミガキ
	〃	〃	2614	甕	0.88	1/4下	VGR	櫛簾→波→垂
79	〃	〃	2615	壺	2.18	3/4		□内面赤彩(図面スクリーントーン欠落)　外ヨコナデ→タテミガキ　胴外精ミ Ⅱ・Ⅳ～Ⅴ1本櫛(径2mm)による沈線　Ⅱ擬簾状文　Ⅴ連弧状
79	〃	〃	2616	壺		2/3		胴上位ハケ残すミガキ　Ⅴ重山形文
79	〃	〃	2617	壺	1.78	3/4		□外ヨコナデ　内ミガキ　外反　胴精製ミガキ
79	〃	〃	2618	壺	3.80	3/4		□外ヨコナデ　内ヨコナデ→ミガキ　胴外ミガキ
79	〃	〃	2619	壺	2.08	2/3		□外ナデ　内ミガキ　胴外精製ミガキ
	〃	〃	2620	壺	0.94	1/3		内外赤彩ミガキ
	〃	〃	2621	壺		2/3		□擬似縄文　内ヨコハケ→ミガキ　Ⅱヘラ描連弧文(細く深い)
	〃	〃	2622	壺		2/3		□外ナデ　内ミガキ　胴外ミガキ
	225	〃	2623	壺	8.53	3/4		Ⅱ横走沈線　2本結束櫛波状文　外精製ミガキ
	〃	〃	2624	壺	8.57	2/3		外ハケ残すミガキ
	〃	〃	2625	壺		2/3		被熱　□外ヨコナデ　内不明　胴外淡い赤彩
79	〃	〃	2626	壺	2.19	完		□ヨコナデ　胴外ハケ
79	〃	〃	2627	壺	5.42	1/2		□外ヨコナデ・ミガキ　胴外精製ミガキ　Ⅱ連弧文4単位　縄→沈→ミ
103	〃	〃	2628	壺	0.78	3/4		ペンカラ採集 試料No.11
	〃	〃	2629	壺	5.75			外　ミガキ
79	226	〃	2630	壺	5.85	1/2		□外ナデ　内ミガキ　胴外精製ミガキ
	〃	〃	2631	壺		3/4		□外ハケ→ヨコナデ　内ナデ　胴外ハケ→ナデ
80	〃	〃	2632	壺	5.91	完		□内外ミガキ　胴上位タテミガキ　下位ヨコミガキ
	〃	〃	2633	壺	3.55	1/2		外ハケ残すミガキ
	〃	〃	2634	壺	5.01	2/3		外ハケ　淡い赤彩（図面スクリーントーン欠落）
	〃	〃	2635	壺	3.53	2/3		外ミガキ
80	〃	〃	2636	壺	7.13	3/4		□刺突　外タテミガキ　内ヨコミガキ　胴上位精製ミガキ　下位ヨコハケ→精ミ
	〃	〃	2637	壺		1/2		外ナデ
	〃	〃	2638	壺		1/3		外ナデ
80	227	〃	2639	壺	5.48	2/3		器面荒れ調整不明瞭　隆帯3箇所
	〃	〃	2640	壺	(6.88)	2/3		外精製ミガキ
	〃	〃	2641	壺		1/2		被熱　橙色　器面荒れ調整不明瞭
80	〃	〃	2642	壺	3.85	1/2		□外ヨコナデ　内ミガキ　胴外精製ミガキ(ハケ残る)
80	〃	〃	2643	壺	7.36	3/4		□外ヨコナデ→ハケ　内ハケ→ナデ　胴外ハケ残す粗いタテミガキ
80	〃	〃	2644	壺		1/2		Ⅴ沈→縄
	〃	〃	2645	壺		1/4下		胴最大径部　Ⅴ文様帯
	〃	〃	2646	壺		1/2		Ⅴ連弧文　右回り施文　白色系に焼き上げる
	〃	〃	2647	壺		1/4下		多段横善文　胴部
	〃	〃	2648	壺		1/4下		沈線内家彩　胴部浮文　1孔有
	228	〃	2649	壺		1/3		Ⅳ・Ⅴ　鋸歯文
89	〃	〃	2650	壺		2/3		Ⅳ櫛刺突列点文　3本組波状沈線文　Ⅴ工字文系4単位？
	〃	〃	2651	壺		1/4下		胴最大径部　Ⅳ・Ⅴ文様帯　無文帯ミガキ
	〃	〃	2652	壺		1/4下		胴最大径部　Ⅳ・Ⅴ文様帯
	〃	〃	2653	壺		1/4下		胴最大径部　Ⅳ・Ⅴ文様帯　縄→沈
	〃	〃	2654	壺		1/4下		胴最大径上位　Ⅲ文様帯　地文ハケ
	〃	〃	2655	壺		1/4下		胴最大径上位　Ⅳ文様帯　工字文系
	〃	〃	2656	壺		1/3		外壁疵文間ミガキ
	〃	〃	2657	壺		1/4下		外櫛直線文→横走沈線文→櫛斜走文→ミガキ
81	〃	〃	2658	台付甕	1.52	3/4		外ハケ(ミガキなし)　内ハケ　下位一部ミガキ
	〃	〃	2659	甕	1.03	1/3	Ⅰ CR	外ハケ内ミガキ
	〃	〃	2660	甕	0.77	1/3	Ⅰ BR	櫛羽状文縄文→垂下文
81	〃	〃	2661	甕	3.60			内ハケ
81	〃	〃	2662	甕	0.19	完存		櫛羽状文3単位+斜線文1単位　内ヨコハケ
	〃	〃	2663	甕	0.19	2/3		外ナデ
	〃	〃	2664	甕		1/4下		コの字重ね
	〃	〃	2665	甕		1/4下	VER	胴　刺突文

写真PL	図版	遺構名	土器No.	器種	容量	残存率	施文手法	成形・調整・施文等 特記事項
115	228	SD12	2666	甕	0.80	3/4	Ⅶ R	内ヨコハケ→ミガキ
	229	〃	2667	甕	2.09	1/2		櫛縦位に上から下へ斜線を重ねて右回り　内ヨコハケ
81	〃	〃	2668	甕	1.37	3/4	I L	内ミガキ
	〃	〃	2669	甕				
	〃	〃	2670	甕		2/3	I BR	内ナデ
81	〃	〃	2671	甕	10.87	3/4	I AR	櫛羽状文6単位+斜線文1単位　内ハケ→ナデ
	〃	〃	2672	甕	(2.85)	1/3		外鋸歯文　内ミガキ
	〃	〃	2673	鉢	0.33	1/3		内外ミガキ
	〃	〃	2674	甕		2/3		焼成前穿孔　内外ハケ→ナデ
	〃	〃	2675	高杯		1/2		内ヨコハケ
81	〃	〃	2676	壺		2/3		口外ヨコナデ　内ミガキ　胴横帯文・ヨコミガキ
	〃	〃	2677	壺		3/4		口外ナデ　内ミガキ　胴縄→沈
	〃	〃	2678	壺		3/4		口外ヨコナデ・ハケ
	〃	〃	2679	壺				
	〃	〃	2680	壺		3/4		懸8単位　Ⅱ簾状文左回り施文
	230	〃	2681	壺	6.23	2/3		外ハケ
81	〃	〃	2682	壺	0.20	完存		外ミガキ
81	〃	〃	2683	壺	0.98	完存		外赤彩・ミガキ
102	〃	〃	2684	壺	0.89	完存		外赤彩・ミガキ
81	〃	〃	2685	高杯	0.33	1/2		外赤彩・ミガキ
81	〃	〃	2686	甕	0.45	3/4	Ⅶ R	内ヨコハケ→ナデ
82	〃	〃	2687	甕	1.79	3/4		コの字重ね3単位　地文縄文　内ハケ残すミガキ
82	〃	〃	2688	甕	0.84	完		コの字重ね6単位　内ミガキ
	〃	〃	2689	台付甕		1/4下		コの字重ね文　下部に刺突列点文(胴下半部)
	〃	〃	2690	甕		1/4下		櫛斜線文+刺突列点文
	〃	〃	2691	甕	1.04	1/4		外　櫛描直線文　縄文　波状沈線文
82	〃	〃	2692	甕	2.84	完		内ミガキ
82	〃	〃	2693	甕	2.48	完	Ⅶ R	内ハケ残すミガキ
82	〃	〃	2694	甕	4.74	2/3	V FL	懸垂下文5単位　波状文上→下　口刺突　内ハケ→ナデ
82	231	〃	2695	甕	(35.11)	2/3	I R	口内ヨコミガキ　胴内ハケ
82	〃	〃	2696	甕	1.59	2/3	I BR	櫛羽状文8単位　口突起1　胴浮文1箇所　内ハケ残すミガキ
	〃	〃	2697	甕	1.81	1/2	I BR	口オサエ　内ヨコハケ　胴ハケ→ナデ
82	〃	〃	2698	甕		3/4		外ハケ→ナデ　内ハケ　口刺突
82	〃	〃	2699	壺	4.62	3/4		刺突　畿内型櫛描文上→下　外ハケ→ナデ　軽いケズリ　橙色
83	〃	〃	2700	壺		2/3		口ヨコナデ→タテハケ　内ハケ・ミガキ　胴外ミガキ
	〃	〃	2701	壺		1/4下		頸部　横走沈線(細線)
	〃	〃	2702	壺		1/4下		肩部　鋸歯・横走沈線
	〃	〃	2703	壺		1/4下		肩部　沈線区画内　短斜線文a
	〃	〃	2704	壺		1/4下		肩部　区画内　斜行沈線押し引き列点文　LR縄文等で充填
	〃	〃	2705	壺		1/4下		工字文系(押し引き列点文充填)+連弧文
83	〃	〃	2706	壺		2/3		口外ヨコナデ・タテミガキ　内不明　胴ハケ→沈線文
83	232	〃	2707	壺	5.80	3/4		胴外　ハケ残すミガキ
83	〃	〃	2708	壺		1/2		Vハケ→縄→沈　鋸歯文右回り施文
	〃	〃	2709	甕	8.46	2/3		櫛格子目文→波状文　内ハケ
	〃	〃	2710	甕	14.77	1/2		外縄→横走沈線3条　連弧文風5条　下半ミガキ　内ハケ残すミガキ
83	〃	〃	2711	甕	14.58	2/3	ⅧAR	緩やかな受口　内精製ミガキ
83	〃	〃	2712	甕	14.11	1/4	I AR	内ハケ残すミガキ
	233	〃	2713	甕				
	〃	〃	2714	甕				
84	〃	〃	2715	甕	1.63	2/3		口刺突　胴内外ミガキ
84	〃	〃	2716	甕	1.23	2/3		内精製ミガキ
84	〃	〃	2717	甕	0.93	3/4	I AR	櫛羽状文6単位　頸部簾状文風　内ハケ　口上位から縄文
84	〃	〃	2718	甕	1.88	2/3	I AR	櫛波→羽　内ミガキ
84	〃	〃	2719	甕	3.21	2/3	I BL	内ミガキ
84	〃	〃	2720	甕	35.86			
84	〃	〃	2721	甕	3.11	1/2	Ⅲ Ra	櫛波→羽(一部縦羽状有)　内ハケ残すミガキ
84	〃	〃	2722	甕	4.65	1/2		ヨコハケ→コの字重ね　口2本櫛結束波状文　内ハケ
84	234	〃	2723	甕	3.39	3/4	I AR	櫛羽状文13単位　内ヨコハケ残すミガキ
84	〃	〃	2724	甕	4.41	1/3	I BR	櫛羽状文6単位+斜線文2単位　内精製ミガキ
85	〃	〃	2725	壺		2/3		口内外精ミ　山形沈線文　Ⅱ横走沈線+刺突　懸波状垂下
85	〃	〃	2726	甕	4.37	1/2	V ER	櫛頸簾1条→垂下(4単位)→胴簾　外タテミガキ　内ハケ残すミガキ
85	〃	〃	2727	甕	2.22	3/4		口ヨコナデ　内ミガキ　胴外短横線文
85	〃	〃	2728	甕		1/4	I BR	口緩やかな受口　内精製ミガキ
	〃	〃	2729	甕		1/3	I AL	受口外面　櫛波状文　内ミガキ
85	〃	〃	2730	甕	6.43	1/2	Ⅱ BL	櫛羽→簾　内外精製ミガキ
	〃	〃	2731	甕	(8.34)			
85	〃	〃	2732	壺	0.32	完存		外赤彩ミガキ
	〃	〃	2733	甕		1/4下		外LR縄文→2本沈線波状垂下文　内ミガキ
	235	〃	2734	人面土器		3/4		頸部外　沈線区画内　押し引き列点文　内ナデ
	〃	〃	2735A	甕		1/4下		口縁部(拓本天地逆)　内綾杉刺突　ヨコナデ　外来系統
	〃	〃	2735B	甕	1.08	1/2	I BR	内ハケ→ミガキ

写真PL	図版	遺構名	土器No.	器種	容量	残存率	施文手法	成形・調整・施文等　特記事項
	235	SD12	2736	甕	0.97	3/4	I　R	櫛羽状文7単位+斜線文1単位
85	〃	〃	2737	甕	1.38	2/3	I BR	内ミガキ
86	〃	〃	2738	壺		2/3		橙色　口外ハケ→ミガキ　内ミガキ　胴外ハケ→ミガキ　波3段(上→下)　ハケ刺突格子目文
126	〃	〃	2739	壺		1/2		口外精ミ　内ミガキ　Ⅱ～Ⅲ刺突・蓑内型波状文・波状垂下
86	〃	〃	2740	有孔鉢	5.17	2/3		外ハケ残すタテミガキ　LR縄文　刺突格子目文　内ハケ残すミガキ
85	〃	〃	2741	壺	4.51	2/3		橙色　口外ヨコナデ　内ミガキ　胴外ハケ残すミガキ
85	〃	〃	2742	壺	0.17	完存		外ミガキ
85	〃	〃	2743	壺		1/2		口外ハケ　内ミガキ　胴外ハケ残すミガキ
	〃	〃	2744	壺		3/4		口内外,胴ミガキ　口外淡い赤彩　Ⅱ貼り付け凸帯+LR縄文
86	236	〃	2745	台付甕	1.30	1/2	ⅧAR	浮文　胴部縦位2点で区画　口縁部は胴部中間に添付
	〃	〃	2746	甕	1.35	3/4	VFR	櫛垂下文4単位　内ミガキ
86	〃	〃	2747	甕		1/2	Ⅲ Rb	口刺突　内ハケ残すミガキ
86	〃	〃	2748	甕	4.18	1/3	I AR	口刺突　内ナデ
86	〃	〃	2749	甕	1.93	1/2	I AR	内精製ミガキ
86	〃	〃	2750	甕	5.29	1/4		口緩やかな受け口　内精製ミガキ
86	〃	〃	2751	甕	13.92	1/3		胴外格子目文 ›波状文・刺突　内精製ヨコミガキ　口上位から刺突
	〃	〃	2752	壺		3/4		口外ハケ→ヨコナデ　内ミガキ　胴外精製ミガキ
	〃	〃	2753	壺		3/4		口外ヨコナデ→ハケ→粗いミガキ　内精製ミガキ　(2757と同型式)
	〃	〃	2754	壺		1/2		口外ヨコナデ→タテハケ　内ミガキ　胴外ハケ→ミガキ
86	〃	〃	2755	鉢	2.20	2/3		器面荒れ調整不明瞭　胴外縄文3段
87	237	〃	2756	壺	6.74	3/4		口大きく外反　2次的に強く被熱　調整不明瞭
87	〃	〃	2757	壺	6.66	3/4		口外ハケ→ヨコナデ　内ヨコナデ→ハケ→ミガキ
87	〃	〃	2758	壺	7.41	1/2		Ⅱ押し引き列点文　胴外精製ミガキ
87	〃	〃	2759	壺	2.24	完存		外ハケ→ミガキ
88	〃	〃	2760	甕	2.04	1/3	Ⅶ R	内ハケ残すミガキ
87	〃	〃	2761	甕	5.13	3/4	Ⅱ BR	内ハケ残すミガキ
87	〃	〃	2762	甕	1.79	1/2		外格子目文　内ミガキ　底部・焼成後穿孔
88	〃	〃	2763	甕	1.28	3/4		外ハケ→ナデ→櫛　内ミガキ
88	〃	〃	2764	甕	1.64	2/3	I BR	器面荒れ調整不明瞭
88	238	〃	2765	甕	1.94	2/3	I BR	櫛羽状文4単位　内精製ミガキ　口内稜
88	〃	〃	2766	甕	(11.18)	1/2	I BR	口擬似縄文　浮文5箇所　櫛羽→波　内ハケ→ミガキ
88	〃	〃	2767	甕	6.48	完	I　R	口ハケ→ヨコナデ　刺突
	〃	〃	2768	壺		2/3		口内外ハケ・ヨコナデ　胴外タテミガキ　内外淡い赤彩
	〃	〃	2769	壺	(6.41)	1/2		口外ヨコナデ→タテミガキ　内精製ミガキ　胴外精製ミガキ
	〃	〃	2770	壺		3/4		口内外ヨコミガキ　懸8単位　懸垂文間精製ミガキ
	〃	〃	2771	壺		1/4下		懸垂文有　Ⅳ沈→縄
	〃	〃	2772	壺		1/2		懸9単位　懸垂文間ミガキ
	〃	〃	2773	壺		1/4下		Ⅴ重三角文　LR縄文→沈
	〃	〃	2774	壺		1/4下		肩部　外ハケ調整→垂下文
88	239	〃	2775	壺		1/2		口ヨコナデ　内ミガキ　外横帯文　ハケ→沈線　›縄文
88	〃	〃	2776	壺	0.24	完存		外ミガキ
88	〃	〃	2777	壺		2/3		Ⅴ工字文4単位　縄→沈　沈線内赤彩　胴下位ハケ残すミガキ
	〃	〃	2778	壺		1/4下		頸部～口縁部　Ⅱ刺突格子目文　口外ヨコナデ　内ミガキ
	〃	〃	2779	壺		1/4下		胴最大径上位　ハケ→沈線
	〃	〃	2780	壺		1/4下		肩部(復元推定径7.9cm・中型サイズの壺)
	〃	〃	2781	鉢	1.75	1/3		外ミガキ　内ナデ
	〃	〃	2782	鉢	1.36	1/2		内外　赤彩ミガキ
89	〃	〃	2783	甕	3.40	3/4		コの字重ね5単位　内精製ヨコミガキ
	〃	〃	2784	甕		1/2		コの字重ね(3単位か？)　口刺突
	〃	〃	2785	鉢		1/3		内ミガキ
89	〃	〃	2786	甕	(5.28)	1/2	I BR	内ミガキ
88	〃	〃	2787	甕	(7.41)	1/3	I BR	口緩やかな受口(内外面稜なし)　内精製ミガキ
89	〃	〃	2788	甕	(5.17)	2/3	VHR	胴垂下文　波状2本沈線5単位　胴刺突　内ミガキ
	〃	〃	2789	蓋		3/4		器面荒れ調整不明瞭　ナデか？　粗製
89	240	〃	2790	甕	1.50	2/3	I BR	櫛羽状文4単位　口外ヨコナデ　左上りハケ　内ミガキ
89	〃	〃	2791	甕	2.08	3/4	VGR	櫛波状文(上→下)　内ハケ残すミガキ
	〃	〃	2792	甕	2.18	1/2		外ナデ　内ハケ
	〃	〃	2793	甕		1/2	I　R	内ミガキ
81	〃	〃	2794	甕		2/3		口刺突　内精製ミガキ
89	〃	〃	2795	甕	(8.24)	1/2	I BL	内ハケ残すミガキ
89	〃	〃	2796	壺	(17.98)	3/4		Ⅴ連弧文11単位　浮文Ⅳ文様帯2箇所・Ⅴ文様帯1箇所
89	〃	〃	2797	壺	5.50	3/4		口外ハケ・ヨコナデ　内ヨコミガキ　胴外精製ミガキ
90	241	〃	2798	壺	(8.31)	1/2		Ⅱ縄→沈　Ⅲ以下沈→縄　沈線内赤彩
	〃	〃	2799	鉢		1/4下		外面無彩　内面赤彩
	〃	〃	2800	高杯		2/3		内外　赤彩ミガキ
90	〃	〃	2801	甕	0.31	3/4	ⅧAR	内ミガキ
90	〃	〃	2802	甕	0.68	2/3	VGR	櫛垂下4単位(垂下上に波状沈線)　口2本櫛波　内ハケ→ナデ
	〃	〃	2803	甕	1.86	3/4	I BR	口刺突　内タテミガキ
90	〃	〃	2804	甕	(7.17)	2/3	I BR	口刺突　櫛ササラ状　内ハケ残すミガキ
90	〃	〃	2805	甕		1/4	Ⅲ	内ハケ残すミガキ　口刺突

写真PL	図版	遺構名	土器No.	器種	容量	残存率	施文手法	成形・調整・施文等　特記事項
90	241	SD12	2806	甕	12.06	1/2	Ⅰ BR	内ハケ残すミガキ
90	〃	〃	2807	壺	6.35	3/4		外ハケ残すタテミガキ　焼成後穿孔
90	242	〃	2808	壺	6.48	2/3		口外ハケ→ヨコナデ　内ヨコミガキ　胴外ハケ残すタテミガキ　淡い赤彩
	〃	〃	2809	壺	(1.20)	1/2		口外ハケ・ヨコナデ　内精製ヨコミガキ　胴外精製ミガキ
91	〃	〃	2810	壺	0.38	完		外精製ミガキ　底部打ち欠き　隆帯一箇所
	〃	〃	2811	甕?		1/4下		外胴最大径部分波状文　櫛原体刺突・斜状列点文
91	〃	〃	2812	甕	1.77	1/2	Ⅲ Lb	内ハケ残すミガキ
91	〃	〃	2813	甕	3.74	3/4	Ⅰ BR	口ヨコナデ・刺突　内ハケ残すミガキ
91	〃	〃	2814	甕	3.74	2/3	Ⅰ BR	櫛羽状文4単位　口刺突　胴内ハケ　下位粗いタテミガキ
91	〃	〃	2815	甕	4.64	1/2	Ⅰ BR	櫛羽状文5単位　内ハケ残すミガキ
91	〃	〃	2816	甕	4.50	1/4	Ⅰ BR	口ヨコナデ・刺突　内ハケ残すミガキ
91	243	〃	2817	壺	5.74	3/4		器面荒れ調整不明瞭　胴ハケ→ミガキ
91	〃	〃	2818	壺		3/4		口綾杉状刺突　下方から刺突ミガキ　Ⅱ沈線→棒状浮文(3本1単位・3箇所)→刺突　肩部斜口短線文(3本1組)　白色系
	〃	〃	2819	壺		2/3		口内外ミガキ　受口2本櫛結束波状文　Ⅲハケ残すナデ
	〃	〃	2820	壺		1/4下		Ⅳ文様帯　横走沈線内　山形沈線文　押し引き列点文で充填
	〃	〃	2821	壺		1/4下		Ⅳ・Ⅴ文様帯　波状沈線文　連弧文
	〃	〃	2822	壺		1/4下		Ⅳ文様帯　波状沈線文　櫛描波状文
	〃	〃	2823	壺		1/2		Ⅳ刺突文　鋸歯文　押し引き列点文
	〃	〃	2824	甕	0.42	2/3	Ⅰ　R	内ミガキ
	〃	〃	2825	甕	2.62	2/3		口刺突　内ミガキ
92	〃	〃	2826	甕	5.03	完	ⅧCR	胴下半ヨコケズリ→タテミガキ　内胴部ヨコケズリ→ミガキ
	〃	〃	2827	甕		1/2	Ⅰ　R	内ミガキ
91	244	〃	2828	甕	16.02	3/4	Ⅰ AR	櫛羽状文6単位　口外左上りハケ→ヨコナデ　内ヨコミガキ
92	〃	〃	2829	甕	1.49	完		コの字重ね3単位
	〃	〃	2830	甕	(2.61)	3/4	Ⅰ BR	内ハケ残す精製ミガキ
	〃	〃	2831	甕	5.19	1/3	ⅤER	外ヨコハケ→櫛描文→刺突文　内ハケ→ミガキ
92	〃	〃	2832	壺	6.17	3/4		口外ハケ・ヨコナデ　内ハケ残すミガキ　外ハケ残すタテミガキ　グリット不明
	〃	〃	2833	壺	5.52	3/4		胴外精製ミガキ
92	〃	〃	2834	壺	0.34	完存		浮文1箇所
92	〃	〃	2835	壺	0.90	完存		外精製ミガキ
92	〃	〃	2836	壺	0.42	完		外ナデ・ミガキ
	245	SBH208	2837	甕		1/4下		櫛　斜線文→直線文
	〃	〃	2838	壺		1/4下		胴上半部　多段横帯文系
	〃	〃	2839	壺		1/4下		胴上半部　Ⅳ文様帯
	〃	SBH257	2840	甕		1/4下		口縁端部　擬似縄文
	〃	〃	2841	鉢		1/4下		内外赤彩ミガキ
	〃	〃	2842	壺		1/4下		胴上半部　Ⅳ文様帯　鋸歯文(細い沈線)
	〃	〃	2843	壺		1/4下		胴上半部　Ⅲ文様帯　懸垂文
	〃	SBH231	2844	甕		1/4下		外羽状文　内ミガキ
	〃	〃	2845	鉢	0.37	1/4下		内外ナデ
	〃	SBH243	2846	甕		1/4下		櫛羽→波　内精製ミガキ
	〃	SBH362	2847	甕		1/4下		櫛羽状文
	〃	SBH371	2848	甕	5.91	1/2	Ⅲ Rb	口外輪積み残す　内精製ミガキ
	〃	SBH361	2849	壺		2/3		懸4単位　Ⅴ重山形文4単位　沈→縄
	〃	〃	2850	甕	0.48	1/2	Ⅰ BL	櫛簾→羽　内ミガキ
	〃	SBH343	2851	台付甕		完		脚部
68	246	ST2177	2852	壺	4.46	完		被熱　橙色　外ハケ後ナデあるいはミガキ
	〃	〃	2853	壺		1/2		被熱　橙色　外ミガキ
68	〃	〃	2854	壺	0.39	完存		被熱　橙色　外器面荒れ赤彩欠落
68	〃	〃	2855	壺	0.82	完存		被熱　橙色　外ハケ後ナデあるいはミガキ
68	〃	〃	2856	壺	0.96	完存		被熱　橙色　外ハケ後ナデあるいはミガキ
	〃	〃	2857	筒形土器		完存		外赤彩タテミガキ　内ナデ　紐孔有　片口部なし
	〃	遺構外	2858	鉢	1.25	1/2		内外赤彩ミガキ
	〃	〃	2859	壺		1/3		底部焼成前穿孔　外ハケ・ナデ　内ハケ
	〃	〃	2860	蓋		1/4下		外赤彩　内淡い赤彩・ミガキ
	〃	〃	2861	甕	0.95	1/4		コの字重ね　櫛施文
111	〃	〃	2862	甕	4.49	3/4	ⅤHR	内精製ミガキ
	247	SB280	2863	壺		3/4		口内外ミガキ　突起3箇所か?
	〃	〃	2864	壺		1/2		口内外　ハケ→精製ミガキ
	〃	〃	2865	壺		3/4		外器面荒れ調整不明瞭　ほぼ完存、口縁部打ち欠き欠損か?
	〃	SB281	2866	鉢		2/3		底部外面赤彩せず、同部のみ黒斑有り
	〃	SB319	2867	鉢		2/3		内ナデ　外ヨコミガキ赤彩
	〃	〃	2868	壺		3/4		胴外タテミガキ
	〃	SB326	2869	甕		1/2	ⅧAR	櫛波状文一部左下がり　施文部に荒いヨコミガキ
	〃	〃	2870	甕		2/3	Ⅷ　R	櫛胴部波状文(中部)→頸部波状文(畿内)
	〃	〃	2871	高杯		完存		外赤彩
	〃	〃	2872	小型土器		完		外荒いミガキ　内ナデ
	〃	SB352	2873	壺		3/4		口内外　胴外精製ミガキ　Ⅱ沈線施文原体結束か?
	〃	SB353	2874	台付甕		3/4	Ⅰ BR	櫛羽(7単位)→簾　内ミガキ
	〃	SB354	2875	壺		2/3		胴外精製ミガキ　Ⅱ淡い赤彩

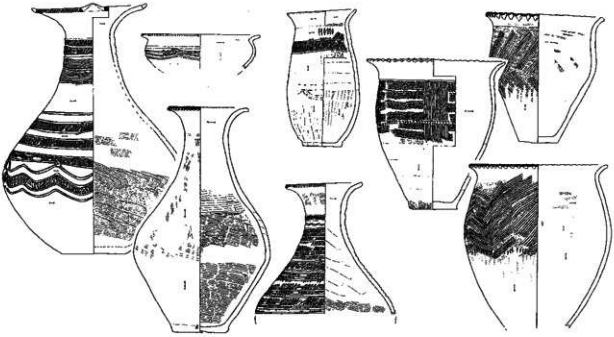
写真PL	図版	遺構名	上器№	器種	容量	残存率	施文手法	成形・調整・施文等　特記事項
	247	SB368	2876	壺		2/3		胴外精製ミガキ　Ⅳ竜山形文　LR縄文
	〃	〃	2877	壺		3/4		□外ナデ 内ミガキ　胴外一部淡い赤彩
	〃	〃	2878	壺		3/4		注口はないと想定される
	248	SB358	2879	壺		2/3		□外ヨコナデ　内ミガキ　胴外ハケ
	〃	〃	2880	壺		完存		□外ヨコナデ内ナデ　内面にヘンガラ痕跡有り
	〃	〃	2881	壺		2/3		Ⅱ擬似縄文→沈線
	〃	〃	2882	壺		1/3		□縁内外およびⅡ文様帯に淡い赤彩　Ⅳ横走沈線とLR縄文
	〃	〃	2883	壺		1/4		胴外頸部以下赤彩
	〃	〃	2884	壺		1/4下		□内外ナデ
	〃	〃	2885	壺		1/3		胴外　ハケ残すミガキ
	〃	〃	2886	無頸壺		1/4下		内ナデ
	〃	〃	2887	高杯		1/4下		鉢の可能性も有り
	〃	〃	2888	鉢		1/2		内外赤彩
	〃	〃	2889	有孔鉢		1/2		□端部LR縄文　内外荒いミガキ
	〃	〃	2890	甕		1/4下		胴外　LR縄文→ヨコの字重ね文
	〃	〃	2891	甕		3/4		胴外　ヨコの字重ね文　5単位
	〃	〃	2892	甕		1/3		櫛擦→波
	〃	〃	2893	甕		2/3		台付甕　充填技法
	〃	〃	2894	甕		1/4		胴内外ハケ→ナデ　□端部LR縄文
	〃	〃	2895	甕		1/4下	Ⅰ R	受口似縄文
	〃	〃	2896	甕		1/4下		垂波状垂下文
	〃	〃	2897	甕		3/4	Ⅶ	内ミガキ
	〃	〃	2898	甕		3/4		胴外ハケ　内ミガキ　底部焼成後穿孔
	〃	〃	2899	甕		1/2	Ⅰ BR	胴内　ヨコハケ→荒いミガキ
	249	SB426	2900	壺		1/3		□縄　複節RLR　内外精製ミガキ
	〃	〃	2901	壺		1/2		□内外 ヨコナデ　片口有り
	〃	〃	2902	壺		1/4		新沈線施文→櫛製ミガキ
	〃	〃	2903	壺		1/3		Ⅲ縄LR斜位施文→垂下文
	〃	〃	2904	壺		1/4		Ⅱ、Ⅲ櫛・沈線文施文→ミガキ
	〃	〃	2905	壺		1/2		胴外ハケ
	〃	〃	2906	鉢		3/4		底部外面非赤彩　黒斑
	〃	〃	2907	鉢		1/3		〃　　〃
	〃	〃	2908	鉢		1/3		内一部赤彩ミガキ　下部ナデ
	〃	〃	2909	鉢		1/3		縁内面屈折部明瞭
	〃	〃	2910	甕		1/2	VIFR	□内面屈折・稜有り
	〃	〃	2911	甕		1/4	VFR	櫛刷部波状文→頸部波状文　胴外刺突
	〃	〃	2912	甕		1/4下	Ⅰ R	□LR縄文→オサエ
	〃	〃	2913	甕		2/3		胴内外ハケ
	〃	〃	2914	甕		1/2	Ⅰ BR	□LR縄文→綾突
	〃	〃	2915	甕		1/2	Ⅰ BR	□LR縄文
	〃	〃	2916	甕		1/4		櫛連弧文　右から左へ描き右回り
	〃	〃	2917	甕		1/3		胴内外ミガキ　外面ナデ調
	250	SB415	2918	壺		1/2		胴外ハケ　隆帯2箇所
	〃	〃	2919	甕		3/4	Ⅰ BR	胴外ハケ残すミガキ　櫛・羽状文6単位
	〃	SB403	2920	鉢		3/4		縛状Ⅱ縁内面屈折部に明瞭な稜なし
	〃	SB425	2921	壺		完		Ⅱ櫛描垂下文　横走沈線　縄文
	〃	SB414	2922	鉢		1/2		内外ミガキ
	〃	SB1103	2923	壺		完存		Ⅱ垂下文3単位　Ⅲ LR縄文→横走沈線
	〃	〃	2924	壺		2/3		胴外ハケ→ナデ・荒いミガキ　□ハケ→ナデ　粗製土器
	〃	〃	2925	壺		3/4		胴外ハケ→ミガキ　頸部段有り
	〃	SB1110	2926	甕		3/4	Ⅰ BR	□胴外ミガキ　櫛羽状文8単位
	〃	SB1136	2927	甕		2/3		胴内外ヨコハケ→ミガキ
	〃	〃	2928	甕		完存		櫛羽→斜　胴一部波所文→斜縄文
	251	SB1104	2929	壺		3/4		□外ハケ→ヨコナデ　内ミガキ　胴外ミガキ
	〃	〃	2930	壺		1/2		器面荒れ調整不明瞭　頸部段有り
	〃	〃	2931	壺		2/3		□内外ミガキ　胴外タテミガキ
	〃	〃	2932	壺		完		□外ヨコナデ内ミガキ　胴外タテミガキ　Ⅱ擬似縄文
	〃	〃	2933	壺		1/2		器面荒れ調整不明瞭
	〃	〃	2934	壺		完存		胴外ハケ→ミガキ　口縁部欠損
	〃	〃	2935	甕		1/4	VIAR	櫛擦→波
	〃	〃	2936	甕		2/3	Ⅰ BR	櫛波・羽　羽状文5単位＋斜縄文1単位
	〃	〃	2937	甕		3/4	Ⅰ AR	櫛羽状文6単位
	〃	SB1141	2938	壺		3/4		□外ナデ内ミガキ　胴外ミガキ
	〃	〃	2939	壺		1/3		□内外ミガキ
	〃	〃	2940	壺		1/2		□外ハケ→ヨコナデ　内ミガキ　胴外ハケ淡い赤彩　Ⅱ櫛直線文2条
	〃	〃	2941	壺		1/2		□内外ミガキ　胴外ミガキ　Ⅱ押し出し状凸帯
	〃	〃	2942	壺		1/3		胴外ミガキ
	252	〃	2943	壺		完		□内外ミガキ　Ⅱ押し出し状凸帯
	〃	〃	2944	壺		完存		底部焼成後穿孔
	〃	〃	2945	壺		2/3		底部焼成後穿孔
	〃	〃	2946	鉢		1/4		内外精製ミガキ

写真PL	図版	遺構名	土器No.	器種	容量	残存率	施文手法	成形・調整・施文等　特記事項
	252	SB1141	2947	鉢		1/2		底部外面無彩
	〃	〃	2948	鉢		1/4下		器面荒れ調整不明瞭
	〃	〃	2949	鉢		1/4下		
	〃	〃	2950	高杯		2/3		充填技法
	〃	〃	2951	甕		完		外ハケ 内ナデ
	〃	〃	2952	甕		完		充填技法 内外ナデ
	〃	〃	2953	甕		2/3		内外ナデ
	〃	〃	2954	甕		1/2		外ハケ 内ナデ
	〃	〃	2955	甕		1/3	I BR	櫛簾→羽 口、LR縄文→刺突
	〃	〃	2956	甕		1/4	Ⅳ	胴ヨコハケ→斜線文 口2本結束波状文 内ハケ
	〃	〃	2957	甕		1/2	I BR	櫛波→羽
	〃	〃	2958	甕		2/3	I AR	櫛羽状文7単位？ 内精製ミガキ
	263	SB1147	2959	甕		1/2	Ⅳ L	胴内外ミガキ
	〃	〃	2960	甕		1/2	Ⅳ L	口オサエ 内面屈折部にゆるやかな稜有り
	〃	SB1144	2961	壺		完存		胴外ミガキ 口縁部欠損
	〃	SB1156	2962	壺		2/3		Ⅱ沈一LR縄文 胴外ミガキ
	〃	SB1161	2963	壺		1/3		器面荒れ調整不明瞭
	〃	〃	2964	壺		2/3		Ⅱ擬似縄文 粘土貼付付部有り
	〃	〃	2965	壺		完		胴外ミガキ 記号1箇所
	〃	〃	2966	壺		2/3		Ⅱ連弧文 7単位
	〃	〃	2967	壺		3/4		Ⅱ2本結束波状沈線 口刺突
	〃	〃	2968	壺		1/3		V連弧文
	〃	〃	2969	無頸壺		2/3		器面荒れ調整不明瞭 胴内外ナデ
	〃	〃	2970	鉢		3/4		口突起2組 4単位 底部外面ハケ痕跡有り
	〃	〃	2971	鉢		1/4下		脚状口縁屈折部の内面に稜なし
	〃	〃	2972	甕		完		櫛 羽状文7単位 口LR縄文→指オサエ
	〃	〃	2973	甕		3/4	Ⅳ L	口指オサエ 粘土焼成他と異なる 黄灰色
	254	〃	2974	甕		1/2	I BR	櫛簾(上から下)→羽 内ミガキ
	〃	〃	2975	甕		3/4		器面荒れ調整不明瞭 粘土焼成他と異なる黄灰色
	〃	〃	2976	甕		1/4		コの字重ね文
	〃	〃	2977	甕		1/4	I AR	櫛 羽→羽
	〃	SB1174	2978	壺		完存		口外ヨコナデ 内荒いミガキ 胴外ミガキ
	〃	SB1182	2979	壺		2/3		胴外 精製ミガキ
	〃	SB1247	2980	壺		1/3		胴外ミガキ
	〃	〃	2981	壺		3/4		器面荒れ調整不明瞭
	〃	〃	2982	鉢		1/4下		高杯の可能性もある
	〃	〃	2983	甕		2/3		胴外 LR縄文→コの字重ね文
	〃	SB1259	2984	甕		2/3		コの字重ね文 5単位
	〃	SB1261	2985	甕		2/3		櫛口唇→波(下から上) 胴直→波(上から下)中部高地型
	〃	SB1276	2986	甕		1/2	I BR	櫛波→羽 口LR縄文→オサエ
	255	〃	2987	甕		2/3	VFR	櫛簾→波 重ね単位
	〃	〃	2988	壺		1/2		胴外 ハケ→ナデ
	〃	SK132	2989	壺		2/3		胴外 波状文→精製ミガキ
	〃	〃	2990	壺		1/3		胴外 文様帯外 精製ミガキ
	〃	〃	2991	壺		3/4		垂2条左→右→沈線5単位 Ⅳ沈線→縄文
	〃	SK141	2992	甕		3/4	VER	櫛直→波 垂下文7単位 内ハケ→荒いミガキ
	〃	SK136	2993	壺		2/3		外赤彩ミガキ
	〃	SK156	2994	壺		2/3		Ⅱ櫛描直線文2段 外ミガキ
	〃	SK160	2995	壺		2/3		Ⅱ・Ⅲヨコハケ→横帯文
	256	SK164	2996	鉢		1/2		内ハケ→荒いミガキ
	〃	SK201	2997	壺		2/3		器面荒れ調整不明瞭(被熱)
	〃	〃	2998	壺		2/3	Ⅶ R	台付甕(被熱)
	〃	SK301	2999	壺		3/4		口外ヨコハケ→ヨコナデ 胴ハケ→ミガキ
	〃	〃	3000	壺		2/3		胴外 ミガキ
	〃	〃	3001	壺		2/3		口外ハケ→ヨコナデ 胴ミガキ
	〃	〃	3002	甕		完存	I BR	櫛羽状文11単位＋斜線文1単位(台付甕)
	〃	〃	3003	甕		1/4	I R	櫛波(3段中部上から下)→羽 口LR縄文 薄い器壁
	〃	〃	3004	甕		1/4	Ⅳ R	櫛斜線文(上から下) 内ミガキ
	〃	〃	3005	甕		1/4下	Ⅸ R	Ⅱb LR縄文(台付甕の可能性有り)
	〃	〃	3006	甕		1/4下	Ⅳ L	口受口状口縁 櫛横羽状文の可能性有
	257	〃	3007	甕		完存	I BR	櫛羽状文8単位 波状文裏内型
	〃	〃	3008	有孔鉢		2/3		口ヨコナデ 内外ハケ→ナデ
	〃	〃	3009	鉢		2/3		内外ナデ
	〃	SK320	3010	壺		完存		口内外ヨコ精製ミガキ 胴縄文→沈線
	〃	SK354	3011	鉢		1/2		口屈折部内面稜有 突起5箇所以上
	〃	SK355	3012	鉢		1/3		口屈折部内面稜有 (明瞭な稜)
	〃	SK334	3013	甕		1/3	I R	櫛簾→羽 内精製ミガキ
	〃	〃	3014	壺		1/4下		口内外精製ミガキ Ⅱ連弧文・刺突
	〃	〃	3015	壺		2/3		器面荒れ調整不明瞭
	〃	〃	3016	壺		1/2		口外チ内精製ミ 内彎志向 胴ミガキ
	〃	SK1333	3017	壺		3/4		胴ヨコハケ→ミガキ 記号 Ⅱ横走沈線＋櫛描波状文

写真PL	図版	遺構名	土器No.	器種	容量	残存率	施文手法	成形・調整・施文等　特記事項
	257	SK1349	3018	壺		2/3		Ⅱ押し出し凸帯　胴ミガキ
	〃	SK1519	3019	壺		2/3		胴ミガキ
	〃	SK1371	3020	甕		1/3		櫛波→羽
	258	SK1714	3021	壺		1/2		器面荒れ調整不明瞭
	〃	〃	3022	壺		完存		□内外　ハケ・ヨコナデ→ハケ残す荒いミガキ
	〃	〃	3023	壺		1/2		□内外ミガキ　Ⅱ押し出し凸帯(板ナデ)
	〃	〃	3024	壺		3/4		□内外ハケ残す荒いミガキ
	〃	〃	3025	壺		1/2		□外ナデ　内ミガキ　胴ハケ残すミガキ
	〃	〃	3026	壺		2/3		□内外　胴外　ミガキ
	〃	〃	3027	甕		3/4		□内外　胴外　ミガキ
	〃	〃	3028	壺		1/4		胴外ハケ　内外面に陰術
	〃	〃	3029	壺		1/2		胴横走沈線1本　赤彩ミガキ
	〃	〃	3030	甕		2/3	Ⅶ AR	櫛胴部波状文→頸部波状文
	〃	〃	3031	甕		2/3		胴コハケ→コの字重ね文
	〃	〃	3032	甕		2/3		外ナデ
	〃	SK1717	3033	甕		完		胴LR縄文→コの字重ね文　内精製ミガキ
	259	SD12A15	3034	甕		1/3	Ⅰ BR	胴内外ハケ
	〃	SD12G16	3035	甕		2/3		□外ナデ内ミガキ　胴外精製ミガキ
	〃	SD12L1	3036	壺		1/2		□外精製ミガキ　内ナデ　ヨコナデ→荒いミガキ
	〃	〃	3037	壺		1/2		胴外赤彩ミガキ
	〃	〃	3038	鉢		3/4		胴内外ハケ→ナデ
	〃	SD12L6	3039	壺		1/2		胴外ハケ→ミガキ
	〃	〃	3040	壺		1/3		Ⅴハケ→LR縄文→重菱形文　胴外淡い赤彩
	〃	〃	3041	壺		1/2		胴外ハケ
	〃	〃	3042	壺		1/3		胴外ハケ
	〃	〃	3043	壺		3/4		胴外赤彩ミガキ　内ナデ
	〃	〃	3044	壺		3/4		□内外ミガキ　Ⅱコビナデ回線有　Ⅲ鋸歯文下段ナデ
	〃	〃	3045	鉢		2/3		□突起二箇所　ひもしばり孔1箇所
	〃	〃	3046	鉢		2/3		胴赤彩ミガキ
	260	〃	3047	壺		3/4		胴外　注口部なし
	〃	〃	3048	壺		2/3		胴外　注口部なし
	〃	〃	3049	高杯		2/3		脚部凸帯剥離面有り
	〃	〃	3050	壺		1/2		胴外　赤彩ミガキ(良好)
	〃	SD12L16	3051	壺		2/3		Ⅰ・Ⅱ　櫛仮縄文
	〃	SD12L21	3052	壺		1/3		Ⅲ・Ⅳ　沈線→縄文→ミガキ
	〃	〃	3053	鉢		完存		赤彩ミガキ　やや粗製土器
	〃	〃	3054	鉢		1/4下		胴外頸部のみミガキ　内ヨコミガキ
	〃	〃	3055	高杯		2/3		外ナデ　内ヨコハケ
	〃	〃	3056	壺		1/3		□外ナデ　内ミガキ
	〃	〃	3057	壺		3/4		□内外ヨコナデ　胴ミガキ
	〃	〃	3058	壺		2/3		胴外ミガキ
	〃	〃	3059	壺		2/3		胴外ミガキ　隆帯1箇所
	〃	〃	3060	壺		2/3		胴外ミガキ
	〃	〃	3061	甕		1/3	Ⅰ BR	□ヨコナデ　内のみミガキ　胴内ハケ
	261	〃	3062	甕		1/3	Ⅰ BR	器面荒れ調整不明瞭
	〃	SD12Q1	3063	壺		2/3		胴外ヨコハケ
	〃	〃	3064	甕		1/4	Ⅰ R	内　精製ミガキ
	〃	〃	3065	甕		3/4	Ⅰ L	櫛　羽状文7単位　頸部波状文　左回り
	〃	〃	3066	甕		1/3	Ⅰ BR	胴内　精製ミガキ
	〃	SD12Q6	3067	壺		1/4		胴外　精製ミガキ
	〃	〃	3068	壺		2/3		胴外　赤彩ミガキ
	〃	〃	3069	壺		2/3		□内外ミガキ
	〃	〃	3070	壺		3/4		□外　ハケ→ヨコナデ→軽いミガキ　突起4箇所
	〃	〃	3071	有孔鉢		1/2		胴内外　ミガキ
	262	SD12Q11	3072	壺		1/3		□外ハケ　内精製ミガキ
	〃	〃	3073	壺		1/2		胴外　精製ミガキ
	〃	〃	3074	壺		2/3		胴外　精製ミガキ
	〃	〃	3075	壺		1/2		胴外　ハケ
	〃	〃	3076	壺		完存		□外ナデ・ケ→ヨコナデ　内ヨコナデ
	〃	〃	3077	壺		完存		□外ナデ→ヨコナデ　内ヨコナデ→ミガキ
	〃	〃	3078	壺		1/4		脚　横下文櫛1条
	〃	〃	3079	甕		完存		胴外　精製タテミガキ　内精製ヨコミガキ
	〃	〃	3080	有孔鉢		1/2		胴内外精製ミガキ
	〃	〃	3081	甕		1/4下	Ⅰ R	□ヨコナデ・刺突　胴内精製ミガキ
	〃	SD12Q16	3082	壺		1/4		胴外精製ミガキ
	〃	〃	3083	壺		1/4		Ⅲ波状沈線文帯部分のみ　LR縄文
	〃	〃	3084	高杯		1/2		内外赤彩ミガキ
	〃	〃	3085	高杯		完		□突起5箇所
	〃	〃	3086	鉢		1/4		胴内外精製ミガキ
70	263	SD100	3087	壺		2/3		胴上位ハケ→ナデ　下位ハケ→荒いヨコミガキ　Ⅳ変形工字文5単位
〃	〃	〃	3088	壺		1/3		□内外　胴外精製ミガキ　Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ縄文→沈線文

写真PL	図版	遺構名	土器No.	器種	容量	残存率	施文手法	成形・調整・施文等　特記事項
70	263	SD100	3089	壺		1/4		Ⅲ～Ⅴハケ→縄文→沈線文 櫛描文→ミガキ
〃	〃	〃	3090	壺		1/4		□外ハケ内ミガキ Ⅲ斜行沈線区画内を櫛と沈線で交互施文
〃	〃	〃	3091	甕		1/3	ⅠR	櫛 羽状文構成に斜線文 □外ハケ→ヨコナデ 内ミガキ 胴内ハケ
〃	SD1215	3092	甕			1/4下	ⅠR	胴内ミガキ
〃	SD1305	3093	壺			1/2		□内外ミガキ Ⅱ櫛描波状文
〃	〃	3094	壺			3/4		Ⅱ 2本組波状沈線文を2回重ねる
264	SD1027	3095	壺			3/4		□内外 胴外ハケ→ナデ □刺突
〃	〃	3096	壺			完存		Ⅱ 横走沈線→刺突
〃	〃	3097	壺			2/3		□内外ミガキ Ⅱ縄文・横走沈線
〃	〃	3098	甕			1/4下	ⅠR	器面荒れ調整不明瞭
〃	SD1083	3099	壺			2/3		□内外ミガキ Ⅱ横走沈線・波状沈線文・櫛描直線文
〃	〃	3100	壺			2/3		器面荒れ調整不明瞭
〃	〃	3101	壺			3/4		器面荒れ調整不明瞭
〃	〃	3102	壺			2/3		□内外ミガキ Ⅱ横走沈線文・櫛描直線文
〃	〃	3103	鉢			1/4		内外赤彩ミガキ
〃	SK343	3104	壺			1/3		外種帯一箇所
〃	〃	3105	壺			2/3		Ⅱ刺突
〃	〃	3106	鉢			1/4下		内外赤彩ミガキ
〃	〃	3107	甕			1/2	ⅠBR	□縄文→刺突 櫛羽→鋸
〃	〃	3108	甕			1/2	ⅠBR	□2本沈線
265	遺構外	3109	壺			1/2		□外ヨコナデ 内ミガキ胴ミガキ
〃	〃	3110	壺			1/3		□外ハケ→ミガキ 内ミガキ胴ミガキ
〃	〃	3111	壺			3/4		Ⅱ連孤文6単位左回り施文 □外ナデ内ミガキ
〃	〃	3112	壺			1/3		Ⅱ連孤文
〃	〃	3113	壺			2/3		胴外ミガキ
〃	〃	3114	高杯			1/2		充填技法
〃	〃	3115	高杯			1/2		脚 ヘラ描き鋸歯文・精製ミガキ赤彩
〃	〃	3116	高杯			完		杯内面無彩ミガキ 内突起2箇所穿孔
〃	〃	3117	無頸壺			1/2		外精製ミガキ赤彩 内ナデ
〃	〃	3118	鉢			2/3		底部ミガキ無彩 突起4箇所か
〃	〃	3119	鉢			1/3		鍔状部昌曲面稜なし
〃	〃	3120	鉢			2/3		内外赤彩ミガキ
〃	〃	3121	甕			2/3		胴外ハケ→荒いミガキ 内ミガキ □刺突
〃	〃	3122	甕			3/4	VMAR	櫛浮文6ブロック □ゆるやかな受口
〃	〃	3123	甕			完	VMAR	櫛波状文8ブロック □ゆるやかな受口
〃	〃	3124	甕			1/2	ⅡR	櫛 羽→鋸 胴内ミガキ
〃	〃	3125	甕			1/4下		内ミガキ
〃	〃	3126	甕			3/4		櫛 羽状文6単位 胴外荒いハケミガキ 内ハケ
266	SB71	3127	高杯			3/4		(弥・後期)杯部底部面に斜離有り 充填技法
〃	〃	3128	高杯			3/4		(弥・後期)脚内部ヨコハケ 充填痕跡ナデ消し
〃	〃	3129	高杯			2/3		(弥・後期)脚内部ヨコハケ→ナデ 充填痕跡ナデ消し
〃	〃	3130	鉢			1/3		(弥・後期)内外 赤彩ヨコミガキ
〃	〃	3131	鉢			1/3		(弥・後期)内外 赤彩ヨコミガキ
〃	〃	3132	深鉢			1/3		(弥・後期)胴内 ナデ
〃	〃	3133	壺			1/4		(弥・後期)内外 赤彩ミガキ
〃	〃	3134	甕			完存		(弥・後期)台付甕脚内外 精製ミガキ
〃	遺構外	3135	高杯			2/3		(弥・後期)脚内部 充填痕跡ナデ消し 杯内面煤付着
〃	SD101	3136	壺			1/2		(弥・後期)
〃	〃	3137	壺					(弥・後期)
267	SD102	3138	壺			1/3		(弥・後期)内外赤彩ミガキ
〃	〃	3139	甕			1/4下		(弥・後期)外波状文(頸部筆状文なし)内ミガキ
〃	〃	3140	甕			1/4下		(古・前期)口外ヨコナデ→ナデ内ヨコハケ
〃	〃	3141	甕			1/3		(古・前期)口外ヨコナデ→内ヨコハケ 胴外煤付着ケズリ→ナデ 内ナデ
〃	〃	3142	甕			完存		(古・前期)内外ナデ 同部完存 底部打ち欠きか
〃	〃	3143	甕			1/4下		(古・前期)器面荒れ調整不明瞭 口縁端部面とり
〃	〃	3144	甕			1/4下		(古・前期)口外ヨコナデ内ヨコナデ→ナデ 胴内外ナデ
〃	〃	3145	甕			1/4下		(古・前期)口内外ハケ→ヨコナデ
〃	〃	3146	甕			1/4下		(古・前期)口外ヨコナデ 内ヨコハケ→ナデ 胴外ハケ内ケズリ
〃	〃	3147	甕			1/4下		(古・前期)口外ヨコナデ→ケテハケ 内ヨコハケ 胴外ナデ内ケズリナデ
〃	〃	3148	甕			1/4		(古・前期)口外ヨコナデ 内精製ミガキ
〃	〃	3149	甕			1/4下		(古・前期)口内外ハケ→ヨコナデ
〃	〃	3150	甕			1/4下		(古・前期)口外ナデ 内ミガキ
〃	〃	3151	甕			1/2		(古・前期)口外ヨコナデ内ミガキ 胴内外ヨコハケ
〃	〃	3152	甕			1/4下		(古・前期)胴内外ハケ
〃	〃	3153	甕			1/3		(古・前期)口胴外ハケ 内ミガキ 口端部ヨコナデ
268	〃	3154	壺			1/4下		(古・前期)二重口縁壺 内外ケテミガキ 端部面とり つまみあげ
〃	〃	3155	壺			1/4下		(古・前期)二重口縁壺 外ヨコナデ 内ミガキ 端部面取り
〃	〃	3156	壺			1/4下		(古・前期)二重口縁壺 外ミガキ 内ナデ
〃	〃	3157	壺			1/4下		(古・前期)二重口縁壺 内外ケテミガキ
〃	〃	3158	壺			1/2		(古・前期)直口縁壺 □外ケテハケ 内ヨコハケ→ヨコミガキ
〃	〃	3159	壺			1/4下		(古・前期)直口壺 内外ミガキ

写真PL	図版	遺構名	土器No.	器種	容量	残存率	施文手法	成形・調整・施文等　特記事項
	268	SD102	3160	壺		1/4下		(古・前期)直口壺　内ナデ 外 精製ミガキ
	〃	〃	3161	壺		1/2		(古・前期)直口壺　外 精製ミガキ　内ナデ
	〃	〃	3162	壺		1/4下		(古・前期)直口鉢壺　器面荒れ調整不明瞭　端部面取り
	〃	〃	3163	壺		1/4下		(古・前期)直口壺　内外ナデ
	〃	〃	3164	壺		2/3		(古・前期)直口壺　外ナデ 内ハケ→ナデ
	〃	〃	3165	壺		1/4下		(古・前期)直口壺　底部線刻有り　内外ナデ
	〃	〃	3166	壺		2/3		(古・前期)外ミガキ　内ナデ
	〃	〃	3167	鉢		1/4下		(古・前期)小型丸底鉢　器面荒れ調整不明瞭　端部ヨコナデ
	〃	〃	3168	鉢		1/4		(古・前期)小型丸底鉢　内外器面荒れ調整不明瞭
	〃	〃	3169	鉢		1/4下		(古・前期)小型丸底鉢　内外ミガキ
	〃	〃	3170	器台		2/3		(古・前期)小型器台　内外ミガキ
	〃	〃	3171	高杯		完存		(古・前期)脚折脚高杯　脚外 精製ミガキ内ナデ　輪積み成形でない
	〃	〃	3172	高杯		完存		(古・前期)脚折脚高杯　脚外ミガキ内ナデ　輪積み成形でない　付加技法
	〃	〃	3173	高杯		1/4		(古・前期)脚折脚高杯　内外精製ミガキ　付加技法で光沢
	〃	〃	3174	甕		1/3		(古・前期)S字状口縁台付甕　脚外ケズリ→ハケ　内ナデ
	〃	〃	3175	甕		1/4下		(古・前期)S字状口縁台付甕　内外ナデ
	〃	〃	3176	甕		1/2		(古・前期)内外ケズリ→ナデ
	〃	〃	3177	甕		完		(古・前期)脚外ハケ
	〃	〃	3178	赤彩鉢		完		(弥・後期)内ナデ　外赤彩ミガキ
	〃	〃	3179	甕		2/3		(古・前期)外タテハケ　内ナデ
	〃	〃	3180	甕		1/4下		(古・前期)内外ナデ
	269	SK166	3181	壺				(古・前期)
	〃	遺構外	3182	壺		2/3		(古・前期)二重口縁壺　内外ヨコミガキ
	〃	〃	3183	壺		1/4下		(古・前期)二重口縁壺　内外ミガキ
	〃	〃	3184	壺		1/3		(古・前期)内外ナデ
	〃	〃	3185	壺		2/3		(古・前期)直口壺　外タテハケ→タテミガキ　内ヨコハケ→ナデ
	〃	〃	3186	鉢		1/4下		(古・前期)小型丸底鉢　内外ヨコナデ→ナデ
	〃	〃	3187	壺		1/4下		(古・前期)外ヨコナデ 内ヨコミガキ
	〃	〃	3188	鉢		1/4		(古・前期)小型丸底鉢　内外精製ミガキ
	〃	〃	3189	鉢		1/4下		(古・前期)小型丸底鉢　内外ナデ　体部外面タテハケ残る
	〃	〃	3190	高杯		2/3		(古・前期)脚折脚高杯　器面荒れ調整不明瞭　器壁薄い
	〃	〃	3191	器台		1/4下		(古・前期)小型器台　外赤彩
	〃	〃	3192	甕				(古・前期)
	〃	〃	3193	鉢		完		(古・前期)外ハケ・ミガキ　内精製ミガキ
	〃	〃	3194	鉢		完存		(古・前期)外ハケ内ナデ　外面煤付着
	〃	〃	3195	壺		2/3		(古・前期)外ハケ内ヨコハケ
	〃	〃	3196	壺		完		(古・前期)外ケズリ内ナデ
	〃	〃	3197	甕		1/3		(古・前期)内外ミガキ



第26図　様相1　SB260出土土器群

第3節　加工円盤・小型土器・土製品

1　土器片加工円盤

(1)　形態と出土遺構

土器片を再加工して円盤を作る土器片加工円盤（第27図）は、孔を穿つことのない加工円盤（第27図，SB263－2）と、中央に孔を穿つ有孔加工円盤（第27図，SB271－1）に分れる。松原遺跡弥生中期集落面では土器片加工円盤が461個体以上出土し、その数が多いことが特記される。加工円盤および有孔加工円盤には様々な状態が認められるが、ここでは便宜的に3類型に分類する。

A類．土器片を円盤状に加工し、中央部を穿孔するもの。この穿孔は両面穿孔が多い。

（第27図，SB271－1）［有孔加工円盤］

B類．土器片を円盤状に加工し、片面の中央部に穿孔を行うが途中で停止し、孔が貫通しないもの。

（第27図，SB260－7）

C類．土器片を円盤状に加工し、中央部に穿孔を行わないもの。

（第27図，SB263－2）［加工円盤］

松原遺跡出土の土器片加工円盤をA～C類に分類した。このうち穿孔を行う有孔加工円盤は70％を占め、穿孔を行わない加工円盤は14％となり、有孔加工円盤がその主体を占めていた。このことは、土器片加工円盤の機能として、中央の円孔が重要な役目をはたしていることが理解される。

次に土器片加工円盤の出土遺構を提示する。松原遺跡出土の土器片加工円盤は461個体以上で、出土遺構は下記の通りである。このうち旧河道、包含層については、未整理のコンテナがあることから、総数は増加するものと思われる。

	竪穴住居	土壙	溝	旧河道	包含層
A類	130	7	28	64	100
B類	38	2	9	11	14
C類	34	13	5	2	4
計	202	22	42	77	118個体

(2)　円盤の加工調整

土器片加工円盤の製作から使用、廃棄に至る経過は詳細な観察によって復元される。当報告では、充分な観察が実施できていないが、円盤製作について若干ふれておく。円盤の加工は荒割り → 周縁加工 → 周縁研磨という順で調整されていくと想定される。よって、土器片から加工する際、側面の加工および調整が問題となる。この部位に注目してその形状について類型分けを行う。

a．形状を調整するための周縁加工が行われ、円盤の形状をとるもので、側面の研磨調整を行っていないもの。円形、不整円形、方形等がある。（第27図，SB268－1）

b．形状および周縁加工はaと同様であるが、側面の一部に研磨調整を行っているもの。やや不整形のものがめだつ。（第27図，SB260－5）

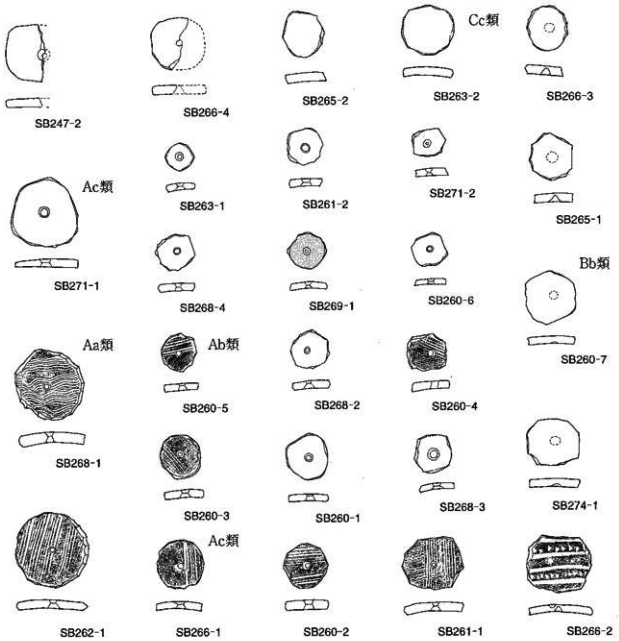
c．周縁加工調整後、側面全体に丁寧な研磨調整を行っているもの。（第27図，SB266－1）

竪穴住居址出土の土器片加工円盤は総数202個体である。そのうちa43％、b22％、c35％となり、cが

予想外に低く、ａが高いという数値となった。ａ，ｂには未整品も含まれていることと思われるが、土器片加工円盤がその用途として必ずしもｃのように全面研磨調整を行わなくとも機能したことを物語っているとは言えまいか。

Ａ～Ｃの形態と、円盤の破損との相関について考えてみたい。Ａ～Ｃ類における破損品の割合はＡ類で33%、Ｂ類で９%、Ｃ類で３%となり、穿孔に関連して破損品が多いことが理解される。また有孔加工円盤の側面調整ではａ～ｃ類がみられ、側面全体を調整するｃ類が必ずしも高くないことが明らかとなった。これらのことから、松原遺跡では土器片加工円盤が多量に製作され、土器片加工円盤を用いた手工業生産が行われたことを物語っている。

有孔加工円盤の用途については議論が必要なところであるが、ここでは繊維質の加工に伴う用具と想定し、松原遺跡内において繊維生産に関連する手工業生産が、各竪穴単位で行われたであろうことを予察しておきたい。

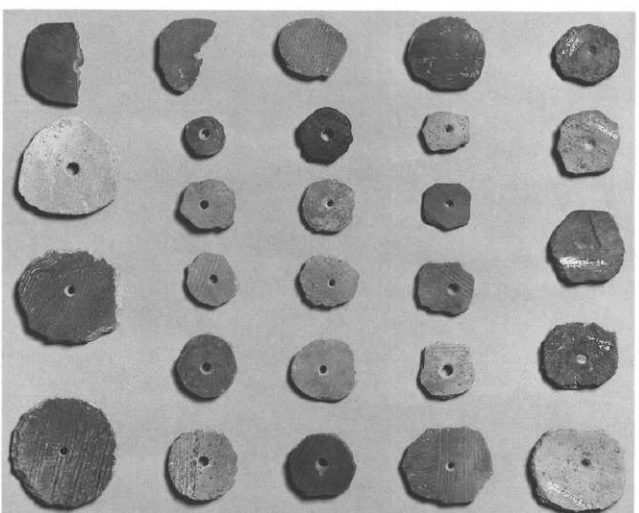


第27図　土器片加工円盤実測図（Ｓ＝1/3）

遺構名	径	重量	型式	器種・状態
SB246	4.6	13.41	△A	壺・羽状文
SB247	4.0	14.28	○B	壺・ミガキ
SB247	不明	13.06	△A	壺胴下半・ミガキ
SB269	3.7	9.44	○A	壺体部下半・ミガキ
SB260	3.4	12.83	○A	壺体部・羽状文
SB259	3.4	10.94	○A	壺体部・羽状文
SB260	3.2	6.67	○A	壺・羽状文
SB260	3.0	5.59	○A	壺・羽状文
SB260	2.7	3.42	○A	壺体部下半・ミガキ
SB260	4.1	13.51	○B	壺胴下半・ミガキ
SB261	5.3	16.70	○A	壺体部・波状文、重下
SB261	2.8	6.55	○A	壺体部下半・ミガキ
SB262	5.9	33.14	○A	壺体部・羽状文
SB263	2.3	3.41	○A	壺体部下半・ミガキ
SB263	4.2	15.01	○C	壺・ミガキ
SB264	2.8	6.22	○B	壺・ミガキ
SB264	(6.5)	23.08	△A	壺・羽状文
SB265	3.8	11.60	○B	壺・羽状文
SB265	3.6	10.19	○C	壺・羽状文
SB265	1.9	1.70	△A	壺・ナデ
SB265	不明	4.79	△A	壺胴下半・ミガキ
SB266	3.8	10.40	○A	壺・ミガキ・クシ
SB266	5.1	18.61	○B	壺・沈線文
SB266	3.6	9.95	○B	壺・ミガキ
SB266	4.1	8.99	△A	壺・ミガキ
SB268	5.5	30.30	○A	壺体部・波状文

遺構名	径	重量	型式	器種・状態
SB268	3.1	7.49	○A	壺体部・ミガキ
SB268	3.1	6.96	○A	壺・ミガキ・クシ
SB268	3.1	8.13	○A	壺・ミガキ
SB269	3.1	5.82	○A	鉢か高杯・赤彩
SB271	5.5	21.20	○A	壺体部下半・ミガキ
SB271	2.6	4.84	○A	壺体部・ミガキ
SB271	5.8	9.43	△A	壺・ミガキ
SB273	4.2	13.53	○A	壺体部・波状文
SB273	4.8	19.43	○B	壺・ミガキ
SB273	2.6	3.92	○B	壺胴下半・ミガキ
SB274	6.0	33.10	○A	壺体部・ミガキ
SB274	5.1	21.72	○A	壺体部・ミガキ
SB274	4.8	14.67	○A	壺体部下半・ミガキ
SB274	4.1	16.70	○A	壺体部・沈線文、鳳文
SB274	4.0	13.86	○A	壺体部・沈線文
SB274	3.0	8.03	○A	鉢、高杯杯部・赤彩
SB274	2.5	4.70	○A	壺・ハケ
SB274	2.7	5.51	○B	壺・ミガキ
SB274	5.2	47.26	○C	壺底部・ナデ
SB274	4.6	16.13	○C	壺・羽状文
SB274	3.8	13.39	○C	壺・羽状文
SB274	3.4	8.76	○C	壺・ミガキ
SB274	3.4	9.20	○C	壺胴下半・ミガキ
SB274	6.8	19.56	△A	高杯・赤彩
SB274	3.8	8.75	△A	壺・沈線文
SB274	5.1	21.63	○C	壺・多段横帯文

第53表　住居址出土土器片加工円盤一覧（1）



土器片加工円盤

遺構名	径	重量	型式	器種・状態
SB281	5.4	11.37	△A	壺・ミガキ
SB281	(5.2)	7.47	△B	焼剥下半・ミガキ
SB281	5.2	7.34	○A	高杯か鉢・赤彩
SB282	4.2	16.77	○B	焼剥下半・ミガキ
SB283	3.8	11.42	○A	壺・ナデ
SB283	3.1	4.67	△A	焼剥下半・ミガキ
SB283	3.2	3.86	△A	壺・ナデ
SB284	2.1	3.93	○A	鉢、高杯杯部・赤彩
SB284	3.2	8.44	○C	壺・ハケ
SB285	3.7	6.15	＜A	壺・ナデ
SB286	3.6	11.39	○A	甕・ハケ
SB287	4.7	15.30	○A	壺・羽状文
SB287	3.5	10.09	○A	鉢か高杯・赤彩
SB287	4.1	17.25	○C	壺・ハケ（狭い赤彩）
SB287	3.2	8.83	○B	壺・ハケ
SB287	不明	8.45	△A	壺・羽状文
SB306	(5.1)	8.99	△A	壺・羽状文
SB308	(4.3)	3.62	△A	甕・ナデ
SB310	5.5	26.53	○A	壺、鼎下半・ハケ
SB315	4.4	17.33	○A	壺・羽状文
SB318	9.7	67.00	△C	壺・羽状文
SB319	5.2	24.06	○C	壺・羽状文
SB319	3.7	10.57	○C	壺・ミガキ
SB319	(7.9)	27.93	△A	壺・沈線
SB319	4.5	9.27	△A	壺・羽状文
SB319		14.42	△	壺・羽状文
SB320	4.1	13.30	○A	壺・羽状文
SB324	3.9	11.40	○A	壺・羽状文
SB324	4.1	14.84	○A	壺・波状文＋乗り文
SB325	4.0	13.50	○B	壺・ミガキ
SB325	4.1	9.66	○A	壺・波状文
SB332	3.0	6.93	○A	鉢か高杯・赤彩
SB332	(3.9)	8.40	△B	壺・羽状文
SB332	3.3	5.86	△A	壺・櫛直線文
SB354	3.8	11.55	○A	壺・波状文
SB355	3.0	10.27	○B	壺・ミガキ
SB356	3.6	11.90	○C	壺・ミガキ
SB356	3.2	8.89	○C	壺・ミガキ
SB363	4.0	12.22	○A	赤彩壺・赤彩
SB368	4.6	16.08	○A	壺・ナデ
SB368	3.9	9.56	○A	壺・羽状文
SB368	4.6	20.84	○C	壺・羽状↓羽状文
SB368	3.4	4.40	△A	壺・ハケ
SB369	5.0	16.95	○C	壺剥下半・ミガキ
SB384	4.3	16.45	○A	壺剥部・櫛直沈線
SB384	4.5	12.74	○C	壺・ハケ
SB384	4.0	11.39	○C	壺・ミガキ
SB384	2.5	4.35	○C	壺・羽状文
SB384	4.4	8.08	△A	壺・ハケ
SB384	(4.5)	9.27	△A	焼剥下半・ミガキ
SB402	3.1	7.21	○A	鉢か高杯・赤彩
SB403	4.4	10.03	△A	壺・ハケ
SB404	3.8	8.01	△A	壺・羽状文
SB405	9.5	142.96	○A	焼酒器
SB405	4.4	16.18	○A	鉢か高杯・赤彩
SB405	4.1	14.60	○A	鉢か高杯・赤彩
SB405	3.4	8.73	○A	壺剥部・ミガキ
SB405	3.1	8.67	○C	鉢か高杯・赤彩
SB405	6.0	30.05	○A	壺・ミガキ
SB405	5.6	35.24	○A	壺底部・ナデ
SB405	4.5	17.99	○A	壺・波状文
SB405	3.5	12.32	○A	壺・ミガキ
SB405	4.2	12.92	○B	壺・ミガキ
SB405	4.2	11.13	○B	鉢・赤彩
SB405	4.4	18.28	○B	壺・波状文
SB405	3.9	16.81	○B	壺・沈線文
SB405	3.4	11.09	○B	剥了半・ミガキ
SB409	3.7	5.84	△A	壺・波状文
SB409	4.8	13.82	△	鉢賀・ナデ
SB409	4.1	19.04	○B	壺・羽状文
SB414	16.0	142.22	△A	甕
SB414	4.9	20.81	○C	壺・羽状文
SB423	3.8	12.45	○A	壺剥部・ミガキ
SB423	3.4	8.80	○B	壺・ミガキ
SB423	2.7	5.64	○C	壺・直線文（クシ）
SB423		9.09	△A	焼剥下半・ミガキ

遺構名	径	重量	型式	器種・状態
SB426	3.5	11.15	○C	壺・ハケ
SB426	6.6	39.48	○A	壺・ミガキ
SB426	4.5	15.01	○A	甕・ミガキ
SB426	3.9	13.64	○A	壺・沈線、クシ
SB426	2.9	7.75	○A	甕・ミガキ
SB426	2.9	8.16	○A	壺（？）・ミガキ
SB426	2.9	6.38	○A	甕・波状文
SB426	4.3	12.09	○B	壺・ミガキ
SB1102	3.4	6.96	○B	壺・櫛直沈線
SB1102	5.2	17.97	○A	壺・ナデ
SB1102	3.6	13.14	○A	甕・ミガキ
SB1103	3.6	8.30	○B	壺・ミガキ
SB1103	4.3	11.98	＜B	壺・櫛直線文
SB1103	(6.5)	16.53	△A	甕・ミガキ
SB1103	3.2	3.96	△A	壺・ミガキ
SB1104	3.0	4.86	○A	焼剥部・羽状文
SB1104	4.7	17.74	○B	赤彩壺・赤彩
SB1104	4.3	13.35	○C	壺・羽状文
SB1104	4.2	14.34	△B	甕・ハケ
SB1104	3.0	9.67	＜A	壺・羽状文
SB1104	4.6	14.30	○A	焼剥下半・ミガキ
SB1111	4.3	11.92	○A	壺・ミガキ
SB1115	5.0	22.47	○A	甕・ナデ
SB1121	3.9	10.62	○B	壺・ミガキ
SB1122	3.7	6.43	△A	壺・ミガキ
SB1123	4.0	13.64	○A	壺・ナデ
SB1123	5.3	24.88	○C	壺・羽状文
SB1123	3.6	12.52	○C	壺・羽状文
SB1125	4.8	21.17	○A	壺・沈線文
SB1125	2.3	3.12	○A	
SB1127	4.3	13.52	○A	壺・ミガキ
SB1127	4.1	13.85	○B	壺・ミガキ
SB1136	3.9	12.74	○A	甕・ミガキ
SB1136	2.5	2.43	△A	壺・ミガキ
SB1138	3.7	7.94	△A	剥了半・ミガキ
SB1138	4.7	17.61	○A	壺剥部・ハケ→ミガキ
SB1139	2.8	5.01	○B	ハケ
SB1139	3.8	12.64	○A	壺・ミガキ
SB1139	5.3	12.66	△A	壺・ミガキ
SB1141	4.0	11.87	○A	壺・ハケ
SB1141	4.2	14.66	○A	壺・ミガキ
SB1141	2.2	3.24	○A	甕・ミガキ
SB1141	3.8	10.71	○B	壺・羽状文
SB1141	5.7	13.67	△A	甕・ミガキ
SB1142	4.1	11.70	○B	焼剥下半・ミガキ
SB1142	(5.4)	10.52	△A	壺・ナデ
SB1143	7.2	35.58	○C	壺・羽状文
SB1144	4.5	19.42	○A	鉢・ハケ
SB1144	5.2	19.52	○B	甕・ミガキ
SB1144	5.2	24.97	○C	壺・ハケ
SB1144	3.7	12.84	○B	甕・ミガキ
SB1144	3.3	7.87	○C	壺・ミガキ
SB1144	4.2	6.42	＜A	壺・ミガキ
SB1145	3.2	8.81	○A	壺・沈線
SB1146	5.7	12.45	△A	焼剥下半・ミガキ
SB1147	4.1	13.50	○A	壺・波状文
SB1155	5.5	17.81	○C	壺剥最大径・ミガキ
SB1155	4.7	16.10	○C	
SB1161	4.0	11.35	○B	壺・ミガキ
SB1161	3.7	5.96	△A	壺・ナデ
SB1161	3.7	6.64	△A	壺・ナデ
SB1178	3.3	10.66	○A	壺・ナデ
SB1178	6.1	22.73	○C	壺・ミガキ
SB1183	4.0	14.79	○C	壺・ミガキ
SB1247	4.3	11.76	○B	壺・波状文
SB1250	4.0	14.75	○A	壺・ナデ
SB1250	3.4	10.47	○A	壺・？
SB1263	3.9	10.35	○A	壺・ハケ
SB1282	4.9	19.39	○A	壺・櫛文、沈線
SB1282	5.4	20.63	○B	甕・ミガキ
SB1296	(3.4)	7.22	○A	壺・ミガキ
SB1301	(5.1)	12.64	△A	壺・ミガキ
SB1301	(3.5)	4.17	△A	甕・沈線
SB1306	4.0	11.64	○A	壺・ミガキ
SB1308	5.4	34.14	○A	ナデ
SB1311	(3.6)	5.67	△A	焼・羽状文

第54表　住居址出土土器片加工円盤一覧（2）

※型式は、○が完形△が破損を示す
A～Cは頻度（本文中）

2　小型土器

ミニチュア土器、手づくね土器と分類されるものを小型土器として一括した。いずれも製作者がイメージする器種が存在するもので、通常の用途と異なる大きさ、形状である。形式によって範型となる器種が不明確なものもある。

第28～29図に松原遺跡出土のすべての小型土器を提示した。出土遺構は第55表に示したが、主に竪穴住居址埋土内より出土し、土壙、包含層、旧河道よりも出土している。

1～26は、範型として壺が想定される。20，23を除き、頸部を有する壺が範型となっており、その形状から細頸壺がモデルになっているものが多い。1～3，5～7，15～16は文様帯表現をもつ小型土器である。いずれも手づくね後ナデ調整される。1，3はⅡ文様帯のみの施文、2はⅡ～Ⅲ文様帯を施文する多段横帯文系、5は懸垂文をもつ文様構成をとる。これらのように、壺の文様は、小型土器の文様構成においてもバラエティーが看取され、文様構成に一定の意図があったことが窺える。17～20は手づくねで筒状を呈し、20以外は頸部の表現が認められる。しかしながら、壺型土器に同様な形状はない。21，22は注口土器である。注口土器が小型土器の範型となっていることは、その機能について予察することができよう。22～26は精製土器で、1～21の手づくね系とは異なる。

27～35は範型として甕が想定される。33～35は台付甕とも高杯ともとれる形状であるが、これらが台付甕であるとすれば、甕を範型とする小型土器では台付甕が重視されていることが想定されよう。30はコの字重ね文をもつ台付甕を範型としており特記される。コの字重ね甕および小型台付甕の機能を想定する上でも甕の小型土器は重要であろう。

36～56は主に範型として高杯が想定される。36～41のように杯部の器高が脚部の器高をはるかに凌ぐ形状は中期高杯をモデルにしていることが理解される。36，37は鍔状口縁高杯を、他は椀型口縁高杯であろう。42の脚部に認められる凸帯も中期の高杯ではしばしば認められる。53～54は小型のミニチュア土器である。

57～62は鉢を範型としているものと思われるが、61～62は鉢の形式とやや異なることから土器以外の木製品等に範型があるのかもしれない。

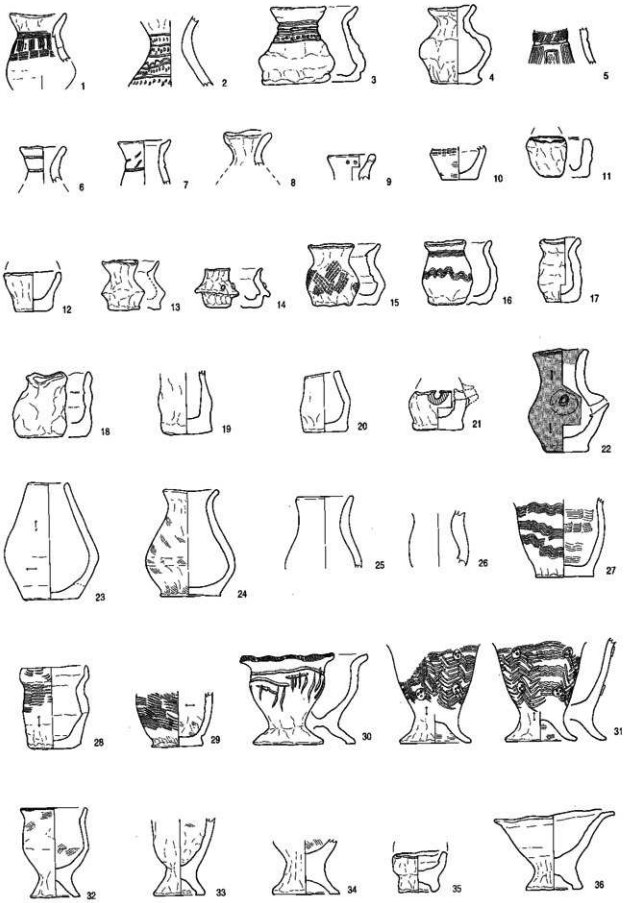
小型土器は非日常具であると想定されるが、通常サイズの土器が範型となっていることが多く、土器の用途および文様の背景を考える際重要であろう。

番号	遺構名	範型	調　整　等
1	SB360	壺	櫛垂下文，荒いミガキ有
2	SB1118	壺	押し引き列点文，沈線文
3	SK148	壺	沈線文・ナデ
4	SK148	壺	タテハケ→ナデ
5	SK159	壺	縄文，懸垂文
6	SB1263	壺	ナデ・沈線文
7	SK1793	壺	ナデ・沈線文
8	SB1306	壺	手づくね→ナデ
9	SB1123	壺	ナデ・孔対面状二箇所
10	SB1296	壺	ナデ・胴部櫛簾状文
11	SD102(E11)	壺	手づくね→ナデ(上部欠損)
12	SD100	壺	手づくね→ナデ
13	SB1160	壺	手づくね→ナデ
14	SB1280	壺	手づくね・胴部浮文3
15	SD100(IG)	壺	手づくね→ナデ・擬似縄文
16	SD100(IG)	壺	ナデ・櫛描波文，波状文
17	SB1282	壺	手づくね→ナデ
18	SB1125	壺	手づくね→ナデ・歪み大
19	SB409	壺	手づくね→ナデ
20	SB1282	壺	ナデ
21	SD100(IG)	壺	ナデ
22	SD102	壺	赤彩精製ミガキ

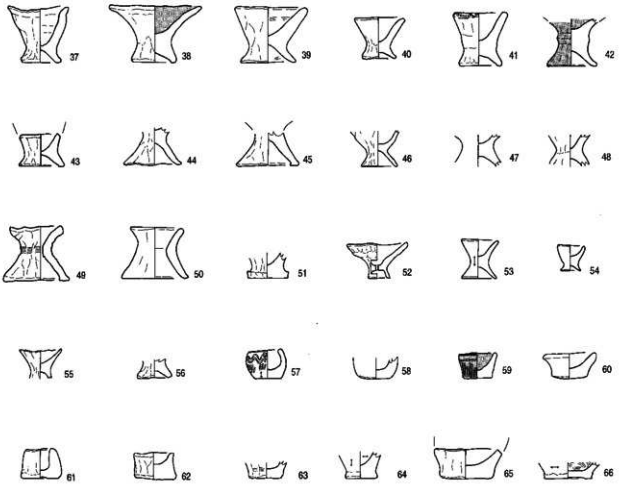
番号	遺構名	範型	調　整　等
23	SB1155	壺	精製ミガキ・精製土器(完存)
24	SB1155	壺	ナデ・精製土器(完存)
25	SB1112	壺	ナデ→ミガキ(？)精製土器
26	SB1283	壺	ナデ
27	SB1293	甕	外櫛描文・内ハケ→ナデ
28	SK163	甕	外羽状文？・ミガキ(受口甕)
29	SK353	甕	外櫛斜線文・内ナデ
30	SB1113	甕	外コの字重ね文・内ハケ
31	SB1311	甕	外櫛描文・内精製ミガキ
32	SB1306	甕	ナデ・口縁端部縄文施文
33	SB1112	甕・高杯？	ナデ
34	SB1306	甕・高杯？	ナデ
35	SD12	甕？	手づくね→ナデ
36	SK1963	高杯	ナデ
37	SD100	甕・高杯？	手づくね→ナデ
38	SB1143	高杯	ナデ・杯内面赤彩
39	SD12	高杯	ハケ→ナデ
40	SD100(IG)	高杯	手づくね→ナデ
41	SK131	高杯	ナデ・ミガキ
42	SD12	高杯	ナデ・隆帯有
43	SD101	高杯	手づくね→ナデ
44	SD101(E13)	高杯	ナデ

番号	遺構名	範型	調　整　等
45	SK1966	高杯	ナデ
46	SB1110	高杯	手づくね
47	SK1895	高杯	外ナデ・内精製ミガキ
48	SB1113	高杯	手づくね→ナデ
49	SB1282	高杯	手づくね→ナデ・簾状文
50	SB1290	高杯	ナデ
51	SB1176	鉢	手づくね→ナデ
52	SB1282	高杯	手づくね
53	SD100	高杯	内ナデ，外精製ミガキ
54	SB370	高杯	手づくね→ミガキ
55	SB1176	高杯	手づくね
56	SD100	高杯	手づくね→ナデ
57	包含層	鉢	手づくね・櫛波状文
58	SB1124	鉢	手づくね
59	SK127	鉢	手づくね・沈線文
60	SB1285	鉢	手づくね
61	SK1400	鉢	手づくね→ナデ
62	SB1123	鉢	手づくね
63	SD1103	鉢	ナデ
64	SD100	甕？	内外精製ミガキ
65	SK1952	鉢？	ナデ
66	SB1290	甕？	ナデ

第55表　小型土器観察表



第28図　小型土器 (1)　　(S＝1/3)



第29図　小型土器 (2)　　(S＝1/3)

3　土製品

第30図67～77に土製品を提示した。67～68は用途不明の土製品で、匙型土製品における柄のような形状を呈するが、先が二股に別れており、同部で欠損している。全体の形状が明らかでないが松原遺跡では同様な土製品が2点出土した。柄のような基部は扁平で、横位から穿孔が施されている。全体はナデ調整で粗製品である。67がSB1142、68がSB1176から出土した。

69～71は、土製勾玉あるいは腕輪型土製品である。いずれもナデ調整で精製品ではない。69は明らかに石製勾玉を範型としているが、70～71は断面が方形状をなし、その形状からイノシシの牙等で製作する腕輪等を範型にしている可能性もある。69はSB368床面、70，71はSB1296埋土より出土した。72は円環状を呈すると思われる土製品であるが、小破片で全容は明らかでなく用途も不明である。

73～77は匙型土製品で、73は手づくねで製作されたミニチュアである。ミニチュアの存在から匙型土製品が非日常行為に用いられたことが想定される。74～77はいずれも欠損するが各々の形から全容は明らかとなる。74は丁寧な精製ミガキが施された精製品であるが、75～77はナデ調整である。73がSB1110、74がSB1291、75がSB1127、76がSD100、77がSK1795から出土した。同様な匙型土製品は後期箱清水式期においても認められ、形状、大きさに変化はない。後期の匙型土製品は、中期同様に量は多くないがていねいなミガキが施され、赤彩されるものもある。

78は高杯と想定され、脚内部に鉦がつく。SD29より出土した。高杯に鈴のような機能を付したものであろうか。箱清水式には高杯脚を用いた鈴がある。

第30図　土製品　　(S＝1/3)

松原遺跡出土小型土器・土製品

第3章　分　析

第1節　甕の文様構成および施文手法

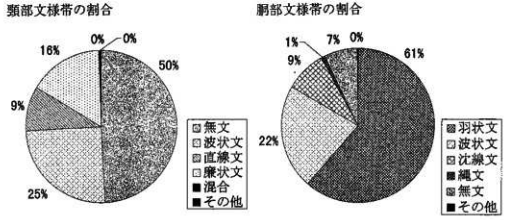
1　栗林土器様式の甕

栗林式土器の甕は平底が基本形式となり、法量の分化が認められるところであるが、小型の台付甕が伴ってセットを構成している。いずれも器壁が厚く、弥生土器における薄甕と厚甕という分類を行うならば後者の類型にあてはまる。その型式は、頸部の締り、胴最大径の位置等から諸類型に分類されるが、いずれも口縁部が短く外反する形態となる。また、胴部上位外面に文様施文を行い、胴部下位外面および内面にミガキを施すことが特徴である。文様施文およびミガキ手法を伴なうこれらの甕は後期様式の箱清水式土器に引き継がれることになる。

本節では、栗林土器様式の甕の文様構成および施文手法について若干の分析を行うものとする。その際、文様帯の位置および呼称については「第1章 第3節4　文様帯と施文手法」で提示した内容で示す（第3図）。また、壷の文様構成については「第7分冊　考察・検索編」で分析を提示したい。

2　甕の文様構成

栗林式土器の甕は、その多くが文様によって飾られる。文様には縄文、櫛描文、沈線文の三種類が認め



第31図　松原出土甕の文様帯別文様構成

られ、文様帯によって主体となる文様要素がある。文様帯は第Ⅰ文様帯(口唇部、口縁端部)、第Ⅱ文様帯（頸部）、第Ⅲ文様帯（胴部）に別れており、その組み合わせで文様表現されている（第3図）。

松原遺跡出土登録甕1139個体について、文様帯別文様構成の割合について提示したのが第31図である。各文様帯毎にその様相をまとめてみよう。

(1)　文様帯別文様構成

①第Ⅰ文様帯（口唇部、口縁端部）

甕の口縁部には単純口縁と受口状口縁とがあり、前者は口唇部Ⅰb帯に、後者は受口部外面Ⅰa帯と口唇部Ⅰb帯に文様が施文される。

単純口縁Ⅰb帯には、縄文および刺突、押圧の施文が認められる。同部に何らかの文様が施されるものは全体の89%に及び、文様帯として位置づいていることが理解され、そのうち79%は縄文施文である。単純口縁の場合は口縁部をヨコナデによって調整し、口唇部に外方の斜位方向から施文原体をあてて文様を施文するために、端部文様が他の文様帯と同様に外方に開く形となる。

受口状口縁はⅠa帯とⅠb帯に文様施文が行われ、1a帯には縄文、沈線文、櫛描文が、Ⅰb帯には縄文が認められる。単純口縁に認められた刺突、押圧施文は受口状口縁には認められない。Ⅰa帯は横位から、Ⅰb帯は上位から文様が施文され、縄文を施文する場合は2段階で施文されることが多い。Ⅰa帯は縄文が地文となって波状沈線文および櫛描波状文bが施文されることが多いが、縄文とセットになる基本形は沈線文系施文である。縄文施文がない場合は波状沈線文の他に櫛描文系施文がめだつ。受口状口縁に縄文が施文される割合は全体の76%。櫛描文系文様が施文される割合は全体の12%である。

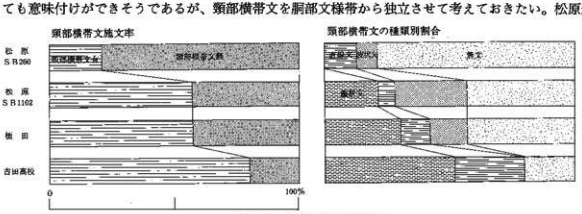
Ⅰ文様帯における縄文、刺突・オサエを施す施文率は下記の通りである。

縄文を施文するもの	72%
縄文を施文し、さらに刺突あるいはオサエを行うもの	7%
刺突あるいはオサエのみ行うもの	10%
文様を施文しないもの	11%

松原遺跡出土の栗林式土器は当様式でも中相から古相を主体とする。松原遺跡における甕の第Ⅰ文様帯では、縄文施文率が約8割で、端部のわずかな文様帯であるが縄文文様に込められたモチーフの重要性が理解される。一方、刺突あるいはオサエのモチーフも2割ほど認められる。第Ⅰ文様帯に文様を施文しない個体は1割ほどで、当文様帯が施文帯として重視されていたことがこの点からも窺える。第Ⅰ文様帯で重視されていたのは縄文施文であった。

②第Ⅱ文様帯（頸部文様帯）

栗林式土器の甕には、頸部に1条ないしは数条の横帯文が施文されることがある。この横帯文は櫛描文系の文様であることが基本で、ごくまれに沈線文系の文様が認められる。この頸部文様の有無は器形と密接な関係がありそうで、頸部の締りのある器形に認められるものである。調整手法から発展した文様としても意味付けができそうであるが、頸部横帯文を胴部文様帯から独立させて考えておきたい。松原遺跡で



第32図　頸部文様帯の構成

はⅡ文様帯の50%は頸部横帯文が認められない(第31図)。他の過半数については櫛描波状文が25%と最も多く、櫛描簾状文が16%、櫛描直線文が9%を占める。いずれも1条の櫛描横帯文が基本で、ごく僅かに2～3条の場合もある。

頸部文様帯について、松原遺跡の良好な一括資料と他遺跡の資料について比較を行う。松原遺跡SB260、SB1102出土一括資料、榎田遺跡中期土器群、吉田高校グランド遺跡後期初頭土器群をとりあげる。頸部文様帯について比較したのが第32図である。

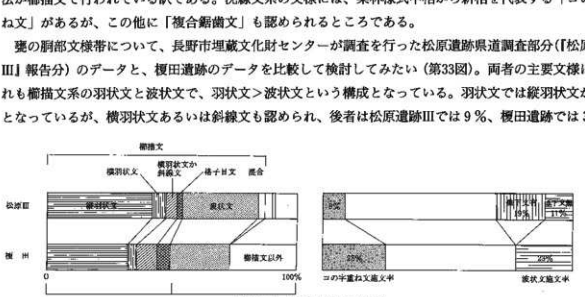
頸部横帯文の有無について考える。松原遺跡SB260ではその79%は頸部横帯文を施文しない。横帯文施文は約2割であるが、松原SB1102および榎田遺跡全体では横帯文を施文しない割合は43%となり、約6割に施文が行われている。後期初頭の吉田高校グランド遺跡では、松原遺跡SB260と割合が逆転し、その8割に横帯施文が認められるところである。次に簾状文の施文率について比較してみよう。頸部簾状文施文は松原遺跡SB260では認められず、松原SB1102では21%、榎田遺跡では30%を占めるとともに、後期初頭の吉田高校グランドでは62%と増加している。後期には中期に認められた等連止めの簾状文とともに、直線文と簾状文が融合した形の簾状文が出現する。2連、3連止めと呼ばれる簾状文で、直線文を引いては数連静止するタイプの簾状文である。2，3連止め簾状文は後期初頭で15%、後期中葉の松原遺跡SD100出土後期土器群では50%を占め、等連止め簾状文の17%をはるかに凌いでいる。

比較した4遺跡の一括資料および資料群は、松原SB260 → 松原SB1103 → 榎田遺跡中期土器群 → 吉田高校グランド遺跡 → 松原遺跡SB100出土後期土器群の順で時間的な変遷が辿えそうである。もしこの変遷が正しいとするならば、栗林式土器における時間的変遷とともに頸部横帯文の増加と、簾状文の増加を読みとることができる。このことについては従来から指摘されてきたことであるが、当データからも追認することができる。

③第Ⅲ文様帯（胴部文様帯）

栗林式土器の甕は、胴上位に文様を施文するものが多い。松原遺跡ではその83%が櫛描文、9%が沈線文、1%が縄文、7%が無文という割合であった(第31図)。櫛描文のうち、61%が羽状文系、22%が波状文系であるが、その施文手法の主体は中部高地型櫛描文である。羽状文系では縦羽状文が主体で、垂下文で波状文帯を区画するものがあり、文様帯を縦構成でブロックに区画しようとする中部高地型の意図が窺える。つまり、壺が横帯構成の文様をとることに対して甕は縦位構成で文様がモチーフされ、その表現方法が櫛描文で行われている訳である。沈線文系の文様には、栗林様式中相から新相を代表する「コの字重ね文」があるが、この他に「複合鋸歯文」も認められるところである。

甕の胴部文様帯について、長野市埋蔵文化財センターが調査を行った松原遺跡県道調査部分(『松原遺跡Ⅲ』報告分)のデータと、榎田遺跡のデータを比較して検討してみたい（第33図)。両者の主要文様はいずれも櫛描文系の羽状文と波状文で、羽状文＞波状文という構成となっている。羽状文では縦羽状文が主体となっているが、横羽状文あるいは斜線文も認められ、後者は松原遺跡Ⅲでは9%、榎田遺跡では3%を



第33図　胴部文様帯の構成

占めている。一方、Ⅲ文様帯が波状文で構成される場合、垂下文によって波状文帯を区画するものと、垂下文が認められずに波状文帯のみで構成されるものとがあるが、松原遺跡Ⅲでは垂下文をもつものが19%、もたないものが11%を占めるのに対し、榎田遺跡では垂下文をもつものがなく、もたないものが23%を占めている。沈線文系ではどうであろうか。沈線文系のコの字重ね文は、松原遺跡Ⅲでは9%、榎田遺跡では25%、鋸歯文は前者で1%、後者で3%となる。

松原遺跡Ⅲと榎田遺跡の文様構成を比較すると、横羽状系文様と波状文帯における垂下文およびコの字重ね文の量的な増減関係については連動する点がありそうである。

(2) 中部高地型の文様固執

栗林様式の甕は文様が施文されることが特徴である。その主たる文様は櫛描文が採用されているが、文様のモチーフは条痕文系土器に系譜を求めることができる羽状文が主たる要素となり、羽状横帯文と共存している。在来の系譜をもつモチーフは、新たなる施文原体を用いて甕の文様表現を生んだものと想定されるが、文様に関する表現方法が在来の伝統の中に、他地域に流行したであろう手法を取り込んでいる点を注意したい。このことに関しては甕の文様帯間における文様の選択に表象されている。甕の文様帯ではⅠ～Ⅲ文様帯を設定し、前項で詳説した。頸部から胴部に関するⅡ～Ⅲ文様帯は櫛描文が主要文様となるが、口唇部ならびに口縁端部のごく狭い文様帯には、縄文施文が固執されている。栗林様式の中相から新相に及ぶ松原遺跡の例をとっても、Ⅰ文様帯の8割に縄文施文が施されることがその世界を物語っており、栗林式様式の甕は櫛描文と縄文施文が共存するととらえて良い。その場合、これまでの研究史は、主たる文様の櫛描文に注目してきたきらいがある。しかし、この狭いⅠ文様帯に表現された縄文文様が、中部高地型櫛描文を理解する際に有効となる。この第Ⅰ文様帯の縄文施文を中部高地型の文様施文に関する固執として理解するならば、弥生時代後期の甕に至っても文様を施文するという中部高地弥生人の世界観を理解することができる。

胴部Ⅲ文様帯については複雑な構成要素がある。主たる文様要素となる櫛描文には中部高地型の施文手法と畿内型の施文手法が混在し、前者が主体となっている。ここでも混在化現象が認められる訳であるが、少数派であるが沈線文系の文様構成が共伴する。その代表的な文様は「コの字重ね文」で、小形の台付甕のモチーフとして多用される。コの字重ね文が盛行するのは栗林様式でも新相と考えられるところから、沈線文系文様を伝統的文様モチーフとするならば、栗林様式後半期におけるコの字重ね文の盛行はやはり中部高地型の固執として評価することが可能となる。「コの字重ね文」は、しばし、その地文に縄文施文を行う。受口状口縁の場合はⅠa帯には縄文地文に波状沈線文がセットとなることが多い。ただし、その場合、頸部Ⅱ文様帯に櫛描横帯文がとり入れていることもある。中部高地型の伝統モチーフの固執について再三記してきた訳であるが、櫛描文系と沈線文・縄文系の共存という世界も充分認めておかねばならないだろう。櫛描文系と沈線文・縄文系という対峙しかねない文様モチーフが同一個体に共存することに、私どもは今後しばらく注目していかねばなるまい。

甕の文様構成において、櫛描文系が主要な要素となり沈線文・縄文系要素が固執されていること、後者の文様施文世界観が、櫛描文といっても中部高地型の櫛描文が主体となっている背景であろうことを確認した。私ども松原弥生整理班は、栗林様式の壺における文様構成については、これまで主として縄文時代の土器研究で成果をあげてきた贄田明が考察編で問題提起を行う。詳細は贄田論考で語られるが、壺における主要文様モチーフは沈線文・縄文系文様であり、甕の櫛描文系主体要素とは逆転している。また、甕が櫛描文をモチーフに縦位区画文構成をとっていることに対して、壺は沈線文・縄文系文をモチーフとして横帯文構成をとっていることに注目しなくてはなるまい。

私どもは甕、壷の文様構成について、中部高地北域の固執世界を提言し、今後の研究方針を銘記したいと考えている。中部高地の固執を理解せずに複雑な栗林土器様式について編年作業も進まないものと考えている。このことは、長野盆地拠点的集落である松原遺跡の解釈にもつながる。私どもは、土器編年にしても、遺構の解釈にしても操急で不明瞭な解釈を求めない。それは前述の土器の文様構成の複雑さをひとつとっても理解されるところである。同時に、この件に関して後々に解釈できる土器提示を心がけてきたことは語るまでもない。

3　甕の文様施文手法

(1)　栗林様式の櫛描文

甕の文様構成において櫛描文系文様が主要を占めていることを確認した。櫛描文の施文手法を分析することにより栗林式土器様式における櫛描文の地域性を考えてみたい。

①中部高地型櫛描文

栗林式土器の櫛描文は、羽状文系と波状文系があり、その施文は櫛描原体を器面にあて横位方向に文様を重ねていく。その場合、羽状文は文様を描きながら原体を器面から離す断絶型の施文を行う。一方、横帯構成をとる波状文は、羽状文と同様な断絶型施文と、一周回転する非断絶型の施文とがあり、本書では断絶型の施文を「中部高地型の櫛描施文」、非断絶型の施文を「畿内型の櫛描施文」と規定している。よって、羽状文は中部高地型の櫛描文、波状文は中部高地型と畿内型の櫛描文とに別れるが、松原遺跡では中部高地型櫛描文の占める割合が96％を占めている。このデータは羽状文を含めた数値であるが、波状文施文における中部高地型櫛描文の割合は84％を占め、栗林土器様式の特徴的な櫛描施文手法であったことが理解されるのである。

②右回りの施文原理

「中部高地型」と「畿内型」の文様施文手法は、文様の重なり方向および回転方向がその分類要素となり、いずれも右方向であった。松原遺跡の場合、非断絶型の波状文施文を行っている甕30個体中29個体が右方向で、断絶型の波状文施文を行っている甕では162個体中159個体が右方向の施文であった。このことから、波状文施文の場合は、断絶型も非断絶型も右回りに文様を重ねていることが指摘されるのである。

羽状文の文様回転方向はどうであろうか。縦羽状文の場合は342個体中、96％が右回転であった。一方、横羽状文の場合105個体中、上位斜線文が右回転のもの48％、左回転のものが52％となり、ほぼ半数が右回転であったが、他の施文手法と異なり、上段では左回りも多いことが注意される。上位斜線文と下位斜線文の回転方向となると同方向に回転するものが36％、上位と下位で逆方向に回転するものが64％を占め、上位が右回転で下位が左回転というパターンが最も高いことが明らかとなった。

中部高地型櫛描文の施文原理には文様の右回り原理が存在したことを物語っている。

(2)　羽状文・波状文の施文手法

①羽状文施文手法

縦羽状文の施文方法は、文様が右回りの他にも一定の方向が認められるところである。縦羽状文は同一方向に重ねた斜線文のまとまりが、縦構成のブロック区画になっているが、このまとまりで上下方向に施文してブロック内を充塡した後右回りに文様を重ねていく。

斜線の描き方には、ブロック内で斜線を常に右側から左側にはね上げたりかきおろす〔右起点型〕（第34図－114）と、２つのブロックの斜線を矢羽根状境界の定点から右斜方下、左斜方下にかきわける〔中央起点型〕（第34図－2360）とがある。松原遺跡では右起点型が89％を占めて主体となる。中央起点型の縦羽状

文施文手法は栗林式土器でも新相に認められる手法である。

各斜線の縦位ブロック毎の斜線の描く方向、重なり方向はどうだろう。その大半が上位から下位に斜線を重ねる〔下位方向型〕をA、重ねていく方向が横のブロックでは反対方向に重ねる〔交互方向型〕をB、大半が下位から上位に斜線を重ねる〔上位方向型〕をCとすると、松原遺跡ではAが31%、Bが65%、Cが4%となり、羽状文では交互方向型が主体となる。このブロック単位の施文方向は、右起点型と中央起点型ではどのような差が認められるであろうか。右起点型では68%が交互方向型のBが主体であるのに対し、中央起点型では下位方向型のAが79%を占め、交互方向型のBが14%と少ない。このことは、栗林新相に多くなる中央起点型の胴部文様施文が、交互方向型から下位方向型へ移行する傾向を示し、後期箱清水式の文様施文手法へ連なるものと解釈することができる。

②波状文の施文手法

胴部に波状文をもつ甕は、波状文ブロックを縦位に区画する垂下文を有するものと、垂下文がなくブロック区画するものとがある。垂下文を有する波状文構成は栗林様式の特徴であるが、その施文パターンは次のような類型に分類した。E類．垂下文を先に描き、波状文を充塡する〔垂下文先行型〕。F類．垂下文と波状文が交互に描かれる〔垂下文・波状文交互型〕（第34図－103）。G類．中部高地型の波状文を先に描き、垂下文で区画するもの〔中部高地型波状文先行型〕。H類．畿内型の波状文を先に描き、垂下文で区画するもの〔畿内型波状文先行型〕。松原遺跡では、〔垂下文・波状文交互型〕のF類が44%を占めて主要となり、E類が21%、G類が24%、H類が11%となる。垂下文先行型に対して波状文先行型が凌いでいる状況が理解される。この施文手法は垂下文先行型 → 波状文先行型へ発展した施文方式であろうか。

垂下文をもたない波状文のブロック内施文順位は、A類．上位から下位方向に描くもの87%、B類．となり同志が交互に描くもの8%。C類．下位から上位方向に描くもの5%となり、上位から下位に描く施文手法が主要となっている。A類主体の垂下文をもたない波状文施文手法は後期箱清水式土器の胴部施文手法に連なるものであろう。

(3)　松原遺跡の施文手法

中部高地型櫛描文を多様する松原遺跡の甕の施文手法について若干のまとめを行う。

i．　中部高地型櫛描文の羽状文ならびに波状文は文様帯を縦位ブロックに分割した空間に、櫛描斜線文ならびに櫛描波状文を重ねることによって充塡し、文様を表現する。

ii．　文様縦位ブロックの重なりは右回りに重ねられる。文様の横位施文方向は「右回りの施文原理」によって行われている。

iii．　羽状文の斜線の描き方には〔右起点型〕と〔中央起点型〕とがあり、松原遺跡の栗林式土器の主要タイプは〔右起点型〕で描かれている。〔中央起点型〕の描き方は後期に継続する。

iv．　羽状文の縦位ブロック内への斜線充塡手法は、ブロック間で方向が逆となる「交互方向型」が主要な手法となっている。

v．　波状文の縦位ブロック内への斜線充塡手法は、上位から下位方向に重ねられる〔下位方向型〕で羽状文と異なる。波状文の描き方が後期様式に継続する。

vi．　垂下文を有する波状文の施文では、垂下文 → 波状文帯 → 垂下文というように右回りに重ねていく文様施文手法が40%を占め主要となり、ここにも右回りの施文原理が働いている。

栗林様式中相から新相の甕は、中部高地型櫛描文によって、栗林様式独自のモチーフを表現しようとした。そこには一定の流儀が認められるところである。